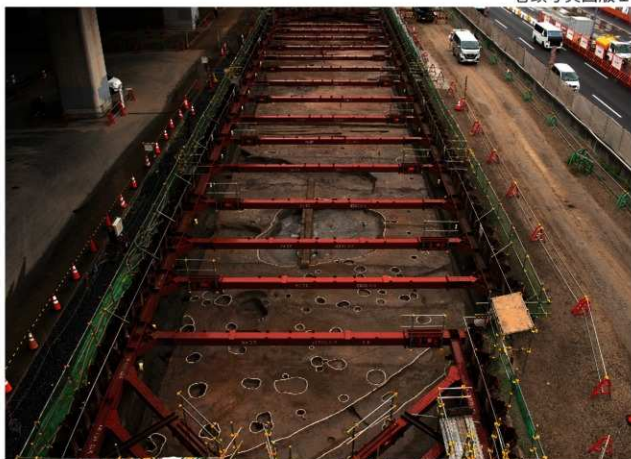


東大阪市

西岩田遺跡

(仮称) 瓜生堂車両基地整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 3区 調査区全景 (南から)



2. 2区 33溝 (北西から)



1. 2区 32・33 溝出土須惠器



2. 3区 240 流路・242 溝・3 b 層出土土師器

序 文

西岩田遺跡は大阪府の北東部、東大阪市に所在する遺跡です。近鉄奈良線と近畿自動車道が交わる地点より北に約200mの地点から、東西約500m、南北約500mの範囲に広がる、古墳時代の集落遺跡です。

今回の発掘調査は、大阪モノレール株式会社が進める大阪モノレール延伸事業の一環として実施している、(仮称)瓜生堂車両基地整備に伴うものです。

これまでに、近畿自動車道天理～吹田線建設などに伴い行われた西岩田遺跡の発掘調査では、弥生時代から古墳時代の河内湖の汀線、古墳時代初頭の自然流路、古墳時代中期の掘立柱建物や井戸、溝などの遺構からなる居住域と、古墳時代初頭から後期までの土器や木製品などの遺物がみつかっていました。

今回の発掘調査では、主に古墳時代から中世の遺構・遺物を確認することができました。特に、古墳時代初頭の自然流路からは土器や木製品が大量に出土したほか、古墳時代中期から後期の溝からは高杯形器台、高杯、杯身、杯蓋などの須恵器や土師器の甕がまとまって出土しました。これらの土器の中には遠隔地の特徴をもつものも多くみられることから、河内海の汀線や河川に近い立地を活かして、物流や交易の拠点だった西岩田遺跡の姿が浮かび上がってきます。また、古墳時代後期以降の掘立柱建物3棟など、古墳時代を中心とする遺構・遺物もみつき、より広範囲に居住域が広がっていたことが判明しました。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたって、大阪モノレール株式会社、大阪府教育庁、東大阪市人権文化部文化室文化財課をはじめとする関係各位より多大なるご協力とご配慮を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋藏文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年5月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂井 秀 弥

例 言

1. 本書は大阪府東大阪市西岩田町・御厨東町に所在する西岩田遺跡（調査名：西岩田遺跡21-1）の発掘調査報告書である。
2. 現地調査および整理作業は、大阪モノレール株式会社から委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査・整理作業に関する受託事業名・受託期間および調査・整理体制は以下の通りである。

【現地調査】

受託事業名：（仮称）瓜生堂車両基地整備に伴う文化財調査業務

受託契約期間：令和3年8月2日～令和4年11月25日

現地調査期間：令和3年8月2日～令和4年10月31日

【調査体制】

令和3年度：事務局長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 岡戸哲紀、調査課長
補佐 佐伯博光、主査 川瀬貴子、技師 尾崎裕妃

令和4年度：事務局長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 佐伯博光、調査課長
補佐 後藤信義、主査 川瀬貴子、副主査 奥村茂輝、技師 尾崎裕妃、主任専門
員 岡戸哲紀、専門員 岡本圭司、駒井正明

【整理作業】

受託事業名：（仮称）瓜生堂車両基地整備に伴う文化財遺物整理業務

受託契約期間：令和4年11月1日～令和6年5月31日

整理作業期間：令和4年11月1日～令和6年1月31日

印刷製本期間：令和6年2月1日～令和6年5月31日

【整理体制】

令和4年度：事務局長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 佐伯博光、調査課長
補佐 後藤信義、主査 川瀬貴子、技師 尾崎裕妃

令和5年度：事務局長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂、調査課長 佐伯博光、調査課長
補佐 後藤信義、主査 川瀬貴子、技師 尾崎裕妃

4. 遺構写真撮影は調査担当者が行った。遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。本書の執筆は第2章、第3章第3節、第5章第2節の第1・2・3項を尾崎が、第1章、第3章第1・2・4・5・6節、第5章第1節、第2節の第4・5項を川瀬が行った。全体の編集は川瀬、尾崎が行った。
5. 空中写真測量は株式会社ケーディーエムに、放射性炭素年代測定（AMS法）は株式会社パレオ・ラボに、木製品の保存処理に関しては株式会社古環境研究所に、木製品・種実の樹種同定は古代の森研究舎に委託した。また、ガラス玉の蛍光X線による化学組成分析については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の田村朋美主任研究員に依頼した。これらの結果報告を編集し、第4章に掲載した。
6. 発掘調査、整理作業において下記の方々からの指導・協力を賜った。記して感謝する（五十音順、

敬称略)。

赤澤徳明(福井県教育庁埋蔵文化財調査研究センター)、飯塚信幸(大阪府教育委員会)、小倉徹也(大阪市教育委員会)、金井千紘(立命館大学)、古墳出現期土器研究会、高野陽子(公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、寺井誠(大阪歴史博物館)、中野咲(奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課)、松永悦枝(前独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、現文化庁)、森岡秀人(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員・公益財団法人古代学協会客員研究員)

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面(T.P.)値を使用している。単位はmである。
2. 座標値は世界測地系(測地成果2011)による平面直角座標系第VI系に基づき表示している。単位はmである。
3. 全体図および遺構図に付した方位は、平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4. 現地調査および整理作業については、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010の内容に準拠して行った。
5. 土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)の『新版 標準土色帖』2009年度版に準拠し、記号・土色・土質の順に記載した。
6. 遺構番号は、遺構の種類や調査区に関わらず1からの通し番号を付与し、遺構名は遺構番号-遺構種類として表記した(例:1土坑、2溝)。ただし、掘立柱建物など複数の遺構が集合したものに関しては、単独の遺構とは別の通し番号を付与し、遺構種類-遺構番号として表記した(例:掘立柱建物1)。
7. 全体図および遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図面に付したスケールバーを参照されたい。写真図版に関しては、縮尺は任意である。
8. 遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・写真図版いずれにも同一の番号を付与している。
9. 遺物実測図の断面について、須恵器を黒塗、その他の遺物を白抜きとした。漆塗りや被熱の痕跡はトーンで表現した。生駒山西麓産胎土の遺物は、遺物番号に下線を引いて表現した。
10. 引用文献・参考文献は各章節の末尾に記した。本文中で引用した文献は、文末の()内に著者名と発行年、あるいは組織名と発行年を表記した(例:福永1975、松山市教委他2002、大文セ1998)。多用する組織名は、以下の略称を用いた。

(財)大阪文化財センター、(財)大阪府文化財調査研究センター、(財)大阪府文化財センター、

(公財)大阪府文化財センター → 大文セ

大阪府教育委員会、大阪府教育委員会文化財保護課 → 府教委

東大阪市教育委員会 → 市教委

(財)東大阪市文化財協会 → 市協会

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 → 調査会

目 次

巻頭写真図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第1項 調査に至る経緯	1
第2項 調査の経過	3
第3項 既往の調査	5
第2節 調査・整理の方法	7
第1項 調査の方法	7
第2項 整理の方法	9
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	13
第3章 調査成果	17
第1節 基本層序	17
第2節 1区の遺構と遺物	23
第1項 1区の概要・層序	23
第2項 1区の遺構と遺物	23
第3節 2区の遺構と遺物	29
第1項 2区の概要・層序	29
第2項 2区第2面の遺構と遺物	32
第3項 2区第3面の遺構と遺物	35
第4項 2区3b層の遺物	65
第4節 3区の遺構と遺物	75
第1項 3区の概要・層序	75
第2項 3区第2面の遺構と遺物	78
第3項 3区第3面の遺構と遺物	83
第4項 3区第3b面の遺構と遺物	109
第5節 4区の遺構と遺物	145
第1項 4区の概要・層序	145
第2項 4-1区の遺構	147
第3項 4-2区の遺構	153

第4項	4-3区の遺構	153
第5項	4区の遺物	153
第6節	5区の遺構と遺物	155
第1項	5区の概要・層序	155
第2項	5区第3b面の遺構	155
第3項	5区第4面の遺構	157
第4項	5区の遺物	159
第4章	分析	167
第1節	放射性炭素年代測定（AMS法）	167
第1項	分析の目的と試料の採取	167
第2項	試料と方法	168
第3項	分析結果	168
第4項	考察	170
第2節	樹種・種実同定	174
第1項	同定の目的	174
第2項	試料	174
第3項	同定結果	174
第3節	ガラス玉の化学組成分析	186
第1項	分析の目的	186
第2項	資料	187
第3項	分析結果	188
第5章	総括	193
第1節	西岩田遺跡の遺構の変遷	193
第1項	古墳時代中期以前	193
第2項	古墳時代中期から古代	195
第3項	中世以降	196
第2節	遺物から見た西岩田遺跡の様相	199
第1項	32・33溝出土須恵器	199
第2項	製塩土器	205
第3項	外来系土器	208
第4項	白玉の分類と属性	212
第5項	木製品	223
遺物観察表		231
写真図版		
抄録		
奥付		

挿 図 目 次

図1	大阪モノレール延伸区間と埋蔵文化財調査地点	1	図36	2区 33溝出土遺物実測図(3)	58
図2	調査位置図	2	図37	2区 33溝出土遺物実測図(4)	60
図3	調査区配置図・地区割図	8	図38	2区 33溝出土遺物実測図(5)	61
図4	周辺地形分類図	12	図39	2区 33溝出土遺物実測図(6)	62
図5	周辺遺跡分布図	14	図40	2区 32溝出土製塩土器、33溝出土埴輪実測図	63
図6	基本層序模式図	18	図41	2区 遺構出土遺物実測図	64
図7	調査区西壁断面図	21・22	図42	2区 43土坑出土遺物実測図	65
図8	1区 東壁・北壁断面図	24	図43	2区 3b層遺物出土位置図	66
図9	1区 第2面平面図	25	図44	2区 3b層出土遺物実測図	67
図10	1区 第3b層下面木製品出土状況図	26	図45	2区 出土木製品実測図(1)	70
図11	1区 出土遺物実測図	27	図46	2区 出土木製品実測図(2)	71
図12	2区 西壁断面図(1)	30	図47	2区 出土木製品実測図(3)	72
図13	2区 西壁断面図(2)	31	図48	2区 出土木製品実測図(4)	73
図14	2区 南壁断面図	32	図49	2区 出土木製品実測図(5)	74
図15	2区 第2面平面図	33	図50	3区 北壁断面図	75
図16	2区 第2面遺構断面図	34	図51	3区 西壁断面図(1)	76
図17	2区 1a層～3a層出土遺物実測図	34	図52	3区 西壁断面図(2)	77
図18	2区 第3面平面図	35	図53	3区 南壁断面図	78
図19	2区 掘立柱建物1平・断面図	36	図54	3区 第2面平面図	79
図20	2区 32・33溝平面図	38	図55	3区 第2面遺構平・断面図	80
図21	2区 32・33溝上層遺物出土状況図	39	図56	3区 235土坑・1a～2-2a層出土遺物実測図(1)	82
図22	2区 32溝遺物出土状況図	40	図57	3区 1a～2-2a層出土遺物実測図(2)	83
図23	2区 33溝遺物出土状況図(1)	41	図58	3区 第3面平面図	84
図24	2区 33溝遺物出土状況図(2)	42	図59	3区 第3面平面図(北半)	85
図25	2区 32・33溝、南半部断断面図	43	図60	3区 第3面平面図(南半)	86
図26	2区 26土坑平・断面図	44	図61	3区 掘立柱建物2平・断面図	88
図27	2区 第3面遺構断面図(1)	45	図62	3区 160溝断面図	89
図28	2区 第3面遺構断面図(2)	46	図63	3区 第3面遺構断面図(1)	90
図29	2区 43土坑平・断面図	46	図64	3区 第3面遺構断面図(2)	92
図30	2区 32・33溝出土遺物実測図(1)	48	図65	3区 第3面遺構断面図(3)	93
図31	2区 32・33溝出土遺物実測図(2)	50	図66	3区 第3面遺構断面図(4)	95
図32	2区 32溝出土遺物実測図(1)	51	図67	3区 第3面遺構断面図(5)	96
図33	2区 32溝出土遺物実測図(2)	53	図68	3区 第3面遺構断面図(6)	98
図34	2区 33溝出土遺物実測図(1)	54			
図35	2区 33溝出土遺物実測図(2)	56			

図69	3区	第3面遺構断面図(7).....	100	平面図.....	152	
図70	3区	155・174・175土器群 遺物出土状況図.....	101	図105	4-1区・4-3区 出土遺物実測図.....	154
図71	3区	第3面遺構出土遺物実測図.....	102	図106	5区 西壁断面図.....	156
図72	3区	160溝出土遺物実測図(1).....	103	図107	5区 南壁断面図.....	157
図73	3区	160溝出土遺物実測図(2).....	105	図108	5区 第3b面・第4面平面図.....	158
図74	3区	2-3a~3a層出土遺物実測図.....	107	図109	5区 出土遺物実測図.....	160
図75	3区	第3b面平面図.....	109	図110	5区 出土木製品実測図(1).....	161
図76	3区	240流路・3b層上面 遺物出土位置図.....	110	図111	5区 出土木製品実測図(2).....	162
図77	3区	土器群1 遺物出土状況図.....	111	図112	試料採取位置図.....	167
図78	3区	土器群2 遺物出土状況図.....	112	図113	2区 南壁試料採取位置図.....	168
図79	3区	土器群3 遺物出土状況図.....	114	図114	暦年校正結果.....	172
図80	3区	240流路・242溝遺物出土位置図.....	114	図115	マルチプロット図.....	173
図81	3区	240流路・242溝断面図.....	115	図116	3区 ガラス玉出土位置図.....	187
図82	3区	3b層遺物出土位置図.....	116	図117	316の成分分析結果.....	188
図83	3区	3b層中集石出土状況図.....	117	図118	317の成分分析結果.....	189
図84	3区	240流路出土遺物実測図(1).....	119	図119	318の成分分析結果.....	189
図85	3区	240流路出土遺物実測図(2).....	121	図120	日本列島へ流通するガラス玉類の 生産地と流通経路.....	191
図86	3区	240流路出土遺物実測図(3).....	123	図121	古墳時代初頭~中期遺構平面図.....	193
図87	3区	242溝出土遺物実測図(1).....	124	図122	河内・摂津・和泉の古備系土器 出土遺跡.....	194
図88	3区	242溝出土遺物実測図(2).....	127	図123	古墳時代中期~古代遺構平面図.....	195
図89	3区	240流路・242溝出土木製品実測図.....	128	図124	中世以降遺構平面図.....	197
図90	3区	3b層出土遺物実測図(1).....	129	図125	2区 32・33溝出土土器器種構成.....	199
図91	3区	3b層出土遺物実測図(2).....	132	図126	2区 32・33溝土器出土位置概略図.....	199
図92	3区	3b層出土遺物実測図(3).....	134	図127	器種別計測箇所.....	200
図93	3区	3b層出土遺物実測図(4).....	136	図128	須恵器有蓋高杯・杯身の法量.....	201
図94	3区	3b層出土遺物実測図(5).....	138	図129	須恵器高杯蓋・杯蓋の法量.....	201
図95	3区	3b層出土遺物実測図(6).....	140	図130	須恵器有蓋高杯脚部の法量.....	202
図96	3区	3b層出土木製品実測図(1).....	143	図131	器種別クロロ回転方向.....	202
図97	3区	3b層出土木製品実測図(2).....	144	図132	32・33溝出土須恵器有蓋高杯.....	202
図98	4-1区	西壁・北壁断面図.....	146	図133	市場南組産須恵器壺.....	203
図99	4-2区	南壁断面図.....	147	図134	出土資料.....	206
図100	4-3区	西壁断面図.....	148	図135	『西岩田』における製塩土器分類.....	206
図101	4-1区	第3面上面、第3面下面平面図.....	149	図136	丸底を有する製塩土器の 外面調整の割合.....	206
図102	4-1区	掘立柱建物3平・断面図.....	150	図137	西岩田遺跡出土外来系土器の比率.....	208
図103	4-1区	第3面遺構断面図.....	151	図138	西岩田遺跡出土外来系土器(1).....	209
図104	4-2区	第2面、4-3区 第3面				

図139 西岩田遺跡出土外来系土器(2).....	210	図146 白玉直径の変遷.....	216
図140 3区 160溝白玉出土位置図.....	212	図147 西岩田遺跡出土の文様のある板.....	225
図141 白玉の分類.....	213	図148 琴の部分名称、構造と横断面形態.....	226
図142 分類項目別観察結果.....	214	図149 槽作り琴出土資料.....	226
図143 白玉法量散布図.....	215	図150 琴板出土資料.....	227
図144 西岩田遺跡の色別白玉直径.....	216	図151 上板固定方法の模式図.....	229
図145 亀川遺跡の色別白玉直径.....	216	図152 西岩田遺跡出土琴復元図.....	230

表 目 次

表1 西岩田遺跡既往調査一覧.....	4	表11 160溝出土ガラス玉一覧.....	187
表2 意岐部遺跡既往調査一覧.....	5	表12 日本列島で流通したガラスの分類.....	191
表3 掘立柱建物一覧.....	37	表13 ガラスの材質に基づいた様相区分.....	192
表4 測定試料および処理.....	170	表14 西岩田遺跡基本層序対照表.....	198
表5 放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果(1).....	172	表15 160溝出土白玉一覧.....	217~222
表6 放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果(2).....	173	表16 種類別樹種一覧.....	224
表7 樹種同定結果.....	175	表17 土器観察表.....	231~250
表8 種実同定結果.....	176	表18 土製品観察表.....	251
表9 種類別樹種集計.....	177	表19 石製品観察表.....	251
表10 3b層出土種実等集計.....	178	表20 金属製品観察表.....	251
		表21 木製品観察表.....	252

写 真 目 次

写真1 2区 南壁.....	169	写真12 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(2).....	180
写真2 2区 南壁サンプル採取位置.....	169	写真13 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(3).....	181
写真3 試料No.1の植物遺体の挟在状況.....	171	写真14 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(4).....	182
写真4 試料No.1(PLD-46920).....	171	写真15 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(5).....	183
写真5 試料No.2の植物遺体の挟在状況.....	171	写真16 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(6).....	184
写真6 試料No.2(PLD-46921).....	171	写真17 西岩田遺跡出土種実.....	185
写真7 試料No.3の植物遺体の挟在状況.....	171	写真18 ガラス玉(316~318) 顕微鏡写真(×25倍).....	186
写真8 試料No.3(PLD-46922).....	171		
写真9 試料No.4の植物遺体の挟在状況.....	171		
写真10 試料No.4(PLD-46923).....	171		
写真11 西岩田遺跡出土木材の 顕微鏡写真(1).....	179		

写真図版目次

巻頭写真図版1

1. 3区 調査区全景（南から）
2. 2区 33溝（北西から）

巻頭写真図版2

1. 2区 32・33溝出土須恵器
2. 3区 240流路・242溝・3b層出土土師器

写真図版1 遺構

1. 調査区遠景（2区北から2・3区をのぞむ）
2. 調査区遠景（2区南から1・2区をのぞむ）

写真図版2 遺構

1. 1区 第2面全景（南から）
2. 1区 北壁地層断面
(T.P. 約+0.6~約-0.5m、南から)
3. 1区 木製品出土状況（北から）

写真図版3 遺構

1. 2区 第3面全景（北から）
2. 2区 第3面全景（南から）

写真図版4 遺構

1. 2区 第3面掘立柱建物1（南東から）
2. 2区 掘立柱建物1 10柱穴断面（東から）
3. 2区 掘立柱建物1 12柱穴断面（東から）
4. 2区 掘立柱建物1 16柱穴断面（西から）
5. 2区 掘立柱建物1 18柱穴断面（西から）

写真図版5 遺構

1. 2区 32溝（南から）
2. 2区 33溝（南から）

写真図版6 遺構

1. 2区 32溝（北西から）
2. 2区 32溝土器群2南西部
遺物出土状況（西から）
3. 2区 32溝土器群3
遺物出土状況（北東から）

写真図版7 遺構

1. 2区 33溝（北西から）
2. 2区 33溝土器群2
遺物出土状況（南東から）

3. 2区 33溝土器群4

遺物出土状況（南西から）

写真図版8 遺構

1. 2区 32・33溝断面（A-A'断面、北から）
2. 2区 32・33溝断面（B-B'断面、北から）
3. 2区 26土坑断面（南から）

写真図版9 遺構

1. 2区 43土坑遺物出土状況（南から）
2. 2区 南壁地層断面
(T.P. 約+1.1~約-0.5m、北から)
3. 2区 南壁地層断面
(T.P. 約-0.5~約-2.0m、北から)

写真図版10 遺構

1. 2区 第3b面南半部全景（北から）
2. 2区 3b層中木製品出土状況（西から）
3. 2区 3b層中土器出土状況（西から）

写真図版11 遺構

1. 3区 第3面全景（北から）
2. 3区 第3面全景（南から）

写真図版12 遺構

1. 3区 第3面掘立柱建物2（東から）
2. 3区 掘立柱建物2 181柱穴断面（東から）
3. 3区 掘立柱建物2 182柱穴断面（東から）
4. 3区 掘立柱建物2 184柱穴断面（東から）
5. 3区 掘立柱建物2 189柱穴断面（東から）

写真図版13 遺構

1. 3区 160溝（北から）
2. 3区 160溝断面（A-A'断面、南から）
3. 3区 160溝断面（B-B'断面、西から）

写真図版14 遺構

1. 3区 195土坑断面（西から）
2. 3区 208土坑断面（南から）
3. 3区 126柱穴断面（北から）

写真図版15 遺構

1. 3区 112土坑断面（東から）
2. 3区 169柱穴断面（北西から）

3. 3区 155土器群遺物出土状況（東から）

写真図版16 遺構

1. 3区 第3b面全景（北から）

2. 3区 240流路（北東から）

写真図版17 遺構

1. 3区 240流路（北東から）

2. 3区 240流路土器群1南西部
遺物出土状況（南西から）

3. 3区 240流路土器群2南東部
遺物出土状況（北から）

写真図版18 遺構

1. 3区 242溝（東から）

2. 3区 242溝断面（東から）

3. 3区 3b層中土器出土状況（北西から）

写真図版19 遺構

1. 3区 3b層中土器出土状況（南東から）

2. 3区 3b層中木製品出土状況（南から）

3. 3区 3b層中集石出土状況（北から）

写真図版20 遺構

1. 3区 南壁地層断面
（T.P.約+1.7～約+0.6m、北から）

2. 3区 南壁地層断面
（T.P.約+0.6～約-0.5m、北から）

3. 3区 南壁地層断面
（T.P.約-0.5～約-2.0m、北から）

写真図版21 遺構

1. 4-1区 第3面上面全景（北から）

2. 4-1区 第3面下面全景（北西から）

写真図版22 遺構

1. 4-1区 第3面上面掘立柱建物3検出状況
（南東から）

2. 4-1区 掘立柱建物3 413柱穴断面
（東から）

3. 4-1区 掘立柱建物3 414柱穴断面
（東から）

4. 4-1区 掘立柱建物3 415柱穴断面
（南東から）

5. 4-1区 掘立柱建物3 416柱穴断面

（南東から）

写真図版23 遺構

1. 4-1区 北壁土器出土状況
（T.P.約-1.4～約-2.0m、南西から）

2. 4-2区 第2面全景（北から）

3. 4-3区 第3面全景（東から）

写真図版24 遺構

1. 5区 第3b面全景（北から）

2. 5区 第3b面落ち込み検出状況（南から）

3. 5区 足跡検出状況（南東から）

写真図版25 遺物

1. 1区

2・6.4区

3～5・7.5区

写真図版26 遺物

1～7.2区 32・33溝上層

写真図版27 遺物

1～9.2区 32溝

写真図版28 遺物

1～5.2区 32溝

写真図版29 遺物

1～6.2区 33溝

写真図版30 遺物

1～10.2区 33溝

写真図版31 遺物

1～8.2区 33溝

写真図版32 遺物

1・2.2区 33溝

写真図版33 遺物

1～6.2区 33溝

写真図版34 遺物

1・2.2区 掘立柱建物1

3～5.2区 43土坑

6.2区 26土坑

写真図版35 遺物

1～4.2区 3b層

5.2区 2a層

写真図版36 遺物

1・2.2区 3b層
写真図版37 遺物
1～8.2区 3b層
写真図版38 遺物
1～5.2区 3b層
写真図版39 遺物
1・2・7.3区 160溝
3.3区 215土坑
4.3区 155土器群
5.3区 174土器群
6.3区 217土坑
写真図版40 遺物
1・4.3区 2a層
2・5.3区 3a層
3・6・8.3区 2-3a層
7.2-3a・3a層
写真図版41 遺物
1～8.3区 240流路
写真図版42 遺物
1～7.3区 240流路
写真図版43 遺物
1・6.3区 240流路・242溝
2・3・5.3区 242溝

4.3区 240流路
写真図版44 遺物
1・2.3区 240流路
3～10.3区 242溝
写真図版45 遺物
1～7.3区 242溝
写真図版46 遺物
1～9.3区 3b層
写真図版47 遺物
1～8.3区 3b層
写真図版48 遺物
1～6.3区 3b層
写真図版49 遺物
1～6.3区 3b層
写真図版50 遺物
1～8.3区 3b層
写真図版51 遺物
1～3.3区 3b層
4.3区 240流路
写真図版52 遺物
1～3・5・6.5区 3b層
4.1区 3b層

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

第1項 調査に至る経緯

西岩田遺跡は東大阪市の中央部、東大阪市西岩田2丁目から4丁目、^{みくら}御厨東2丁目に位置する。近鉄奈良線と近畿自動車道の交点から北に約200mの地点から、南北約0.5km、東西約0.5kmの範囲に広がる、古墳時代の集落遺跡である。

本調査は、大阪モノレール株式会社が進めている大阪モノレール延伸事業の一環である、(仮称)瓜生堂車両基地整備に伴い実施された。

大阪モノレール延伸事業とは、現在は大阪空港から門真市まで運行している大阪モノレールの軌道を、東大阪市瓜生堂まで8.9km南伸する事業である。この南伸する区間に5つの新たな駅を設けることで、近鉄奈良線、Osaka Metro 中央線・長堀鶴見緑地線、JR学研都市線、京阪本線と接続して、大阪府内の利便性がより高まる。令和11(2029)年開業を目指して工事が進められている(図1)。大阪モノレールは現在は大阪の中部から北部を運行しており、車両基地も北部の吹田市に万博車両基地が設けられている。

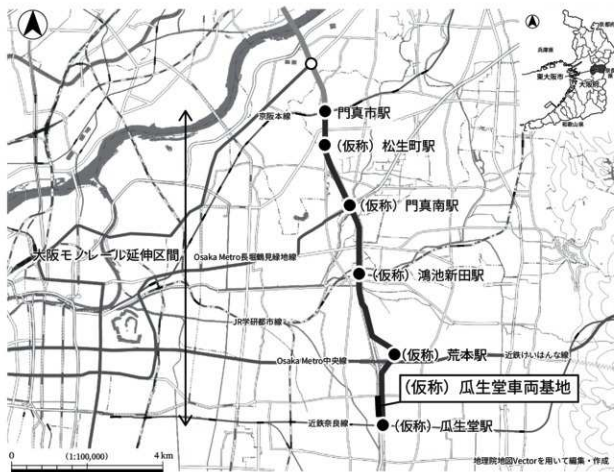


図1 大阪モノレール延伸区間と埋蔵文化財調査地点

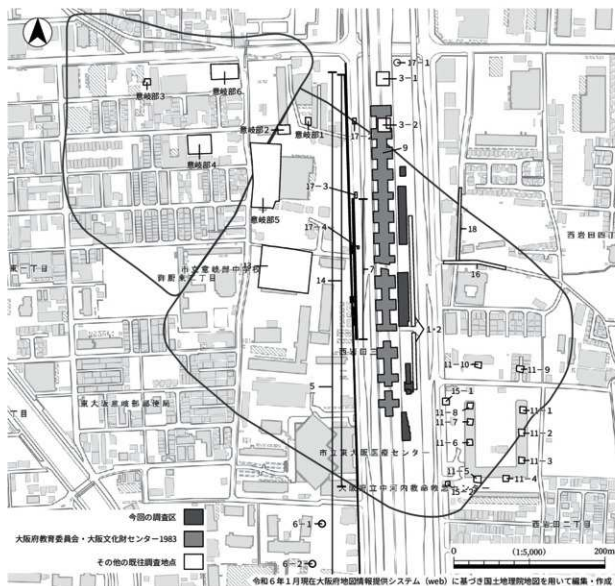


図2 調査位置図

南伸する区間の軌道や新設する駅舎の建設以外にも、車両の増加に対応するため、災害時に万博車両基地の代替機能を果たすために、新たな車両基地の増設が必要となった。そこで、(仮称)瓜生堂駅の北側に、南伸区間を総括するための(仮称)瓜生堂車両基地を建設することとなった(図1)。

(仮称)瓜生堂車両基地の建設予定地は近畿自動車道と大阪モノレールの軌道に挟まれた位置で、総面積は約18,750㎡におよぶ。その範囲には西岩田遺跡が含まれる。そのため、建設工事に先行して文化財調査が実施されることとなった。

今回の調査地は大阪府東大阪市西岩田3丁目地内に所在し、近畿自動車道天理～吹田線の高架下にあたる。(仮称)瓜生堂車両基地の留置線、入庫線、事務室、列車検査場、工作車検収庫などを増築する箇所を調査区として、5カ所の調査区が設定された(図2・3)。

文化財調査に先立って、当センターでは令和3年7月29日付で「(仮称)瓜生堂車両基地整備に伴う文化財調査業務」という契約名称で、大阪モノレール株式会社との間で委託契約を締結した。契約締結後、大阪府教育庁の指導の下、令和3年8月2日より令和4年10月31日まで現地調査を実施した。その後、遺物整理作業については令和4年10月20日付で「(仮称)瓜生堂車両基地整備に伴う文化財遺物整

理業務」の契約を締結し、当センター中部調査事務所において、令和4年11月1日より令和6年1月31日まで遺物整理作業を実施し、令和6年5月の報告書の刊行をもって、遺物整理事業は終了した。

第2項 調査の経過

今回の発掘調査は近畿自動車道天理～吹田線の高架下にあたり、調査地全体が南北に細長い形状をとる。構造物の建設予定地にあわせて、調査区を5カ所設定し、北から1区、2区、3区、4区、5区とした(図3)。各区の調査面積は93㎡、800㎡、974㎡、260㎡、341㎡で、調査総面積は2,468㎡である。

各調査区の掘削深度は既往の調査成果から4m超の深さに設定された。また、調査地の西には近畿自動車道天理～吹田線が、東には大阪府東部流域下水道事務所の下水道管が隣接している。掘削によって地盤が緩み、車両の通行に支障が出たり、下水道に影響が出ることは未然に防がなければいけない。そこで、調査区の周囲に鋼矢板等を打設して土留を行うこととした。

1区、2区、5区、3区、4区の順で調査に着手したが、1区と2区、2区と5区というように複数調査区を併行して調査を進めた。また、4区については、中央に関西電力両渠や大阪府東部流域下水道事務所の立坑が存在することが判明した。この範囲は鋼矢板を打設できないためオープンカットで法をつけて掘削し、埋め戻し後にその北側と南側に鋼矢板を打設して調査を実施した。つまり、4区は3つに細分して調査することとなった。

発掘調査はまず、盛土・表土・近世の耕作土層を重機で慎重に除去した。現地表の標高平均がT.P.+3.2mであり、T.P.+1.5mに達したところで1段目土留支保工を施工した。その後人力掘削の対象となる地層に達していない場合は、再び機械掘削を行った。

機械掘削終了後、スコップやジョレン、両刃鎌などを使用して人力掘削を行い、ベルトコンベアを用いて掘削土は場外に搬出した。T.P.-0.5mまで掘削した段階で2段目土留支保工を施工し、施工後再び人力掘削を行った。人力掘削は層序ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認および遺物の取り上げに努めた。

人力掘削では地層の堆積状況を断面で観察・分層・写真撮影し、土層断面図を作成した。地層の堆積状況を観察した結果、耕作土や遺物包含層が累重していることが認められたため、必要と判断された遺構面で平面調査を実施した。各遺構面ではトータルステーションや電子平板、レーザー測量を使用して平面図を作成した。

また、各遺構面で検出した遺構は必要に応じて写真撮影を行い、遺構平面図や遺構断面図を作成した。主要な遺構面については、ラフテレーンクレーンを用いた空中写真測量を行った。検出した遺構面の全景写真を撮影する場合には高所作業車を使用した。発掘調査に使用した標高値は、調査区際に設置した4級水準点を使用した。高さ表記はすべてT.P.値である。なお、空中写真測量は、株式会社ケーディエムに委託した。

調査中は大阪府教育庁文化財保護課による立会を逐時行い、調査に関する指示・指導を受けた。大阪府教育庁の最終立会を経て調査を終了した調査区ごとに、事業者である大阪モノレール株式会社に引き渡しを行った。

また、発掘調査と併行して、出土遺物の登録、洗浄、注記、台帳作成や遺構図面整理などの基礎整理作業を現場事務所にて実施した。

令和4年6月16日には大阪モノレール株式会社の要望を受け、近隣の西岩田校区自治会連合会、八戸

表1 西岩田遺跡既往調査一覧

番号	調査原因	調査地	調査主体/発見者	調査期間	調査内容	文献	備考
	中央環状線工事に伴う工業用水道管の埋設工事	—	森田昭次	1965	弥生・古墳時代の遺物採集		
1	中央南幹線下水道管築造工事	西岩田3丁目	中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会	1971.2.20～3.31	弥生土器・須恵器・土師器出土	1	東大阪1次
2	中央南幹線下水道管築造工事	西岩田3丁目	中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会	1971.4.26～6.26	井戸・川床（古墳前期）、掘立柱建物・溝・ビット（古墳後期）検出。 庄内式土器・土師器出土	1	東大阪2次
3	近畿自動車道天理～吹田線建設	西岩田3丁目	大阪文化財センター	1974	落ち込み検出。土師器・須恵器・木製品出土	2	
4	大阪ガス中央幹線埋設	西岩田3丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1974.9～1975.2	庄内式土器・土師器出土	3	東大阪3次
5	上水道排水管敷設	西岩田3丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1974～1976	井戸・溝状遺構・ビット（古墳）検出。 土師器・須恵器	4	
6	マンション建設	西岩田3丁目	瓜生堂遺跡調査会	1976.3.1～4.5	弥生土器・土師器・須恵器・磁器・中近世の土器出土	5	
7	上水道排水管・ガス管敷設工事	西岩田3丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1976.9.4～1977.1.20, 1976.11.15～1977.5.30	溝（古墳前期）、溝・土坑・ビット検出（古墳後期）、庄内式土器・土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・土製品（土師）出土	6	東大阪4・5次
8	マンション建設	西岩田1丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1977	円形埴溝（庄内式併行期）、溝（古墳後期）検出。土師器・土製品（土師）・木製品出土	7	東大阪6次
9	近畿自動車道天理～吹田線建設	西岩田3丁目	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	1979.3.28～1981.9.30	河川（古墳前期）、掘立柱建物・溝・井戸・土坑・ビット（古墳中期）、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ビット（古墳後期）、掘立柱建物（古代）、土坑・竪穴遺構（中世）検出。弥生土器・庄内式土器・土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・磁器・漆器・木製品・石製品・銭貨出土	8	
10	ゴルフスタンド建設					未報告	東大阪7次
11	共同住宅および休日診療所建設	西岩田2丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1980.7.16～8.13	弥生土器・土師器・須恵器・中近世土器・木製品・吉銭出土	9	東大阪8次
12					—	未報告	東大阪9次
13	マンション建設	西岩田3丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1982.7.27～11.11	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・ビット・溝・落ち込み（古墳前期）、掘立柱建物・溝・井戸・落ち込み（中世）検出。 土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石製品・鉄製品出土	10	東大阪10次
14	関西電力（株）による電線地中化工事	西岩田3丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1988.1.13～5.31	掘立柱建物・溝（古墳後期）検出。 弥生土器・土師器・須恵器出土	11	東大阪11次
15	公共下水道築造工事	西岩田2丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1992.11.7～12.4	弥生土器・土師器出土	12	東大阪12次
16	公共下水道築造工事	西岩田4丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1992.11.7～12.4	土師器・須恵器出土	12	東大阪13次
17	公共下水道築造工事	西岩田3・4丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1993.4.19～4.26	ビット（古墳後期）検出。 須恵器・土師器出土	13	東大阪14次
18	公共下水道管築造工事	西岩田4丁目	大阪府教育委員会	2006.11.21～12.5	遺構・遺物無し	14	東大阪15次

※番号は図2、文献は後述の参考文献に対応する。現在の遺跡範囲に含まれない調査地の調査も記載している。

東大阪○次は東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会の調査回数数を表す。

表2 意岐部遺跡既往調査一覧

番号	調査原因	調査地	調査主体/発見者	調査期間	調査内容	文献	備考
	道路建設	—	規則一太郎	1940	土師器・須恵器・石製模造品の採集		
1	共同住宅建設	西岩田3丁目	東大阪市遺跡保護調査会	1978.2.17～ 3.12	溝・ピット(古墳後期)検出、土師器・須恵器・製塩土器出土	未報告	東大阪1次
2	国庫補助事業 (築理確認調査)	西岩田3丁目	東大阪市教育委員会	1980.1.10～ 1.11	土師器・須恵器・瓦器出土	15	東大阪2次
3	ガソリスタック埋設工事	御厨東2丁目	財団法人東大阪市文化財協会	1988.4.15～ 5.2	溝・土坑・竈込み・ピット(古墳後期)、土坑・ピット(鎌倉)、土師器・須恵器・瓦器・土製品(土師)出土	16	東大阪3次
4	賃貸共同住宅建設	御厨東2丁目	東大阪市教育委員会	1999.10.25～ 12.9	土坑・ピット・溝(古墳)、溝・土坑・ピット(平安)、溝・土坑・ピット(平安～中世)検出、土師器・須恵器・瓦器出土	17	東大阪4次
5	店舗建設	西岩田3丁目	財団法人東大阪市文化財協会	2000.4.26～ 5.31	溝・土坑・柱穴・井戸(古墳前期)、溝・土坑・柱穴・井戸(古墳後期)、土坑・柱穴・井戸・大群(奈良～平安)、井戸(中世)検出、土師器・須恵器・埴輪陶器・黒色土器・瓦器・瓦・陶器・製塩土器・磁・土製品(土師・門簾)、石製品(砥石)出土	18	東大阪5次
6	賃貸共同住宅建設	御厨東2丁目	東大阪市教育委員会	2001.7.23～ 9.20	竪立柱建物(古墳中期～後期)、竪立柱建物・ピット(奈良～平安時代)、土坑・溝・池沼検出、土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・石製品(砥石・滑石製有孔門簾)、土製品(土師)出土	19	東大阪6次

※番号は図2、文献は後述の参考文献に対応する。現在の遺跡範囲に含まれない調査地の調査も記載している。

東大阪○次は東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会の調査回数数を表す。

ノ里東校区自治会連合会、および東大阪市役所の交通戦略室、都市計画室、文化課といった関係部署を対象とする現地公開を2回に分けて実施し、約30名の参加があった。その他、大阪モノレール株式会社による工事進捗の説明に対し、遺物展示や解説、延伸事業の紹介動画での文化財事業の説明、施設見学者等に配布するパンフレットの写真提供などの協力を行っている。

遺物整理では、現場調査時に実測した遺構平面断面図や地層断面図、写真測量で得た遺構平面図などを整理してデジタルトレースを行い、遺構挿図を作成した。現場で撮影した遺構写真は調査区や遺構面ごとに抽出し、遺構写真図版を作成した。

出土土器については、遺構や層位ごとに接合・復元を試み、残存状況の良い遺物や重要遺構出土遺物を抽出して実測し、デジタルトレースにより遺物挿図を作成し、観察や所見の一覧表を作成した。また、中部調査事務所写真室にて写真撮影を行い、遺物写真図版を作成した。その他の遺物についても特に重要なものを抽出して、同様の挿図や写真図版を作成した。

遺構や遺物に関する記述のみならず、周辺の環境や既往の調査成果もふまえて原稿を作成した。また、委託を行った自然科学的分析は結果報告書に基づいて編集を行い原稿を作成した。全体の編集校正を経て、令和6年5月に報告書を刊行した。

報告書作成作業と併行して実測図や写真、出土遺物の収納作業を行い、報告書掲載情報や収納場所を検索できる台帳を作成し、一連の遺物整理業務が完了した。

第3項 既往の調査

西岩田遺跡と西岩田遺跡に隣接する意岐部遺跡の既往の調査については、調査位置を図2に、調査概

要を表1・2にまとめた。

〈参考文献〉（行頭の番号は表1・2の文献欄の番号と対応する）

1. 中央南幹線内遺跡調査会 1971 『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』
中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 『西岩田遺跡』
2. (財)大阪文化財センター 1975 『近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書』((財)大阪文化財センター調査報告11)
3. 芋本隆裕 1975 「大阪ガス中央幹線埋設に伴う調査」『調査会ニュース No.1』 東大阪市遺跡保護調査会
4. 勝田邦夫・才原金広 1977 「上水道排水管敷設工事に伴う瓜生堂、西岩田、新家遺跡の調査」『調査会ニュース No.7』 東大阪市遺跡保護調査会
5. 瓜生堂遺跡調査会 1976 『西岩田・瓜生堂遺跡 試掘調査報告書Ⅰ』
6. 勝田邦夫・才原金広 1984 「瓜生堂・西岩田遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』(財)東大阪市文化財協会
7. 上野利明 1980 「西岩田遺跡出土の土師器について」『調査会ニュース No.16』 東大阪市遺跡保護調査会
8. (財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
9. 松田順一郎 1989 「西岩田遺跡第8次試掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』(財)東大阪市文化財協会
10. 福永信雄 1997 「西岩田遺跡第10次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集—1996年度(1)一』(財)東大阪市文化財協会
11. 芋本隆裕 1989 「西岩田遺跡第11次試掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1988年度』(財)東大阪市文化財協会
12. 木建正宏 1994 「西岩田遺跡第12・13次試掘調査概報」『東大阪市下水道関係発掘調査概要報告—1992年度—』(財)東大阪市文化財協会
13. 金村浩一 1995 「西岩田遺跡第14次発掘調査概報」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1993年度—』(財)東大阪市文化財協会
14. 才原金広 2008 『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—平成19年度—』 東大阪市教育委員会
15. 芋本隆裕・勝田邦夫 1980 『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要—1979年度—』 東大阪市教育委員会
16. 若松博恵 1998 「意岐部遺跡第3次発掘調査」『東大阪市文化財協会概報集—1997年度—』(財)東大阪市文化財協会
17. 下村晴文 2000 「意岐部遺跡第4次調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成11年度—』 東大阪市教育委員会
18. (財)東大阪市文化財協会 2002 『意岐部遺跡第5次発掘調査報告書』
19. 菅原章太・植原美智子 2002 「意岐部遺跡第6次発掘調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成13年度—』 東大阪市教育委員会

第2節 調査・整理の方法

第1項 調査の方法

当センターが発掘調査の統一や標準化をはかるマニュアルとして発行する、『遺跡調査基本マニュアル』2010に従って発掘調査並びに整理作業を行った。

調査区割 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては上述のマニュアルに基づき、平面直角座標系第VI系（世界測地系）を基準とした区画を使用した。これにのって第I～第IVまでの大小4段階の区画を設定した（図3）。

第I区画は、大阪府の南西端 $X=-192,000\text{m}$ 、 $Y=-88,000\text{m}$ を基準とし、南北方向に6km、東西方向に8kmで府域を62区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へ0～8とする。

第II区画は、第I区画を南北方向に1.5km、東西方向に2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。

第III区画は第II区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。

第IV区画は、第III区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。

今回の調査地は第I区画がH6、第II区画が6、第III区画が9F～9J・8Iにあたる。出土遺物を取り上げる際には、第I区画から第IV区画までをラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にもこの区画割に基づいた区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を用いている。

調査名・調査区の設定・呼称 マニュアルに従って遺跡名に調査開始年（西暦）の下2桁を加え、さらにその年度内での同一遺跡の調査回数や枝番号で示した調査名称を使用している。従って、今回の調査名は西岩田遺跡21-1となる。

調査区名は、5つの調査区に対して北から番号を付与して、1区、2区、3区、4区、5区とした（図3）。4区は調査区をさらに3分割して調査したため、4区の後ろに枝番号を付与して4-1区、4-2区、4-3区とした。

遺構名 遺構の検出順に、1からの通し番号を遺構種別の前に付与した（例：1溝）。発掘調査時に実測や遺物取り上げが生じた遺構にのみ、遺構名を付与している。なお、複数調査区を同時に調査しているため、同じ遺構面であっても遺構番号は連続していない。

掘立柱建物など、複数の遺構が集合して1つの遺構を形成するものについては、柱穴などの個別の遺構番号とは別の通し番号を付与し、遺構種類-遺構番号として表記した（例：掘立柱建物1）。

記録作業 発掘調査に使用した標高値や、断面図の記録に使用した高さは、調査区際に設置された4級水準点をもとにしており、高さ表記はすべてT.P.値である。水準点の打設は事業者が実施している。主要な遺構面の全景写真を撮影する場合には、事業者が打設した4級水準点を使用し標定点を打設し、ラフトレーンクレーンを用いた空中写真測量を測量会社に委託して実施した。

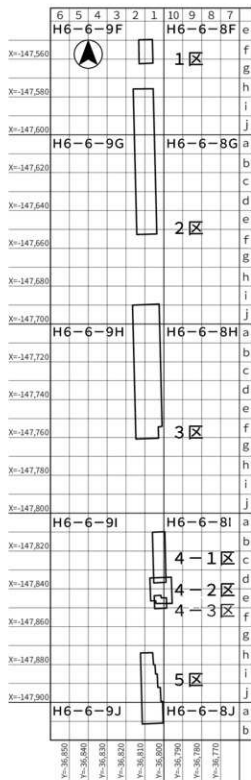
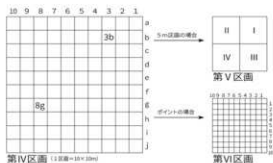
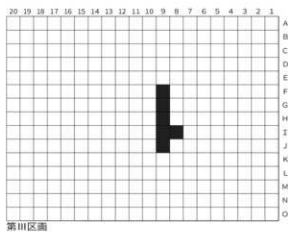
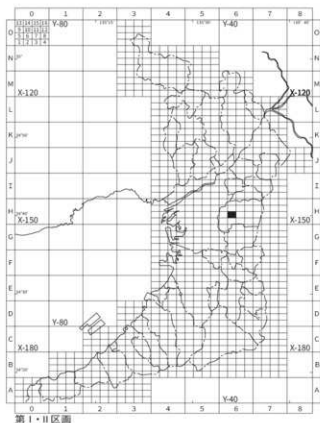


図3 調査区配置図・地区割図

各調査区の全景写真撮影に関しては、高所作業車を使用して調査担当者が撮影した。また、個別の遺構写真や出土状況、土層断面等も必要に応じて撮影を行った。撮影に使用したカメラはデジタル一眼レフカメラ（APS-C）と中型フィルムカメラ（6×7）、使用フィルムは白黒・カラーリバーサルである。

遺構面測量は、レーザー測量や電子平板を用いて、100分の1を基本とする遺構平面図を作成した。高さの記録が必要な場合にはレベル測量を行い、平面図に高低差など地形の変化を記録した。また、個別遺構の平面図・断面図・立面図や出土状況図については、必要に応じて10分の1、20分の1等の縮尺で作成した。

土層観察用の断面に関しては、南北方向は1区は東壁面、それ以外の調査区では西壁面で20分の1の断面図を作成した。東西方向に関しては、北壁、南壁の両方、あるいはそのどちらかで20分の1の断面図を作成した。その他、面積が大きい2区や3区では、必要に応じて東壁や中央にもアゼを設定して土層の堆積状況、土色、土質を記録した。

基礎整理作業 調査と併行して、現場事務所に基礎整理作業を実施している。

発掘調査で出土した遺物は、出土地区や出土年月日に応じて登録番号を付与し取り上げた。洗浄することで遺物の種類や残存状態を観察し、洗浄後は土器や金属製品等は乾燥させ、木製品などの有機遺物は水を入れたコンテナに収納して仮保存した。

遺物の取り上げ時に記入したラベルに基づいて、調査名や登録番号を注記した。また、遺物の出土区・出土層位・出土遺構などの情報を検索しやすいように、登録番号をキーとする Microsoft 社製 Excel 形式の遺物台帳を作成した。遺物台帳には、洗浄時の遺物写真も貼り付けて、出土時の個数や状態がみ分かるように工夫されている。

現場で記録した遺構実測図については、隣接する調査区との整合性や土層断面図のつながりを確認するなどの基礎的な整理を実施した。また、遺構実測図面には図面ごとに番号を付与して、実測内容、縮尺などが分かる実測図台帳を作成した。

撮影した写真フィルムは、撮影順に写真番号を付与してアルバムに収納した。デジタルカメラで撮影した写真のデータは RAW 形式と JPG 形式があり、それぞれをハードディスクに保存した。フィルム写真、デジタル写真ともに、必要情報（調査区・層位・遺構名など）のデータを入力した Microsoft 社製 Excel 形式の写真台帳を作成し、遺構写真の整理を行った。写真台帳も軽量化した写真データを貼り付け、検索しやすいように努めた。

第2項 整理の方法

遺物整理、報告書作成作業は中部調査事務所にて実施した。

台帳作成 基礎整理作業から継続して、遺物台帳や写真台帳を作成した。写真台帳では、写真図版に掲載する写真について、掲載写真番号なども登録し、使用した写真を検索できるようにし、今後の活用に対応できるよう努めた。

挿図や写真図版に使用した遺物は、実測番号や掲載遺物番号、収納コンテナ番号なども遺物台帳に入力し、今後の貸出依頼に対応できるよう整備した。

遺構挿図作成 遺構平面図は、現場で実測した原図や写真測量の平面図をもとに Adobe 社製 IllustratorCC を用いてデジタルトレースを行い調査区平面図を作図した。主要遺構については、現地で作成した平面図、断面図、遺物出土状況図などの実測図を組み合わせて、遺構挿図を作成した。遺構挿

図の合成は Adobe 社製 PhotoshopCC を用いて行い、浄書は Adobe 社製 IllustratorCC を用いてデジタルトレースを行った。

遺物の抽出・実測・復元・挿図作成 洗浄・注記作業を終えた遺物は、同じ遺構や隣接する地区ごとに接合を試み器形を復元した。接合しても欠損している部分は石膏による補充や着色を行い、より原形に近くなるように努めた。

復元した遺物の中から、報告書に挿図や写真として掲載する遺物を抽出し、遺物実測図を作成した。また、実測図のみでは表現しにくい一部の遺物に関しては拓本を採った。

遺物実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを行い、合成は Adobe 社製 PhotoshopCC を用いて行った。浄書は Adobe 社製 IllustratorCC を用いてデジタルトレースを行い、遺物挿図を作成した。

写真図版作成 現地撮影した遺構面および個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別してフィルム写真のスキャニング作業を行い、デジタルデータ化した。調査区や遺構順に写真をレイアウトし、Adobe 社製 InDesignCC を用いて版組を行い、写真図版を作成した。

また、遺物は報告書に掲載するものを選別して、写真室にて写真撮影を行った。撮影した写真は TIFF 形式にデータ化した。調査区や遺構、器種順などによって写真をレイアウトし、Adobe 社製 InDesignCC を用いて版組を行い、写真図版を作成した。

原稿執筆・編集 その他、報告書作成に必要な、周辺地域や既往の調査成果を記載した文献の収集や、報告書原稿執筆のための基礎資料を作成した。

以上の作業と併行して遺構、遺物の事実報告やまとめとなる総括の原稿を執筆した。委託分析や同定については、結果報告書を遺構、遺物の事実記載と対照してより理解が深まるように再編集し、挿図を追加するなどして掲載した。

Adobe 社製 InDesignCC を用いて原稿、挿図、写真図版の編集、校正作業を実施し、報告書を完成した。入稿後は校正作業を経て、本書の刊行を行った。

収納 編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類した。報告書掲載遺物については、挿図番号や写真図版番号が確定すると個々の遺物に掲載遺物ラベルを付与し、掲載順にコンテナに収納した。未掲載遺物についても、登録番号順にコンテナに収納し、コンテナの表面には報告書番号や調査名（遺跡名）、登録番号を記載したコンテナラベルを貼付した。コンテナ番号は遺物台帳に記入して必要時には検索できるようにした。

遺構実測図については、実測図 1 枚ごとに図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号順に並べ替え、図面ケースに収納した。実測図についても遺構、遺物ごとに台帳を作成した。図面ケースや写真アルバムの背表紙には調査名や報告書番号、報告書名を記入したラベルを貼付した。

その他、測量委託、分析委託の成果品等にも調査名や報告書番号、報告書名を記入したラベルを貼付して、整理作業の成果品として一括して管理できるようにまとめた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

西岩田遺跡は東大阪市の中央部、東大阪市西岩田2丁目から4丁目、御厨東2丁目^{みくりや}に所在する。遺跡は南北約0.5km、東西約0.5kmの範囲に広がり、古墳時代の集落跡として周知される。遺跡範囲の中心を南北に中央環状線、近畿自動車道が縦断し、遺跡の南には近鉄奈良線が通る。

西岩田遺跡が所在する東大阪府は大阪府のほぼ中央に位置する。現在の行政区分で言えば、北は大東市、西は大阪市、南は八尾市と接する。市内東側は生駒山西麓にあたり、奈良県との府県境となる。昭和42（1967）年に布施、河内、枚岡の3市が合併して東大阪市となり、平成17（2005）年には大阪府内で3番目の中核市へと移行した。

東大阪市の市域の大部分は低地に分類され、「河内平野」と呼ばれる沖積地に立地する。河内平野は山地や台地に囲まれ、北には淀川、南には大和川が流れる。（図4）。

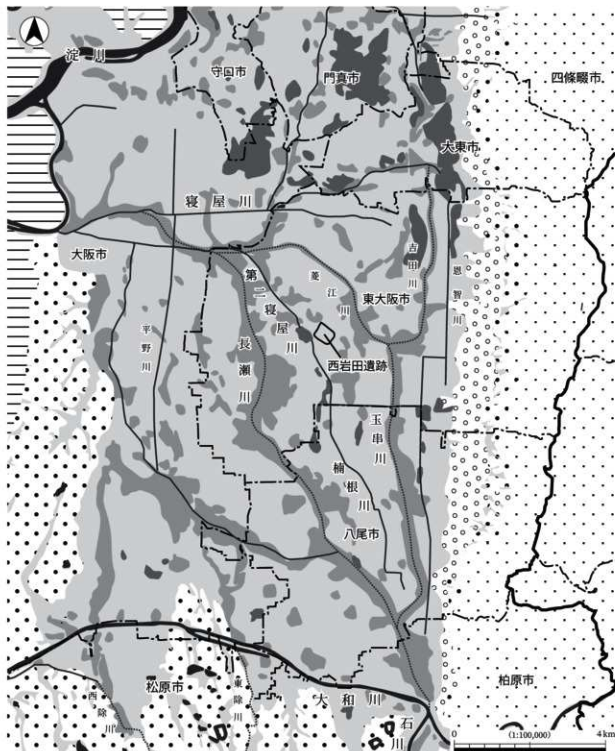
河内平野の古地理の変遷については、梶山彦太郎・市原実両氏による一連の研究をはじめ、戦後の都市開発の進展とともに解明されてきた（梶山・市原1986）。縄文時代前期に縄文海進により「河内湾」が形成され、海岸線が現在の寝屋川市付近まで入り込んだ。その後、河内湾は旧大和川、旧淀川から運ばれる土砂によって埋積し、縄文時代中期から晩期にかけて、「河内潟」と呼ばれる干潟が形成される。弥生時代から古墳時代には土砂の流入が進み、河内潟は湾口が塞がれることにより「河内湖」へと次第に変化する。

西岩田遺跡は河内湖南岸の縁辺部に立地していた。南に瓜生堂遺跡、北に新家遺跡、東に岩田遺跡、西に意岐部遺跡^{いぎべ}等が所在する（図5）。当遺跡周辺では繰り返される河川の堆積作用により、沖積平野が形成された。これまでの発掘調査では、運ばれた土砂が埋積することにより標高に高低差が生じ、凹凸のある地形であった状況を確認している。人々は氾濫が発生する度に居住域を移動させ、水位が下がり陸地化した範囲に集落を展開していたと推測される。

宝永元（1704）年には、大和川の付け替え工事により河内平野の地理的環境は大きく変化する。旧大和川は、生駒山地を抜けて現在の柏原市付近で石川と合流し、長瀬川（久宝寺川）と玉串川（玉櫛川）に分かれていた。2つの川は小河川や池と合流しながら北に向かい、上町台地の北端で淀川と合流して海へと流れていた。旧大和川の支流は土砂が堆積した天井川で、破堤、氾濫が発生するたびに洪水被害が多く発生した。河内平野の治水については、『日本書紀』における「堀江」や「茨田堤^{あつたづみ}」に関する記述に始まり、江戸時代以前も度々試みられたと考えられている。

現在の大和川は石川と合流し、そのまま西へ向かい大阪湾に流れる。治水工事は旧川床や池沼地は埋め立てられ新田として開発が進み、新田の経営拠点であった鴻池新田会所は国史跡として知られる。新田では綿花が盛んに栽培され、「河内木綿」として全国に流通した。新田が広がっていた範囲は、現在は商工業地域へと変換し、都市化が進んでいる。

大和川の付け替え後も東大阪市内では都市化の影響により、雨水の流出量が増大して水害が度々発生した。昭和44（1969）年には対策として人工河川である第二寝屋川が開削された。現在、当遺跡の西に流れる第二寝屋川の流域はかつて淀川水系の桶根川であった範囲にあたる。



国土地理院治水地形分類図に基づき作成

凡例

山地	台地・段丘	低地		
段丘面	扇状地	機高地(自然堤防)		
その他	氾濫平野	砂州・砂丘		
現河道・水面	後背湿地	旧大和川流域	

図4 周辺地形分類図

第2節 歴史的環境

河内平野には、縄文時代から近世の遺跡が多く所在している（図5）。昭和51（1976）年から昭和61（1986）年にかけて実施された、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査では、河内平野を南北に縦断するように調査区が設定され、河内平野における考古学的研究の端緒となった。以降も調査成果が蓄積されており、古環境復元を含めて検討が続けられている。以下は当遺跡周辺の考古学的調査成果を中心に歴史の変遷を紹介する。

縄文時代 縄文時代前期になると、縄文海進により海水面が上昇し、西岩田遺跡周辺は水没していた。当時の河内湾は生駒山西麓まで広がり、東岸部に位置していた鬼虎川遺跡では海食崖を確認できる。当該時期の遺跡は生駒山山麓部や段丘面・扇状地上を中心に分布する。

縄文時代中期から晩期にかけて、当遺跡周辺は海域から河内湾へと変化した。若江北遺跡では後期前葉の深鉢、新家遺跡、山賀遺跡では後期の土器が出土した。平野部では陸地化が進んだことにより、縄文時代晩期以降に遺跡数が増加し、多数の遺跡で出土資料を確認している。

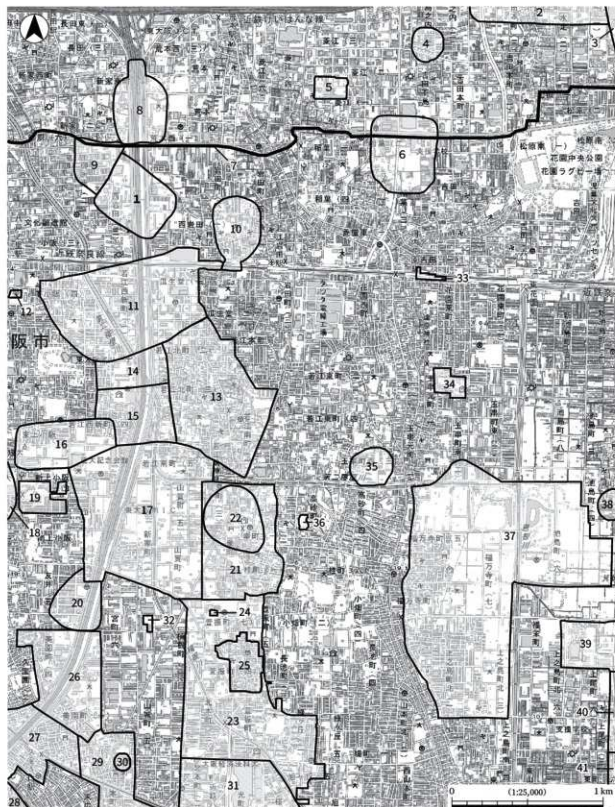
弥生時代 縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけて、河内湾は規模が縮小し、汀線に沿って微高地上に集落が営まれた。弥生時代前期には後背湿地を利用した水稲農耕が開始され、若江北遺跡や山賀遺跡では集落とともに水田を検出した。東大阪市と八尾市にまたがって位置する池島・福万寺遺跡は弥生時代前期から現代まで続く生産域である。弥生時代前期中葉以降は、瓜生堂遺跡、美園遺跡等で居住域、友井東遺跡で生産域を確認している。

弥生時代中期になると、遺跡数が急激に増加する。各遺跡の集落は拡大し、方形周溝墓群からなる墓域をとまなう事例が目立つようになる。瓜生堂遺跡は当該期の拠点集落として著名である。平野部では、巨摩庵寺遺跡、若江北遺跡、若江遺跡、山賀遺跡、新上小阪遺跡等で居住域や墓域が展開される。一方、鬼虎川遺跡をはじめ、生駒山山麓に立地する遺跡でも大規模な集落域を確認しており、平野部の様相と対比される。

弥生時代から古墳時代にかけて、河川の氾濫が頻繁に発生するようになり、湾口が埋没した河内湾は河内湖へと変化した。弥生時代後期以降、河内湖南岸の平野部では自然環境の変化が激しくなり、大規模集落は解体され、小規模の集落が点在するようになる。各遺跡では当該期の流路や氾濫を起因とする堆積を確認しており、流されてきた、もしくは何らかの祭祀に用いられたと考えられる土器や木製品が出土することも少なくない。巨摩庵寺遺跡では墓域、瓜生堂遺跡・岩田遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡では生産域を確認している。

古墳時代 弥生時代から続く河川の堆積作用により形成された微高地上に新しい集落が展開される。河内湖の南に流れていた旧大和川水系の各分流路に沿って多くの遺跡が分布する。当時の大和川の本流である「小阪合分流路」、およびその分流である「萱振分流路」の流域に広がる山賀遺跡・西部遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡等では古墳時代前期の居住域や墓域を確認している。一方、河内湖南岸の縁辺部は後背湿地にあたり、生産域として利用されることが多い傾向がみられる。

久宝寺遺跡では、古墳時代前期の準構造船や木製榑等が出土しており、河内湖沿岸で遠距離航海が行われていたことを示す。また、各遺跡では他地域との交流がうかがわれる外来系要素を有する遺物を確認している。西岩田遺跡では、中央南幹線下水管渠築造に伴う発掘調査における庄内式甕と吉備系甕の共伴例（調査会1971）にはじまり、西日本を中心とする地域と関連する土器が出土している。



- | | | | | | | |
|----------|-------------|----------|----------|-----------|----------|------------|
| 1 西岩田通跡 | 2 水北通跡 | 3 曳舟川通跡 | 4 吉田通跡 | 5 藤江寺跡 | 6 稲葉通跡 | 7 堀内越前守良直道 |
| 8 新家通跡 | 9 豊後部通跡 | 10 新田通跡 | 11 瓜生堂通跡 | 12 長竹通跡 | 13 若江通跡 | 14 巨摩興寺通跡 |
| 15 若江北通跡 | 16 上小坂通跡 | 17 山賀通跡 | 18 小若江通跡 | 19 新上小坂通跡 | 20 友井東通跡 | 21 西郡通跡 |
| 22 西郡南寺 | 23 雲南通跡 | 24 雲南1号境 | 25 雲南寺内町 | 26 美園通跡 | 27 佐堂通跡 | 28 久宝寺通跡 |
| 29 宮町通跡3 | 30 穴太興寺 | 31 兼郡通跡 | 32 橋樑通跡 | 33 花原敷通跡 | 34 花園通跡 | 35 玉串通跡 |
| 36 高杉町通跡 | 37 池島・福万寺通跡 | 38 池島東通跡 | 39 大竹西通跡 | 40 太田川通跡 | 41 水尾通跡 | |

図5 周辺通跡分布図

河内湖の南では弥生時代の方形周溝墓の流れを汲む小規模な方墳が多く築造される。美園遺跡では古墳時代前期後葉に方墳（美園古墳）が築かれ、周溝からは国指定重要文化財に登録された家形埴輪や壺形埴輪が出土した。その他、萱振遺跡では方墳（萱振1号墳）より靫形埴輪や武具形埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪等の形象埴輪とともに朝顔形埴輪・鯨付円筒埴輪が出土した。久宝寺遺跡では墓域が広がり、前方後方墳である久宝寺古墳では壺形埴輪を用いた葬送儀礼が行われた。

古墳時代中期以降、河内湖南岸縁辺部では居住域が広がり、西岩田遺跡や新家遺跡、意岐部遺跡で集落が形成される。南河内では集落が拡大し、各遺跡で渡来系集団の移入に伴う影響が確認できる。久宝寺遺跡では掘立柱建物を中心とする居住域より多数の韓式系土器が出土している。また、河川に付随する水制を検出し、当時では先進的な技術によるものと考えられる。生駒山西麓に近い池島・福万寺遺跡等では未製品を含めた滑石製品が大量に出土しており、集落内で生産されていたと推定される。

羽曳野丘陵では古墳時代を通して、大型前方後円墳からなる古市古墳群が形成される。中期になると生駒山西麓においても全長160mをはかり、中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳が築造される。河内湖の南では前期から続き、巨摩麻寺遺跡（巨摩1号墳）、友井東遺跡等で、小規模な方墳が分布する。河内湖南岸の縁辺部では、瓜生堂遺跡や岩田遺跡で古墳時代中期から後期の円筒埴輪が出土しており、石田神社付近には古墳が存在したという伝承がある（福永1975）。

古墳時代後期以降、山麓部に多数の群集墳が築造され、渡来系氏族との関連も指摘されている。また、河内地域は当時の有力氏族であった物部氏の本拠地の一つと推測されており、久宝寺遺跡では物部氏の居館跡と想定される建物群を確認している（八尾市史編纂委員会2020）。河内湖南岸の縁辺部では当該期の集落は少ないものの、西岩田遺跡・意岐部遺跡・呉竹遺跡で確認している。

古代 当遺跡周辺は旧令国制の河内国若江郡に属していた。中河内地域は難波と大和を結ぶ交通の要衝地であり、飛鳥時代には仏教文化が伝わっていたと考えられる。若江遺跡では素弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、飛鳥時代に創建された若江寺との関連が推測される。また、瓜生堂遺跡では「若」と記した墨書土器が出土しており、若江郡衙が存在した可能性を示す。

8世紀以降になると集落が増加する。萱振遺跡では8世紀代の掘立柱建物群を検出しており、西郡麻寺（錦織氏）に関連する集落であった可能性があると指摘されている。瓜生堂遺跡、美園遺跡からも当該期の集落を確認している。岩田遺跡では8世紀から10世紀の集落を検出しており、円面硯や帯金具、墨書土器等の官人との関連がうかがわれる遺物が出土した。川原寺式に類似する瓦や、「足得」「中臣」のスタンプがある恭仁京式瓦、平城京・恭仁京と同範瓦等も出土しており、中央政権と関係があった氏族の存在が推測される。

中世 中河内地域は複数の街道や水路が走り、京都や大和とつながっていたため、多くの荘園や公領が置かれた。若江郡内には10世紀中頃に成立する醍醐寺領河内五箇庄の一つである若江庄、11世紀後半には成立したとされる石清水八幡宮領掃部別宮、12世紀中頃には興福寺領若江庄があったとされる。

中世前期に中河内一帯に勢力を持った水走氏に関連する遺跡として水走遺跡がある。水走氏は河内国一ノ宮平岡神社（現・枚岡神社）の神職や皇領の大江御厨の管理と警護も兼ねた在地領主であり、中世後期には畠山氏の臣下となる。14世紀後半には、河内国守護畠山氏により若江城が築かれ、若江寺を破壊して築城したのと考えられる。若江城は織田信長の石山本願寺攻略の拠点として利用された後、天正8（1580）年には廃城になったとされる。発掘調査により土塁や堀、井戸等の関連遺構を確認しており、城郭規模は東西約0.5km、南北約0.4kmの範囲におよぶと推定されている。

瓜生堂遺跡、岩田遺跡では12世紀前半から15世紀までの集落を確認している。巨摩鹿寺遺跡では12世紀後半から15世紀の集落がみつかり、13世紀中頃から後半には掘立柱建物や井戸を大溝で区画する様相を確認している。花屋敷遺跡では、13世紀から16世紀に集落が形成された。

中世以降、河内湖南岸の縁辺部は生産地として利用されていたと考えられ、新家遺跡では土俵を敷き詰めた道状遺構を検出しており、低地で活動していた人々の痕跡と言える。

〈参考文献〉

- 大阪府教育委員会 2009 『呉竹遺跡』
- (財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
- (財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1987 『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』
- (財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1991 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1995 『新家遺跡第6次発掘調査報告書』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1996 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書―第5次―』
- (財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1996 『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』
- (財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1998 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』
- (財)大阪文化財センター 1995 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告―第4次―』
- (財)大阪府文化財センター 2003 『新上小阪遺跡』
- (財)大阪府文化財センター 2004 『岩田遺跡』
- (財)大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡1』
- (財)大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡2』
- (財)大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡3』
- (財)大阪府文化財センター 2007 『新上小阪遺跡Ⅱ』
- (財)大阪府文化財センター 2007 『山賀遺跡』
- (財)大阪府文化財センター 2009 『山賀遺跡Ⅱ』
- (財)大阪府文化財センター 2010 『新上小阪遺跡Ⅲ』
- (公財)大阪府文化財センター 2012 『瓜生堂遺跡4・岩田遺跡2・花屋敷遺跡3』
- (公財)大阪府文化財センター 2012 『鬼虎川遺跡』
- 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 『西岩田遺跡』
- 八尾市史編纂委員会 2017 『新版 八尾市史 考古編1―遺跡からみた八尾の歩み―』
- 八尾市史編纂委員会 2020 『新版 八尾市史 考古編2―遺跡からみた八尾の歩み―』
- 梶山彦太郎・市原実 1986 『大阪平野のおいたち』 青木書店
- 櫻田小百合・森本徹・市村慎太郎 2016 『河内地域』『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』
古代学研究会
- 福永信雄 1975 『岩田遺跡』『東大阪市遺跡保護調査会年報1』 東大阪市遺跡保護調査会
- 松田順一郎 2000 『八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達』『小阪合遺跡1』
(財)大阪府文化財調査研究センター

第3章 調査成果

第1節 基本層序

西岩田遺跡の今回の調査区は南北約0.5km、東西約0.05kmの範囲内に南北に間隔をあけて並ぶ形状をとっている(図3)。1区北端から5区南端までの距離は約0.36kmある。そこで、南北方向の基本層序は西壁(1区のみ東壁)で地層断面図を作成して、連続した層序の把握に努めた(図7)。東西方向の地層断面図は北壁、南壁の両方、あるいはいずれかで作成した(断面実測の箇所は図6下段に示した)。その他、2区と3区については調査区長や幅が広いこと、堆積状況が東西南北で大きく異なる場合は、東壁や調査区の中央辺に東西アゼを設定して層序の把握に努めた。

各調査区の断面図は、第2節以降の各調査区の調査成果に図示した。当節では、各区の基本層序を柱状化した模式図(図6)と南北方向をつなげた西壁断面図(図7)から基本層序を概略する。また、今回の調査区の西側に隣接する、近畿自動車道建設に伴う発掘調査時との層序の対比をまとめ、第5章第1節の表14に掲載した。

流路堆積層上部の耕作土層や古土壤層といった土壌化層をa層、母材である水成層をb層と呼称する。土壌の母材が明確である層にはa・b層をつけ、西岩田遺跡の基本層序を1層から4層に大別した。また、遺構面名称は層の上面を層と共通した名称とする(例:3a層の上面は第3面)。一つの層をさらに細分する際は枝番号を付して「○-○a層」(例:2-1a層)とし、分層を一括して呼称する場合は「○層」(例:2a層)とする(分層の表記は断面図の注記に記し、本文中は○層の表現で統一して記述した)。

西岩田遺跡の地形的な特徴は、場所によって高低差が著しいことである。これは西岩田遺跡の立地する環境に大きく起因する(第2章第1節参照)。西岩田遺跡周辺は縄文海進によって河内湾の水域であったが、その後は河内湾、河内湖へと変化した。西岩田遺跡はこの河内湖の縁辺部に位置しており、河川の氾濫によって堆積した砂が自然堤防を形成し、その内側や周辺に河内平野遺跡群がつくられた。

現標高は全域を通じてほぼ平坦でT.P.+3.2mだが、これは近現代の造成や土地改良によって盛土等が行われ、地表面が平坦化された結果と言える。中世後半期までは3区北半周辺が最も高かったようで、3区を頂点としてそれ以北、以南に下がっていく地形である。近世土層である1a層上面検出高は、3区北半ではT.P.+1.6~+1.7mであるが、1区ではT.P.+0.3m、5区ではT.P.+0.8mと、その高低差は0.8~1.3mにもおよぶ。

3b層を除いた古墳時代初頭面(4a層上面)では、1区が最も低くT.P.-1.9m、次いで2区の南半から3区北半がT.P.-1.6~-1.5mである。ところが、3区南半や4-1区では、T.P.-0.8~-0.6mと高く、高低差が2a層上面検出高と逆転している。これは弥生時代末から古墳時代初頭の流路堆積(註1)において、2区南半から3区北半を中心に砂礫層が上方に積み重なって厚く堆積したことにより、低い区域が一挙に高くなり、高低差が逆転する現象が起きたためと考えられる。以後、この砂礫層の土壌化が進み3a層(古墳時代を主とする包含層)や2a層(中世後半を主とする包含層)が形成されるが高低差は解消されることなく、2区南半から3区北半では陸地化した部分を活かした土地利用がなされたと考えられる。

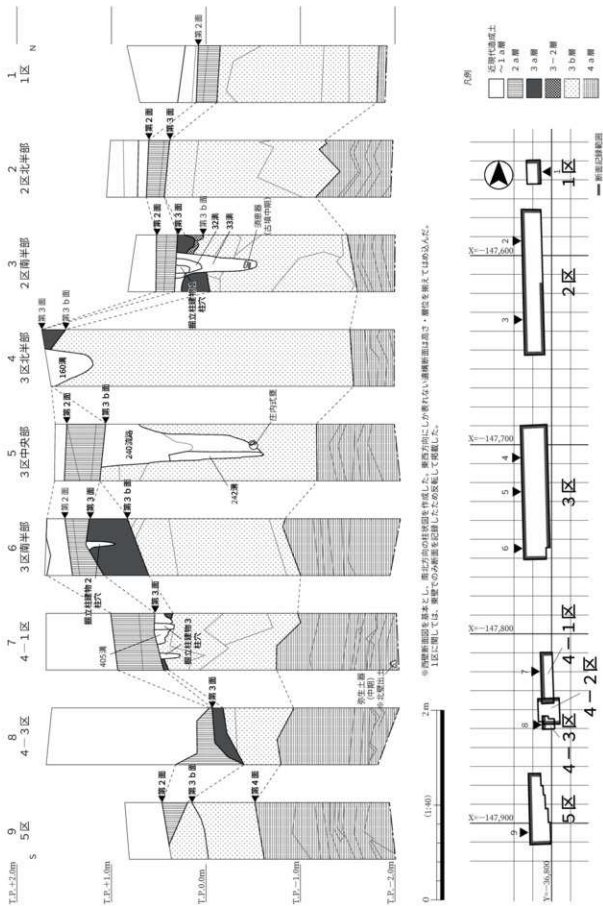


図6 基本層序模式図

※西側断面図を基本とし、南北方向の柱梁図を作成した。東西方向にしが差れない連続断面は高さ・層位を揃えてはめた。また、1区に關しては、基礎でのみ断面を記したため区別して作成した。

中世後半期以降の段階で、耕作などのため地表を平坦化する土地改良が行われた結果、古墳時代から中世前半期にかけて標高が高かった範囲が削平を受けたため、当該地で古墳時代以降の包含層が残存していないと推測される。

近現代盛土 各調査区の現標高は平均 T.P.+3.2m であり、これより T.P.+1.7~+1.0m までは、近現代の盛土や耕作土が堆積していた。重機による機械掘削を行った。

1 a 層 1 a 層は灰色や暗灰色の粗砂混じりシルトの耕作土層である。酸化鉄を含みかたく締まる。

調査地によって検出高が異なり、最低標高の 1 区や 5 区では T.P.+0.4m、最高標高の 3 区南半部では T.P.+1.7m で検出した。耕作土層としたのは、断面で畝溝などが観察されたためである。

瓦質土器や陶磁器、瓦を包含することから、中世末から近世の耕作土と考えられる。1 a 層は 3 区北半部や 4 区などでは削平されており、確認できない。

2 a 層 2 a 層は 2 区では 2-1 a 層から 2-4 a 層に細分される。暗灰黄色～灰色、あるいは鈍い黄褐色の極細砂～細砂混じりシルトでかたく締まり、斑鉄が認められる耕作土層である。2 区では炭化物を含む。層厚は 0.2~0.5m である。

2 a 層の標高は 1 区から 2 区では T.P.0.0~+1.0m、3 区では北半部では削平されており中央から南半部では T.P.+1.0m 以上と高くなり、4 区から 5 区では T.P.0.0~+1.0m と再び低くなっている。

2 a 層以下を人力掘削の対象とした。1 区から 2 区では、2 a 層上面で南北方向を基本とする畝溝や畦畔などを確認した。3 区では北半が南北方向の畝溝、中央付近では東西方向の溝や、土坑などを確認した。瓦器、瓦質土器、陶磁器などの遺物を包含することから、2 a 層は中世後半期以降の堆積層と考えられる。

3 a 層 3 a 層は 1 区から 2 区の北半と 3 区中央部、5 区では存在しない。前述のように、3 b 層が厚く堆積した結果、周辺より高くなった箇所にも、3 a 層は本来形成されていたと思われる。後世に整地され、高い場所は 2 a 層以降の削平を受けた結果、消失したと思われる。

それ以外の箇所では 3 a 層は存在し、灰黄褐色～黄褐色極細砂～細砂混じりシルトで、細かい遺物片を含む。ただし、2 区南半部でみられる 3 a 層は、灰黄褐色細砂混じりシルト～粗砂と砂質が強く酸化鉄を多く含むため、他の調査区と区別して 3-2 層とした (図 7・12・13)。

層厚は 0.2~0.5m とばらつきがあり、特に 3 区南半部では厚く堆積しており、3 区南半部では 0.1~0.2m 単位で 3-1 a 層から 3-4 a 層に分層可能である。細分した複数層上面で遺構が確認できるなど、比較的短期間で集落地としての土地利用と廃絶が頻繁に行われていたと推測できる。

標高は、2 区南半部では T.P.+0.4~T.P.+0.5m、3 区北半部では T.P.+1.7m、3 区南半部では T.P.+0.7~+1.1m、4 区では T.P.0.0~+0.4m である。東西方向では西が高く東が低い傾向にあり、低いところでは間層に砂層のレンズ状堆積がみられる箇所もある。

2 区南半部、3 区中央部から南半部、4-1 区の第 3 面上面掘立柱建物各 1 棟や溝、土坑、柱穴などの多数の遺構を検出した。遺構および 3 a 層からは、古墳時代中期を中心とする須恵器や土師器が出土している。第 3 面が本調査の主要遺構面であり、古墳時代中期以降に機能した遺構面と考えられる。古墳時代初頭以降、地盤が安定し人が居住しやすい環境になったため、下層の流路堆積物 (3 b 層) が積み重なった部分に集落が営まれたと考えられる。

3 b 層 3 b 層は灰色～淡黄灰色のシルト混じり極細砂～細砂、あるいは灰色粗砂～礫で、ラミナのみられる流路堆積層である。調査区全域でみられ、その厚さは 0.6~3.0m におよぶ。4 区南半から 5 区が

厚さ0.6mと最も薄く、他の区では平均1.5m前後の厚さだが、3区の北半部が3.0mと厚く堆積する。

検出高は、1区でT.P.-0.1m、2区ではT.P.0.0～+0.3m、3区北半部ではT.P.+1.6m、3区南半部ではT.P.+0.5～+1.1m、4-1区ではT.P.0.0～+0.5m、4-3区ではT.P.0.0m、5区ではT.P.0.0～+0.3mである。

堆積状況を観察すると極細砂で下部にシルトが堆積する箇所や、あるいは粗砂から礫層が帯状に堆積する箇所など、3b層中でも粒径に違いが認められる。また、ラミナの方も水平もあれば斜交するものもあり、3b層も複数層に細分可能である。3b層と4a層との境界面では、南西から北東に4a層上方を侵食して流れる様子が、2区や3区、5区で観察できた。

3区では流路や溝が検出された。4-1区では柱穴や溝などの遺構が検出された。3b層中には庄内式土器を中心とする土器や木製品が大量に含まれており、3b層は古墳時代初頭以前に生じた流路堆積層と推定される。

4a層 4a層は、最も高い5区ではT.P.+0.5m、最も低い1区ではT.P.-1.8m以下で堆積し、断面調査を行ったT.P.-2.0mまでは連続して認められた。それより下位にもさらに堆積している可能性が高い。その他の調査区での検出高は、2区ではT.P.-1.0～-1.5m、3区ではT.P.-0.5～-1.0m、4区ではT.P.-1.0m前後である。平面調査は3b層を除去した4a層上面（5区第4面）、もしくは4a層中の黒褐色シルト層上面（T.P.-1.5～-1.3m）まで実施した。5区第4面では遺構は検出できなかったが、人の足跡を検出している。

4a層の上層は灰色シルトが0.3～0.5m堆積し、その下層には黒褐色シルトや茶褐色シルト、青灰色シルトが厚さ約0.1m単位で互層となって堆積する。黒褐色や茶褐色シルトには、多量の有機物（ヨシなどの植物の根茎）が含まれており、有機物が腐植して土に混在した結果、本来の灰色シルト層が濃色を呈すると考えられる。しかし、各層の層界は明確でなく、また、層界線は水平でなく波打つように細かく上下する。青灰色シルト層は堆積が速いため有機物の含有量が少なく、黒褐色やオリーブ黒色シルト層は時間をかけて堆積したために有機物を多く含み、それによって色に濃淡が生じたと考えられる。

4a層は粘性の高いシルト層であることから、長期間湿潤な湿地のような環境が継続し、まさに干涸となっていく過程の堆積層と推測される。3b層と4a層の境界では湿潤な環境のため有機物が乾燥や腐食せずに残存したと推測され、木製品が多数出土した。

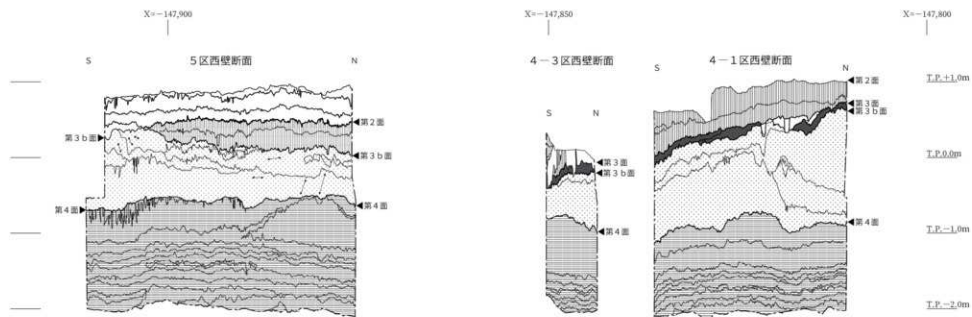
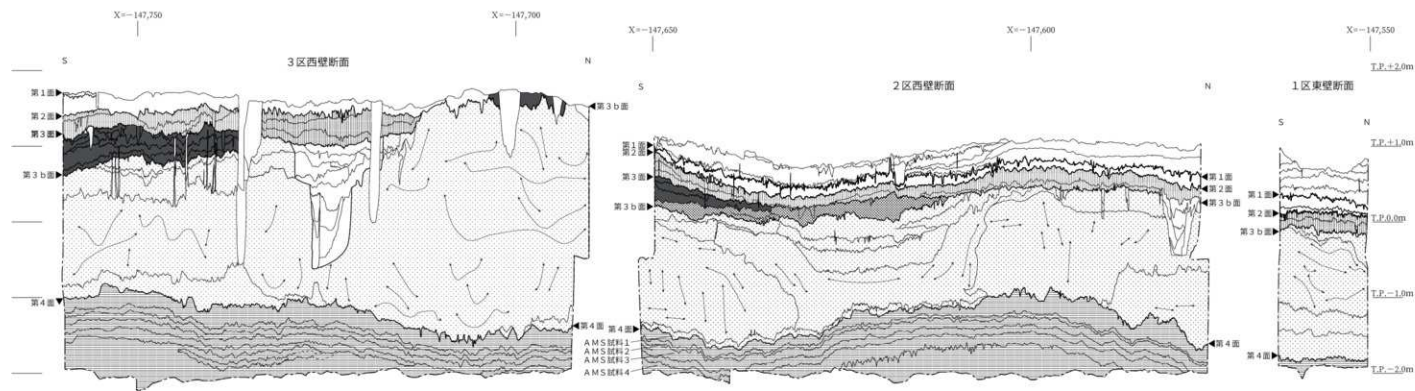
4-1区の北壁、T.P.約-1.8mで4a層中より弥生時代中期前半の甕底部が1点出土した（図105-657）。4a層はこの1点を除いては遺物を含まない。また、2区南壁で4a層中から試料を3点採取し、AMS分析による放射性炭素年代測定を実施したところ、4-1区で土器が出土した層位と合致する層位で、紀元前4世紀半ばから紀元1世紀半ば、弥生時代中期相当の年代が求められた（第4章第1節参照）。従って、4a層は弥生時代中期から古墳時代初頭の堆積層と考えられる。

〈註〉

1. 旧大和川の主流である小阪合分流路の分流（西岩田分流路）と考えられる（別所1999）。

〈参考文献〉

別所秀高 1999 「瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴」『都市計画道路大阪蕨草山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』（財）東大阪市文化財協会



- 凡例
- 远明代造土
 - ▨ 1 a 层
 - ▩ 2 a 层
 - 3 a 层
 - ▧ 3-2 层
 - ▦ 3 b 层
 - ▤ 4 a 层



图7 调查区西壁断面图

第2節 1区の遺構と遺物

第1項 1区の概要・層序(図8、写真図版2-2)

1区は全調査区の最も北側にあたる調査区で、東西幅7.1m、南北長13.0m、面積93㎡と全調査区中で最小である。最も早く調査に着手し、令和3年8月中旬から機械掘削を開始した。続いて、8月末から人力掘削を開始し、11月上旬に大阪府教育庁の立会を経て調査を終了した。

現標高はT.P.+3.2m前後であり、T.P.+0.8m前後までは近現代の盛土や旧耕作土であったため、重機にて掘削した。機械掘削の途中、T.P.+2.2mに達すると1段目土留支保工を実施し、その後再び機械掘削を行った。T.P.+0.8m前後から人力掘削を開始し、T.P.-1.5mまで掘削および平面調査を行った。人力掘削の途中、T.P.0.0mに達すると2段目土留支保工を実施した。

人力掘削開始後、調査区の北辺と東辺に沿って排水と土層観察を兼ねて側溝を設け、土層観察を行うために壁面を残した。側溝のみT.P.-2.0mまで掘り下げ、北辺と東辺で断面調査を行って1区の調査を終了した。1区ではクレーンによる空中写真撮影と図化は実施せず、レーザー測量による平面図化や高所作業車による全景写真撮影を行った。

1区の層序は、現地表からT.P.+0.8m前後までは近現代の造成土、T.P.+0.8～+0.4mは旧耕作土、T.P.+0.4～+0.2mは近世の耕作土層である1a層、T.P.+0.2～-0.2mは中世後半から近世の包含層である2a層の順に堆積する。

2a層上面の第2面では、畝溝を検出した。2区や3区で主要遺構面を構成する3a層の堆積は、1区では認められなかった。2区でも南半のみでしか3a層は認められず、度重なる氾濫や耕作によって2区北半部より北の1区では3a層が削平された可能性が高い。

3b層はT.P.-1.9～-0.1m間に堆積する流路堆積層である。水平もしくは東に上がるように斜交するラミナがみられ、2m近い厚さで堆積する。3b層の下層には4a層がT.P.-1.9m以下に堆積していた。4a層は腐食した有機物、ヨシなどの水生植物の根茎を多量に含むため、黒色化したシルト層である(図8東壁の15層、北壁の19層)。ただし、黒色シルト層の直上層(東壁の13・14層や北壁の18層)は有機物を含む灰色シルト層であるので、2区以南の調査区と対照するとこれらの層は4a層に含まれる可能性もある。

平面調査はT.P.-1.5mまで、断面調査はT.P.-2.0mまで実施し、層位としては4a層までを確認して終了した。T.P.-2.0mよりさらに下層にも4a層が堆積する可能性が高い。

第2項 1区の遺構と遺物(図9～11、写真図版2-1・3、25-1、52-4)

遺構面としては、2a層上面にあたる第2面を検出した。先述のとおり、遺構面の呼称は、検出順に第1面、第2面とするのではなく、○層上面を第○面とする。従って、1区では第2面のみが存在する。

第2面 T.P.+0.2m前後で検出した。調査区内はほぼ平坦な地形である。遺構としては、南北方向に等間隔で並ぶ溝を6本検出した。

東から幅0.5m、深さ0.1m程度の溝が5本並び、最も西側の鋼矢板に切られる溝のみが、現存幅が1.0m以上と他の溝より規模が大きい。溝と溝が約1.0mの等間隔で並ぶことから、これらの溝は耕作に伴う畝溝と考えられ、溝と溝の間は畝状だったと推察されるが、検出時は高まりを失っていた。溝も本来はもっと深さがあつたと推測できるが、粘性が強い土壌層を基盤としており間層に砂などを挟まないため、

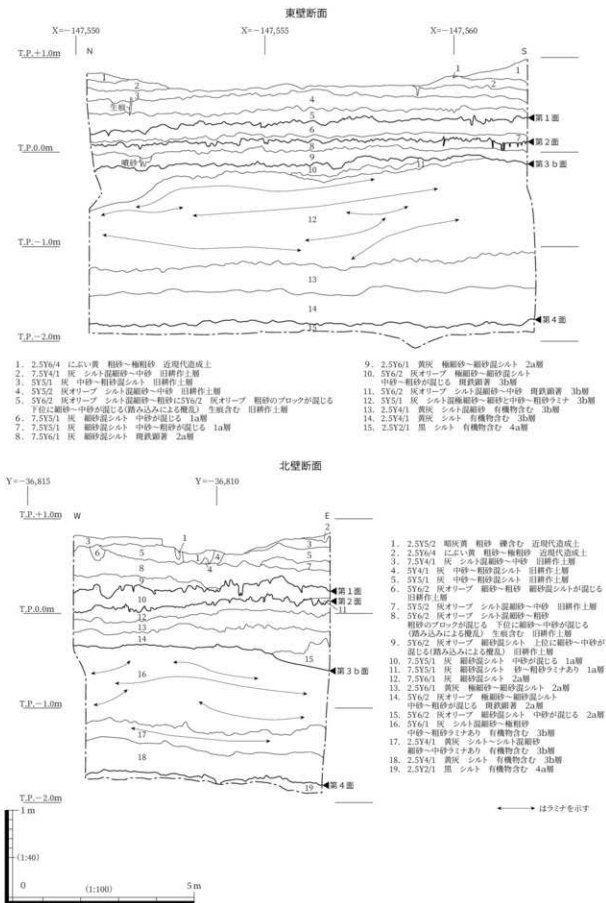


図8 1区 東壁・北壁断面図

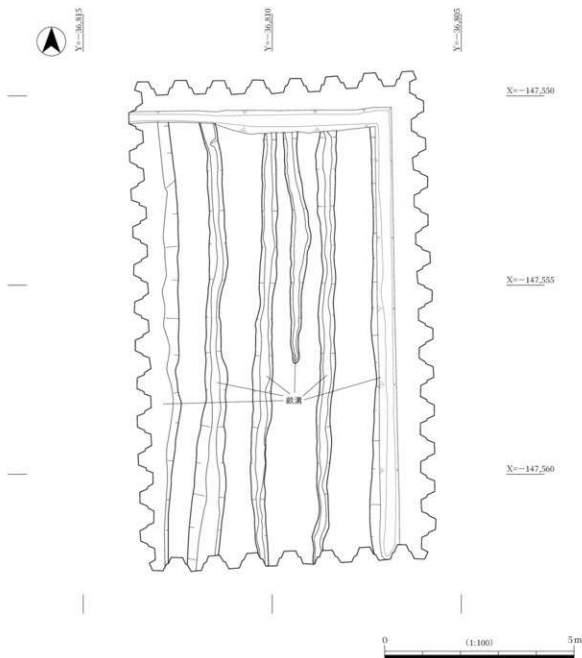


図9 1区 第2面平面図

検出時には削平されて本来の高さより低くなっていると考えられる。鉄溝内から遺物は出土していない。

2 a層からは中世の瓦器や土師器、瓦、古墳時代の須恵器が少量出土した。よって、第2面は13世紀初めを上限とする遺構面と考えられる。

第2面より下層では遺構は認められず、砂礫層（3 b層）が約1.5mの厚さで堆積する。また、その下層は有機物を含むシルト層（4 a層）となり、遺物を包含しない。よって、1区周辺は中世以前には沼や潟に近い湿潤な環境であったと推測され、居住域や生産域には適さない環境だったと考えられる。

1区は西岩田遺跡の範囲でも最北部に位置する。河内潟の規模が縮小し、河内湖へと変化した際の汀線が、西岩田遺跡の北にある新家遺跡周辺であり、周辺が湖化するのが古墳時代初頭であることが判明している（第2章図5参照）。

今回の調査結果では、4 a層以下が古墳時代初頭以前の堆積と考えられることや、1区より南の2区

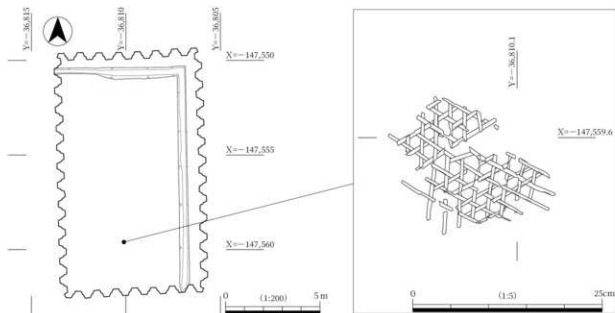


図10 1区 第3層下面木製品出土状況図

や3区に遺構、遺物が集中することが判明した。1区で古墳時代以前の遺構面が存在しないことは、地理的にも1区が2区や3区より河内潟汀線にあたる自然堤防に近い位置にあることや、時期的にも集落域形成以前であったことも合致する。

第3層下面 3層と4a層の境界面では木製品が出土した(図11)。なかでも、調査区の南部で出土した竹を幅0.5cmの箴状に裂いて籠目に編んだ木製品は希少である(図10、写真図版2-3)。

籠状木製品は確認できるだけでも、縦9本、横6本の竹箴を3本ずつ組み合わせて正三角形にし、正三角形が上辺と下辺にくるように編み込まれた六つ目編みの製品である。全体の形状を復元できるほどは残存しておらず、高さ(深さ)などは不明である。この下層から土器などは検出されなかった。よって、用途も特定できないが垣根などには1本の箴の幅が細いことから、籠・箱・笊などの容器か漁撈に使用するびくや仕掛けの籠の一部などではないかと推定される。

西岩田遺跡から南に1.0~1.5kmに位置する巨摩遺跡でも、似た形状の籠製品が出土し(大文セ1995、図35-214)、本文中では亀甲編み(六角形)の網籠と報告されているが、付章では六つ目編みとされている(藤田1995)。

藤田氏によると、編み物製品は縄文時代から存在するが、編み方の技法は縄文時代の網代編みから、弥生時代に入ると網代編み、もじり編み、弥生時代後期に入ると笊編みと変遷し、古墳時代前期に入って六つ目編みが登場するとされる。巨摩遺跡の六つ目編み籠は、奈良県纏向遺跡の籠などと並び、最古に属すると報告されている。現在では類例は増加しており、出現時期もより遡る可能性もあるが、編み方から今回検出した籠状木製品が古墳時代前期と推定できるのであれば、古墳時代初頭とする3層の出土層位とも合致する。

その後の調査例では、鳥取県青谷上寺地遺跡では弥生時代中期後葉の区画溝から六つ目編み籠が1点出土している(鳥取埋せ2005)。六つ目編みは平行する2本の箴を1対として水平と左右の斜め方向の3方向から組まれ、六角形を形成する編み方と定義され、少ない本数で広範囲を編むことができるため大型品を編むのに適しているとされている。弥生時代中期後葉の滋賀県守山市下ノ郷遺跡や弥生時代後期から古墳時代初頭の和歌山市井辺遺跡など、縄文時代から古墳時代初頭までの数例の出土が報告され

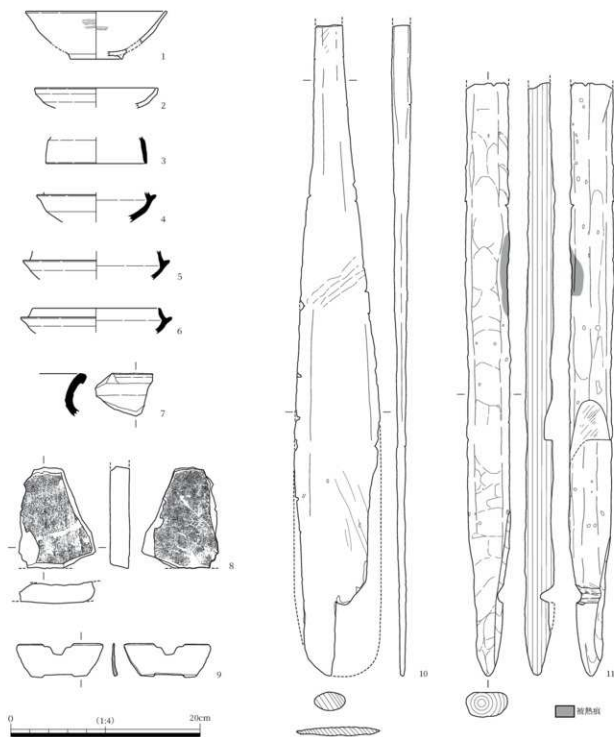


図11 1区 出土遺物実測図

ている。私見としては、編み目が粗いので穀物など粒形の細かいものを入れる用途ではなく、水から何かを掬い上げるなどの用途に適していたのではないかと推測する。

その他、藁状の植物何十本かを同じ植物でひとくりに束ねた製品も3b層中から出土している。束ねていることから、自然の植物群生が横倒しになっていたのではなく、人為的に手が加えられた製品と推察するが用途は不明である。

1区の遺物 (図11、写真図版25-1、52-4)

土器は8以外は3b層中から、木製品は3b層と4a層の境界より出土した。

土器

1は和泉型Ⅱ-3～Ⅲ-1型式の瓦器碗である。内外面にわずかにヘラミガキが残る。高台断面が三角形で比較的高器が深いことから、13世紀初めまでにおさまる。

2は土師器皿である。口縁部はゆるやかに立ち上がり段をなすが、口縁端部は内側に巻き込まない。1の瓦器碗と同時期のものである。

3～7はいずれも須恵器で小片である。3は杯蓋、4～6は杯身で、口縁部先端や底部、天井部を欠損するが、内外面は回転ナデ調整や回転ヘラケズリがわずかに認められる。5と6は口径が大きく、立ち上がりが短く、3は稜線が不明瞭である。7は甕口縁の小片で、口縁端部はわずかに外側に折り返し、側面は平らである。これらの須恵器は主に古墳時代後期の遺物と思われる。

8は平瓦で北壁からの出土だが、おそらく2a層から出土した。小片で3側面は欠損する。凹面にはヘラケズリの痕跡、凸面にはハケの痕跡が残る。凸面はいぶし焼成されず、灰色を呈する。凸面は縄目や布目は認められないので、時期は不明であるが比較的新しいものか。

木製品

前述の籠状木製品等以外では、櫛かみ（10、写真図版52）、板（9）、杭（11）が3b層より出土した。他にも図化し得なかったが杭や建築部材等が出土している。

9は小形の薄い板状製品である。台形の板の底辺をアーチ状に切れ込みを入れ、上辺にもわずかに切れ込みが入る。切れ込みから内側にむかつては擦痕が認められるので、緊縛する紐を通す孔は認められないが、他の板や紐などと組み合わせる可能性がある。「四方転びの箱」といった、組み合わせ式の箱の一側板と推測する。

10は櫛である。残存長68.4cmで、握り部分は幅3.5cm、厚さ2.0cm程度の扁平な棒状であるが、途中から欠損する。水挿き部分は丸みを持たせた幅8.9cm、厚さ0.8cmの扁平な板状であるが一部欠損する。柁目材で、樹種はスダジイである。櫛は全調査区で合わせて3点出土しており（1区10、2区236、5区676）、櫛を使用する頻度が高い水際の環境だったと言える。

11は杭である。丸太の芯持材を利用しており、長さ62.5cm、太さは直径4.5cmをはかるが、外面を面取りしているため、丸太材ではなくやや扁平な角材である。杭先は下端から30cm程削って尖らせ、杭先から約10cmと30cmのところに抉りが入る。紐などで緊縛するための切れ込みとするなら、建築材の一部になるか。一部に被熱痕がみられる。

3b層中に少量ながら土器や櫛などの実用的な木製品が含まれることは、調査区内では検出できなかったが、周辺に居住地があり氾濫によってそこから遺物が運ばれてきた可能性を示唆される。また、遺構としては中世の耕作面を検出した。

〈参考文献〉

（財）大阪文化財センター 1995 『若江北遺跡発掘調査 報告書—第4次』

鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』

藤田由里 1995 「巨摩遺跡出土の古墳時代前期の籠—出土例と保存処理について—」『若江北遺跡発掘調査報告書—第4次』付章（財）大阪文化財センター

第3節 2区の遺構と遺物

第1項 2区の概要・層序(図12~14、写真図版9-2・3)

2区は1区の南に位置し、東西幅11.0m、南北長77.0mと全調査区中で最長の調査区である。調査面積は800㎡をはかる。令和3年8月下旬から機械掘削を開始し、同年9月下旬から人力掘削を開始した。令和4年4月下旬に大阪府教育庁の立会を経て調査を終了した。

現地表面の標高は北端部でT.P.+3.1m前後、南端部でT.P.+2.7m前後であり、南北の標高差は約0.4mをはかる。T.P.+0.5~+1.1m前後までは近現代の盛土や旧耕作土であったため、重機にて掘削した。機械掘削の途中、T.P.+1.5mに達すると1段目土留支保工を実施し、その後再び機械掘削を行った。

T.P.+0.5~+1.1m前後から人力掘削を開始した。掘削深度がT.P.-0.5mに達した時点で2段目土留支保工を実施した後、T.P.-1.5mまで再度人力掘削および平面調査を行った。人力掘削開始後、調査区の北辺、南辺、西辺、東辺の一部(X=-147,620~-147,650間)に沿って排水のために側溝を設け、土層観察を行うために壁面を残した。側溝のみT.P.-2.1mまで掘り下げ、北辺、南辺、西辺の壁面で断面調査を行って2区の調査を終了した。2区では第3面でクレーンによる空中写真測量を実施した。その他レーザー測量による平面実測や高所作業車による全景写真撮影を必要に応じて数回行った。

2区の層序は以下の通りである。西壁と南壁断面を掲載した。現地表からT.P.+0.5~+1.1mまでは近現代の造成土、旧耕作土が堆積していた。T.P.+0.4~+1.1mは灰色の細砂混じりシルトで、耕作土層である(1a層)。層厚は0.05~0.25mをはかり、調査区全体に認められる。古墳時代から近世までの遺物を含み、近世以降の耕作土と考えられることから重機で掘削した。

T.P.+0.15~+1.1mは中世の耕作土層(2a層)で、4層に細分できる。

2-1a層は灰色の細砂混じりシルトもしくはシルト混じり細砂~粗砂である。T.P.+0.3~+1.05mで検出し、層厚は0.05~0.25mをはかる。上面で畦畔を検出したことから2-1a層上面を第2面とした。

2-2a層は灰色のシルト混じり細砂である。T.P.+0.55~+0.85mで検出し、層厚は0.05~0.15mをはかる。調査区の南西に認められる。

2-3a層はにぶい黄褐色の細砂~粗砂混じりシルトである。T.P.+0.7~+0.8mで検出し、層厚は0.1mをはかる。調査区の南西に認められる。2-1a層から2-3a層は、層中に古墳時代~中世までの遺物を含み、中世前期以降(13世紀前半以降)の耕作土層と考える。

2-4a層はにぶい黄褐色のシルト混じり極細砂~粗砂あるいは灰色の極細砂~細砂混じりシルトで、耕作土層である。T.P.+0.2~+0.7mで検出し、層厚は0.05~0.15mをはかる。調査区全体に認められる。層中に古墳時代から中世までの遺物を含み、中世前期以降(12世紀前半以降)の耕作土層と考える。上面では遺構を確認できなかったものの、第3面で検出した28落ち込みは、西壁断面の堆積状況によると本層上面からの遺構であった可能性がある。

3a層は主に灰黄褐色の細砂混じりシルト~粗砂で、古墳時代前期から中期の遺物包含層である。T.P.+0.2~+1.0mで検出し、層厚は0.1~0.6mをはかる。X=-147,630付近より以南で堆積し、南に向けて高くなる。北では中世前期以降の耕作により削平されたと考えられる。層中に酸化鉄を多く含み、遺物は土師器・須恵器の細片を含む。

3-2層は灰オリーブ色の細砂~細礫で、一部に酸化鉄を含む。T.P.+0.15~+0.4mで検出し、層厚

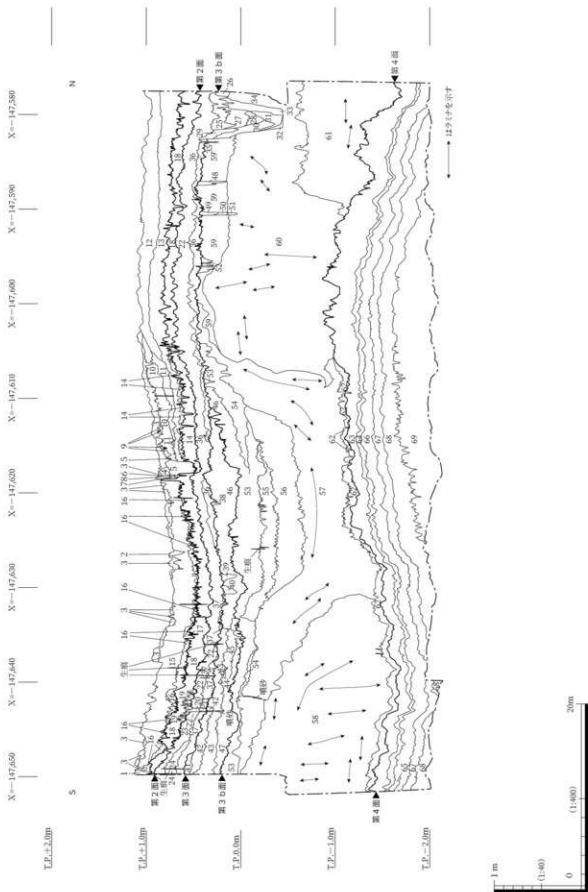


图 12 2区 西壁断面图 (1)

1. 10Y5/1 灰 シルト混細砂～細礫 層状
2. 5Y4/1 灰 シルト混中砂～粗砂 粗砂～極粗砂が混じる 層状
3. 5Y3/1 灰 シルト混細砂～中砂 旧耕作土層
4. 5Y3/1 灰 シルト混細砂 旧耕作土層
5. 5Y2/2 灰オリーブ シルト混細砂～中砂 5Y3/2 灰オリーブ 細砂混シルトのブロックが少量混じる 旧耕作土層
6. 5Y6/2 灰オリーブ シルト混細砂 粗砂～中砂ラミナあり 旧耕作土層
7. 5Y5/1 灰 シルト混細砂～中砂 中砂ラミナあり 旧耕作土層
8. 5Y6/2 灰オリーブ シルト混細砂 中砂ラミナあり 旧耕作土層
9. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～中砂 旧耕作土層
10. 5Y3/1 灰 シルト混中砂～粗砂 1層 5Y5/2 灰オリーブ シルト混細砂が混じる 旧耕作土層
11. 5Y3/2 灰オリーブ シルト混細砂 旧耕作土層
12. 5Y1/1 灰 細砂～中砂混シルト 中砂ラミナあり 旧耕作土層
13. 5Y6/2 灰 細砂～中砂混シルト 中砂ラミナあり 旧耕作土層
14. 5Y6/2 灰オリーブ 中砂 下位にシルト混細砂～中砂が混じる 旧耕作土層
15. 5Y3/1 灰 細砂～中砂混シルト 落ち込み
16. 5Y7/2 灰白 細砂～中砂混シルト 粗砂～粗砂ラミナあり 落ち込み
17. 5Y7/2 灰白 シルト混細砂～中砂 落ち込み
18. 7.5Y5/1 灰 細砂混シルト 1a層
19. 10YR6/1 暗灰 シルト混細砂～粗砂 斑状 2溝
20. 7.5Y5/1 灰 シルト混中砂～粗砂 斑状 2溝 炭化物を含む 遺構か
21. 10Y5/1 灰 細砂混シルト 遺構か
22. 7.5Y5/1 灰 シルト混細砂～粗砂 斑状 2溝 2-1a層
23. 7.5Y5/1 灰 細砂混シルト 2-1a層
24. 5Y6/1 灰 シルト混細砂 極粗砂が少量混じる 2-2a層
25. 10YR4/2 灰黄褐 細砂混シルト 28落ち込み
26. 7.5Y5/2 灰オリーブ 極細砂 28落ち込み
27. 7.5Y4/1 灰 細砂混シルト 28落ち込み
28. 7.5Y4/1 灰 細砂混シルト 28落ち込み
29. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～極細砂混シルト 28落ち込み
30. 10Y4/1 灰 細砂～中砂混シルト 28落ち込み
31. 10Y5/1 灰 シルト混細砂 28落ち込み
32. 7.5Y4/1 灰 シルト混細砂 28落ち込み
33. 2.5GY5/1 オリーブ 灰 粗砂～粗砂混シルト 28落ち込み
34. 7.5Y4/1 灰 粗砂～礫 28落ち込み
35. 10Y5/1 灰 細砂混シルト 遺構か
36. 10Y5/1 灰 極細砂～細砂混シルト 2-4a層
37. 10YR5/3 に近い黄褐 細砂～細砂混シルト 2-4a層
38. 2.5Y3/2 暗灰黄 シルト混細砂～中砂 遺構か
39. 2.5Y3/2 暗灰黄 シルト混中砂～粗砂 遺構か
40. 2.5Y3/2 暗灰黄 シルト混細砂～極粗砂 遺構か
41. 5Y7/1 灰白 細砂混シルト 極粗砂少量含む 3a層
42. 2.5Y3/2 暗灰黄 細砂～粗砂混シルト 3a層
43. 5Y7/1 灰白 細砂～粗砂 粗砂～極粗砂ラミナあり 3a層
44. 2.5Y7/1 灰白 粗砂～細礫 3-2層
45. 2.5Y6/2 灰黄 細砂～中砂混シルト 3-2層
46. 5Y6/2 灰オリーブ 細砂～細礫 3-2層
47. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混 3-2層
48. 10Y5/1 灰 細砂～中砂混シルト 中砂～粗砂が混じる 遺構か
49. 2.5Y5/2 灰オリーブ 極細砂～中砂混シルト 炭化物極少量含む 34溝
50. 5Y5/1 灰 シルト混極細砂～細砂 炭化物含む 34溝
51. 5Y5/1 灰 細砂 細砂混シルトのブロックが混じる 炭化物含む 34溝
52. 10Y5/2 オリーブ 灰 シルト混細砂 遺構か
53. 7.5Y6/1 灰 シルト混細砂～中砂 3b-1層
54. 7.5Y5/1 灰 極細砂～細砂混シルト 3b-1層
55. 10Y5/1 灰 シルト混細砂～細砂 炭化物含む 3b-1層
56. 10Y4/1 灰 シルト わずかにCa結核・炭化物を含む 3b-1層
57. 7.5Y6/1 灰 極細砂～細砂混シルト シルト混細砂が混じる 細砂～中砂ラミナあり 炭化物含む 3b-1層
58. 10Y6/1 灰 極細砂～中砂 中砂～極粗砂ラミナあり 炭化物含む 液状化痕跡 3b-1層
59. 7.5Y6/1 灰 極細砂～細砂混シルト 極細砂～粗砂ラミナあり 炭化物含む 液状化痕跡 3b-1層
60. 10Y5/1 灰 細砂～粗砂 極粗砂～細砂ラミナあり 3b-1層
61. 10Y5/1 灰 中砂～細礫 細砂～粗砂ラミナあり 有機物含む 3b-1層
62. 7.5Y4/1 灰 極細砂～細砂混シルト 細砂ラミナあり 有機物含む 3b-2層
63. 5Y3/2 灰オリーブ 極細砂～細砂混シルト 有機物含む 4a層
64. 5Y4/1 灰 極細砂混シルト 有機物含む 4a層
65. 5Y6/1 灰 細砂混シルト 有機物含む 4a層
66. 5Y3/1 オリーブ 灰 シルト混極細砂～中砂 有機物含む 4a層
67. 7.5Y4/1 灰 極細砂～細砂混シルト 有機物含む 4a層
68. 7.5Y3/1 オリーブ 灰 シルト混粗砂 有機物含む 4a層
69. 5Y6/1 灰 極細砂～細砂混シルト 7.5Y3/1 オリーブ 灰 シルトのブロックが混じる 4a層

図 13 2区 西壁断面図(2)

は0.05～0.4mをはかる。調査区の南の一部に認められ、主にX=-147,610～-147,640にかけての範囲で堆積し、3区北半部の砂礫層を母材とする層と考えられる。3a層・3-2層上面で掘立柱建物や溝・土坑・柱穴等を検出したため、第3面とした。

T.P.-1.85～+0.5mは弥生時代後期末から古墳時代初期の流路堆積を主体とする層(3b層)で、2層に細分できる。

3b-1層は灰色の極細砂混シルト～細礫で、上層に細砂～中砂ラミナが堆積する。T.P.-0.1～+0.5mで検出し、層厚は1.1～1.8mをはかる。層中に植物遺体や有機物を多量に含む。また、一部では噴砂や液状化現象等の地震痕跡が確認できる。遺物は弥生土器・土師器、木製品が出土した。籠目土器や木製品の榫のような水辺で利用されたと推測される遺物も目につく。

3b-2層は、上層は灰色の極細砂～細砂混じりシルト、下層は灰オリーブ色の極細砂～細砂混じりシルトで、ラミナが認められる。層中に植物遺体や有機物を少量含む。T.P.-1.7～-0.85mで検出し、層厚は0.1～0.4mをはかる。調査区全体に認められ、X=-147,590～-147,630にかけては他の範囲より検出高が高い。主にシルト質からなり、3b-1層が堆積する以前に調査区周辺は止水域であったと考えられる。南壁で層中から試料を1点採取し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施した。図14-29層で庄内式期の年代が求められたため、弥生時代後期末から古墳時代初期に属すると推定する。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査におけるIXa層に相当すると考えられる(第5章第1節表14)。

T.P.-2.1～-1.2mは灰色の極細砂～細砂混じりシルトもしくはオリーブ黒色のシルト混じり極細砂～中砂である(4a層)。多量の未分解の植物遺体を含むことから、ヨシ等が群生する湿地状の堆積と考えられる。T.P.-1.85～-1.2mで検出し、層厚は0.1～0.9mをはかる。調査区全体に認められ、3b-2層と同様に、X=-147,590～-147,630の間は他の範囲より検出高が高い。2区では層中に遺物は確認できなかった。上層(図14-30・31層)は3b-2層と4a層の遷移層で、既往調査のIXb層に相当すると考えられる(第5章第1節表14)。南壁で4a層中から試料を3点採取し、AMS法による放射性

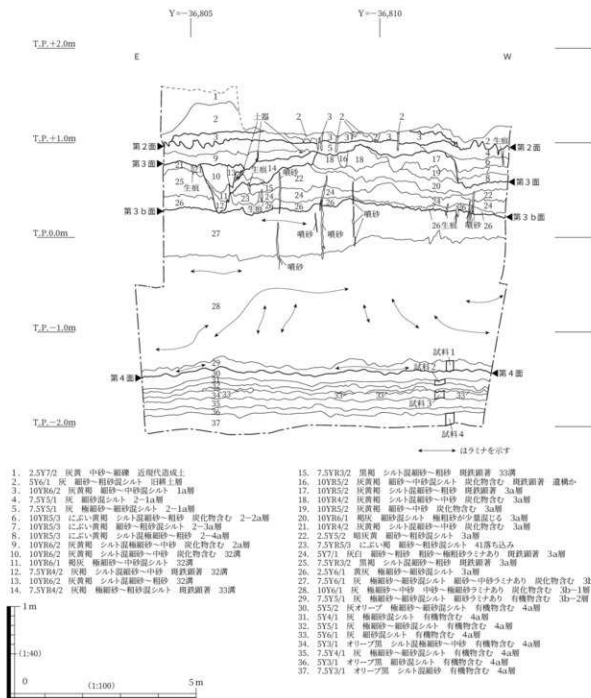


図14 2区 南壁断面図

炭素年代測定を実施した。上部にあたる図14-31層で庄内式期、図14-33層と最下部にあたる図14-37層で弥生時代中期相当の年代が求められたため、弥生時代中期から後期末に属すると推定する。

平面調査はT.P.-1.5mまで、断面調査はT.P.-2.1mまで実施し、層位としては4a層までを確認して終了した。

第2項 2区第2面の遺構と遺物 (図15～17、写真図版35～5)

第2面はT.P.+0.3～+0.9mで検出した。X=-147,615付近から南へ標高が低くなり、X=-147,630付近以南から調査区南端にかけて再び標高が上がる地形である。遺構としては、畦畔を検出しており、

いずれも調査区の南で確認した。時期としては、2 a層に中世前期以降の遺物が含まれるため、中世以降の耕作面と考える。

3～5畦畔(図16) 約2.0mの間隔で並ぶ3本の畦畔を検出した。いずれも北東-南西を主軸とする。3畦畔は頂部幅0.3～0.6m、底部幅0.4～0.7m、高さ0.05mをはかる。北端は攪乱によって消失しており、南端は調査区外へとびている。4畦畔は頂部幅0.3～0.6m、底部幅0.4～0.8m、高さ0.05mをはかる。5畦畔は頂部幅0.2～0.6m、底部幅0.4～0.6m、高さ0.05mをはかる。

第2面の遺物(図17、写真図版35-5)

土器

12～18は1 a層から出土した。

12は白磁碗口縁部である。外面に玉縁をもつ。

13は陶器皿である。内面に煤と考えられる痕跡が残り、灯明皿として利用された可能性がある。

14は土師器杯、15は土師器皿である。14は口縁端部は丸く上につまみ上げる。15は口縁部で端部は外側に肥厚する。16・17は須恵器である。16は杯身である。古墳時代後期に相当する。17は甕口縁部である。18は瓦質土器羽釜脚部である。

19～28はいずれも2-1 a層から出土した。

19は青磁碗底部である。竊蓮弁文が認められ、龍泉窯系と考えられる。20は白磁碗底部である。21は陶器おろし皿底部である。22・23は瓦器椀で、22は口縁部、23は底部である。高台断面が三角形で見込みにヘラミガキを施すことから、和泉型Ⅲ期と考えられる。24は瓦質土器羽釜脚部である。25・26は鉢で、東播系の須恵器こね鉢である。いずれも12世紀末から13世紀後葉に相当すると考えられる。

27・28は須恵器である。27は杯蓋である。口縁端部は丸くおさめ、天井部と口縁部の境はない。28は杯身口縁部から体部である。色調は灰白色である。いずれも古墳時代後期に相当する。

29～34はいずれも2-3 a層から出土した。

29は青磁碗口縁部である。竊蓮弁文が認めら

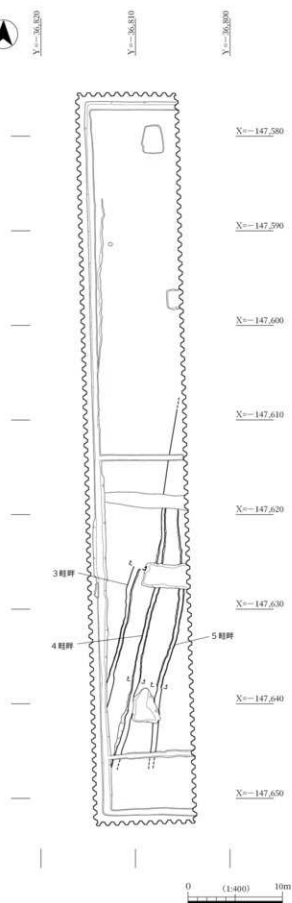


図15 2区 第2面平面図

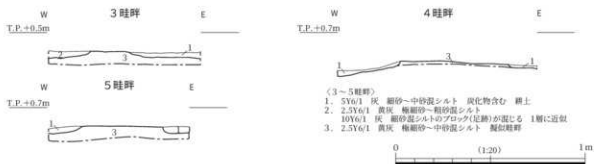


図16 2区 第2面遺構断面図

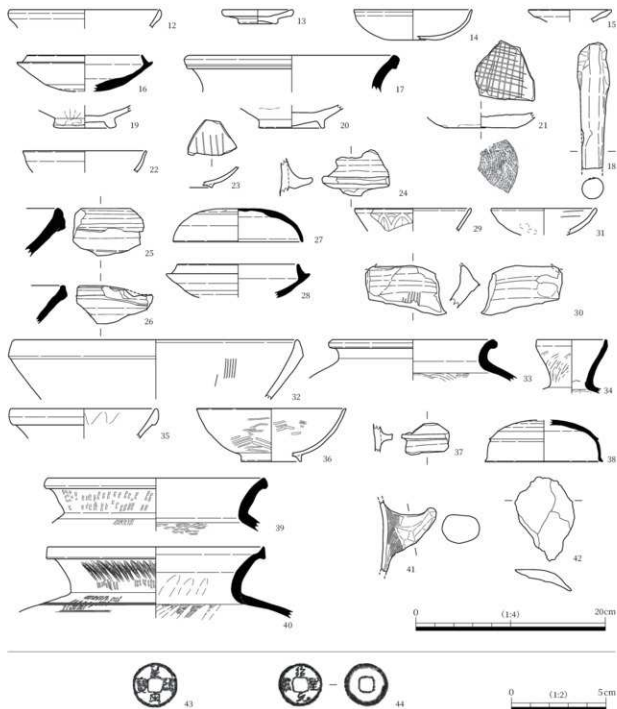


図17 2区 1a層~3a層出土遺物実測図

れ、龍泉窯系と考えられる。30は陶器すり鉢口縁部である。内面には7条のすり目が認められる。備前焼と考えられる。31は瓦器椀である。内面にヘラミガキが残る。32は瓦質土器すり鉢口縁部である。内面には5条のすり目が認められる。33・34は須恵器である。33は短頸壺口縁部から肩部である。34は提瓶もしくは横瓶の口頸部である。

35～41はいずれも2-4 a層から出土した。

35は白磁碗口縁部である。白磁碗IV類と考えられる。36は瓦器椀である。内外面にまばらにヘラミガキが施される。高台は先端の尖った断面三角形を呈する。和泉型II-2型式、12世紀前半に相当すると考えられる。37は瓦質土器羽釜鋳部である。

38～40は須恵器である。38は杯蓋である。口縁端部は段状を呈し、先端は尖る。古墳時代中期に相当する。39は甕口頸部である。口縁部は外反し、端部は面状を呈する。外面にタタキを施し、頸部内面に同心円文当て具痕が残る。40は甕口縁部から肩部である。口縁部は外反し、上端はやや内湾する。端部は面状を呈する。外面はタタキ調整し、口縁部に波状文1条、肩部にカキメを施す。内面は同心円文当て具痕をナデ消す。41は土師器甕もしくは銅の把手である。

石製品

42は2-4 a層から出土した砥石である。

金属製品

43・44は2-1 a層から出土した銅銭である。43は皇宋通宝である。裏面にも1枚付着しているが、溶着しているため種類は不明である。44は紹聖元宝である。

第3項 2区第3面の遺構と遺物(図18～42、写真図版3～8、9-1、26～34)

第3面はT.P.+0.15～+0.6mで検出した。2 a層以下に堆積する層の上面を遺構面とした。そのため、南半部は3 a層上面を遺構面とし、北半部は2 a層以下に3 a層が堆積していなかったた

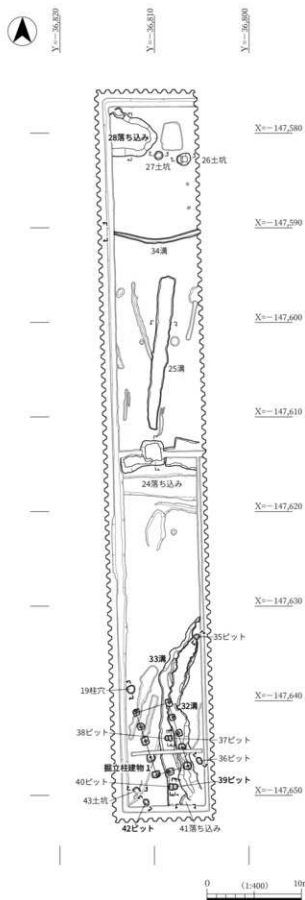
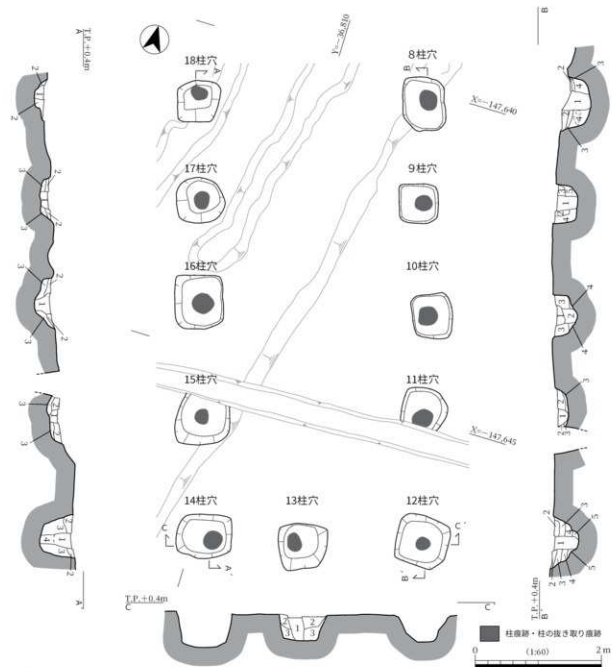


図18 2区 第3面平面図



- 8柱穴
1. 10YR5/2 灰黄粉 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/1 焼灰 シルト混細砂
 3. 10YR5/1 焼灰 細砂～中砂混シルト
 4. 7.5Y5/1 灰 極細砂～細砂混シルト 極細砂混シルトのブロックが混じる
- 9柱穴
1. 10YR5/1 焼灰 極細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/2 灰黄粉 シルト混極細砂～細砂 炭化物含む 柱頭跡か
 3. 10YR5/2 灰黄粉 細砂混シルト 炭化物含む
 4. 10YR5/1 焼灰 極細砂～細砂混シルト
 5. 10YR5/1 焼灰 シルト混細砂 炭化物含む
- 10柱穴
1. 10YR5/2 灰黄粉 細砂～粗砂混シルト 炭化物含む 柱の抜き取り痕跡か
 2. 10YR5/1 焼灰 シルト混極細砂～細砂 下部シルト質 柱の抜き取り痕跡
 3. 10YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む
 4. 10YR5/1 焼灰 細砂混シルト 炭化物含む
- 11柱穴
1. 10YR5/2 灰黄粉 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む
 3. 10YR5/1 焼灰 シルト混中砂 炭化物含む
- 12柱穴
1. 10YR5/2 灰黄粉 極細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/2 灰黄粉 細砂混シルト 炭化物含む
 3. 10YR5/1 焼灰 シルト混中砂 炭化物含む
 4. 10YR5/1 焼灰 シルト混極細砂～中砂 炭化物含む
 5. 7.5Y6/1 灰 シルト混中砂 炭化物含む

- 13柱穴
1. 10YR5/3 濃い黄粉 細砂～粗砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～粗砂 炭化物含む
 3. 10YR5/1 焼灰 細砂混シルト 炭化物含む
- 14柱穴
1. 7.5YR5/2 灰黄粉 細砂～粗砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 7.5YR5/2 灰黄粉 極細砂～細砂混シルト 炭化物含む
 3. 7.5YR5/1 焼灰 シルト混細砂～粗砂
 4. 7.5Y5/1 灰 極細砂～粗砂混シルト 柱頭跡か
- 15柱穴
1. 7.5YR4/2 灰黄粉 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 7.5YR5/2 灰黄粉 極細砂～中砂混シルト 炭化物含む
 3. 10YR6/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む
- 16柱穴
1. 10YR5/2 灰黄粉 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 7.5YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む
 3. 10YR6/2 灰黄粉 シルト混極細砂～中砂 炭化物含む
- 17柱穴
1. 10YR5/1 焼灰 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 7.5YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む
 3. 10YR5/1 焼灰 細砂混シルト 炭化物含む
- 18柱穴
1. 7.5YR5/2 灰黄粉 細砂～中砂混シルト 炭化物含む 柱頭跡か
 2. 10YR5/2 灰黄粉 シルト混細砂～中砂 炭化物含む

図 19 2区 掘立柱建物1平・断面図

表3 掘立柱建物一覧

調査区	建物名称	規模 (間)	規模 (m)	梁行柱間 (m)	桁行柱間 (m)	面積 (㎡)	方位	備考
2区	掘立柱建物1	2×4	3.5×7.3	1.3～2.0	1.6～2.0	25.6	N-17°-W	掘立柱建物
3区	掘立柱建物2	2×3	3.8以上×5.0	1.6～1.8	1.4～1.8	19.0以上	N-22°-W	掘立柱建物 東側延付
4区	掘立柱建物3	1×2	3.2×1.6以上	(1.6)	(1.6)	5.12以上	不明	掘立柱建物

め、3b層の上面を遺構面として扱う。第2面と同様に、X=-147,630付近以南から調査区南端にかけて標高が上がる地形である。北半部では、土坑2基、溝2条のほか、落ち込みを検出した。南半部では、掘立柱建物1棟(掘立柱建物1)、柱穴1基、ピット7基、土坑1基、溝2条のほか、落ち込みを検出した。

主な時代は古墳時代中期から後期と考えられ、南半部に掘立柱建物をはじめ、集落を構成する遺構が集中する。北半部で検出できた当該期の遺構と推定されるのは26土坑のみであり、中世以降の耕作に伴う削平により失われた可能性がある。また、当調査区北部は1区と同様に河内湖の水域に近く、居住域として適していなかったとも考えられる。それ以外に、北半部を中心に24落ち込みや28落ち込み等の中世以降の遺構を検出している。2a層掘削時に検出できなかった遺構も一部含まれると考えられ、28落ち込みは堆積状況から、本来は2-4a層上面の遺構であった可能性が高い。

掘立柱建物1(図19、写真図版4、表3) 調査区の南で検出し、X=-147,645、Y=-36,810地点に位置する。梁行2間、桁行4間の南北を長軸とする掘立柱建物である。

規模は梁行が3.5m、桁行は7.3m、面積は25.6㎡をはかる。それぞれの柱間は、梁行が1.3～2.0m、桁行が1.6～2.0mである。建物の主軸はN-17°-Wを指向し、座標北よりやや西にふる。柱穴は1辺0.6～0.9m、深さ0.2～0.5mをはかり、多くが隅丸方形を呈する。いずれの柱穴からも柱痕跡あるいは柱の抜き取り穴と考えられる痕跡が確認でき、その規模は直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.5mである。柱穴11・15～18は2a層により削られており、本来の深さよりも浅い状態であったと考えられる。北の妻柱は本来存在していたが削平によって失われた可能性が高い。

10・18柱穴より土師器、9・11・13～17柱穴より土師器・須恵器、8柱穴より土師器・須恵器・製塩土器、12柱穴より土師器・須恵器・土製品(移動式竈か)が出土したが、いずれも細片である。これらの遺物は、32・33溝上層からの混入も考えられるものの、古墳時代後期(TK43型式か)の須恵器杯身(198・199)を含むこと、また、当遺構は古墳時代中期から後期の遺構である32・33溝を切ることから、古墳時代後期から奈良時代の遺構と推測する。今回の調査では、当遺構のほかに3区と4-1区で掘立柱建物を検出している(表3)。

32・33溝(図20～25、写真図版5～8) 調査区の南東に位置する溝である。調査区外の南から北へのびたあと、北東方向へ弧を描くように調査区外の東へのびる。2条の溝が切り合う状態で検出し、新しい溝を32溝、32溝に切られる溝を33溝として掘削した。さらに、両溝は掘立柱建物1の8～13柱穴に切られる(図25)。32溝は幅0.5～1.95m、深さ0.25mをはかり、断面は皿形あるいは逆台形を呈する。33溝は幅1.1～3.1m、深さ0.2～0.55mをはかり、断面は逆台形を呈する。

32溝の埋土として、上層は褐灰色シルト、中層が黄灰色シルト、下層は褐灰色あるいは灰黄褐色のシルトを主体として埋積する。33溝の埋土として、上層は褐灰色シルト、中層は黄灰色シルトが埋積する。33溝下層はオリーブ灰色もしくは灰色の砂に3b層由来のブロックが混じる。遺物としては取り上げな



Y=-26,815

Y=-26,810

Y=-26,805

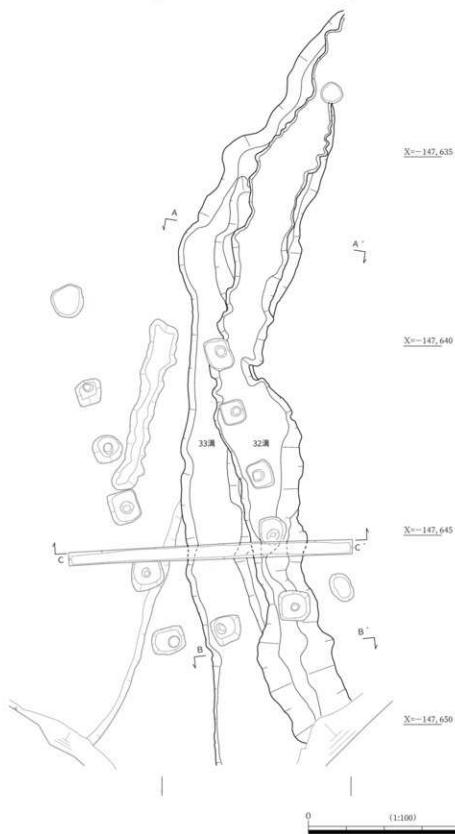


图 20 2区 32・33 溝平面图

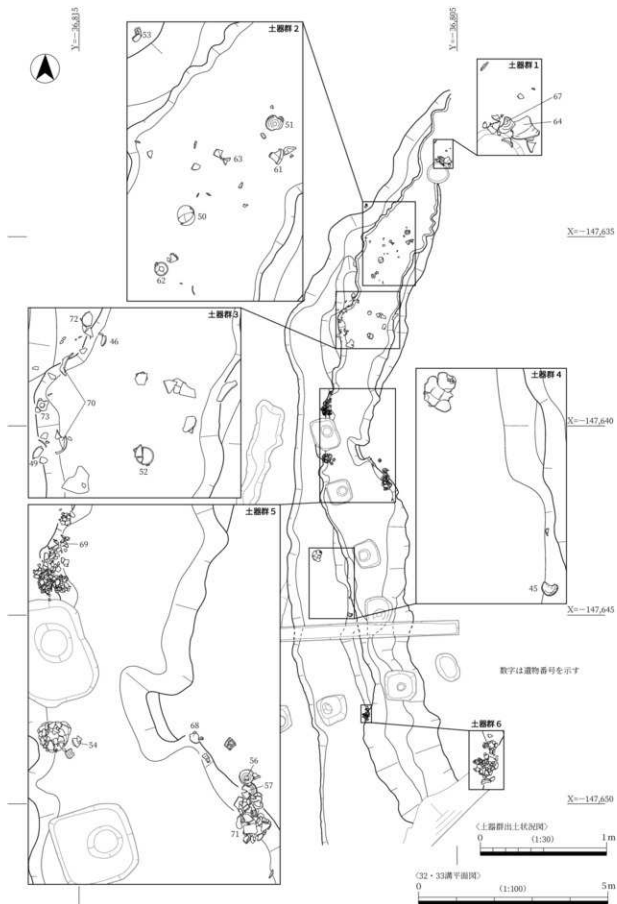


图 21 2区 32・33 溝上層遺物出土状況図

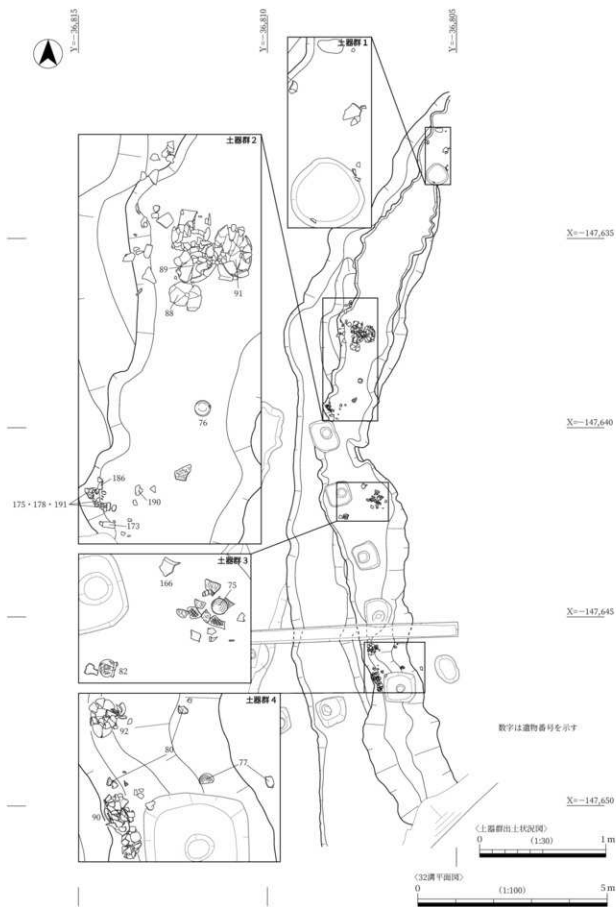


図 22 2区 32溝遺物出土状況図

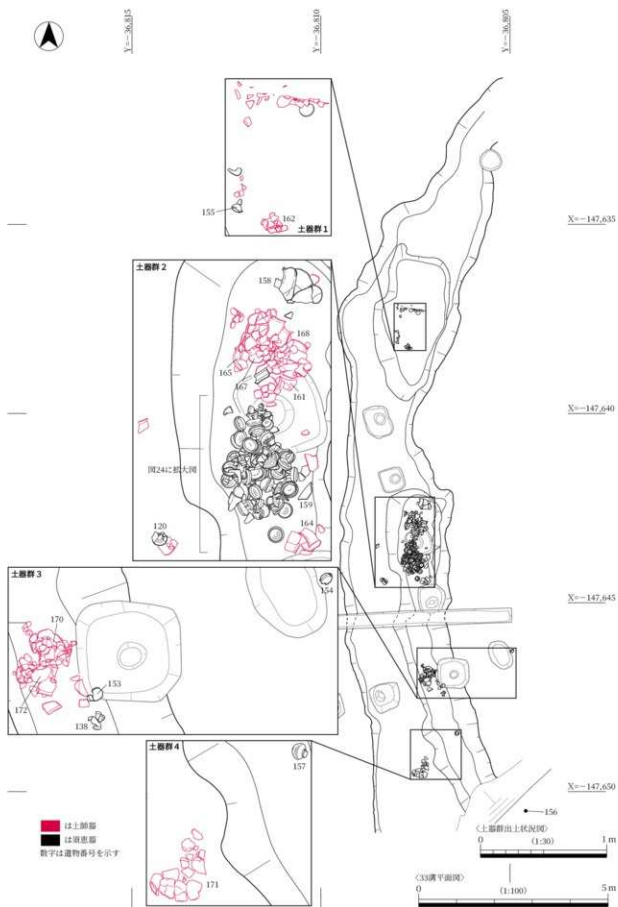


図 23 2区 33溝遺物出土状況図(1)



図24 2区 33溝遺物出土状況図(2)

かったが、埋土中に緑泥岩結晶片岩や紅簾石片岩の薄片をいくつか含んでいた。また、32・33溝は切り合うものの、重複する状態で検出しているため、33溝が埋没した後に再掘削した溝が32溝と考えられる。

両溝からは全体的に多くの遺物が出土した。当初、32・33溝を同一の遺構と考えていたため、両溝を検出した際に出土した遺物は32溝・33溝として区別せず取り上げた(図21)。これらの遺物は32・33溝上層として扱う。32・33溝上層からは土師器・須恵器(45~73)が出土しており、須恵器は古墳時代中期(TK23~47型式)から後期(TK43型式)のものが混在する。

32溝より土師器・須恵器(74~92)、製塩土器(173~193)が出土しており、須恵器は古墳時代中期(TK23~47型式)に属する。33溝より土師器・須恵器(93~172)、埴輪片(194)が出土した。器種としては、土師器は甕・甔・鍋・高杯、須恵器は杯蓋・杯身・高杯蓋・無蓋高杯・有蓋高杯・鉢・高杯形器台・壺・壺・甕・甔がある。特にX=-147,644、Y=-36,807地点では、須恵器供膳具(杯身・杯蓋・高杯蓋・有蓋高杯)(図23・24)が1カ所に集中して出土しており、有蓋高杯は当地点だけで完形品に近い個体が17点出土した。また、33溝の南東端では、ほぼ完形品の高杯形器台が杯部を下にして伏せた状態で出土した。いずれも古墳時代中期(TK23~47型式)に属する。

33溝は古墳時代中期までに掘削されたと推定される。32溝と33溝の遺物は時期差が少ないため、33溝が埋まった後に32溝として再掘削されるまでの期間は短かった可能性が高い。32・33溝上層として取り

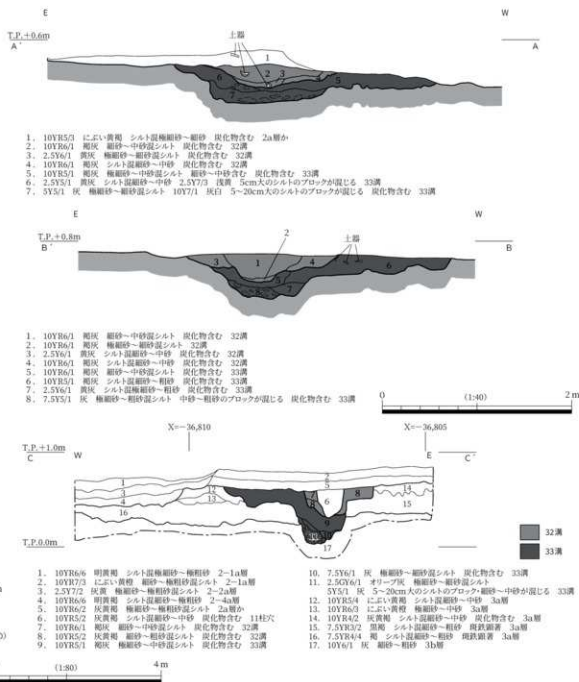


図25 2区 32・33溝、南半部断剖面図

上げた遺物の様相から古墳時代後期までに埋没したと考える。検出範囲に限られるため、両溝の性格は明言し難いものの、遺物として多量の須恵器供膳具や完形に近い高杯形器台等の儀礼に利用される土器を含み、何らかの祭祀が行われたと考えられる。

26 土坑(図26、写真図版8-3) 調査区の北東に位置する平面が円形の土坑である。直径1.4m、深さ0.35mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は灰色シルトを主体とし、下層はシルトブロックが混じる。上層から須恵器甕体部下半(204)がまとまって出土した。そのほか、土師器片が出土した。出土遺物から古墳時代中期の遺構と推測する。

19 柱穴(図27) 調査区の南西、掘立柱建物1の北に位置する平面が隅丸方形の柱穴である。直径0.9m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈する。1層は柱の抜き取り痕跡か。

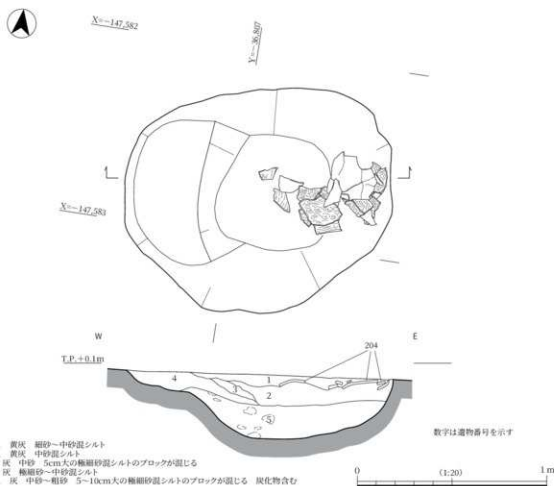


図 26 2区 26土坑平・断面図

1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混シルト
2. 2.5Y6/1 黄灰 中砂混シルト
3. 5Y6/1 灰 中砂 5cm大の楕圓砂混シルトのブロックが混じる
4. 5Y5/1 灰 楕圓砂～中砂混シルト
5. 7.5Y6/1 灰 中砂～粗砂 5～10cm大の楕圓砂混シルトのブロックが混じる 炭化物含む

掘立柱建物1の西側柱筋の延長に当り、柱穴の規模や形状が類似することから、掘立柱建物1の桁行が北に延長する可能性がある。しかし、18柱穴との間隔が1.8mであり、掘立柱建物1の桁行の柱間と比較すると距離が離れる。そのため、掘立柱建物1の周辺に他の掘立柱建物や柱列が存在した可能性が考えられる。土師器・須恵器片が出土した。

24 落ち込み (図28) 調査区の中央に位置し、東西に広がる落ち込みである。幅3.8m、深さ0.05～0.8mをはかる。埋土は灰色シルトを主体とし、下層は3b層由来のブロックが混じる。土師器・須恵器・瓦器 (195・196)・瓦質土器・平瓦 (197) が出土しており、出土遺物から中世後半以降の遺構と推測する。

25 溝 (図27) 調査区の中央北側に位置し、南北にのびる溝である。長さ16.2m、幅0.8～1.7m、深さ0.2mをはかる。断面は逆台形を呈する。土師器・須恵器片が出土した。

27 土坑 (図27) 調査区の北に位置する平面が円形の土坑である。直径0.8m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土に炭化物を含む。土師器片が出土した。

28 落ち込み (図28) 調査区の北西に位置し、東西にのびる落ち込みである。幅3.9～5.1m、深さ0.5～0.8mをはかる。東から西に向けて深くなり、西端は調査区外へとびていく。第3面で検出したが、西壁断面図では2～4a層上面より掘削されており、第3面以降に掘削されたと推測する。埋土としては上層はシルトを主体とする。下層は砂が埋積し、シルトブロックが混じる。土師器羽釜等の細片が出土した。中世以降の遺構と推測する。

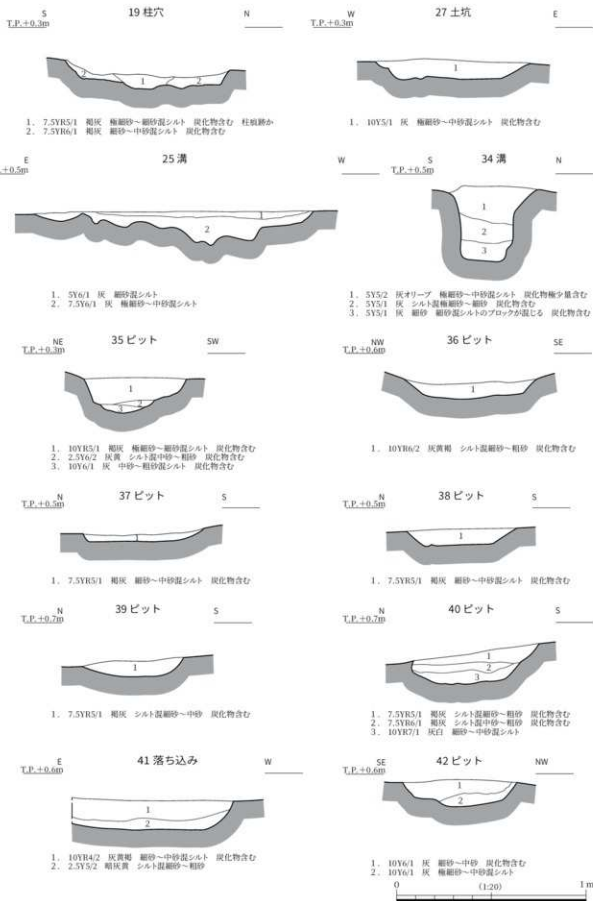


図 27 2区 第3面遺構断面図(1)

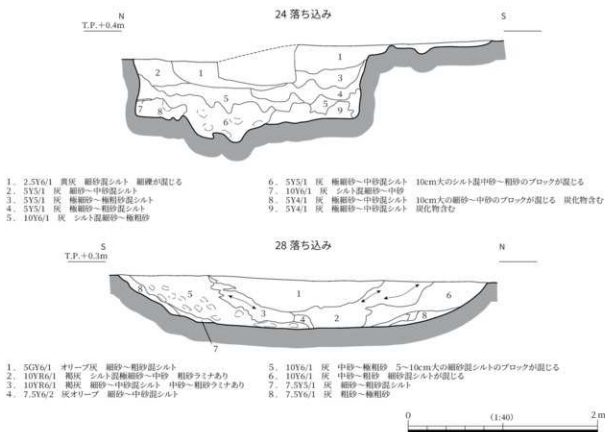


図28 2区 第3面遺構断面図(2)

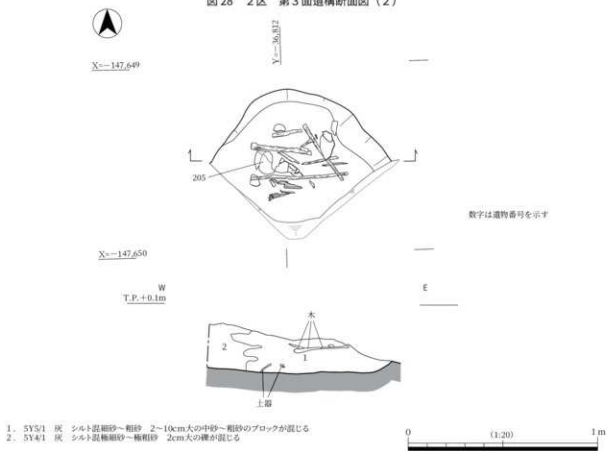


図29 2区 43土坑平・断面図

34 溝 (図27) 調査区の北に位置する溝である。調査区外の西から東へのびる。幅0.45m、深さ0.4mをはかる。断面は逆台形を呈し、埋土に炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

35 ビット (図27) 調査区の南東に位置する平面が円形のビットである。直径0.5m、深さ0.2mをはかる。断面は碗形を呈し、埋土に炭化物を含む。土師器片が出土した。

36 ビット (図27) 調査区の南東に位置する平面が円形のビットである。直径0.7m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土に炭化物を含む。須恵器杯身 (203)、土師器片が出土した。

37 ビット (図27) 調査区の南に位置する平面が円形のビットである。直径0.6m、深さ0.05mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土に炭化物を含む。須恵器片が出土した。

38 ビット (図27) 調査区の南に位置し、37ビットに切られる平面が円形のビットである。直径0.6m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土に炭化物を含む。土師器片、須恵器片が出土した。

39 ビット (図27) 調査区の南に位置する平面が円形のビットである。直径0.5m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈し、埋土に炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

40 ビット (図27) 調査区の南に位置し、39ビットに切られる平面が方形のビットである。直径0.7m、深さ0.2mをはかる。断面は逆台形を呈し、埋土に炭化物を含む。土師器片、須恵器片が出土した。

41 落ち込み (図27) 調査区の南東に位置し、北西から南東にかけてのびる落ち込みである。幅0.8m、深さ0.15mをはかる。埋土に炭化物を含む。32溝・33溝の下より検出し、南端は調査区外へとのびていく。遺物は出土しなかった。

42 ビット (図27) 調査区の南西に位置する平面が円形のビットである。直径0.6m、深さ0.15mをはかる。断面は碗形を呈し、埋土に炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

43 土坑 (図29、写真図版9-1) 調査区の南西に位置する土坑である。直径1.0m以上、深さ0.2mをはかる。側溝掘削時に南側を掘削したため、規模は不明である。断面は皿形を呈し、灰色シルトに3b層由来のブロック・礫が混じり埋積する。木片・果皮・種実等の植物遺体とともに、ほぼ完形の個体を含む古式土師器の甕 (205~208) や小形器台 (209) が出土した。植物遺体の組成としてはヒョウタン・ヒシ属・モモのほか、タケ亜科があげられる。種実同定の結果、タケ亜科には黒い塗膜が認められ、組編製品の一部と示唆されており、43土坑内に土器と共に籠があった可能性もある (第4章第2節参照)。甕は全て外面に煤が付着し、破砕した状態で出土した。出土遺物から古墳時代初頭に帰属する遺構と考えられ、ゴミ穴としての性格をもっていた可能性がある。

第3面の遺物 (図30~42、写真図版26~34)

土器

45~73はいずれも32・33溝上層より出土した。

45は須恵器杯蓋である。天井部は丸みをもち、口縁端部は鈍い段状を呈する。32・33溝から出土した他の個体より大形であり、天井部と口縁部を分ける稜線が鈍いことから古墳時代中期より降る可能性がある。

46~52は須恵器杯身である。46は口縁端部は段状をなし、先端は丸い。底部は丸く仕上げる。47は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。内面、断面が酸化焼成により赤みを帯び、胎土に含む砂粒は少ない。48は口縁端部は面状を呈する。47・48はやや平坦な底部をもつ。46~48はいずれも古墳時代中期に相当する。49は口縁部から底部上半である。口縁端部は鈍い段状を呈する。50~52は立ち上がりは低く内傾し、先端は尖る。52は50・51と比べ、やや色調が白く、胎土は白色粒を多く含み、少し粗い。50~52

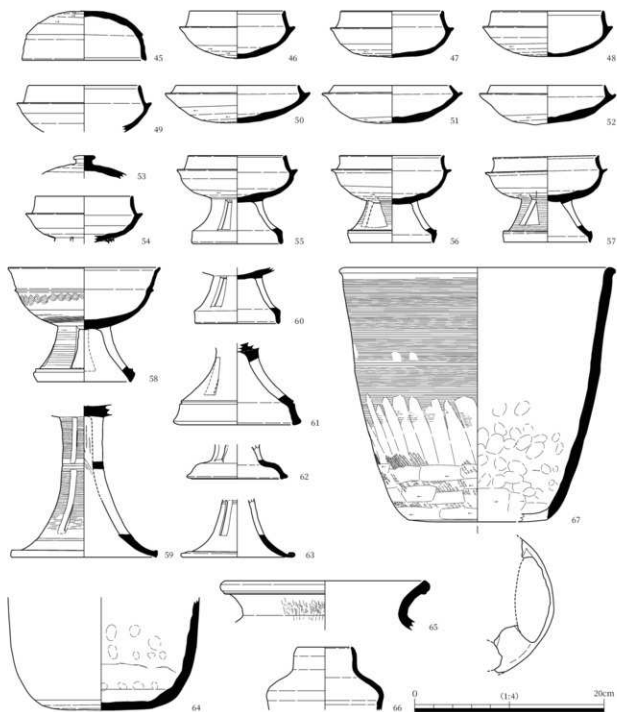


図30 2区 32・33 溝出土遺物実測図(1)

はいずれも古墳時代後期に相当する。

53は須恵器高杯蓋である。小さいつまみが付く。古墳時代後期に相当する。

54～57は須恵器有蓋高杯である。いずれも長方形透孔を三方向に施していたと考えられる。56・57は脚部外面にカキメを施す。54は杯部に脚部片が付く。口縁端部は丸くおさめる。55はやや青色を帯びる色調である。口縁端部は面状を呈する。脚部の段は直立し、脚端部は丸くおさめる。長方形透孔は他の個体と比べ、幅がやや狭い。56・57は焼成が良好で、色調はやや紫色を帯びる。口縁端部は段状を呈し、先端が尖る。脚部の段は明瞭な沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖る。57の長方形透孔は三角形に近い形状で、透孔を穿孔した際の痕跡が明瞭に残る。57は杯部内面に重ね焼きの痕跡が残る。54～57はいずれ

も古墳時代中期に相当する。

58は無蓋高杯である。焼成が良好で、色調はやや紫色を帯びる。胎土に含む砂粒は少ない。杯部外面に波状文1条を巡らせる。杯部下半から脚部外面はカキメが認められる。口縁端部は段状をなし、先端は丸い。脚部の段は明瞭な沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖り、内面に稜はみられない。長方形透孔を四方向に施していたと推定され、透孔を穿孔した際の痕跡が残る。杯部内面に自然軸が付着する。古墳時代中期に相当する。

59～63は須恵器高杯脚部である。59は二段の長方形透孔を三方向に施す。外面にカキメが認められる。脚端部は面状を呈し、内外面に先端が突出する。60はやや青色を帯びる色調である。胎土に含む砂粒は少ない。脚部の段は直立し、脚端部は丸くおさめる。有蓋高杯である可能性が高い。61は長方形透孔を三方向に施していたと推定される。脚部の段は外反し、明瞭な沈線を巡らせる。脚端部は面状を呈する。62は長方形透孔を三方向に施す。裾部は内湾し、脚端部は面状を呈する。63は長方形透孔を三方向に施していたと推定される。裾部は外反し、脚端部は折り曲げ、外側に肥厚する。

64は須恵器鉢体部下半から底部である。外面調整は回転ナデを主体とし、底部は回転ヘラケズリを施す。内面はユビオサエの痕跡が目立つ。

65は須恵器甕口頸部である。口縁端部は外側に肥厚する。内外面に自然軸が付着する。

66は須恵器短頸壺口縁部から体部上半である。

67は須恵器甕である。口縁部は外側に折り返す。体部の残存は4分の1程度であり、把手の有無は不明である。底部は平底で、体部との境目がやや丸みをもつ。底部の蒸気孔は中央に1つの円孔を穿孔し、その周囲に4個の楕円形の孔をもつものと推定される（飯塚2022）。外面調整は体部上半にカキメを施した後、体部下半に縦方向のナデ調整し、タタキを施す。その後、体部下半は回転ヘラケズリで仕上げられる。内面は回転ナデを主体とし、体部下半にユビオサエの痕跡が残る。蒸気孔付近の内面はヘラケズリが認められる。円孔を底部の縁まで穿つのは千里窯産に多い要素だが、全体的には陶邑窯産にみられる特徴を示す（飯塚信幸氏のご教示による）。

68は土師器高杯である。杯部は欠損する。裾部はやや屈曲して開く。外面は縦方向の板ナデ、内面はユビオサエの痕跡が残る。透孔はない。

69・70は土師器甕である。69は口頸部である。やや内湾気味に外傾し、端部は水平な面をもつ。70は口縁部から肩部である。口縁部は外反し、口縁端部は面状を呈する。肩部外面は縦方向のハケが認められる。口縁部内面はナデ調整し、頸部以下の内面はヘラケズリを施す。

71は土師器長胴甕である。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。外面は縦方向のハケを施す。口縁部内面は横方向のハケ、頸部から体部下半の内面は横方向のハケを施す。体部下半内面の一部には縦方向のハケが認められる。

72・73は土師器甕である。72は把手は貼り付けており、断面は扁平形を呈する。底部の蒸気孔は中央に1つの円孔を穿孔し、その周囲に3個の楕円形の孔をもつと推定される。外面調整は縦方向のハケを施し、底面にもハケを施す。内面は摩滅しているものの、横方向のヘラケズリが認められる。73は底部である。蒸気孔は中央に1つの円孔を穿孔し、その周囲に4～5個の楕円形の孔をもつと推定される。

74～92はいずれも32溝より出土した。

74・75は須恵器杯蓋である。いずれも天井部は丸みをもつ。74は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。75は口縁端部は段状をなし、先端は丸い。外面の一部に粘土片が付着する。74・75は古墳時代中期に相

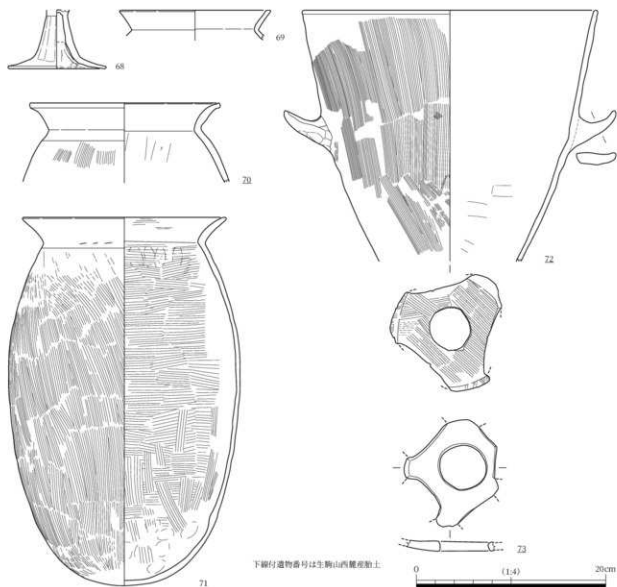


図31 2区 32・33溝出土遺物実測図(2)

当する。

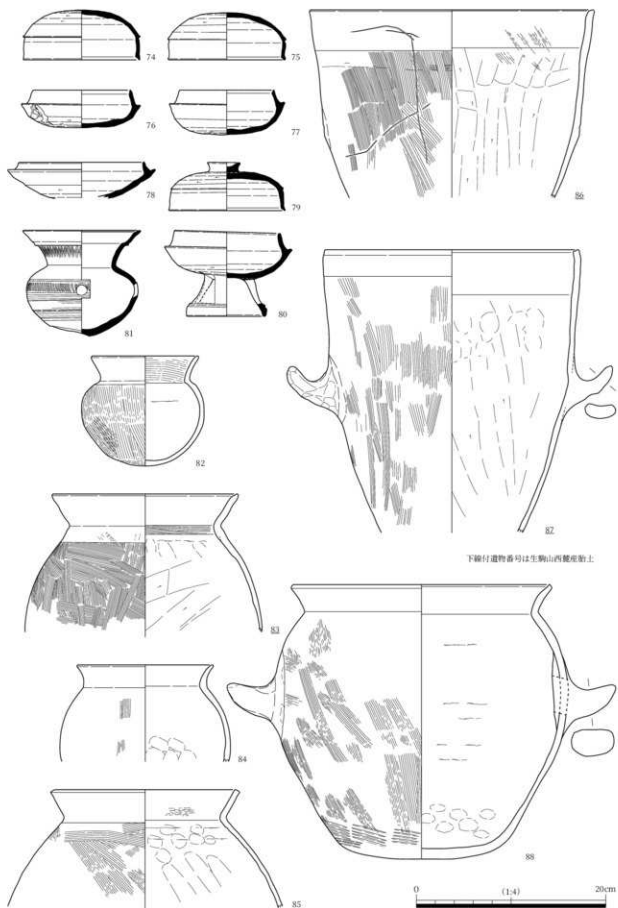
76～78は須恵器杯身である。76・77はいずれも色調は灰白色で、口縁端部は鈍い段状を呈する。76は胎土は白色粒を主体とし、3～5mm程度の砂粒も少量含む。77は胎土は白色粒を少量含む、少し粗い。76は器高が低く、底部は平底状を呈する。外面に自然釉や粘土片が付着する。77は底部は丸く仕上げる。76・77は古墳時代中期に相当する。

78は黄色を帯びた灰白色で、胎土に含む砂粒は少ない。立ち上がりは低く内傾し、口縁端部は尖る。古墳時代後期に相当する。

79は須恵器高杯蓋である。色調は紫色を帯びた灰色である。口縁端部は面状を呈する。つまみは中央が凹む形態を呈する。古墳時代中期に相当する。

80は須恵器有蓋高杯である。色調は黄色を帯びた灰白色である。長方形透孔を三方向に施していたと考えられる。口縁端部は丸くおさめる。脚部の段は明瞭な沈線を巡らせ、脚端部は先端が丸い。透孔の幅は比較的広く、透孔を穿孔した際の痕跡が残る。古墳時代中期に相当する。

81は須恵器甕である。体部上半に円孔を穿つ。頸部外面に一条の波状文、体部上半外面に沈線を2条



下線付遺物番号は生駒山西麓産胎土

图 32 2区 32溝出土遺物実測図(1)

施し、その間に列点文が認められる。体部下外面にカキメを施す。底部外面には剥離した痕跡が認められ、癒着した粘土を剥がしたものと考えられる。

82は完形品の小形甕である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部外面に縦方向のハケを施す。口縁部内面は横方向のハケを施し、体部内面はナデにより仕上げる。

83～85は土師器甕口縁部から体部上半である。83は口縁部はやや内湾気味に外傾し、口縁端部は内傾する面をもつ。体部上半外面は縦方向と横方向のハケを施し、頸部周辺はハケをナデ消す。口縁部内面はナデにより仕上げ、頸部内面には横方向のハケが残る。体部上半内面の調整としては基本的にヘラケズリを施す。84は口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。全体的に摩滅しているものの、外面にハケ、内面にナデやユビオサエの痕跡が残る。85は口縁部は外傾し端部は面状を呈する。体部上半外面は斜め方向と横方向のハケを施す。口縁部内面はハケを施した後にナデ消す。体部内面はナデにより仕上げる。

86・87は土師器甕である。86は口縁部から体部上半である。口縁部は直立気味に外傾し、端部は内傾する面をもつ。外面に縦方向のハケを施す。内面はハケ調整後、縦方向のヘラケズリで仕上げる。把手を貼り付けていたと考えられるが、剥離して欠損している。外面に線刻を施す。87は口縁部から体部下
半である。口縁部は直立気味に外傾し、端部は内傾する面をもつ。外面に縦方向のハケを施す。口縁部から体部上半内面はナデにより仕上げられており、ユビオサエの痕跡が残る。体部下
半は縦方向のヘラケズリを施す。把手は貼り付けており、断面は扁平形を呈する。

88は土師器鍋である。口縁部は外反し口縁端部は面状を呈する。体部は基本的に縦方向のハケを施し、底部周辺は平行タタキが認められる。内面は全体的にナデにより仕上げられ、底部周辺にユビオサエが残る。把手は体部に穿孔した後、はめ込んだと考えられる。把手はやや薄手で断面は扁平形を呈する。

89～92は土師器長胴甕である。口縁部は内湾するもの(89)と、外反するもの(90～92)がある。基本的に体部外面は縦方向や斜め方向のハケを施す。89は口縁部から体部下
半である。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部内面はナデにより仕上げられており、体部内面は縦方向のヘラケズリを施す。外面には煤が付着する。90は口縁端部は面状を呈する。口縁部内面は横方向のハケを施す。体部上半内面は横方向のハケ、体部下
半内面は縦方向のヘラケズリが認められる。他の個体よりも口縁部が短く、器高もやや低い。91は口縁端部は面状を呈する。口縁部内面はナデにより仕上げる。体部内面は縦方向のヘラケズリを施し、肩部内面はナデとユビオサエの痕跡が認められる。外面に煤が付着する。92は口縁端部は外側に突出する。頸部外面に刺突のような痕跡が残る。口縁部内面は横方向のハケを施し、体部内面はナデにより仕上げる。外面に煤が付着する。

93～172は33溝より出土した。

93～100は須恵器杯蓋である。法量としては、口径12.4cm前後のものが多い。中でも、器高4.5cm以下のやや平坦な天井部をもつもの(94・95)、器高4.5cm以上の天井部が丸みをもつもの(96～98)に分かれる。そのほかに他の個体と比べて口径が小さく、小形のもの(93)がある。

93は紫色を帯びた灰色の色調で、胎土に含む砂粒は少ない。天井部は丸みをもち、口縁端部は鈍い段状を呈する。

94・95はいずれも口縁端部は鈍い段状を呈する。94は外面に粘土片が付着する。95は色調はやや青色を帯びた灰色である。胎土は砂粒を多く含み、3～10mm程度の砂粒を少量含む。

96～98はいずれも色調はやや青色を帯びた灰色である。96・98は口縁端部は段状をなし、先端は丸い。97は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部と口縁部の境は丸みをもつ。93～98は古墳時代中

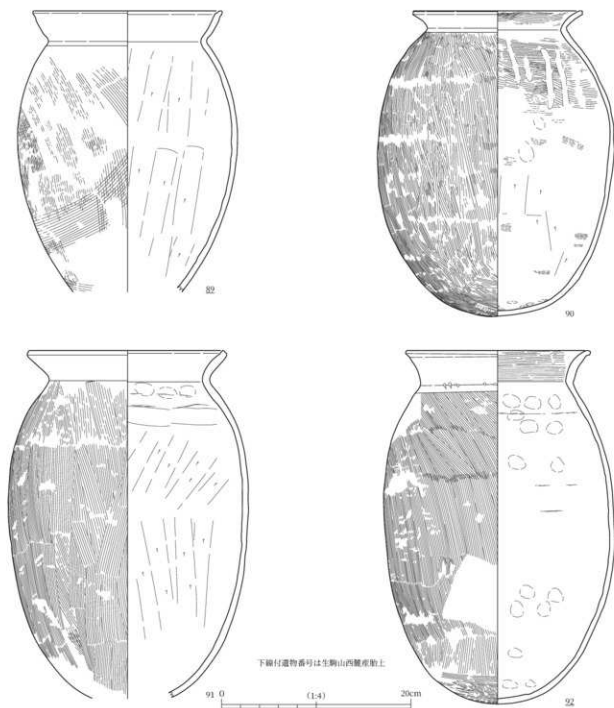


図33 2区 32溝出土遺物実測図(2)

期に相当する。

99・100は天井部を欠損する。99は灰色を基本とした色調であり、断面は紫灰色である。胎土に含む砂粒は少ない。口縁端部は面状を呈する。ロクロの回転方向は残存状況が悪く判別できない。有蓋高杯の蓋である可能性がある。古墳時代中期に相当する。100は焼成が甘く、色調は黄色を帯びた灰白色である。口縁端部は段状を呈する。口径は16.0cmに復元でき、32・33溝から出土した他の個体より大形であることから古墳時代中期より降と考えられる。

101～118は須恵器杯身である。法量としては、口径10cm以下(101)・口径10.0～10.4cm(102～105)・口径10.5～10.9cm(106～110)・口径11.0cm以上(111～115)に分かれる。104・108・111は底部外面

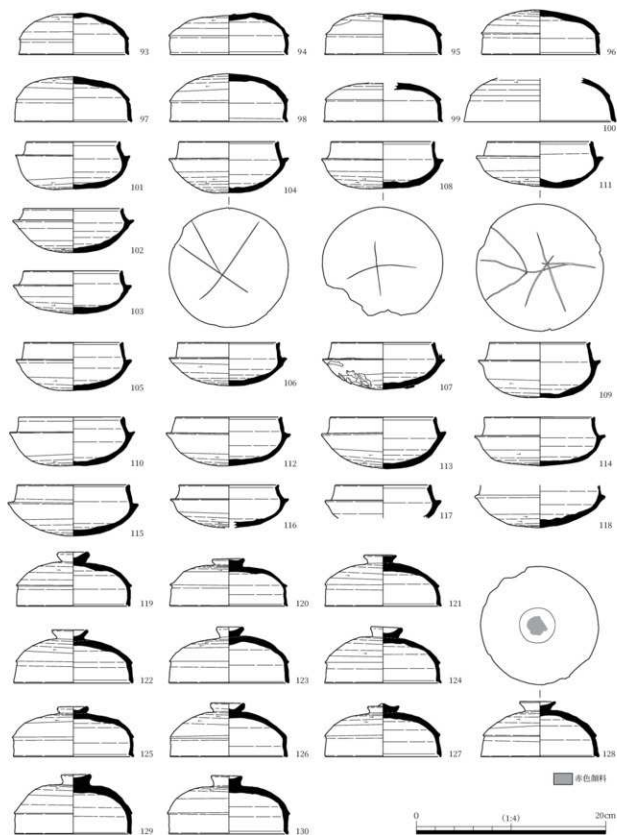


図 34 2区 33溝出土遺物実測図(1)

にヘラ記号を施す。

101は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。体部から底部が深く、受け部は鈎状を呈する。やや平坦な底部をもつ。口径は9.8cmであり、32・33溝から出土した他の個体より小さい。

102は口縁端部は面状を呈し、底部は丸みをもつ。103～105は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。いずれも底部は丸く仕上げる。103は紫色を帯びる色調である。胎土は2～4mm程度の砂粒を少量含む。

106～107は底部は丸みをもつ。106は色調は青灰色である。口縁端部は鈍い段状を呈する。107は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。受け部、底部外面に粘土片が付着する。

108は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。底部はやや平坦である。109は口縁端部は面状を呈する。体部から底部が深く、受け部は鐔状を呈する。底部は丸く仕上げる。110は内面と断面は酸化焼成により赤みを帯びる。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。底部が深く、受け部は鐔状を呈する。底部は丸く仕上げる。外面に焼成時の痕跡が残る。

111は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。底部はやや平坦である。112は口縁端部は鈍い段状を呈する。底部は丸く仕上げる。底部外面全体に自然釉が付着する。114は色調は灰白色である。口縁端部は段状をなし、先端は丸い。底部はやや平坦である。113・115は焼成が甘く、色調は黄色を帯びた灰白色である。底部は丸く仕上げる。113は口縁端部は鈍い段状を呈する。115は口縁端部は面状を呈する。ロクロの回転方向は摩擦しており判別できない。

116は底部下半を欠損する。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。底部は丸く仕上げる。117は口縁部から底部上半である。口縁端部は段状をなし、先端は丸い。118は受け部から底部である。色調は灰白色で、焼成はやや不良である。底部は丸く仕上げる。

119～130は須恵器高杯蓋である。法量としては、杯蓋と同様に口径12.4cm前後のものが多い(120～130)。そのほかに他の個体と比べて口径が小さく、小形のもの(119)がある。また、つまみの形態として、中央が凹むもの(119・122～124・128～130)・中央がやや突出するもの(120・125・126)・平坦なもの(121)・中央が突出するもの(127)に分かれる。基本的に焼成は良好である。いずれも古墳時代中期に相当する。

119は色調は紫色を帯びた青灰色である。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部は丸みをもつ。

120は灰色を基本とした色調であり、断面は紫灰色である。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部は平坦で、やや器高が低い。天井部外面にカキメを施すか。

121・122・124・125は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部は丸みをもつ。123は口縁端部は鈍い段状を呈する。天井部は丸みをもつ。125は色調は青色を帯びる。126は口縁端部は面状を呈する。天井部は丸みもち、口縁部との境の稜が鈍い。天井部外面にカキメを施すか。

127は胎土に砂粒を多く含むが、精緻な印象を受ける。色調は青味が強い青灰色である。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部は丸みをもつ。天井部と口縁部の境の稜がやや鈍い。

128～130は焼成が良好で、色調は青色を帯びる。胎土に含む砂粒は少ない。128は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。天井部は丸みをもつ。つまみ上面に赤色顔料が付着する。129・130は類似する特徴をもち、器高が他の個体より高い。口縁端部は面状を呈する。天井部は丸みをもつ。

131～154は須恵器有蓋高杯である。法量としては、口径10.5cm以上、脚部高4.6cm以上で、比較的脚部が高く大形のもの(131～140)、口径10.5cm以下、脚部高4.6cm以上のもの(141～147)、口径10.5cm以下、脚部高4.6cm以下で、比較的脚部が低く小形のもの(148～152)に大別できる。いずれも長方形透孔を三方向に施す。透孔の幅は比較的広いものが多い。

131～140は脚部が高く大形のもので、口径は10.6～11.0cmである。

131は口縁端部は面状を呈する。脚部の段は沈線巡らせ、内面に稜が認められる。脚端部は先端が尖

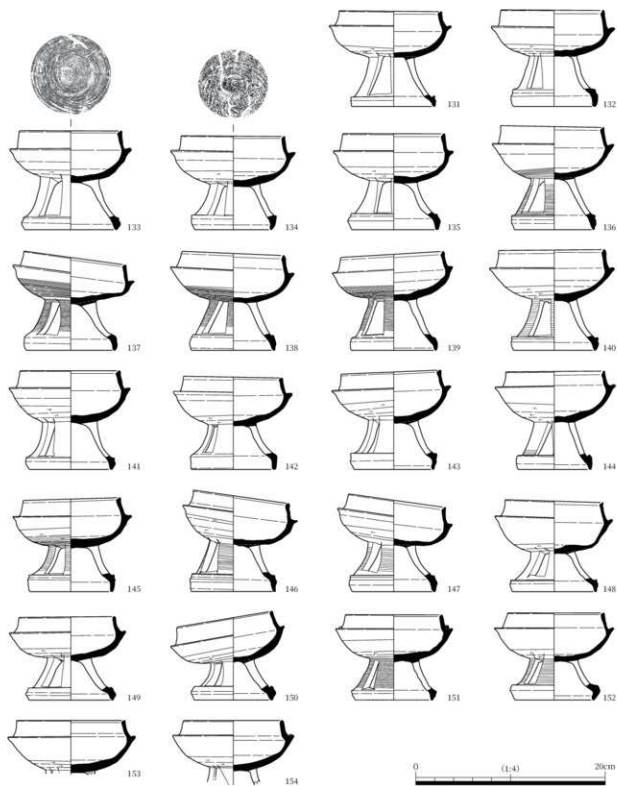


図 35 2区 33 溝出土遺物実測図(2)

る。透孔の幅は比較的広く、透孔を穿孔した際の痕跡が残る。132は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線を巡らせ、内面に稜が認められる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

133・134は杯部内面に同心円文当て具痕が残る。133はやや黄色を帯びた灰白色の色調で、少し粗い印象を受ける。口縁端部は面状を呈する。脚部の段は沈線を巡らせ、内面の稜は不明瞭である。脚端部は丸くおさめる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。134は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の

段の沈線は不明瞭で、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

135は焼成が良好で、やや紫色を帯びる。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線が認められ、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

136～140は外面にカキメが認められ、136～139は杯部下半から脚部外面、140は脚部外面のみに施す。

136は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線が認められ、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。137は口縁端部は面状を呈する。脚部の段は直立し、脚端部は丸くおさめる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。138は内面が紫色を帯びる色調である。胎土に砂粒を多く含む。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線が認められ、端部は先端が尖り、内面の稜は不明瞭である。

139はやや黄色を帯びた灰色で、杯部内面は酸化焼成により赤みを帯びる。胎土に砂粒を多く含む。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線が認められ、端部は先端が尖り、内面の稜は不明瞭である。140は口縁端部は段状をなし、先端は丸い。脚部の段は沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖る。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

141～147は器高に対し脚部が比較的高い。口径は10.1～10.5cmである。

141・142は青灰色で、129・130と色調が似る。141は口縁端部は面状を呈する。脚部の段は沈線を巡らせ、内面の稜は不明瞭である。脚端部は丸くおさめる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。142は口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は直立し、脚端部は丸くおさめる。透孔の幅が比較的狭く、全体的に精緻な印象を受ける。

143は口縁端部は鈍い段状を呈する。脚部の段の沈線は不明瞭で、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

144は焼成が良好で、断面は紫灰色である。脚部下半外面にカキメのような痕跡が残る。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は直立し、脚端部は先端が尖る。透孔は三角形に近い形状で、穿孔した際の痕跡が残る。

145～147は外面にカキメが認められ、145は杯部下半から脚部外面、146・147は脚部外面に施す。

145は口縁端部は鈍い段状を呈する。脚部の段は沈線が認められ、端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。146は口縁端部は面状を呈する。脚部の段は沈線が2条認められ、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。147は口縁端部は鈍い段状を呈する。脚部の段は沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖り、内面の稜は不明瞭である。145～147はいずれも透孔を穿孔した際の痕跡が残る。

148～152は脚部が比較的低い。口径は10.0～10.3cmである。148は口縁端部は面状を呈する。脚部の段は沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。149・150は特徴が似る。色調は灰色で、断面は赤みが強い。胎土に含む砂粒は少ない。口縁端部は丸くおさめる。149は脚部の段は沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。150は脚部の段の沈線は不明瞭で、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。148～150は透孔を穿孔した痕跡が残る。

151・152は外面にカキメが認められ、いずれも脚部外面に施す。151は胎土に含む砂粒は少ないが、2～4mm程度の砂粒をわずかに含む。口縁端部は段状をなし、先端は丸い。脚部の段の沈線は不明瞭で、脚端部は先端が尖り、内面に稜が認められる。透孔の幅は狭く、斜めに穿孔する。杯部に重ね焼きした粘土片が付着する。152は全体的に酸化焼成により赤みを帯びる。胎土に含む砂粒は少ないが、8mm程度の砂粒をわずかに含む。口縁端部は段状を呈し、先端は尖る。脚部の段は屈折し、脚端部は尖る。透

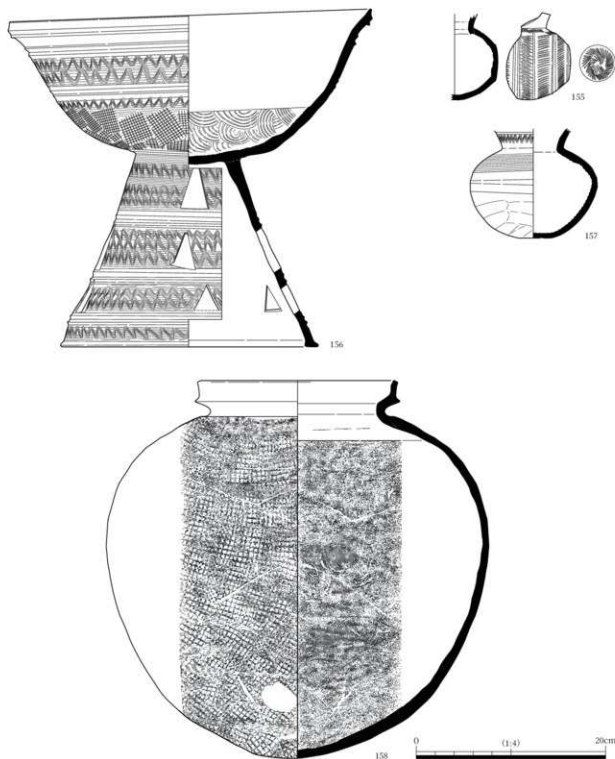


図 36 2区 33 溝出土遺物実測図 (3)

孔を穿孔した際の痕跡が残る。

153は杯部である。色調は紫色を帯びる。口縁端部は鈍い段状を呈する。154は杯部から脚部上端である。焼成は良好で、紫色を帯びた灰色である。胎土は砂粒を多く含む。口縁端部は丸くおさめる。透孔を穿孔した際の痕跡が残る。受け部に重ね焼きした粘土片が付着する。

155は須恵器樽形壺口縁部下半から底部と考えられる。頭部外面に列点文を施す。体部外面は3条の沈線を巡らせ、それにより区分された文様帯が4つ確認できる。端の文様帯二つには列点文を、中央の

文様帯一つには波状文を施す。また、側面には放射線状の列点文を施す。

156は須恵器高杯形器台である。完形に近い状態で出土した。口縁部は外傾し、端部は外側に突出する。杯部上半外面はカキメ調整後に2条の波状文を施しており、沈線により文様体として杯部下半と区分される。杯部下半外面はカキメ調整後に1条の波状文を施し、さらに格子目タタキを施す。脚部外面は4つの文様帯に分かれており、基本的にカキメ調整後に1～3条の波状文を施す。脚部の文様帯3つに透孔を施し、透孔は上段に3方向、中段に4方向、下段に5方向確認できる。杯部内面はナデ調整するが、下半には同心円文当て具痕が残る。

157・158は須恵器壺である。157は小形の壺の口縁部下半から底部である。扁球状の体部をもつ。頸部外面に波状文1条を施し、体部上半にカキメを巡らす。体部下半外面は回転ヘラケズリを施し、底部は横方向のヘラケズリにより仕上げる。頸部外面から体部上半外面に自然軸が付着する。158は大形の壺である。色調は白味が強い灰色である。頸部は大きく屈曲し、直立する口縁部がつく。口縁端部は面状を呈する。口縁部と頸部の境が突出し、断面三角形の突帯状を呈する。体部はやや肩が張る球胴状を呈し、底部は尖り気味である。体部外面は格子目タタキを施した後にカキメを巡らす。肩部から体部内面は同心円文当て具痕をナデ消す。口縁部から頸部の断面形態、外面調整が愛媛県伊予市市場南組窯跡出土資料と類似する（三吉2016）。

159・160は須恵器甕である。159は口縁部から肩部である。口縁部は外反し、端部は面状を呈し、上端、下端が突出する。頸部外面はカキメを施す。体部外面は格子目タタキを施した後、カキメを巡らす。体部内面は同心円文当て具痕が残る。160は大形の甕の口縁部から体部上半と底部である。口縁部は外反し、端部は面状を呈する。口縁部外面は沈線により区分された二つの文様帯が認められる。上段は波状文2条、下段は波状文1条を施す。体部から底部外面は平行タタキを施し、底部には回転カキメが認められる。口縁部から肩部内面はナデにより仕上げる。体部内面は同心円文当て具痕と車輪文当て具痕が混在し、底部内面はナデ消す。全体的に焼きひずみによりゆがむ。

161～163は口径13cm前後の土師器甕である。いずれも口縁部は外反し、外面調整は縦方向や斜め方向のハケを施す。161は完形品で、球胴状の体部をもつ甕である。口縁端部は丸くおさめる。内面は全体的にナデにより仕上げる。体部外面に煤が付着する。162は口縁部から体部上半である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面は横方向のハケを施す。体部内面はナデにより仕上げており、ユビオサエの痕跡が残る。163は口縁部から体部上半である。口縁端部はやや外側に突出し、面状を呈する。口縁部外面はハケ後、ナデ調整する。口縁部内面は横方向のハケが認められる。体部内面は斜め方向のヘラケズリ後、ハケを施す。体部外面に煤が付着する。

164～166は土師器甕の口縁部から体部上半である。口径が16～20cmの大形品で、長胴甕である可能性がある。口縁部が外反するもの（164・166）、口縁部が内湾するもの（165）がある。いずれも外面調整として縦方向や斜め方向ハケを施す。164は口縁端部は面状を呈する。内面は全体的に横方向のハケを施す。165は口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部内面は横方向のハケが認められる。体部内面は縦方向のヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。166は口縁端部は面状を呈する。口縁部から肩部内面はナデにより仕上げており、肩部以下の内面は縦方向のヘラケズリが認められる。

167・168は土師器長胴甕である。167は口縁部から体部下半である。口縁部は外傾し、端部は尖るよう丸くおさめる。体部外面は縦方向・斜め方向のハケを施す。口縁部内面はナデにより仕上げる。体部内面の調整は摩滅しているものの、縦方向のヘラケズリもしくは板ナデが認められる。他の個体と比

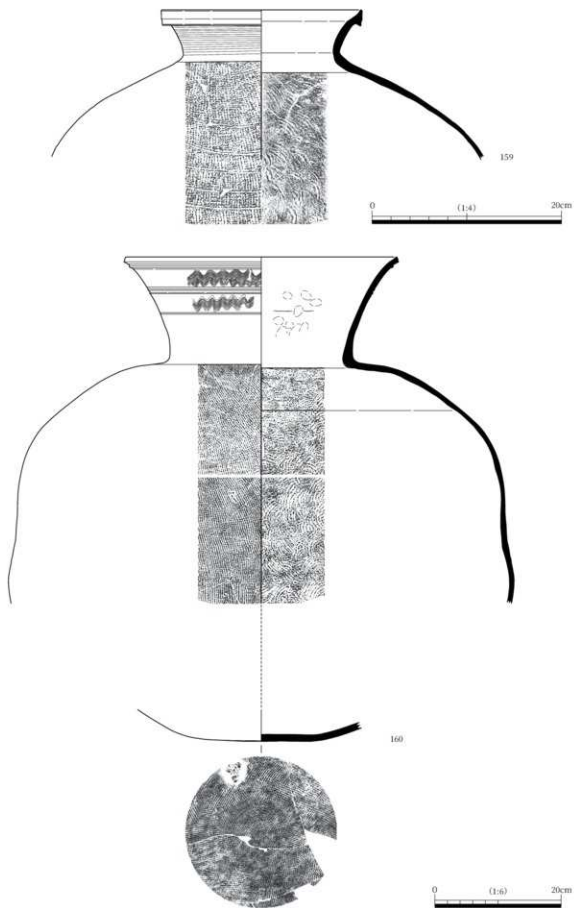


图 37 2区 33 清出土遗物实测图(4)

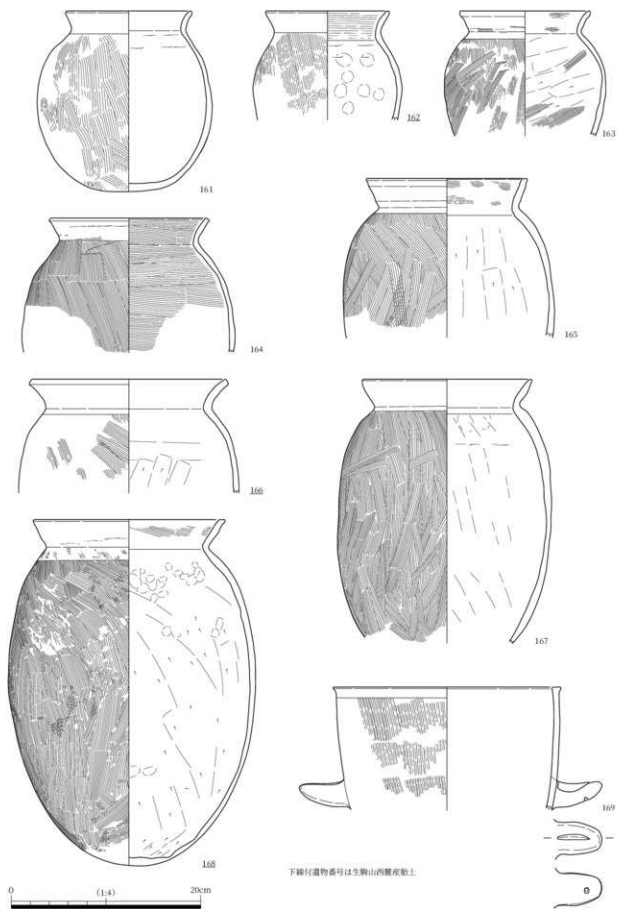


图 38 2区 33 溝出土遺物実測図 (5)

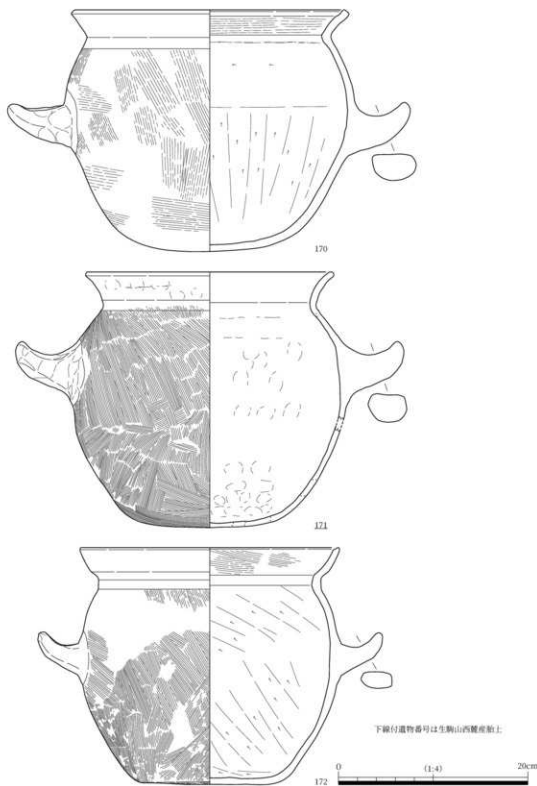


図39 2区 33溝出土遺物実測図(6)

べてやや肩が張る。頸部から体部外面に煤が付着する。168は口縁部は外傾し、端部は水平な面をもつ。体部外面は縦方向や斜め方向のハケを施し、底部周辺は調整が摩滅している。口縁部内面は横方向のハケが認められる。体部は縦方向や斜め方向のヘラケズリを施す。

169は土師器甕の口縁部から体部上半である。口縁部は直立し、端部は水平な面をもち、外側、内側にやや突出する。外面に縦方向の平行タキを施し、内面は摩滅しており調整は不明である。把手上面

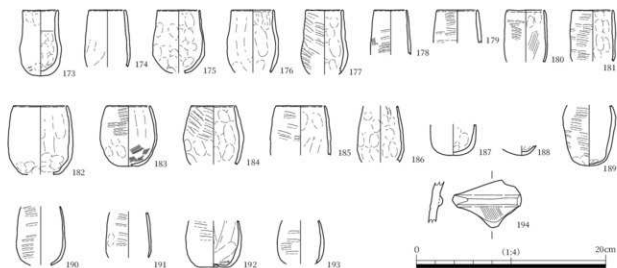


図40 2区 32 溝出土製塩土器、33 溝出土埴輪実測図

は切り込みが入り、断面はV字状を呈する。把手下面には小さな孔が認められる。体部に穿孔した後、把手をはめ込んだものと考えられる。

170～172は土師器鍋である。口縁部が外反もしくは外傾するもの（170・171）、口縁部が内湾するもの（172）がある。いずれも外面調整として縦方向、斜め方向ハケを施し、底部周辺は横方向のハケが認められる。170は口縁端部がやや内湾し、先端は面状を呈する。口縁部内面は横方向のハケを施す。頸部から体部上半内面はナデにより仕上げられており、体部下半内面は縦方向のヘラケズリを施す。把手の断面は扁平形を呈する。外面に煤が付着する。171は口縁端部は丸くおさめる。内面は全体的にナデにより仕上げられており、ユビオサエの痕跡が残る。把手の断面は扁平形を呈する。172は口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部内面は横方向のハケを施し、頸部はナデ調整する。体部内面は縦方向・斜め方向のヘラケズリを施す。把手の断面は扁平形を呈し、170・171よりも薄手である。

173～193は製塩土器である。いずれも丸底I式である（広瀬1994）。口径4.5cm未満で、外面をナデ、ユビオサエにより調整するもの（173～176）、口径4.5cm未満で、外面をタタキにより調整するもの（177～181）、口径4.5cm以上で外面をナデ、ユビオサエにより調整するもの（182）、口径4.5cm以上で、外面をタタキにより調整するもの（183～185）に分けられる。186～193は口径は不明ではあるが、外面をナデ、ユビオサエにより調整するもの（186～188）、外面をタタキにより調整するもの（189～193）に分けられる。口径4.5cm未満の製品は173・174・177等のようにコップ形を呈するものが多い。173は底部が平底となる。口径4.5cm以上の製品は全体が残らないものの、鉢形に近い形態であったと考えられる。182・183は底部が平底となる。

194は円筒埴輪である。突帯の形状は断面が台形を呈する。全体的に摩滅しているが、外面に斜め方向のハケ（6本/cm）が認められる。

195～197はいずれも24落ち込みより出土した。

195・196は瓦器椀口縁部である。いずれも和泉型IV-2～3型式、13世紀後半から14世紀に相当するものと考えられる。197は平瓦である。凸面に縄叩き痕が認められ、凹面に布目が残る。

198～202はいずれも掘立柱建物1より出土した。

198・199は須惠器杯身である。198は16柱穴、199は9柱穴より出土した。立ち上がりは低く内傾し、先端は丸い。いずれも古墳時代後期に相当する。200は8柱穴より出土した須惠器高杯脚部である。短

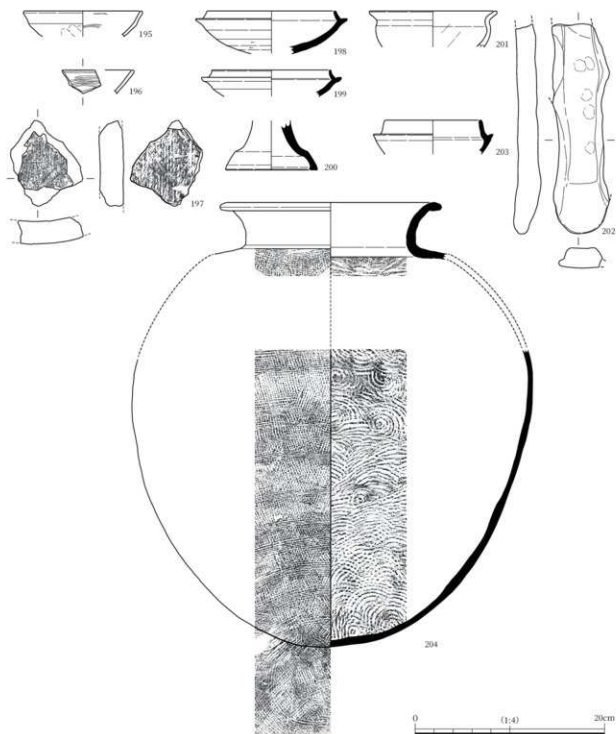


図41 2区 遺構出土遺物実測図

い脚部を有し、脚端部は水平な面をもつ。台を備える器種の台部である可能性もある。

201は9柱穴より出土した土師器鉢口縁部である。短い口縁部をもち、内面にはヘラ状工具の痕跡が残る。202は12柱穴より出土した土師器片で、移動式竈の焚口脚部と考えられる。ナデ調整により成形しており、表面にはユビオサエが残る。裏面はヘラ状工具の痕跡が残る。

203は36ピットより出土した須恵器杯身である。胎土に砂粒を多く含み、色調は紫色を帯びた灰色である。口縁端部は丸くおさめる。杯部に重ね焼きした際の粘土片が付着する。

204は26土坑より出土した須恵器甕である。口縁部片と体部から底部が出土しており、体部下半から

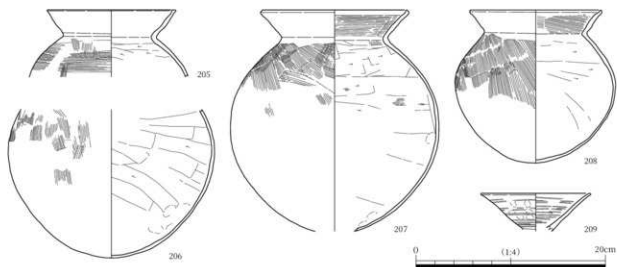


図42 2区 43土坑出土遺物実測図

底部のみ完存する。口縁部は外反し、端部は折り返す。肩部から体部外面は格子目タタキを施した後、約2.5cm間隔で幅1cm程度のカキメを巡らせる。内面には同心円文当て具痕を残し、底部内面の一部はナデ消しが認められる。

205～209はいずれも43土坑より出土した。

205～208は土師器甕である。205は口縁部から肩部である。口縁部は内湾気味に外傾し、端部は水平な面をもち、内側にやや突出する。外面に横方向のハケを施し、一部縦方向のハケが認められる。体部内面はヘラケズリを施す。口縁部の特徴と外面調整から布留式甕と考えられる。206は体部下半から底部である。底部はやや尖り気味の丸底を呈し、207と形態が類似する。外面に縦方向のハケが認められ、内面はヘラケズリを施す。207は口縁部から体部下半まで復元できた。口縁部は外傾し、端部は外傾する面を呈し内側に突出する。底部はやや尖り気味の丸底を呈すると推測される。肩部から体部外面は左上がり斜め方向のハケを施す。口縁部内面は横方向のハケを施し、頸部より下はヘラケズリを施す。208はほぼ整形に復元でき、206・207より小形である。口縁部は外傾し、端部はつまみ上げる。底部はやや尖り気味の丸底を呈する。調整としては、207と共通する。206～208は外面にタタキが認められないが、庄内式甕の要素を残している。209は土師器小形器台の受け部である。逆円錐状を呈し、中央は孔が貫通する。内外面に横方向の細いヘラミガキを施す。

第4項 2区3b層の遺物(図43～49、写真図版10、35-1～4、36～38)

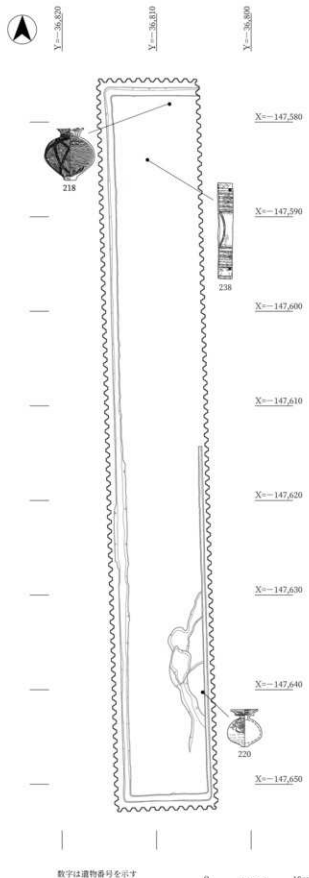
流積堆積を主体とする3b層中では遺構を確認できなかったが、調査区内全体より遺物が出土した。弥生時代後期末から古墳時代初頭に帰属するものが中心である。

報告遺物には須恵器や埴輪片等、古墳時代中期以降に相当する遺物も含まれるが、ほとんどは東側側溝(9G-1e)から出土した。東側側溝は第3面の32・33溝や掘立柱建物1と隣接することから、後世の遺物が混入したと考えられる。

土器

210～213は須恵器である。

210は杯身である。底部下半を欠損する。酸化焼成により、赤みを帯びる。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。底部は丸く仕上げる。211は有蓋高杯である。色調は青灰色で、断面は紫色を帯びる。三方



数字は遺物番号を示す

図43 2区 3b層遺物出土位置図

向に長方形透孔を穿孔したと推測される。口縁端部は段状をなし、先端は尖る。脚部の段は沈線を巡らせ、脚端部は先端が尖る。212は壺頸部から体部である。体部上半に円孔が穿たれ、その周囲外面に一条の波状文を巡らす。体部内面は焼きぶくれが認められる。213は高杯形器台杯部である。口縁端部は外側に突出し、突帯状を呈する。杯部上半外面に1条の波状文を施し、下半外面はタタキ調整後にカキメを巡らす。内面に同心円文当て具痕を残す。

214～216は弥生土器壺口頸部である。

214は口縁部が外反し、端部は面状を呈する。外面は口縁部上半に横方向のヘラミガキ、口縁部下半から頸部に縦方向のヘラミガキが認められる。内面は横方向のナデにより仕上げられており、頸部にはユビオサエの痕跡が残る。215は口縁部が外傾し、口縁端部は丸くおさめる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。216は直立気味に頸部が立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は面状を呈する。外面は頸部と肩部の境に刺突文を巡らす。内面は横方向のナデおよびヘラミガキが認められ、頸部にユビオサエの痕跡が残る。いずれもV様式相当と考えられる。

217は壺頸部から底部である。体部は算盤玉状の扁球形を呈し、小さい平底をもつ。外面は体部上半に平行タタキ後、肩部に縦方向のハケ、体部下半から底部に横方向および縦方向のハケを施す。内面は成形した後、体部上半にナデ、体部下半から底部に斜め方向のハケを施す。

218は壺口縁部下半から底部である。口縁部上半は欠損しており、口縁部下半を下にした状態で出土した。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部に向けて外傾する。体部は扁球状を呈し、平底をもつ。外面に龍目の痕跡が残る。口縁部から頸部の外面は縦方向のハケ後、横方向のヘラミガキを施す。体部外面は平行タタキ、ハケを施した後、体部上半は横方向や斜め方向のヘラミガキ、体部下半は縦方向のヘラミガキを施す。口縁部下半内

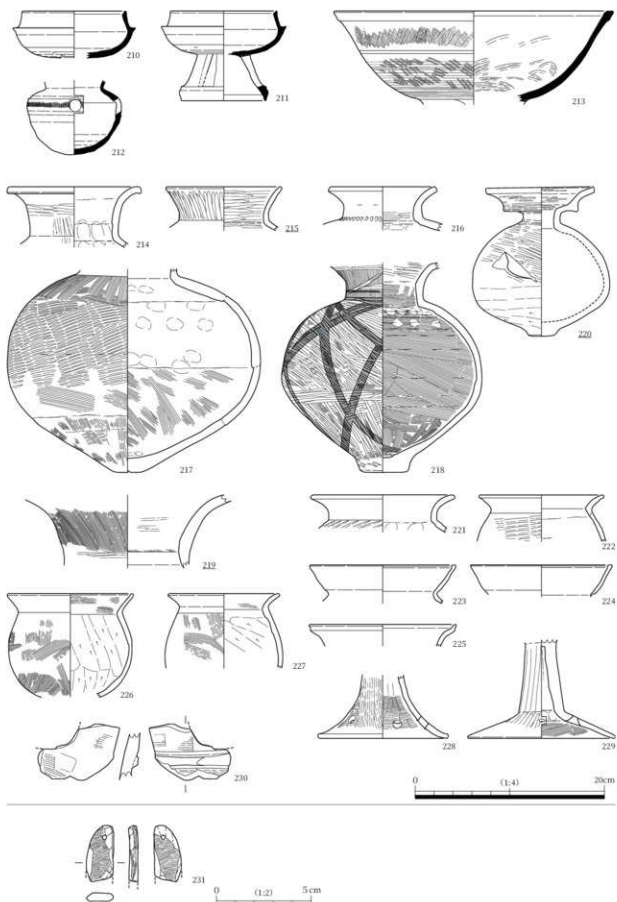


图44 2区 3b层出土遗物实测图

面は横方向のヘラミガキ、頸部から体部下半は横方向のハケを施す。底部付近は縦方向のハケを施す。口頭部外面に煤、体部下半から底部の外面に黒斑が認められる。

219は弥生土器壺頸部である。外面は縦方向のハケ、横方向のヘラミガキを施す。内面は横方向のハケとヘラミガキが認められる。生駒山西麓産と考えられる。V様式に相当すると考えられる。

220は土師器二重口縁壺である。ほぼ完形の状態で出土した。口縁部は面状を呈する。体部はやや下膨れの球状を呈し、平底をもつ。口縁部と体部上半の外面に横方向のヘラミガキを施し、体部下半は横方向のヘラケズリにより仕上げる。口縁部内面は横方向のヘラミガキを施す。体部中央に焼成後穿孔が認められるものの、取り上げ時の破損である可能性がある。生駒山西麓産と考えられる。

221は甕口頸部である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面は平行タタキが認められ、内面はナデにより仕上げる。

222～225は土師器甕口頸部である。222は口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面は平行タタキが認められる。内面は横方向のナデにより仕上げており、V様式の特徴を残す。223・224は口縁部が内湾気味に外傾し、端部は内側に突出する。いずれも布留式甕と考えられる。225は口縁部は外反し、口縁部はつまみ上げる。

226・227は土師器甕である。226は扁球状の体部をもつ。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめ、内側にやや突出する。227は口縁部から体部上半にあたる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。いずれも外面にハケを施し、口縁部内面は横方向のハケ、頸部以下内面はヘラケズリを施す。

228は高杯もしくは器台の裾部である。裾部はなだらかに開く。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。円形透孔を5方向に穿孔する。

229は土師器高杯脚部である。脚柱部より屈曲して裾部が開く。外面は縦方向のヘラナデ後、裾部に縦方向のヘラミガキを施す。裾部内面は斜め方向のハケを施す。円形透孔を4方向に穿孔する。

230は円筒埴輪片である。突帯の形状は断面が台形を呈し、円形の透孔を有する。外面にヨコハケ（5～6本/cm）が認められる。

石製品

231は滑石製模造品である。板状で、径2mm程度の穿孔を1つ施す。

32・33溝上層や3a、3b層中で自然石剥片が多数出土した（3区等でも出土）。大阪市教育委員会小倉徹也氏による肉眼鑑定で緑泥岩結晶片岩や紅簾石片岩との教示を得た。これらの変成岩は本州中部から四国中央部等の三波川変成帯、中央構造線上でみられる岩石で、西宮田遺跡周辺では産出されない石材なので、明らかに他地域（和歌山県、三重県、徳島県等）から搬入されたと考えられる。結晶片岩の石製品は出土しておらず用途は不明だが、3区第3b面では花崗岩や閃緑岩の川原石がまとまって出土する事例もある（図83）。土器などと共に搬入された可能性が高い。

木製品

232・234・237は農具である。232は横鎌の刃部にあたる。鋸歯状の歯が5枚認められる。234・237は堅件である。いずれも芯持ち削り出しである。234は両端を欠損する。搦部は円柱状を呈し、握部との境は曲線的である。237は握部を欠損する。搦部は円柱状を呈する。樹種については、232はコナラ属アカガシ亜属、234はアワブキ属、237はヤブツバキである。

236は櫂である。握部は欠損する。水掻きにあたり、平面は長方形を呈する。最大幅8.6cmをはかる。樹種はスダジイである。

233・242・244は槽または容器である。233は槽である。欠損が多く、全形は不明ではあるが、方形を呈し、底部は薄手で側面は厚手である。低い脚台が2カ所認められる。被熱によって焦げた痕跡が残る。樹種はスギである。242は長さ62.1cmをはかる。楕円形を呈し、低い脚台を2カ所備える。樹種はクロマツである。244は槽で全形は不明瞭で脚台をもたない。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

235・238・239は用途不明品である。235は薄い板状で最大幅19.1cmである。残存部は半円形を呈する。農具もしくは櫂等の一部である可能性が考えられる。樹種はヒノキである。238は長さ81.0cm、幅13.6cmをはかる、大形の板である。サクラ樹皮による綴じが3カ所に認められ（1カ所は樹皮が剥がれている）、本来は両端に2個一対で綴じられていたと考えられる。樹皮を綴じる範囲の表面は切れ込みにより区画され、その裏面は溝状に抉られている。表面中央に半円形の文様、上端と下端に各5本の横線を施す。左上の端には小さい円孔が一つ認められるため、この孔に紐などを通して綴じ、他の部材と連結させていたと考えられる。箱状の製品もしくは船の装飾板等である可能性が考えられる。239は弧状の文様を施す板である。表面には緊縛痕が認められる。238と同様の遺物の一部である可能性が考えられる。238・239の樹種はヒノキである。

240・241・243は有頭棒である。いずれも芯持ち削り出しであり、棒状具の端部を抉り込んで頭部を作る。頭部の大きさはそれぞれ異なる。243は径1～2mmの孔が2つ認められるものの、意図的に穿孔したかは不明である。241・243の樹種はモミ属である。

246は両端に頭部を持つ棒状具である。上端は欠損している。紡織具（認め軸棒）である可能性が考えられる。樹種はスギである。

245・247・248は柄穴を有する板である。245は右端、上部左端に長方形の孔を4カ所穿孔する。樹種はスギである。247は右上端、左端、中央下部に不整形の孔を6カ所穿孔する。樹種はヒノキ科である。248は3カ所に楕円形や円形の孔を穿つ。下端は斜めに切ったような痕跡があり、擦痕が多く認められる。245・247・248はいずれも用途としては建築部材のように利用されていたと想定される。

249は残存長184.5cm、残存幅28.5cm、厚さ9.1cmをはかる大形の板である。木棺側板のような板材である可能性が考えられる。樹種はヒノキである。

250は杭である。長さ69.0cmをはかる。先端部に刻んだような痕跡が残る。

以上、2区では中世から古墳時代にかけての遺構、遺物を確認した。弥生時代後期末まで調査区周辺の環境は河内湖縁辺の湿地および静水域であったと考えられる。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて流路が形成され、砂礫（3～2層）が調査区の南あたりで厚く堆積したことにより、南が高い地形が形成された。3b層上面では遺構を確認できなかったが、3b層中より弥生土器、土師器、木製品が出土したことから、周辺に居住域が存在していたと考えられる。

古墳時代中期以降は調査区周辺で陸地化が進み、微高地である調査区の南を中心に人の活動が積極的に行われた。第3面では柱穴、ピット、土坑、溝、落ち込みを確認した。掘立柱建物1を検出しており、古墳時代後期以降は居住域が展開していたと考えられる。古代に相当する遺構、遺物はほぼ確認できなかったが、第2面では調査区の南で北東―南西を主軸とする畦畔が残っていたことから、中世以降は耕作地として利用されたと考えられる。

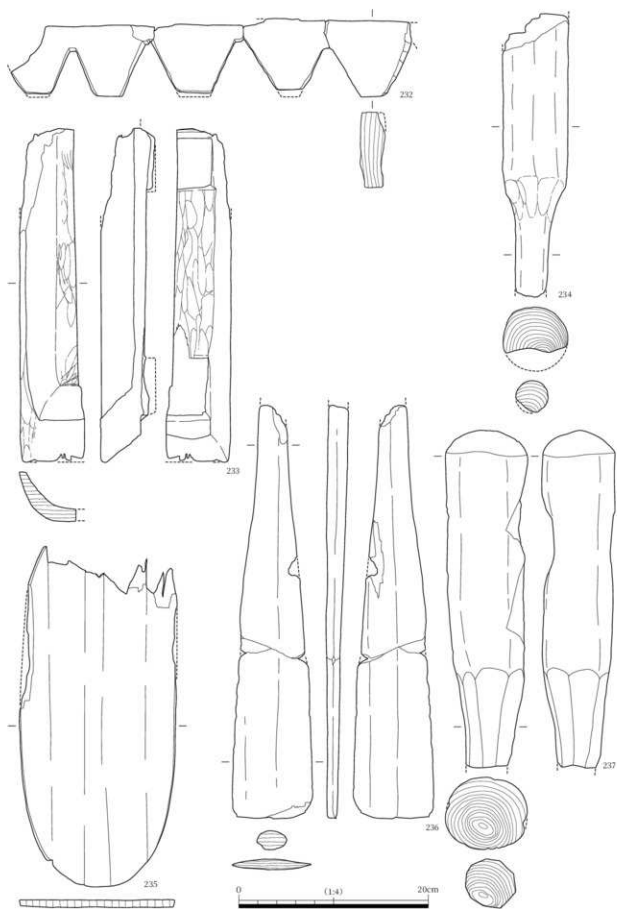


图45 2区 出土木製品実測図(1)

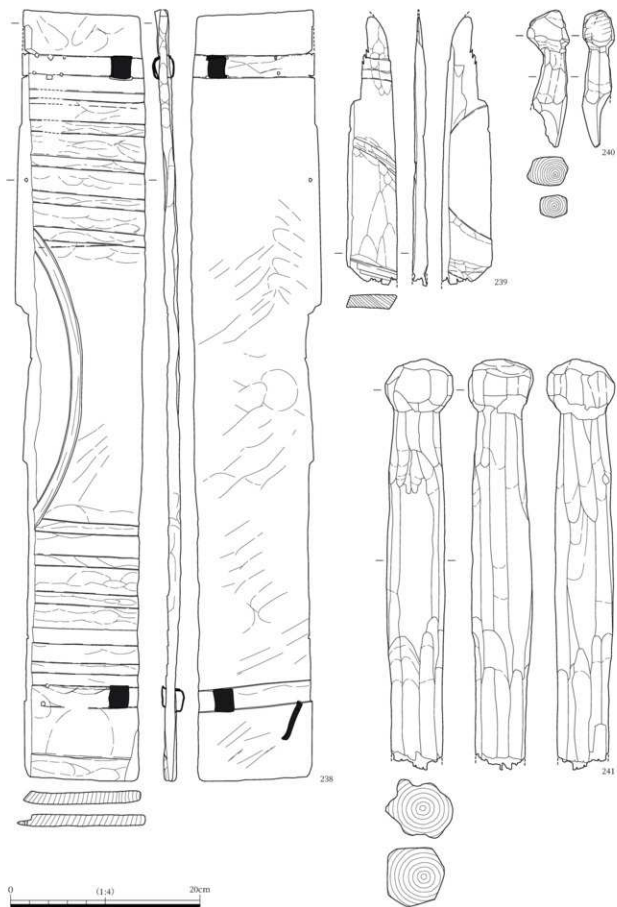


图46 2区 出土木制品实测图(2)

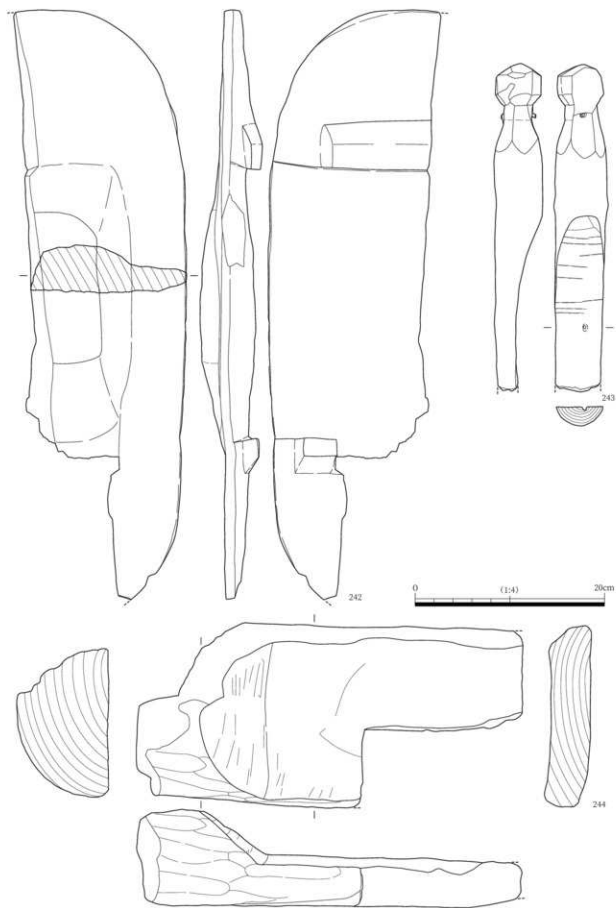


图47 2区 出土木製品実測図(3)

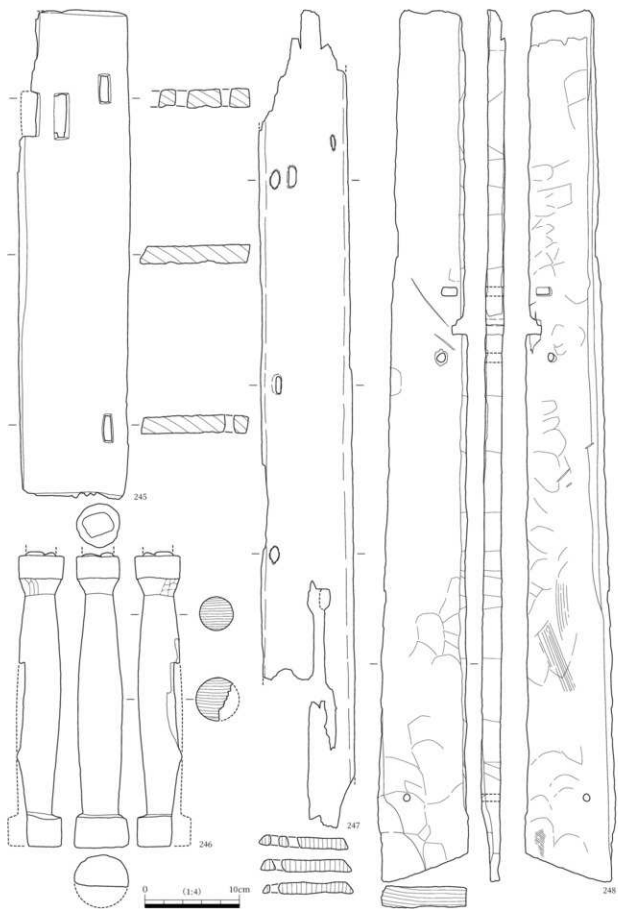


图48 2区 出土木制品实测图(4)

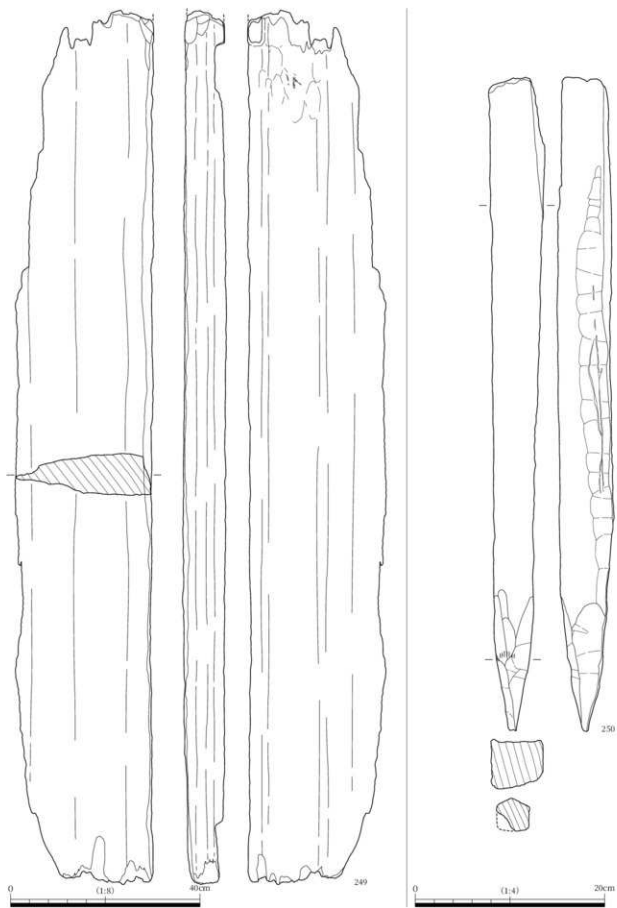


图49 2区 出土木製品実測図(5)

第4節 3区の遺構と遺物

第1項 3区の概要・層序(図50~53、写真図版20)

3区は調査地の中央に位置する東西幅14.0m、南北長71.0mの調査区で、調査面積は974㎡と全調査区中で最大である。令和4年1月より断続的に機械掘削を開始し、機械掘削の途中で1段目土留支保工を実施した。人力掘削は4月より実施し、1区や2区同様に人力掘削の途中で2段目土留支保工を実施した。大阪府教育庁の立会を経て、10月に人力掘削を終了した。

3区の現地表面の標高はT.P.+3.2m前後であり、T.P.+1.7~+1.5mまで機械掘削を行った。他調査区と比較すると第2面の検出高が0.5~1.0m高い。以後T.P.-1.5mまで人力掘削を行った。T.P.-2.0~-1.5mは北、西、南辺の側溝を掘り下げ断面確認を実施して調査を終了した。

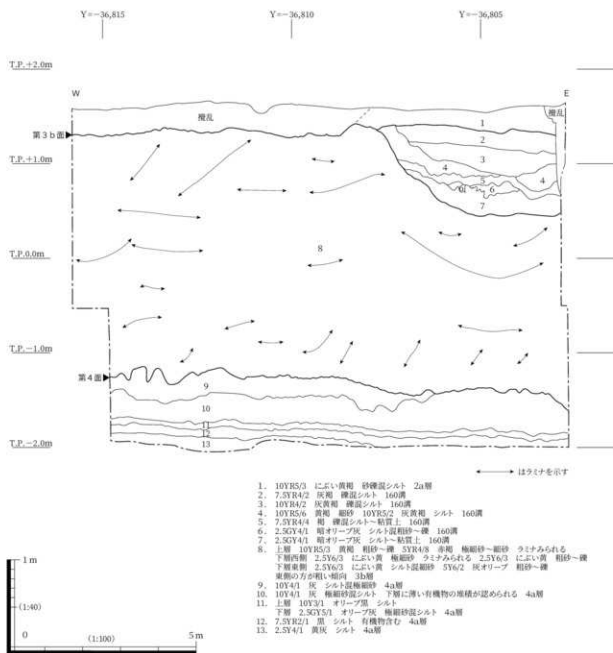


図50 3区 北壁断面図

- | | |
|--|---|
| 1. 2.5Y/2 期灰黄 極細砂シルト 1a層 | 33. 5Y/2 灰オリーブ 極細砂 240流路 |
| 2. 5Y/2 灰オリーブ シルト 1a層 | 34. 5Y/1 灰 シルト+極細砂 240流路 |
| 3. 2.5Y/3 黄灰 シルト 2a層 | 35. 2.5Y/1 黄灰 シルト+極細砂 240流路 |
| 4. 2.5Y/3 オリーブ黒 極細砂シルト 2a層 | 36. 2.5Y/1 黄灰 シルト+極細砂 240流路 |
| 5. 10YR/3 に近い黄褐色 極細砂シルト 灰黄 2a層 | 37. 2.5Y/2 灰黄 極細砂 240流路 |
| 6. 10YR/2 灰黄褐色 極細砂シルト 179柱穴(掘立柱建物2) | 38. 2.5Y/2 期灰黄 極細砂+砂 240流路 |
| 7. 10YR/2 灰黄褐色 極細砂+細砂 3a層 | 39. 2.5Y/2 黄褐色 極細砂 240流路 |
| 8. 10YR/1 期灰 極細砂 3a層 | 40. 2.5Y/1 黄灰 シルト 2.5Y/2 灰黄 極細砂と 2.5Y/3 オリーブ黒 粗砂が混じる 242溝 |
| 9. 10YR/2 灰黄褐色 極細砂シルト 3a-1層 | 41. 2.5Y/1 黄灰 極細砂 下層 2.5Y/4 に近い黄 溝が堆積する 242溝 |
| 10. 10YR/4 黒 極細砂シルト 3a-2層 | 42. 5Y/2 灰オリーブ 粗砂+軽石(10mm以上) 242溝 |
| 11. 2.5Y/3 オリーブ黒 シルト 3a-3層 | 43. 10YR/2 灰黄褐色 礫シルト 160溝 |
| 12. 2.5Y/6 黄褐色 極細砂シルト 3a-4層 | 44. 10YR/3 に近い黄褐色 礫シルト 3a層 |
| 13. 上層 7.5Y/1 灰 シルト+粘質土 10YR/1 期灰 粗砂 | 45. 10YR/4 期黒 粗砂+礫シルト 遺構 |
| 中層 7.5Y/1 灰 シルト 10YR/1 期灰 極細砂が土中に堆積する | 46. 5Y/1 灰 シルト 5Y/1 灰 極細砂が互層となる |
| 下層 2.5Y/1 黄灰 シルト 2.5Y/1 黄灰 極細砂 5Y/1 灰 極細砂+細砂が土中に堆積する 3b層 | 47. 7.5Y/1 灰 シルト |
| 14. 10YR/2 黒褐色 極細砂シルト 3a層 | 48. 下層 有機物が堆積する 10YR/1 期灰 シルト 4a層 |
| 15. 10Y/1 灰 シルト 3b層 | 49. 上層 10YR/3 黄褐色 シルト 2.5Y/1 オリーブ黒 シルト |
| 16. 10Y/1 灰 極細砂 3b層 | 下層 5Y/1 オリーブ黒 シルト 10Y/1 灰 シルト 4a層 |
| 17. 2.5Y/2 期灰黄 シルト 2a層 | 49. 10YR/2 黒 シルト 植物根がみられる |
| 18. 7.5YR/1 期灰 極細砂+シルト 遺構 | 7.5Y/1 オリーブ黒 シルト 有機物大量を含む 4a層 |
| 19. 2.5Y/1 黄灰 シルト+極細砂 3a層 | 50. 2.5Y/1 黄灰 シルト |
| 20. 2.5Y/2 期灰黄 シルト 3b層 | 上層 7.5Y/1 オリーブ黒 シルト |
| 21. 2.5Y/1 黄灰 粗砂混シルト 遺構 | 下層 2.5Y/1 オリーブ黒 シルト 4a層 |
| 22. 10YR/3 に近い黄褐色 粗砂 遺構 | 51. 10YR/2 黒褐色 シルト |
| 23. 10YR/2 灰黄褐色 シルト+細砂 3b層 | 植物根茎の堆積が多い 茶色層 4a層 |
| 24. 7.5Y/1 灰 シルト 3b層 | 52. 5Y/1 オリーブ黒 シルト 植物根茎がみられる |
| 25. 5Y/2 灰オリーブ シルト 2a層 須恵器片を大量に含む | 4区北壁で発生土露出上層可層 4a層 |
| 26. 10YR/2 灰黄褐色 シルト 2a層 須恵器片を大量に含む | 53. 2.5Y/2 黒 シルト 4a層 |
| 27. 2.5Y/1 黄灰 極細砂シルト 2a層 須恵器片を大量に含む | 54. 上層 2.5Y/1 黄灰 シルト |
| 28. 10YR/3 に近い黄褐色 粗砂+細砂 遺構 | 下層 2.5Y/1 黄灰 シルト 7.5Y/1 オリーブ黒 シルト 4a層 |
| 29. 2.5Y/3 オリーブ黒 シルト 遺構 | 55. 10YR/2 灰黄褐色 粗砂 3b層 |
| 30. 2.5Y/2 期灰黄褐色 極細砂シルト 240流路 | 56. 2.5Y/2 黄灰 シルト+極細砂シルト |
| 31. 10YR/2 灰黄褐色 粗砂 | 57. 2.5Y/1 黄灰 シルト+極細砂 |
| 32. 10YR/2 灰黄褐色 シルト+細砂 240流路 | 58. 10YR/2 灰黄褐色 シルト+粗砂 |

図 52 3区 西壁断面図(2)

3区では第2面、第3面、第3b面と3面にわたる遺構面を検出した。第3面の北半部は全調査区でも最も標高が高い微高地となっており、その高まり周縁に沿ってめぐる160溝を検出した。北半部の高まりはX=-147,705周辺で人為的に削平され、それ以南の標高は徐々に低くなり、中央部のX=-147,710~-147,730の区間は大きくくぼんで溝状になる。X=-147,730以南の南半部では比較的平坦な地盤が続き、掘立柱建物1棟(掘立柱建物2)や多数の柱穴、土坑、溝などを検出した。第3面と第3b面で空中写真測量を実施した。必要に応じて電子平板やレーザーを用いて土器の出土状況図などの平面実測を実施した。

3区の特徴は調査区内での地表面の高低差が激しいことである。地層の堆積状況が東西南北で大きく異なり、地層のつながり具合を把握するのが困難だった。また、東西方向に近現代の攪乱が数カ所存在していることも、遺構面のつながりを分かりにくくする一要因であった。そこで、北辺、西辺、南辺には最終掘削深度まで側溝を設け、東辺も必要に応じて側溝を設けて壁面での土層断面観察に努めた。報告書では北壁、西壁、南壁の断面図を掲載した(図50~53)。

X=-147,710までの北半部では、古墳時代初頭以前の流路堆積層、3b層が最も厚い範囲では3mにわたって堆積する。2区の南半から3区にかけて3b層の堆積が突出して厚いが、これは付近にあった河川の砂礫が分厚く堆積し、この周辺に微高地が形成されたためである。微高地は中世頃まで存在していたが、中世後半段階に耕作地とした際平坦化するため高い部分を削平したため、本来は3b層の上形成されていた2a層や3a層も削平されたと推測される。

X=-147,710~-147,730の中央部は、古墳時代中期以前に240流路が存在していた影響で、古墳時代中期以降も他より低い状態だったと考えられる。この区域を平坦化するために、古墳時代中期以降に整地を行ったと思われる。上層はシルト層に須恵器片が密に混在する層が存在していた。

X=-147,730以南の南半部では中央部の低い部分から徐々に地形が高くなっていき、3a層が0.1~0.5m堆積している。この部分では3a-1~3a-4層に細分可能である(図53)。3a-1層上面や3a-2層上面から、掘立柱建物や柱穴、土坑、溝などの遺構が多数検出されることから、南半部は居

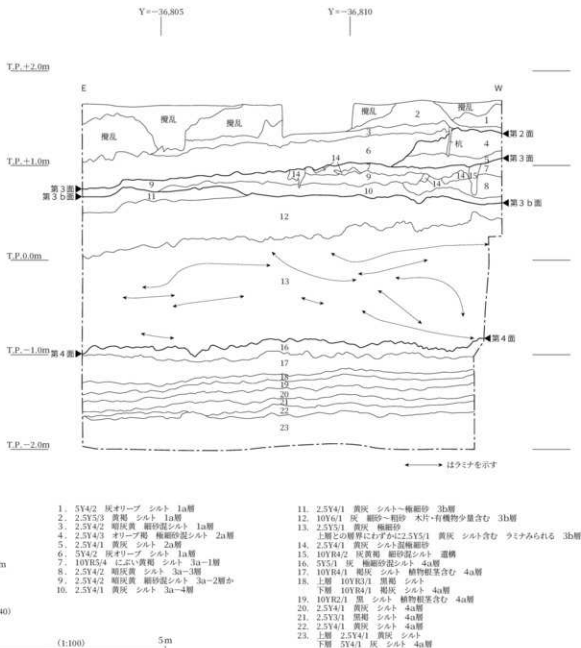


図53 3区 南壁断面図

住域として利用されていたと考えられる。

3 b層より下層は他の調査区同様に、4 a層である灰色シルトと黒褐色シルトが互層となって、約1 mにわたり堆積していた。遺物の出土は認められなかった。

第2項 3区第2面の遺構と遺物 (図54～57、写真図版40-1・4)

機械掘削で盛土や近世の耕作土(1 a層)を掘削し、検出した遺構面を第2面とした。

3区第2面は下層の3 b層の堆積状況を反映し南北で高低差がある。調査区北端からX=-147,710までの約20mの北半部は遺構面が高く、T.P.+1.7m前後で検出した。北半部では2 a層が薄い。

北半部では、3 b層が厚さ3.0mにもおよんで標高が一挙に高くなり、微高地を形成したと考えられる。微高地上に本来堆積していた1 a層や2 a層は、近世以降の整地で平坦化された際に、削平された

可能性が高い。X=-147,706~-147,712で、斜行する段がつけられている。

X=-147,712~-147,728にあたる中央部の2a層中には、古墳時代中期から後期の須恵器の破片が大量に埋積していた。元来この部分は、下層の240流路の影響を受けて大きくくぼんでいたと思われるが、古墳時代後期以降に地表面の高さを均一にする整地が行われたと考えられる。中央部から南半部の標高は、T.P.+0.9~+1.5m前後である。北半部と中央部から南半部にかけてとの標高差は0.2~0.8mにおよぶ。

第2面の遺構は畝溝や鋤溝、土坑である。

北半部では、3.0mの等間隔に幅1mの南北方向の溝が3条検出された。畝溝と考えられる。

X=-147,730付近では、幅1mの東西方向の177溝と、それ以南では177溝に平行する0.2m幅の鋤溝を数条検出した(176溝他)。X=-147,730付近を境として、南北から東西に耕作の方向が変わると考えられる。東端では218土坑を検出した。X=-147,740以南では西から東に段がつくように低くなっており、東側の低い部分で235土坑を検出した。

第2面は数十メートルの間隔に、近現代の造成に伴う大きな攪乱が存在するなど残存状況が悪いが、南北方向の畝溝や東西方向の鋤溝が確認されており、生産域と考えられる。2a層中には瓦器や瓦質土器、陶器などが含まれることから、時期は中世後半と想定する。

第2面の遺構

235土坑 (図55) X=-147,750付近で検出した平面が長方形の土坑で、東側は矢板によって切られる。残存長3.0m、幅1.0m、深さ0.4mをはかる。断面は長方形を呈し、明オリーブ灰色から灰色の極細砂から粗砂が埋積する。235土坑中からは土師皿が出土した(図56-264)。264は口縁部はつまみあげて外方に緩くたちあがる。中世前半期と考える。

176溝 (図55) 177溝の南で東西方向の鋤溝を多

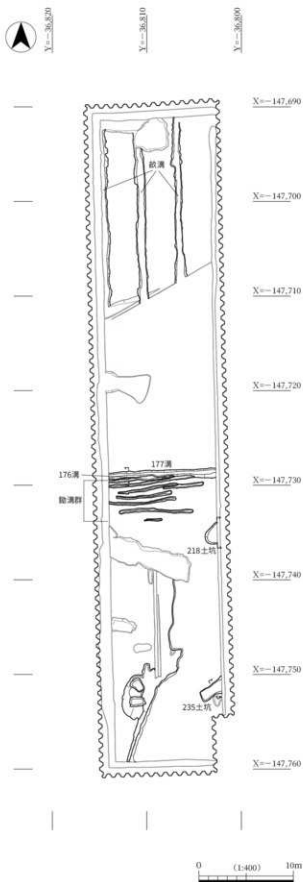


図54 3区 第2面平面図

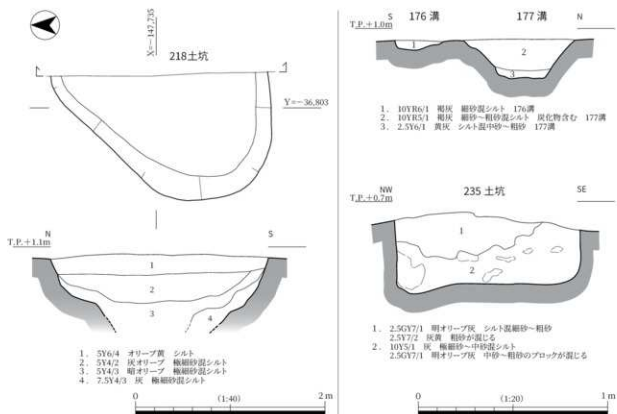


図55 3区 第2面遺構平・断面図

数検出した。176溝はこの溝群中で177溝に最も近い溝で、長さ7.0～8.0m、幅0.25m、深さ0.05mをはかるが、本来はもっと深い溝と推測される。遺物は出土していない。

177溝 (図55) X=-147,730付近で検出した東西溝である。両端は調査区外に延長するので、長さは調査区幅の11.0m以上であると推測される。幅は0.6m、深さ0.2mをはかり、断面は逆台形を呈する。177溝は区画溝の役割を果たしていたと思われる。既往の調査では、調査地が河川に挟まれた氾濫原にあたるため、条里地割の復元は困難とされた(大文セ1983)。しかし、今回の調査成果を基に条里地割の復元を試みた結果、177溝は坪境から約100m北に位置することがわかった(第5章第1節参照)。遺物は出土していない。

218土坑 (図55) 鋤溝群の東側で検出した。東半は側溝によって切られる。平面が長円形もしくは隅丸方形の土坑と推定するが、南北の残存長幅は2.0m、幅は2.3mをはかる。深さは約1.0mまで掘削したが、最底部までは湧水と掘削深度を超えるため掘削できなかった。埋土は灰オリーブ色のシルトが水平に埋積していた。矢板際で桶枠板が検出されていることなどから、桶枠板組の井戸となる可能性が高い。遺物は出土していないが、井筒構造から中・近世の遺構と考えられる。

第2面包含層(1a層～2-2a層)の遺物(図56・57、写真図版40-1・4)

土器

251～258は1a層の可能性が高いが側溝上層、259～263は2a層上層から出土した遺物である。おおむね中世後半以降の所産である。

251は瀬戸産陶器の天目茶碗である。252は青磁碗、253～255は白磁碗である。252～254は底部のみ残るが、254は見込みに鉄分が付着し畳付けは露胎である。255は口縁部外面に波状の陰刻文が入る。253は法量が大きく、碗より鉢とした方がよいかもしれない。

256～258は土師器である。256は焼塩壺の蓋で、型成形である。近世の所産と思われる。257と258は杯で、口縁部はわずかに内傾する。257は内外面とも摩滅しているが、外面にわずかにナデやユビオサエが残る。258は内外面とも摩滅している。

259は白磁碗で、口縁部が玉縁となる。260は陶器碗で、信楽焼と思われる。削り出し高台で、体部は淡緑色の釉薬で施軸されている。261は陶器備前焼すり鉢の底部で、内面には5、6条1単位のすり目が残る。262は陶器鉢口縁部である。口縁部外面に2段の凹線をもつ。内面にはすり目は認められないが、器形と灰赤色の胎土から備前焼のすり鉢になる可能性がある。

263は瓦質土器の風炉もしくは火鉢である。火鉢の特徴である口縁部の突帯にスタンプ文が施印されていないことや、口縁部から直角に曲がる体部片の傾きがほぼ垂直かやや下位が広がるので、風炉とした方がよいかもしいない。

265～279は2 a層中層から下層（2 a層の細分、2-2 a層なども含む）から出土した遺物である。

265は瓦器皿である。ナデとユビオサエで仕上げられている。267は瓦器碗の底部で、見込みにわずかに平行ミガキが残る。器高が浅く高台も形骸化していることから、和泉型Ⅲ-3型式と考えられる。

266は瓦質土器盤の口縁部である。盤とは浅鉢に脚がついた容器である。大和火鉢に先行して12世紀代に楠葉や大和で生産を開始するが、14世紀になると激減した。火鉢のように口縁部突帯にスタンプ文を施印せず、木製の箱型容器に入れて二重構造で使用したと考えられている。法量的には13世紀末の大和型に近い。

268は黒色土器B類碗で、底部を欠損する。口縁はつまみあげにより沈線が生じる。摩滅しているが内外面に細い横方向のヘラミガキが残る。

269は瓦質土器羽釜の口縁部から体部上半である。罫は反り気味に上を向き、口縁部は2段の段をもつ。体部外面は横方向のヘラケズリで、体部内面はハケが残る。

270は陶器常滑焼甕の口縁部である。口縁部は折り返すが、肥厚しない。

271は磁器碗で、下半は欠損する。素地にコバルトで施文する。外面は口縁部付近に一重の圏線、その下に横向きの草花文、内面は口縁に圏線と水玉状の文様を描く。素地が純白でなく褐色を帯びていること、釉薬の色が淡青色であることから中国産の青花の可能性もある。

272は土師器高杯の杯部である。摩滅が著しいが、外面は横方向のハケのち縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデのち斜め方向のヘラミガキが残る。内外面に黒斑がある。277は土師器高杯の杯部である。底部から下を欠損する。摩滅著しいが、外面はユビオサエと縦方向のハケが、内面は縦方向のハケの痕跡が残る。外面の一部に黒斑がある。

273は青磁碗体部で外面は陰刻でカキメ文様が、内面は陰刻で曲線と鋸歯状の文様が描かれる。龍泉窯産青磁である。274は陶器皿の底部である。削り出し高台で豊付は露胎、内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。黄褐色の釉薬で施軸されている。275は陶器鉢の底部である。ロクロによって外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。276は瀬戸・美濃産陶器の天目茶碗である。内外面とも黒褐色の釉薬を施す。

石製品

278は砥石である。平面形も不定形で側面も面取りされていないため、一見自然石のようにみえるが、表裏面にも側面すべてにも擦痕が残ることから、砥石として利用されていたと思われる。目が詰まった石材で、砂岩と思われる。第2面の攪乱から出土している。

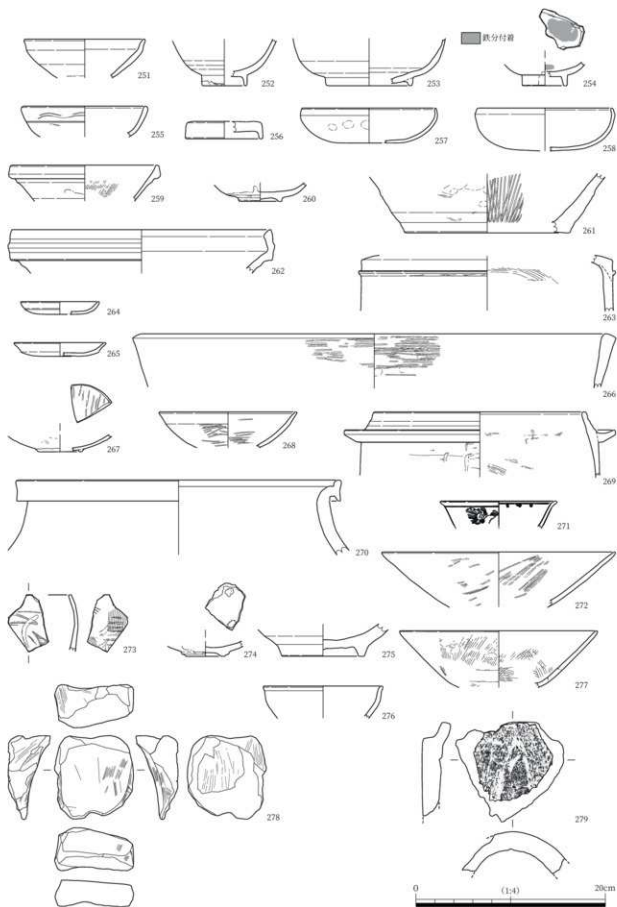


图 56 3区 235 土坑·1 a~2 a 层出土物实测图 (1)

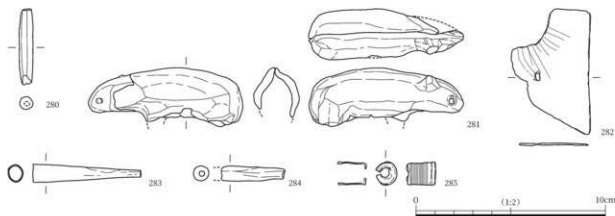


図57 3区 1a～2-2a層出土遺物実測図(2)

瓦

279は丸瓦の一部である。側縁を欠損するが、凹面に布目痕が残る。

土製品

280は両端細形の土錘である。長さ4.0cm、直径0.7cmの円柱の中心に約0.3cmの孔を穿つ。側溝からの出土であるが301と量目が似ており、古墳時代中期以降の製品と考えられる。

281は土人形である。2a層からの出土である。中空で、2枚の型抜きした粘土を貼り合わせて成形されている。角状の突起があることと尻尾の表現から牛と思われる。頭部の一部と下腹部は欠損する。黄橙色の精良な粘土で作られて素焼きされており、厚さは0.5cmと薄い。

金属製品

282は2a層から出土した金属の板状製品である。1辺は垂直で、その反対側の辺は凸状、もしくは花卉のように波打つ。全体に錆が著しく、0.3cm×0.2cmの孔が1つあるが、意図的な穿孔か腐食による孔か不明である。また、外縁から内側に向けて放射線状に、0.3cm幅の紐状の擦痕が5カ所みられる。飾り金具と推測するが、詳細は不明である。

283・284はいずれもキセルの吸口である。284は被熱して赤く変色する。283は薄い金属板を円形に丸めて成形し、継ぎ目を溶接している。2点とも銅製と思われる。

285は細かい凹線の入る筒状製品で、銅もしくは真鍮の板を丸めて円柱形にしているが、端は完全に閉じられていない。キセルの羅宇と雁首、羅宇と吸口をつなぐための金具か。

2a層中層から下層に含まれる遺物は、捜乱や遺構のたわみに埋積した近世の遺物も含まれるが、主体は中世後半になると思われる。

第3項 3区第3面の遺構と遺物(図58～74、写真図版11～15、39、40-2・3・5～8)

第3面の遺構

北半部では3a層の層厚が0.05～0.1mであり、近現代の捜乱や第2面の畝溝により、遺存状況はきわめて悪かった。

北半部では微高地縁に沿って巡る160溝、その北側に複数のビット、土坑を検出した。

中央部でも3a層の堆積はほとんどみられない。第2面と同様に溝状にくぼんだ地形となる。遺構は希薄でビットや土坑数基を検出した。

南半部西側は、古墳時代の土器破片を包含するしまったシルト層(3a層)が約0.5m堆積し、0.1～

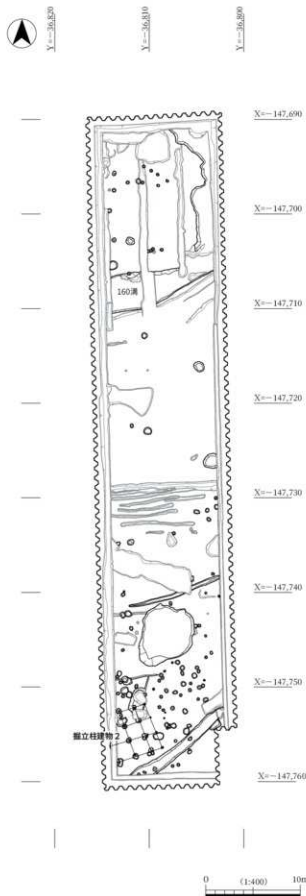


図58 3区 第3面平面図

0.2mの厚さの数層に細分できた(図51・52の3a-1層~3a-4層)。第3面から掘立柱建物1棟(掘立柱建物2)を検出した。その他、掘立柱建物2の周辺に遺構が集中しており、建物を構成すると思われる柱穴や、素掘井戸と考えられる大形土坑、多数のピットや溝が検出された。

第3面は第2面と同様に北半部が高く、中央部が低く、南半部で再び高くなるが、中央部と南北の高低差は若干縮まる。北半部でT.P.+1.6m、中央部でT.P.+0.7m、南半部でT.P.+1.1mが平均標高である。また、北西から南東にむかって低くなる。

遺構が集中する南半部が、集落域として主に機能していたと考えられる。ただし、遺物から推定する遺構の時期が古墳時代中期以降、古墳時代中期、古墳時代前期から初頭の布留式期、庄内式期と時期幅があり、検出遺構の時期が北半、中央、南半の区域ごとに明確には分けない。

また、3b層の砂が地震の液状化現象によって吹き上がる墳砂が第3面でみられることから、3a層堆積後に大規模な地震が発生したことがうかがえる(図51)。

掘立柱建物2(図60・61、写真図版12、表3)

3区の南西端、X=-147,752~147,758、Y=-36,808~36,814で検出した。

梁行2間以上、桁行3間の総柱建物で、東辺に底をもつ。身舎の東側柱筋は側溝や壁面に遮られて178・179柱穴の2基を確認したのみであるが、おそらく178・179柱穴の北にも柱穴が存在していたと考えられる。身舎の規模は梁行が3.8m以上、桁行が5.0mをはかる。身舎のそれぞれの柱間は、梁行が1.6~1.8m、桁行が1.4~1.8mである。掘立柱建物1と同様に、主軸は南北方向でN-22°-Wで、座標北より西にふる。底の柱筋は身舎と揃える。

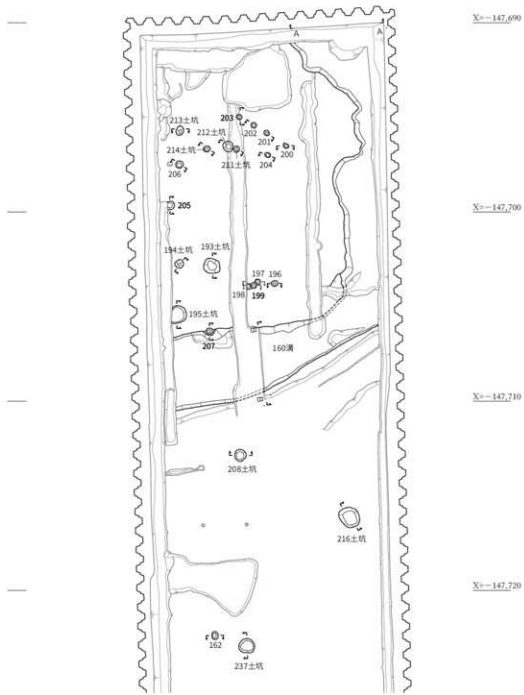
180柱穴から187柱穴の柱掘方は直径0.4~0.6mの円形で、深さは0.1~0.4mである。柱痕跡あるいは柱の抜き取り穴の規模は直径0.2m、深さ



Y=36,820

Y=36,810

Y=36,800



0 (1:200) 10m

图 59 3区 第3面平面图(北半)



Y=36,830

Y=36,810

Y=36,800

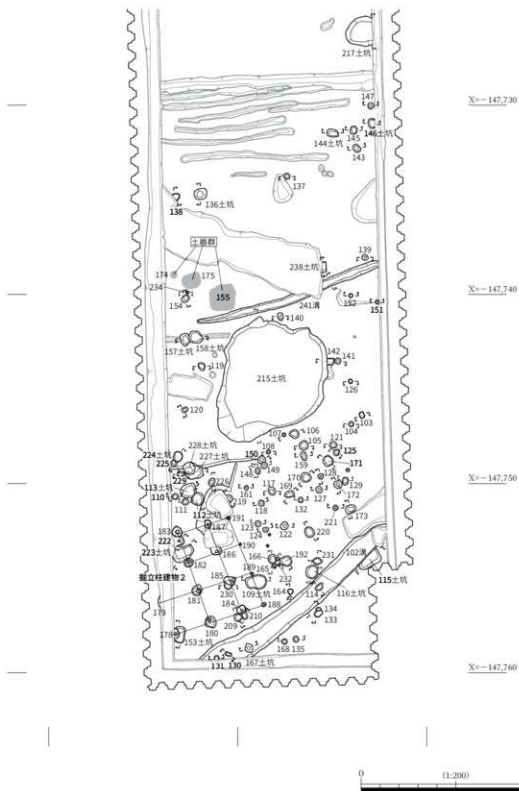


图 60 3区 第3面平面图(南半)

0.2～0.35mをはかる。柱穴の断面形は鉢形や皿形、方形を呈し、黄灰色や暗灰黄色シルトが埋積する。上方は2 a層に削平されており、実際の掘方は平面形、深さともっと大きかったと思われる。183柱穴や184柱穴、185柱穴には切り合う柱穴や土坑がみられることから、複数回の建て替えがあったと推測される。底になると考えられる188柱穴から191柱穴の規模は、直径0.1～0.2mの円形で、深さは0.1～0.2mである。

遺物は少なく、180柱穴から古墳時代の土師器甕口縁部（図71-288）、178柱穴からは土師器高杯脚部（図71-289）細片が出土したのみである。

建物柱穴の形状や建物の規模から古墳時代後期から奈良時代の建物と推測する。2区で検出した掘立柱建物1と主軸の方向や傾きが似ることから、時期が近い可能性がある。

160溝（図59・62、写真図版13） 調査区の北半部で検出した溝である。調査区東端から約16m南北にのびた後、 $X = -147,705$ 付近で屈曲して高まりに沿うように西にのびる。北端と西端は調査区外にさらにのびるので全体を検出していないが、コの字形もしくは逆L字形の溝と推測される。東西方向は直線的で幅が一定しているが、南北方向は西側肩が曲線的で蛇行する。

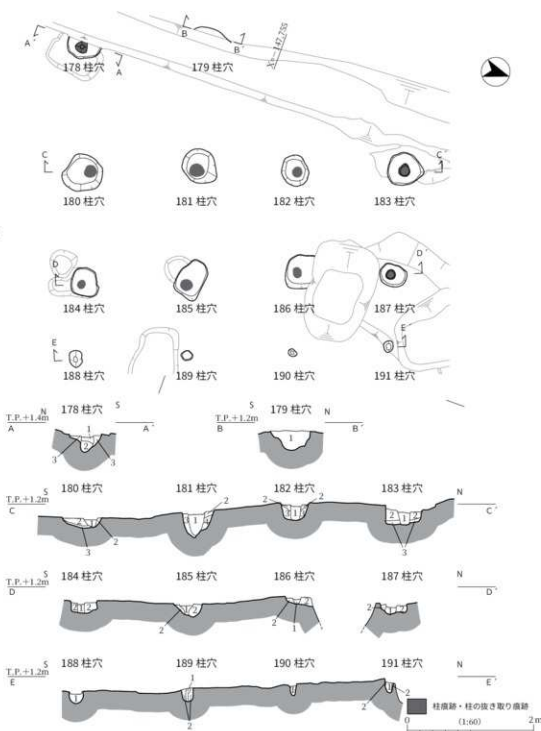
南北長20.0m、東西長12.0m、最大幅4.7m、最深度0.9mをはかる。調査区北端断面（図62のA-A断面）を観察すると、断面形は皿形で東肩は調査区外にのびるので、幅はより大きくなると推測される。埋土には灰褐色や褐色の礫混じりシルトが水平に埋積することから、一定の時間をかけて自然に埋積したと考えられる。

上層では攪乱からの混入と言える磁器や土人形も含まれるが、須恵器杯身や土師器など主に古墳時代中期の遺物が出土した。また、160溝内の埋土を洗浄したところ、土錐、滑石製模造品、土玉2点、サヌカイト製石鏃、ガラス玉3点、滑石製の白玉約390点が出土した（図72・73）。須恵器杯身（304）の型式年代や化学的分析から求められたガラス玉の年代（第4章第3節参照）から、160溝は古墳時代前期から中期に機能し、古墳時代中期に廃絶したと考える。また、白玉類は未成品や原材料は出土しないことから西岩田遺跡で生産されたのではなく、製品として搬入されたことも確実である。

160溝の性格について、当初は高まりを取り囲むように巡る区画溝として構築されたと考えたが、高まりは流路堆積で砂礫層が厚く堆積したことによって形成された自然地形と考えられる。160溝はその高まり周縁に沿っていたと考えるのが妥当であろう。遺物の出土状況も人為的な32・33溝とは異なる。しかし、同時期であることや160溝からのみガラス玉や白玉が出土した事象は、祭祀に関わる行為が160溝で行われた可能性もあり、32・33溝との関連も皆無ではない。

102溝（図60・63） 調査区の南端を南西から北東にのびる溝である。幅1.0m、深さ0.2mをはかり、炭化物を含んだ灰黄色シルトが埋積する。115土坑を切り、溝内には複数の土坑、ピットがみられる。古墳時代中期の須恵器杯蓋（287）や土師器鉢（286）が出土している。

103ピット・104柱穴（図60・63） 調査区の東端、 $X = -147,747$ 付近で検出した。103ピットは直径0.2m、深さ0.05mをはかる平面が円形のピットである。103ピットの北西1.8mに126柱穴、そのさらに北西1.5mに141・142ピットが存在する。103ピット、126柱穴、141・142ピットは列状に並び傾きが掘立柱建物2と似ることから、掘立柱建物を構成する柱列になる可能性もあるが、柱の抜き取り穴を確認できるのは126柱穴のみである。104柱穴は103ピットの西に位置し、直径0.2m、深さ0.25mをはかる。中心に直径0.1m、深さ0.25mの柱痕跡がある。柱穴としたが、南に約1間離れた位置にある121ピット、125ピットなどに柱の抜き取り穴を確認できなかったため、掘立柱建物を構成する柱穴であるかは不明



- 178柱穴
 1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混シルト 柱痕跡か
 2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～中砂
 2.5Y4/1 黄灰 シルトのブロックが混じる 炭化物含む
 3. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混細砂～粗砂 炭化物含む
- 179柱穴
 1. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混シルト
- 180柱穴
 1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混シルト 柱痕跡か
 2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～粗砂
 2.5Y5/1 黄灰 シルトのブロックが混じる
 3. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト混細砂
- 181柱穴
 1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混シルト 柱痕跡か
 2. 2.5Y6/2 灰黄 中砂～粗砂 炭化物含む
 3. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂混シルト 炭化物含む
 4. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混中砂～粗砂 炭化物含む

- 182柱穴
 1. 2.5Y6/1 黄灰 中砂～粗砂混シルト 柱痕跡か
 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混細砂～粗砂 炭化物含む
 3. 2.5Y6/1 黄灰 中砂～極粗砂
- 184柱穴
 1. 2.5Y5/1 黄灰 極細砂～細砂混シルト 柱痕跡か
 2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～粗砂
 3. 2.5Y6/1 黄灰 細砂～中砂混シルト
- 185柱穴
 1. 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂～中砂混シルト
 2.5Y4/1 黄灰 シルトのブロックが混じる 柱痕跡か
 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混細砂～中砂
 2.5Y4/1 黄灰 シルトのブロックが混じる
- 188柱穴
 1. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混極細砂～粗砂 柱の抜き取り
 2. 9H9/1 黄 残り跡か
 2.5Y6/1 黄灰 シルト混中砂～粗砂
 2.5Y4/1 黄灰 シルトのブロックが少量混じる

- 186柱穴
 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～粗砂 柱痕跡か
 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混中砂～粗砂
- 187柱穴
 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～中砂混シルト 柱痕跡か
 2. 10YR6/2 灰黄褐 細砂～中砂混シルト 炭化物含む
- 188柱穴
 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混シルト 炭化物含む
- 189柱穴
 1. 2.5Y6/1 黄灰 極細砂～細砂混シルト
 2. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混細砂～粗砂
- 190柱穴
 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂～粗砂
- 191柱穴
 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混中砂～粗砂
 2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混シルト

図61 3区 掘立柱建物2平・断面図

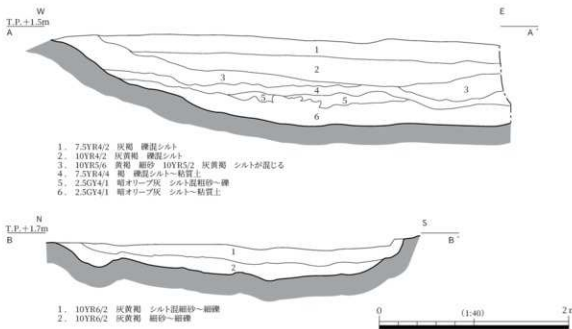


図 62 3区 160溝断面図

である。

105ピット・106ピット (図60・63) 調査区南半中央、215土坑の南側で検出した。105ピットは直径0.35m、深さ0.05m、106ピットは直径0.4m、深さ0.15mで、どちらも平面は不整形である。

107ピット・108ピット (図60・63) 107ピットは215土坑の南、108ピットは107ピットの南西1.2mに位置する。どちらも平面が小円形のピットで、直径0.2m、深さ0.05mをはかる。

109土坑 (図60・63) 掘立柱建物2の東柱列、189柱穴に接して検出した。東西に長軸をもつ平面が長円形の土坑で、長径1.05m、短径0.6m、深さ0.05mをはかる。埋土に炭化物を含む。

110ピット・111ピット (図60・63) 110ピットは調査区南半の西側溝際で検出した。直径0.3m、深さ0.05mをはかる。中心より西よりに直径0.15mの柱の抜き取り穴ともいえる部分があるが、柱穴かは不明である。111ピットは110ピットの南東で検出した平面が円形のピットで、直径0.35m、深さ0.15mをはかる。

112土坑 (図60・63、写真図版15-1) 111ピットの東側で検出した。平面が円形の大形土坑で直径0.7m、深さ0.1mをはかる。埋土に炭化物を含む。

113土坑 (図60・63) 112土坑と南東部を接する土坑である。平面が隅丸方形で、長辺0.85m、短辺0.6m、深さ0.25mをはかる。断面は鉢形を呈し、埋土に炭化物を含む。

114ピット (図60・63) 102溝中より検出した。直径0.3m、深さ0.05mをはかる。

115土坑 (図60・63) 調査区の東端にあり、102溝に北西部を切られる。平面が隅丸方形の土坑で、東西辺が1.25m、深さ0.15mをはかる。断面底部が凹凸が激しく埋土にブロックが混じることから、掘削後すぐに埋め戻しが行われたと考えられる。

116土坑 (図60・63) 114ピットの北、102溝と接するように検出した平面が長円形の土坑である。直径0.65m、深さ0.05mをはかる。

117ピット・118ピット (図60・63) 南半の中央で検出した。117ピットは直径0.4m、深さ0.1mをはかる。断面逆台形を呈する。118ピットは直径0.3m、深さ0.1mをはかる。断面皿形を呈する。

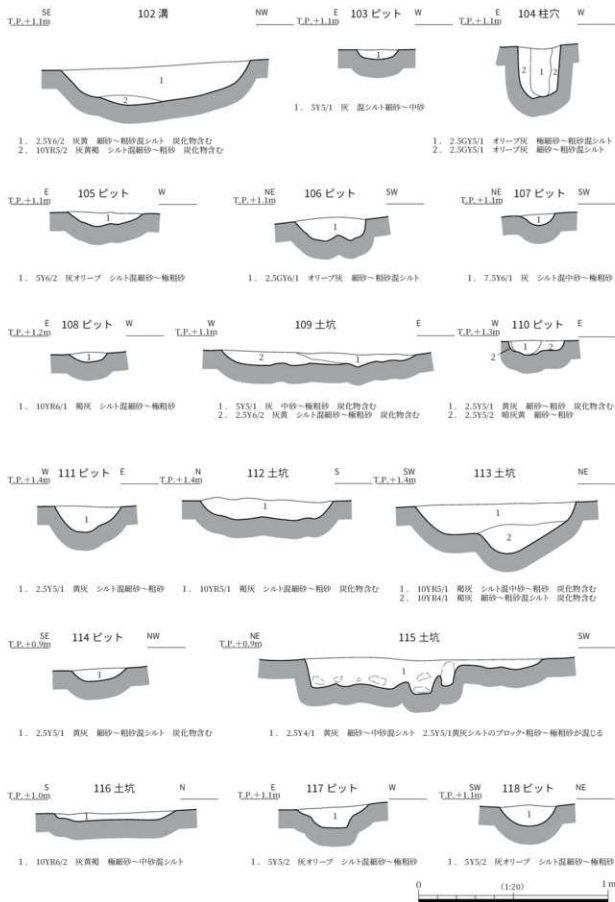


図 63 3区 第3面遺構断面図(1)

- 119 ビット・120 ビット** (図60・64) 119ビットは215土坑の西側で検出した。直径0.35m、深さ0.1mをはかる。断面逆台形を呈する。柱穴になる可能性もある。120ビットは119ビットの南側で検出した。直径0.25m、深さ0.2mをはかる。断面逆台形を呈する。
- 121 ビット** (図60・64) 104柱穴の南東で検出した。直径0.4m、深さ0.15mをはかる。深さもあり、104柱穴と関連して柱穴になる可能性もあるが、柱の抜き取り穴は確認できなかった。
- 122 ビット・123 ビット・124 ビット** (図60・64) 掘立柱建物2の北東で検出した。122ビットは直径0.4m、深さ0.1mをはかる。123ビットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。124ビットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。いずれも削平されていると思われる。
- 125 ビット** (図60・64) 121ビットの南東で検出した。直径0.3m、深さ0.05mをはかる。
- 126 柱穴** (図60・64、写真図版14-3) 103ビット、141ビットと列状に並ぶが、126柱穴のみ明確に柱の抜き取り穴が残る。直径0.2m、深さ0.05mの平面が円形で、中心に直径0.1m、深さ0.1mの柱の抜き取り穴がある。
- 127 ビット・128 ビット** (図60・64) 掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた区画で検出した。127ビットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。土師器壺(296)が出土しているが、摩滅が著しく詳細な時期は不明である。128ビットは直径0.25m、深さ0.05mをはかる。
- 129 ビット** (図60・64) 171ビットの南、172ビットに接して検出した。172ビットの建て替えビットとして、171・172・173の列状遺構に含まれる可能性がある。直径0.25m、深さ0.05mをはかる。
- 130 ビット・131 ビット** (図60・64) 102溝中より検出した。小形のビットで、130ビットは直径0.2m、深さ0.1mを、131ビットは直径0.25m、深さ0.05mをはかる。
- 132 ビット** (図60・64) 掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた区画で検出した。平面形が小円形のビットで、直径0.25m、深さ0.05mをはかる。
- 133 ビット・134 ビット** (図60・64) 102溝の南肩中央に近い位置で検出した。133ビットが134ビットを切る。133ビットは直径0.25m、深さ0.05mを、134ビットは推定直径0.3m、深さ0.05mをはかる。
- 135 ビット** (図60・64) 102溝の南肩中央より西で検出した。直径0.25m、深さ0.05mをはかる。
- 136 土坑** (図60・64) 調査区中央西寄り、X=-147,730付近にある第2面の鋤溝群と攪乱に挟まれた位置で検出した。直径0.5m、深さ0.05mをはかる。底面の凹凸が著しい。
- 137 ビット** (図60・64) 136土坑の北東で検出した。平面が円形のビットで直径0.25m、深さ0.1mをはかる。
- 138 ビット** (図60・64) 136土坑の西で検出した。攪乱に西半を切られる。直径0.35m、深さ0.05mをはかる。
- 139 ビット・140 ビット** (図60・64) 139ビットは241溝の北東、140ビットは241溝の南で検出した。139ビットは直径0.3m、深さ0.1mを、140ビットは直径0.3m、深さ0.35mをはかる。140ビットは断面形状から柱穴だった可能性もあるが、柱の抜き取り穴は確認できなかった。
- 141 ビット・142 ビット** (図60・65) 215土坑の東に位置し、142ビットは215土坑に切られる。141ビットは直径0.3m、深さ0.1mを、142ビットは平面が東西に長い長円形で、残存長0.4m、深さ0.05mをはかる。
- 143 ビット・144 土坑・145 ビット・146 土坑・147 ビット** (図60・65) X=-147,730付近、第2面の鋤溝群の東側で検出した。143ビットは直径0.35m、深さ0.1mをはかる。144土坑は平面が東西に長

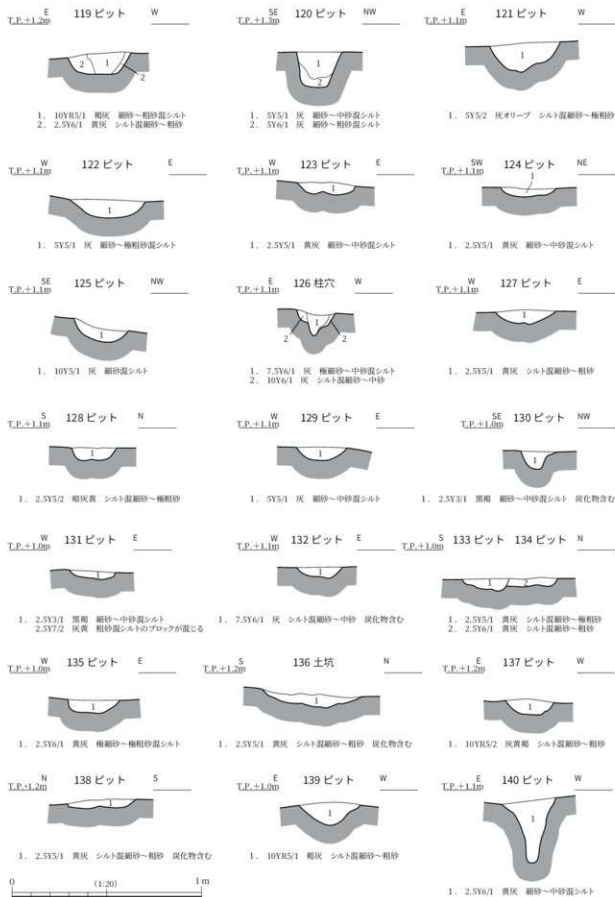


図 64 3 区 第 3 面遺構断面図 (2)

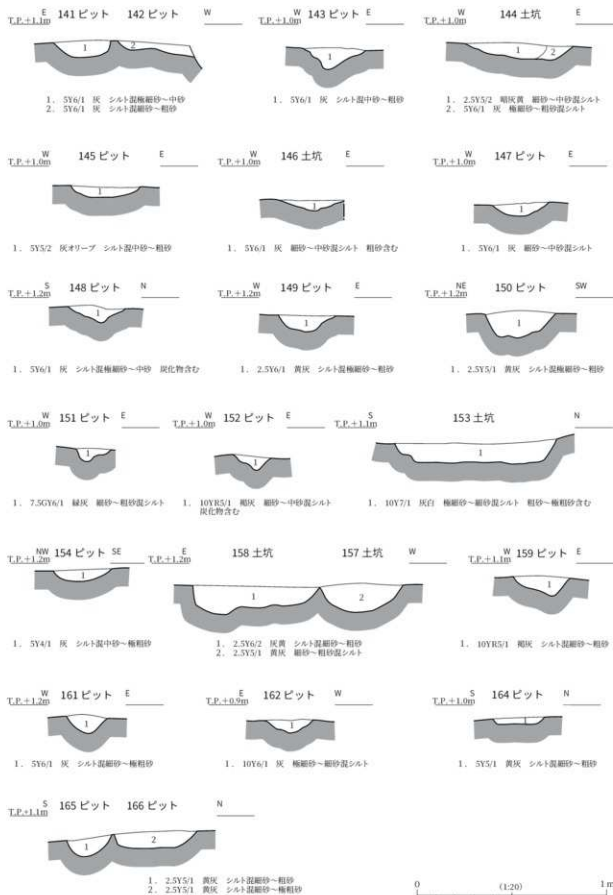


図 65 3区 第3面遺構断面図(3)

い長円形の土坑で、長径0.55m、深さ0.05mをはかる。145ピットは直径0.35m、深さ0.05mをはかる。146土坑は東側溝に切られ、残存長0.35m、深さ0.05mをはかる。147ピットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。

148ピット・149ピット・150ピット（図60・65）215土坑の南で検出した。いずれも平面が円形のピットで、148ピットは直径0.3m、深さ0.1mを、149ピットは直径0.3m、深さ0.1mをはかる。150ピットは直径0.35m、深さ0.15mをはかり、断面逆台形を呈する。

151ピット・152ピット（図60・65）241溝の南、調査区東端に位置する。どちらも平面が小円形のピットで、151ピットは直径0.2m、深さ0.05mを、152ピットは直径0.2m、深さ0.1mをはかる。

153土坑（図60・65）調査区の南西隅で検出した。掘立柱建物2の南東角の178柱穴によって切られており、西半は側溝によって失われている。平面が隅丸方形の土坑と推定され、南北長0.85m、深さ0.1mをはかる。断面は逆台形を呈する。

154ピット（図60・65）X=-147,740付近、西端に位置する。直径0.3m、深さ0.05mをはかる。

157土坑・158土坑（図60・65）241溝の西南に位置する平面が円形の土坑である。157土坑は直径0.45m、深さ0.15mを、158土坑は直径0.7m、深さ0.15mをはかる。

159ピット・161ピット（図60・65）掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた区画で検出した。159ピットは直径0.3m、深さ0.1mをはかる。161ピットは直径0.2m、深さ0.1mをはかる。

162ピット（図59・65）X=-147,723付近で検出した。直径0.25m、深さ0.05mをはかる。

164ピット・165ピット・166ピット（図60・65）掘立柱建物2の東側で検出した。164ピットは直径0.25m、深さ0.05mをはかる。165ピットは直径0.2m、深さ0.1mをはかる。166ピットは直径0.45m、深さ0.1mをはかる。

167土坑（図60・66）102溝中より検出した。直径0.55m、深さ0.1mをはかる。断面逆台形を呈する。

168ピット（図60・66）102溝の南東で検出した。直径0.3m、深さ0.1mをはかる。

169柱穴・170ピット・171ピット・172柱穴・173ピット（図60・66、写真図版15-2）いずれも掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた区画で検出した、やや大形の平面が円形の遺構である。遺物は出土しなかった。169柱穴は直径0.5m、深さ0.15mの中心に直径0.1m、深さ0.3mの柱の抜き取り穴をもつ。170ピットは169柱穴の東に位置する。直径0.5m、深さ0.15mだが、柱の抜き取り穴を確認できなかった。171ピットは170ピットの東に位置する。直径0.45m、深さ0.15mだが、柱の抜き取り穴を確認できなかった。172柱穴は171ピットの南東で検出した。直径0.4m、深さ0.1mの中心に直径0.1m、深さ0.2mの柱掘方をもつ。173ピットは172柱穴の南東に位置する。直径0.35m、深さ0.05mだが、柱の抜き取り穴を確認できなかった。

169柱穴の東にある170ピット、171ピットも平面形状・規模が169柱穴に似ており、各々が1.5mの等間隔に並ぶことから東西方向の柱列になる可能性が高い。さらに172柱穴も171ピット、173ピットと等間隔に並ぶので、これを南北方向の柱列として、169柱穴、170ピット、171ピットの柱列と交差する掘立柱建物を想定できる。169柱穴から南に220ピット・231ピットをその西側の柱列とするには、各ピットが等間隔ではない。

南北列については掘立柱建物2と軸方向も似ており、掘立柱建物2の東にもう1棟掘立柱建物があった可能性が高いが、明確に検出できたのが169柱穴と172柱穴のみであるので、復元し得なかった。

192ピット（図60・66）掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた区画で検出した。直径0.45m、深

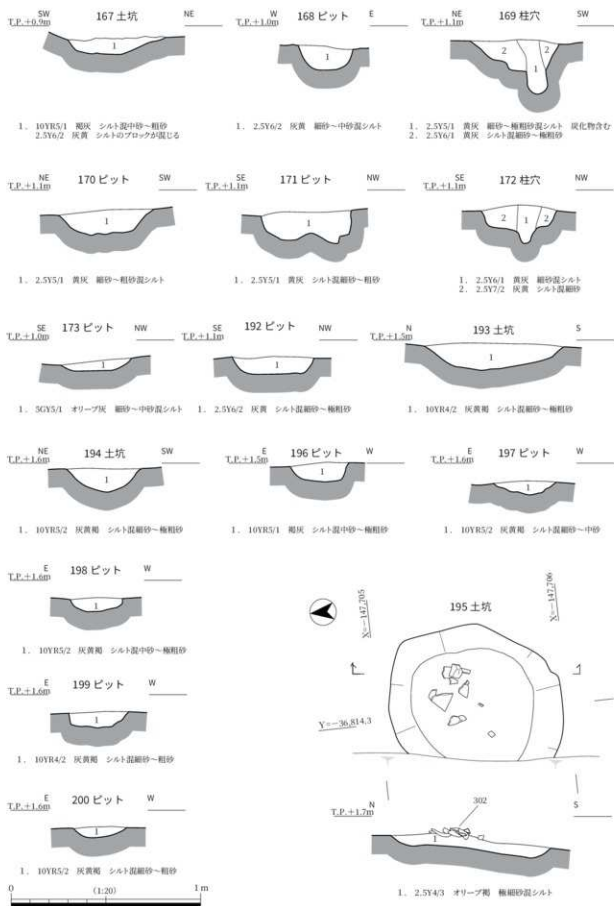


図 66 3区 第3面遺構断面図(4)

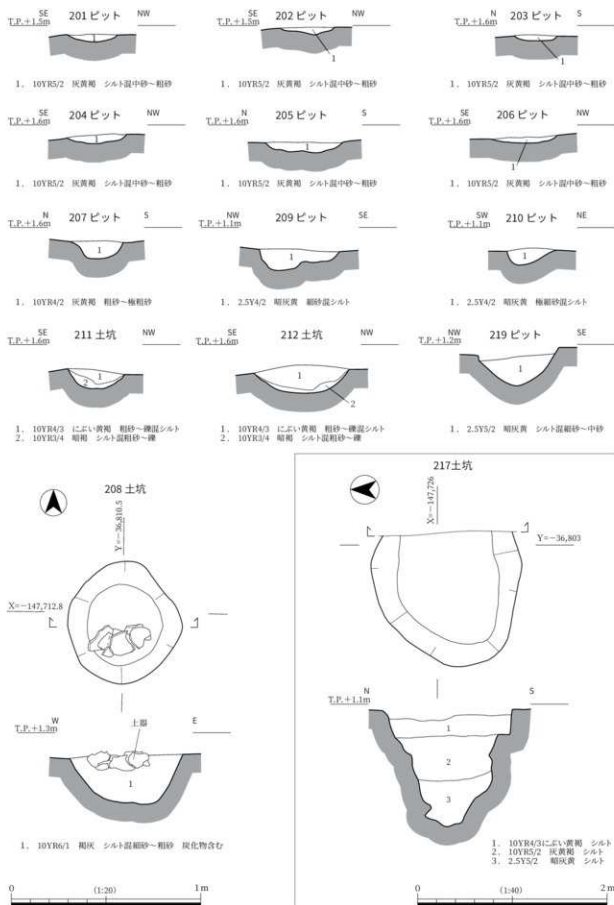


図 67 3区 第3面遺構断面図(5)

さ0.1mをはかる。192ピット、165ピット、166ピット、232ピットがかたまつて、切り合いをもちながら位置することから、何度か建て替えを行った柱穴の可能性もあるが、柱の抜き取り穴は確認できなかった。

193 土坑・194 土坑 (図59・66) 調査区北半の高まり、160溝内南側に存在する平面が円形の土坑である。直径0.75m、深さ0.15mをはかる。194土坑は193土坑の東に位置する。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。

195 土坑 (図59・66、写真図版14-1) 194土坑の南に位置する。大形で平面が円形の土坑だが西側は側溝によって切られる。直径0.9m、深さ0.05mをはかる。土師器鉢(302)が出土した。

196 ピット・197 ピット・198 ピット・199 ピット (図59・66) 調査区北半の193土坑の西南に位置する。196ピットは直径0.3m、深さ0.1mをはかる。197ピットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。198ピットは直径0.25m、深さ0.05mをはかる。199ピットは直径0.3m、深さ0.1mをはかる。

200 ピット (図59・66)・**201 ピット・202 ピット・203 ピット・204 ピット** (図59・67) 調査区北半の高まり、160溝内北側に存在するピットである。204ピット以外は、北西-南東の列状に並ぶようにもみえるが、その間隔も一定でない。200ピットは直径0.3m、深さ0.05mを、201ピットは直径0.25m、深さ0.05mを、202ピットは直径0.3m、深さ0.05mを、203ピットは直径0.2m、深さ0.05mを、204ピットは直径0.3m、深さ0.05mをはかる。

205 ピット (図59・67) 調査区北半の高まり、160溝内中央西端に存在するピットである。西側は側溝によって切られる。直径0.4m、深さ0.05mをはかる。

206 ピット (図59・67) 205ピットの北に位置する。直径0.35m、深さ0.05mをはかる。

207 ピット (図59・67) 160溝の肩で検出した平面が円形のピットで、直径0.25m、深さ0.1mをはかる。

208 土坑 (図59・67、写真図版14-2) $X=-147,713$ 、 $Y=-36,810$ 、調査区北半の高まりが斜めに切られた場所で検出した。直径0.6m、深さ0.25mをはかる土坑である。平面は不整形で、断面は逆台形を呈する。上層から古墳時代前期から中期の土師器壺もしくは甕の体部下半片が出土したが、実測できなかった。体部上半や口縁部が欠損しているのは、208土坑の上方が削平されたためと考えられる。

209 ピット・210 ピット (図60・67) 掘立柱建物2の184柱穴と重複するように検出した。210ピットは184柱穴に切られており、209・210ピットは184柱穴の建て替え柱穴の可能性が高いが、柱掘方は確認できなかった。209ピットは直径0.4m、深さ0.1mを、210ピットは直径0.25m、深さ0.1mをはかる。

217 土坑 (図60・67) 調査区東端、 $X=-147,726$ 、 $Y=-36,803$ で検出した。平面が長円形の土坑と思われるが、東側は側溝や東壁により全形を検出できなかった。残存する長径が1.4m、短径1.4m、深さ1.2mをはかる。断面が円錐形を呈し、黄褐色や灰黄褐色シルトが水平に堆積する。壁面の凹凸が著しく深さがあることから、素掘りの井戸となる可能性が高い。

須恵器壺(293)や土師器甕(294・295)が出土した。土師器甕は吉備系か近江系の搬入土器で、庄内式新段階に相当する。

211 土坑・212 土坑 (図59・67) 調査区北半の高まり、160溝内北側に存在する土坑である。211土坑は直径0.3m、深さ0.1mを、212土坑は直径0.5m、深さ0.15mをはかる。

219 ピット (図60・67) 掘立柱建物2の北東で検出した。攪乱によって西半を切られる。直径0.45m、深さ0.15mをはかる。



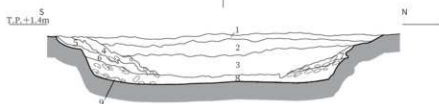
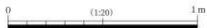
1. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂～礫混シルト



1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂(白色の砂礫一定量含む 2a層)



1. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂～礫混シルト



1. 2.5Y7/3 浅黄 シルト混細砂～粗砂
2. 5Y6/1 灰 シルト混細砂～中砂
3. 7.5Y6/1 灰 細砂～粗砂混シルト
4. 5Y6/1 灰 細砂～中砂混シルト 2.5Y5/1 黄灰 シルトのブロック・粗砂のブロックが混じる
5. 5Y7/1 灰白 シルト混細砂～中砂
6. 7.5Y6/1 灰 細砂～中砂混シルト
7. 5Y6/1 灰 細砂～中砂混シルト 5Y5/1 灰 シルトのブロック・粗砂のブロックが混じる
8. 2.5Y6/1 灰 細砂～粗砂混シルト 5Y5/1 灰 シルトのブロックが混じる
9. 5Y7/1 灰白 細砂～中砂混シルト



図 68 3区 第3面遺構断面図(6)

213 土坑・214 土坑 (図59・68) 調査区北半の高まり上、160溝の北側に存在する土坑である。213土坑は直径0.45m、深さ0.15mを、214土坑は直径0.35m、深さ0.05mをはかる。

215 土坑 (図60・68) 調査区中央部、X=-147,741~-147,748、Y=-36,805~-36,811で検出した。大形の不整形の土坑で直径6.0m、深さ1.0mをはかる。断面は逆台形を呈する。灰色シルトが複数層埋積するが、下層にブロック土が裏込めのように埋積することなどから、人為的な埋め戻しが行われた素掘りの井戸だった可能性もある。215土坑からは土師器の甕や壺(290~292)が出土している。古墳時代初頭の遺構と思われる。

216 土坑 (図59・68) 調査区中央部、X=-147,716、Y=-36,805で検出した。隅丸方形の大形の土坑で、長辺1.15m、短辺0.9m、深さ0.15mをはかる。

220 ビット・231 ビット (図60・69) 掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた範囲で検出した。220ビットは169柱穴の南に、231ビットは220ビットの南に位置する。169柱穴から南東にのびる柱穴列となる可能性をもつが、大きさや各遺構間の距離が等間隔でないため、断定できなかった。220ビットは直径0.55m、深さ0.15mをはかる。231ビットは直径0.35m、深さ0.05mをはかる。

221 ビット (図60・69) 掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた範囲で検出した。220ビットの北東にある。直径0.3m、深さ0.1mをはかる。

222 柱穴 (図60・69) 掘立柱建物2の北西角、183柱穴の南に隣接して検出した。直径0.55m、深さ0.1mをはかる掘方の中心に、直径0.15m、深さ0.2mの柱の抜き取り穴をもつ柱穴である。

223 土坑 (図60・69) 183柱穴、229柱穴の南、182柱穴の間に位置する隅丸方形の土坑である。長辺1.15m、深さ0.1mをはかる。

224 土坑・225 ビット (図60・69) 調査区の西端、X=-147,748付近で検出した。224土坑が225ビットを切る。224土坑は直径0.5m、深さ0.15mを、225ビットは直径0.3m、深さ0.15mをはかる。

226 ビット (図60・69) X=-147,750付近で検出した。直径0.4m、深さ0.05mをはかる。

227 土坑・228 土坑 (図60・69) 調査区の西端、X=-147,749付近で検出した。228土坑が227土坑を切る。228土坑は直径0.6m、深さ0.35mをはかる。227土坑は長方形の土坑と思われ、長辺1.1m、短辺0.6m、深さ0.1mをはかる。

229 ビット (図60・69) 調査区の西端、227土坑・228土坑に接して検出した。直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面は逆台形を呈する。

230 ビット (図60・69) 掘立柱建物2の185柱穴に切られる形で検出した。従って、185柱穴建て替え前の柱穴であった可能性もある。直径0.4m、深さ0.15mをはかる。

232 ビット (図60・69) 掘立柱建物2、215土坑、102溝に挟まれた範囲で検出した。165ビット・166ビット・192ビットに隣接する小穴である。直径0.1m、深さ0.1mをはかる。

234 ビット (図60・69) 調査区中央部西側、X=-147,740、Y=-36,812で検出した。234ビットは小穴で、長径0.15m、深さ0.05mをはかる。

237 土坑 (図59・69) 調査区中央部、X=-147,723、Y=-36,811に位置する土坑である。直径0.7m、深さ0.1mをはかる。

238 土坑 (図60・69) 調査区中央部、X=-147,738、Y=-36,805に位置する方形土坑である。西側は攪乱によって切られる。一辺0.5m、深さ0.1mをはかる。

241 溝 (図60・69) 調査区南半、215土坑の北に位置する溝である。東側は調査区外にのび、西側は調

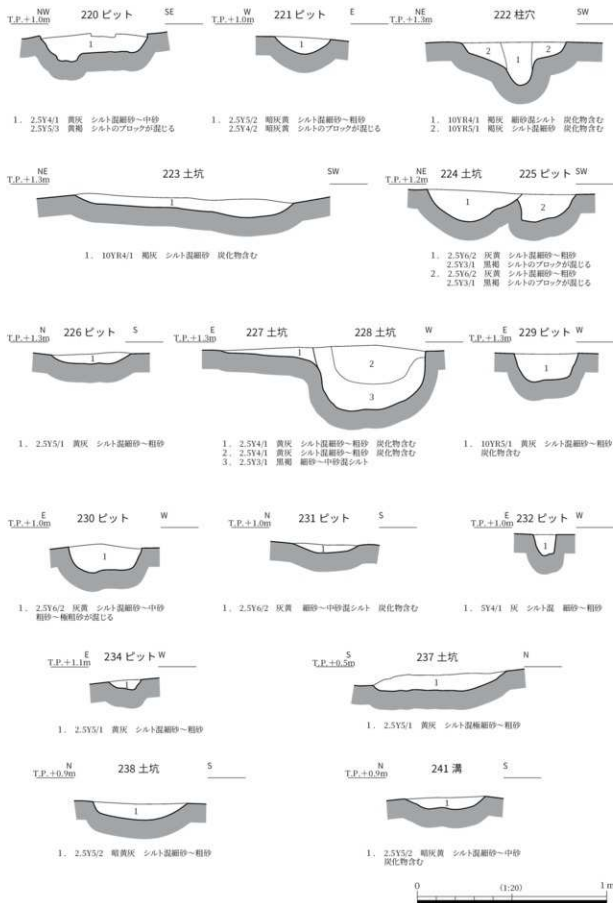


図 69 3区 第3面遺構断面図(7)

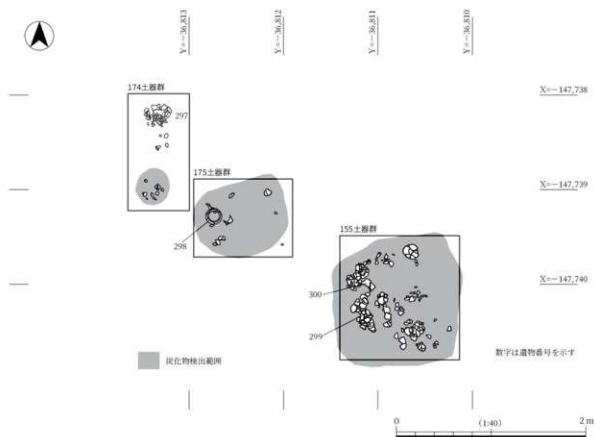


図70 3区 155・174・175 土器群遺物出土状況図

査区内で細くなって途切れる。長さ10.0m、幅0.4m、深さ0.05mである。

155 土器群 (図60・70、写真図版15-3)・**174 土器群** (図60・70)・**175 土器群** (図60・70)

調査区の南半、 $X=-147,738\sim-147,741$ 、 $Y=-36,810\sim-36,814$ 間で3カ所にわたって土器がまとまって検出された。東から155土器群、175土器群、174土器群という遺構名称を与えたが、広域には1つのまとまりが、精査を経て3つに分断されたと言える。検出高は第3面最上層に位置し、出土遺物も第3面出土遺物中では最新に属する布留式段階のものである。

155土器群は東西1.3m、南北1.4mの範囲にわたって土器が散在していた範囲を指す。土器は土師器や土鍾(299～301)で、破片数は一定量あったが、摩滅が著しい。174土器群は175土器群の西に東西0.3m、南北0.4mの範囲にわたって土器が散在していた範囲を指す。土師器甕(297)が出土した。175土器群は155土器群の西に東西1.0m、南北0.8mの範囲にわたって土器が散在していた範囲を指す。土師器甕(298)が出土した。

第3面遺構の遺物 (図71、写真図版39-3～6)

土器

286・287は102溝から出土した。286は土師器小形丸底鉢である。口縁部は短く、摩滅しているが口縁部はヨコナデ、体部はナデである。287は須恵器杯蓋で天井部を欠損する。

288は掘立柱建物2の180柱穴から出土した土師器甕である。289は掘立柱建物2の178柱穴から出土した土師器高杯の脚部で、円形透孔は1カ所しか確認できない。掘立柱建物2出土遺物はこの2点のみだが、建物の形状等から推測される時期より古い古墳時代中期に相当する。

290～292は215土坑から出土した遺物である。290は土師器甕で、口縁から頸部は鋭く外反し口縁は端

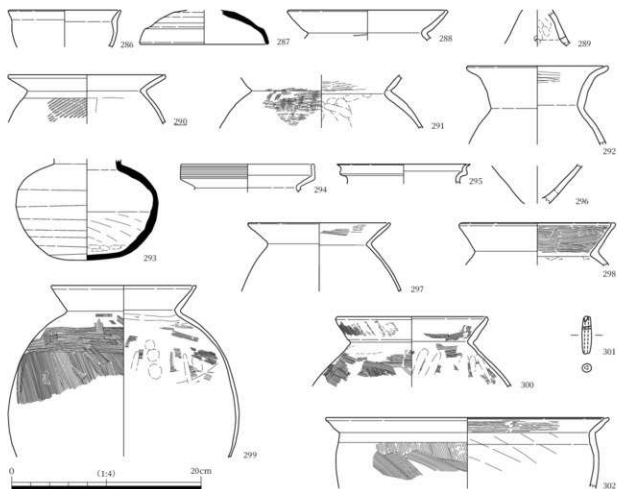


図71 3区 第3面遺構出土遺物実測図

面をもつ。体部外面は右上がりの細いタタキを、内面にはヘラケズリを施す。全面に煤が付着し、生駒山西麓産の胎土である。291は土師器甕であるが頭部のみが残る。体部外面は平行タタキ後縦方向のハケ、口縁部内面にハケ、体部内面はユビオサエとナデである。内外面ともに煤が付着する。292は土師器短頸壺である。口縁部端面は丸くおさめ、頸部から外反する口縁部は先端でさらに外に開く。外面はヘラミガキ、内面はハケの痕跡がわずかに残る。

293～295は217土坑から出土した。293は須恵器壺である。外面は上半を回転ナデ、下半を回転ヘラケズリ、底部はナデでやや扁平な形に仕上げる。内面は上半が回転ナデ、下半にはユビオサエと斜め方向のナデがみられる。294は土師器甕の口縁部で、外面に多条の凹線が退化した櫛描沈線を巡らす、庄内併行期の吉備系甕である。295は土師器甕の口縁部である。口縁部の特徴と胎土に花崗岩を含むことから、近江湖南地域からの搬入土器、庄内式新段階併行と言える。

296は127ピットから出土した。土師器壺の口縁部である。

297は174土器群から出土した土師器甕で、摩滅のため口縁部のヨコハケのみ認められる。298は175土器群から出土した土師器甕である。口縁部は広がり端部は平らな面をもつ。口縁部内面には横方向のハケメ、体部内面には横方向のヘラケズリが認められる。297・298は布留式甕と考える。

299～301は155土器群から出土した。299は土師器甕で、口縁部は広がり端部は平らな面をもち、体部は大きく球形に膨らむなど布留式甕の特徴をもつ。体部外面は縦方向のハケ後、肩部には横方向のハケを施す。内面頸部付近はヘラケズリ、体部はナデ後、横方向のハケを施す。300も299と同じく布留式甕

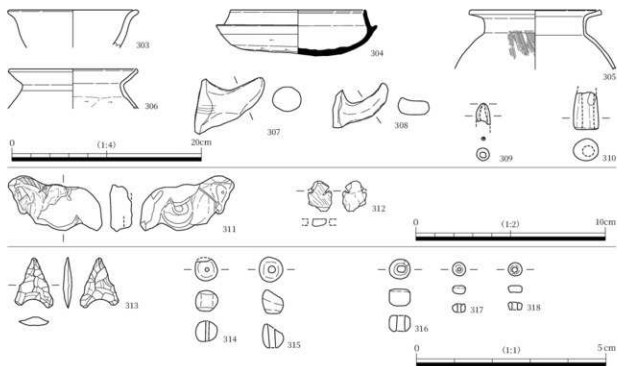


図72 3区 160溝出土遺物実測図(1)

だが、肩部が丸味を持たない。口縁部内外面にもハケが残る。155土器群の遺物は布留式期の時期に入り、174土器群、175土器群はそれより若干新しい様相だが、大きな時期差はない。

302は195土坑より出土した土師器の鉢である。口縁端部は平らで、体部外面は縦方向のハケ、体部内面はナデ、口縁部外面はナデ、口縁部内面は横方向のハケである。

土製品

301は155土器群から出土した両端細形の土錐である。下方はわずかに欠損し、外面には焼成時の黒斑と、中心よりやや上方に紐状のものによる擦痕が認められる。紐や糸を中心の孔に通す以外に、外面に結んで使用したのであろうか。今回の調査で出土した土錐で最小であり、形状は280に似ている。

160溝の遺物(図72・73、写真図版39-1・2・7)

土器

303は青磁碗だが、小杯の可能性もある。口縁部は端反りで、内外面施軸されるが無文である。龍泉窯系青磁である。304は須恵器杯身であり、古墳時代中期である。305は土師器広口壺の口縁部から肩部である。直立する頸部から大きく口縁部が開く。摩滅のため調整不明瞭だが、体部外面はハケである。306は土師器甕の口縁部から肩部である。器壁の薄さや口縁端部を内側に巻き込む形状から、布留式と思われる。307は土師器甕の把手、308は土師器鍋の把手である。307は断面円形、308は断面が扁平な形で、厚さにも違いがあるがどちらも古墳時代前期から中期のものと思われる。

160溝の遺物は中近世の攪乱に切られていたため、303や311は混入と思われる。それ以外は古墳時代中期と古墳時代前期におさまる。

土製品

309は両端細形の土錐である。砲弾形を呈し、下方を欠損する。内面には成形時の絞り痕が残る。中空部分の孔は直径0.5cmだが上面の孔は直径0.1cmと小さいため、この孔に紐が通ったかは不明である。外面横方向に紐などを結びつけていたとも考えられる。表面に黒いものが付着する。

310は管状土錐で、円柱形よりはやや下膨れの形をとる。上方は欠損するが、底面は平らである。孔は直径1.4cmあり、孔の位置は中心よりずれる。3区で計10点の土錐が出土しているが、1点は側溝中なので正確な層位は不明だが、1点が第3面155土器群、2点が第3面160溝、1点が第3b面242溝、5点が3b層・3a層からと、古墳時代中期以前に集中する。

311は土人形である。鬘や鞍の表現から馬と思われる。型抜き成形だが282と異なり中実で、2枚の型を合わせたのでなく、粘土の塊の上下に型を押し付けて作り、素焼きしてある。脚がないのは欠損か。160溝は古墳時代の遺構だが、近世以降に大きく攪乱されており、混入品と考えられる。

314・315は160溝の埋土を洗浄した際に、白玉と共に出土した土玉である。2点とも直径0.55～0.65cmで中心に0.1～0.2cmの孔を穿つ。

石製品

312は滑石製の模造品である。いびつな円形の板に直径0.2cmの小孔を2つ穿つ。双孔円板の未成品もしくは加工途中の破損品ではないかと推測される。表面に研磨痕が残る。313はサヌカイト製の凹基無茎式石鐮である。長さ1.3cm、幅1.05cmと極小サイズである。160溝の埋土を洗浄、ろ過した際に出土した。313以外にもサヌカイトのチップも多数確認できたが、完成品は313のみであった。

ガラス玉

160溝より土玉2点、白玉389点と共にガラス玉が3点出土した。ガラス玉については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の田村朋美主任研究員に、蛍光X線照射による化学組成分析を依頼した。分析結果の詳細は第4章第3節に掲載した。

316は淡青色のガラス玉である。直径4.96～5.56mm、厚さ4.16～4.43mmとやや大形である。引き伸ばし製法によって製作されており、中心に直径1.9mm程度の孔がある。同位体分析の結果、主成分はソーダガラスで、着色剤に銅および微量の錫か鉛が含まれることが判明した。南アジアから東南アジアを原産地とする製品である。時期は古墳時代前期後半と考えられる。

317は紺色透明のガラス玉である。直径3.25～3.31mm、厚さ1.97～2.19mmである。引き伸ばし製法によって製作されており、中心に直径1.14mmの孔がある。同位体分析の結果、主成分はソーダガラスで、着色剤に植物灰由来のコバルトが含まれることが判明した。中央アジアからアジアを原産地とする製品である。時期は古墳時代中期後半と考えられる。

318は淡青色のガラス玉である。直径3.14～3.33mm、厚さ1.77～1.83cmである。引き伸ばし製法によって製作されており、中心に直径1.35mmの孔がある。同位体分析の結果、主成分はソーダガラスで、着色剤に銅および微量の錫か鉛が含まれることが判明した。南アジアから東南アジアを原産地とする製品である。時期は古墳時代前期後半と考えられる。

316～318の3点とも日本で玉に加工されたのではなく、製品として搬入された。また、160溝からは古墳時代中期の須恵器杯身が出土しており、第3b面を構成する3b層が古墳時代前期以前であることから、時期的にも合致する。

白玉

160溝を掘削した際に土器に付着して白玉が検出されたため、溝の埋土を可能な限り採取して洗浄し、ふるいなどにかけて白玉を採取した。その結果、389点の白玉と2点の土玉、3点のガラス玉、その他サヌカイトのチップなどの微細遺物が出土した。

白玉はいずれも滑石製と思われる。白玉の出土状況は160溝掘削中に確認できたものは少ないが、10

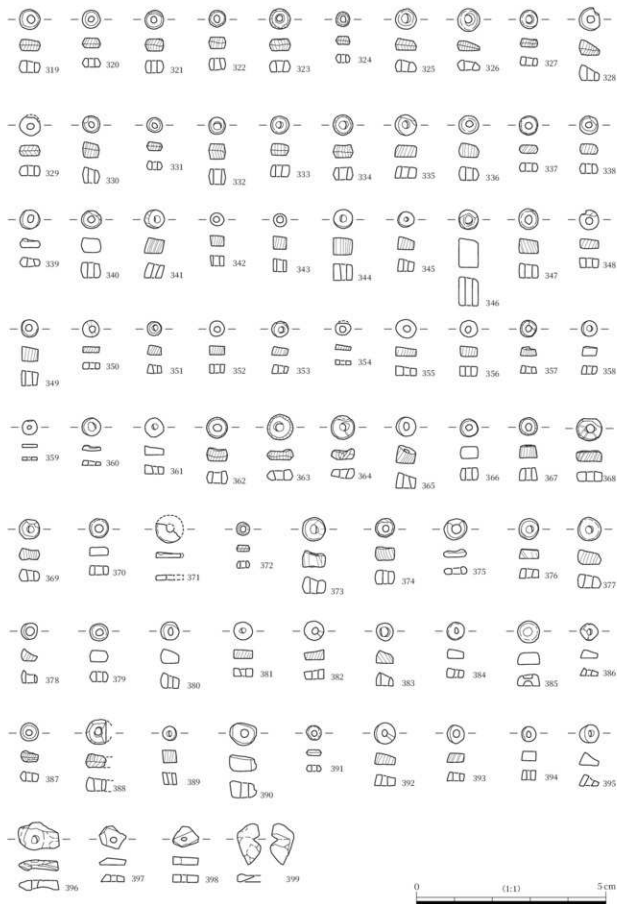


图 73 3区 160 号出土文物实测图(2)

m区画で土壌を採取して、白玉の出土した区画をみても、1カ所にかたまっているのではなく、広範囲に散在している。

白玉については、1個体ずつ番号をつけて個体観察と計測を行った。また、色、側面の形状、側面の研磨方向、端面の形状、残存状況を観察項目として分類を行った。分類基準の詳細や、分類ごとの傾向や特徴については第5章第2節第4項に掲載した。なお、計測中破損したものと、白玉でないかと判断したものは計測には含めていないので、計測個体数は388点である。各個体の法量や分類を示した遺物観察表を作成し掲載した。各分類を代表する個体を抽出して81点実測し（図73）、36点の写真を掲載した（写真図版39-7）。以下、特徴的なものについて記述する。

319～361までが色分類の1群（緑、薄いものも濃いものもあり）である。1群が最も多く43点ある。その中で側面形状が胴の中央が膨らみ稜線をもつ算盤玉状のもの（A類）、太鼓状のもの（B類）、直線的なもの（C・D・E類）がある。346は唯一、側面が直径以上の厚さをもつ長方形で管玉のような形状をとる。また、側面の研磨方向は斜めが最も多く、縦も認められるが、横は皆無である。法量にはかなりばらつきがある。端面は水平なものも斜めになっているものがあるが、斜めのものが未成品とは言えない。350は端面に4カ所の切れ込み（線刻）がある。

362～371までが色分類の2群（黒に近い緑）で、10点ある。1類と比較すると、直径が大きく、側面形状が直線的なものが多い。363は中心にある稜線が鋭く明瞭である。364は平面に擦痕が薄く残る。368は端面に細かい線刻がある。

372～376までが色分類の3群（白、半透明のもの、濁ったものあり）で、5点ある。

377～386までが色分類の4群（赤褐色、赤みがかった白）で、10点ある。382は端面に2カ所の切れ込み（線刻）がある。385は孔開けの途中段階か、上下端から穿孔しようとして両平面に凹みがあるが貫通しない。

387～390までが色分類の5群（灰色、青味が強いもの）で、4点ある。390は研磨が認められず、未成品か。

391～395までが色分類の6群（その他）で、5点ある。392は端面に切れ込み（線刻）がある。

どの色類でも一部欠損したものより、4分の3以上残るか完形なものが多い。368・382・392のように表面に筋状の痕跡が残るものもあるが、製作段階の加工痕か糸などをかけた使用痕かは判然としない。

385・396～399が未成品と思われる。396と397は周縁を研磨していない。色分類は396は1類、397と398は4類、399は2類となる。また、399は白玉に含めたが2区出土の滑石製模造品（231）や3区出土の双孔円板（312）と同種の石製品になる可能性がある。

第3面は遺構数は多いが、遺構に含まれる遺物は少量かつ小片であった。古墳時代前期から中期の遺物である。

包含層（2-3 a層～3 a層）の遺物（図74、写真図版40-2・3・5～8）

土器

413・414・419は側溝からの出土のため、出土層が2-3 a層や3 a層に限定できるか不明瞭である。406・408・415・418・421は3 a層、それ以外は2-3 a層からの出土である。

400・401は瓦器椀である。400は口径が小さく、内外面ともにミガキが消失する。和泉型の最終段階である。401は底径が6.0cmと大きく、高台も断面逆台形で外に張り出し和泉型I型式と思われる。

402は須恵器鉢で、東播系こね鉢になる。12世紀末から13世紀初めと考えられる。

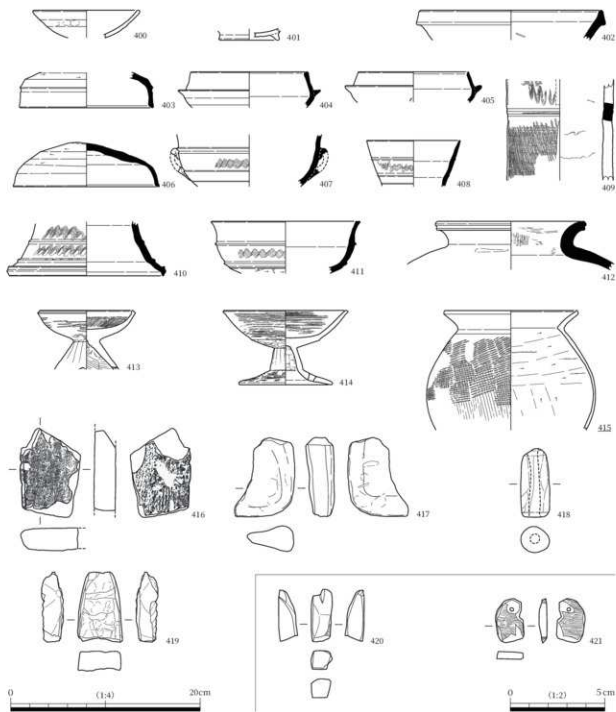


図74 3区 2-3 a~3 a層出土遺物実測図

403~412はいずれも古墳時代中期の須恵器である。403・406は杯蓋である。403は160溝の遺物になる可能性もある。稜の下は凹線状にくぼむ。406は口径、器高とも大きく、口縁端部は内傾する段をもつ。404・405は杯身で、404は160溝の遺物になる可能性もある。404は受部が水平にのび、立ち上がりが内傾する。口縁端部は平らである。405は受部が上方にのびて丸みを帯び、口縁部は内傾して段をもつ。

407は把手付の無蓋高杯だが、口縁先端と底部から下を欠損する。杯部のちょうど把手がつく幅3.5cmの箇所に、上から突帯、波状文、沈線を巡らす。408はコップ形で、底部を欠損する。幅2.0cmの上下を凸帯で区画し、その中に波状文を、凸帯下方には沈線を巡らす。口縁端部は先細りになる。

409は筒型器台で、筒状の胴部のみが残存する。長方形の透孔が上下2段、2カ所に認められ、おそらく4カ所に透孔があったと想定できる。外面はカキメ後横方向のナデ後施文する。上下の透孔の間に2条の凹線を巡らせ、凹線の上に波状文、下に確認できる限りでは6段の列点文を施す。亀川遺跡の土坑765（大文セ2002）や大和川今池遺跡460井戸（大文セ2000）で類例が出土している。

410は高杯形器台の脚部から台部である。裾部は折り返し、2条の突帯の間に1条の波状文を巡らす。2区の156と似た器形、法量なので同時期の器台になると思われるが、裾部先端が垂直に接地するなど156と異なる点もある。

411は無蓋高杯である。底部から下を欠損する。回転ヘラケズリのち、2条の突帯の間に波状文を巡らす。412は須恵器壺口縁部で、体部を欠損する。口縁部外面には沈線が入る。

413は土師器小形器台で、円形透孔は1カ所のみ確認できた。杯部外面は横方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケ後放射線状のヘラミガキを施す。脚部外面は縦方向のヘラナデ、内面はハケが残る。

414は土師器小形高杯である。底部から斜め上方に杯部がたちあがる。杯部外面は底部にヘラケズリが残るが、それより上位は極細の横方向のヘラミガキ、杯部内面も極細の横方向のヘラミガキである。脚部から裾部はやや曲線的に屈曲する。脚部外面は板ナデ、内面はヘラケズリ、台部外面は極細の横方向のヘラミガキで透孔を3カ所穿つ。

415は土師器甕である。口縁部は鋭く外反し体部最大径が中心より下にある体部をもつ。口縁端部は内側に巻き込む。体部外面は右上がりの平行タタキ後縦方向のハケ、体部内面はヘラケズリである。口縁部と肩部より下に煤が付着する。生駒山西麓産胎土である。

417は不明土製品である。底面と一側面は生きているが、他は欠損する。U字形土製品とするには厚く、竈の底などの一部分と推測する。

2-3 a層から3 a層に含まれる遺物は、上層に瓦器など中世の遺物を含むが、主体は古墳時代前期から中期の遺物で、須恵器が比較的多い。

瓦

416は平瓦であるが一側面以外は欠損する。凸面には縄目痕が残り、凹面には布目痕とナデ消しの痕跡が残る。

土製品

418は管状土錐である。長さ7.3cm、直径3.1cmと大形の円筒で、外面には焼成時の黒斑が残る。中心孔は直径1.3cmで、中心に棒を置き粘土の板を巻き付けて成形したと考えられる。外面には右斜め方向にナデあるいはハケの痕跡が残る。

石製品

419・420は砥石である。419は平面台形、断面長方形の石で、表面と両側面は面取りされている。擦痕はさほど認められないが、手持ちの砥石と考えられる。比較的目的が詰まった石材であり、砂岩と思われる。中世以降のものか。

420は平面長方形、断面正方形の石で、四面とも面取りされている。仕上げ用のごく小形の砥石としたが、擦痕は認められない。

421は滑石製模造品である。第3 b面上面より出土した。内側にくびれをもつ長方形の板の上方に小孔を1つ穿つ。231と同じく、勾玉を模したと考えられる。穿孔の周辺が摩滅しているようにみえるが使用による摩擦痕か、加工の際に付いた擦痕か不明である。

第4項 3区第3b面の遺構と遺物(図75～97、写真図版16～19、41～51)

主に南西部に堆積する3a層を掘削すると、調査区全域で3b層を検出した。また、中央部では従前から低地部であったが、シルト層を除去すると、さらに深さ1.0m以上の砂礫層が堆積する落ち込みになったため、この落ち込みを240流路とした。240流路は埋積土を数層に大別できることや、平面形の幅が広がり狭まったりすることから、埋積の過程も複数回にわたると考えられる。

240流路中層からは、さらに幅の細い242溝を検出した。242溝は均一な幅であり、242溝と直交する杭列を検出したため、人為的な遺構とみなした。

第3b面の遺構は240流路と242溝を検出したのみであるが、240流路、242溝中および3b層中からは、上層から下層まで土器、土製品、木製品などの多量の遺物が出土した。土器や土製品は全層にわたって出土するが、木製品は下層の4a層との境界で出土することが多い。

第3b面の標高は北半部ではT.P.+1.3～+1.4m、中央部ではT.P.+1.0～+1.1m、南半部ではT.P.+0.7～+0.9mと北から南にいくほど低くなる。また、北壁でみると東西ともT.P.+1.3mとほぼ水平であるが、南壁でみると東側はT.P.+0.7m、西側はT.P.+0.6mと西側がわずかに低い地形となる。北を上流とする流路(旧大和川の支流)が東にあるので、その流路に含まれる大量の砂礫が流れ込んだ結果、3b層が厚く堆積したと言える。その中で水勢が強い箇所が抉られて240流路になったと考えられる。

第3b面は出土遺物から、古墳時代初頭から中期の遺構面と考えられる。

240流路(図75～78・80・81、写真図版16～2、17) 中央部のX=-147,710～-147,730に広がる240流路を検出した。

240流路は最大幅19.0m(東側)、最小幅12.5m(西側)、深さ1.6mをはかる大規模な流路である。

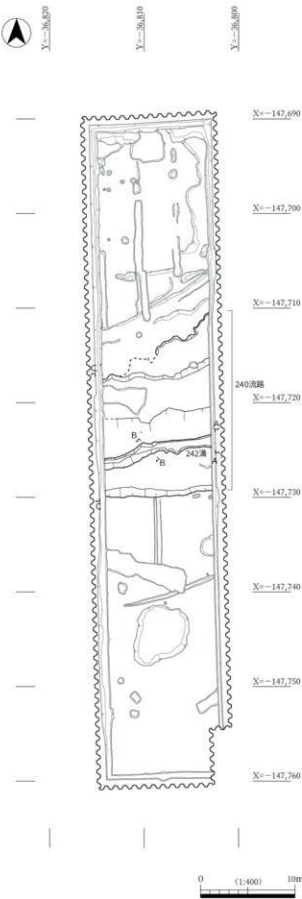


図75 3区 第3b面平面図

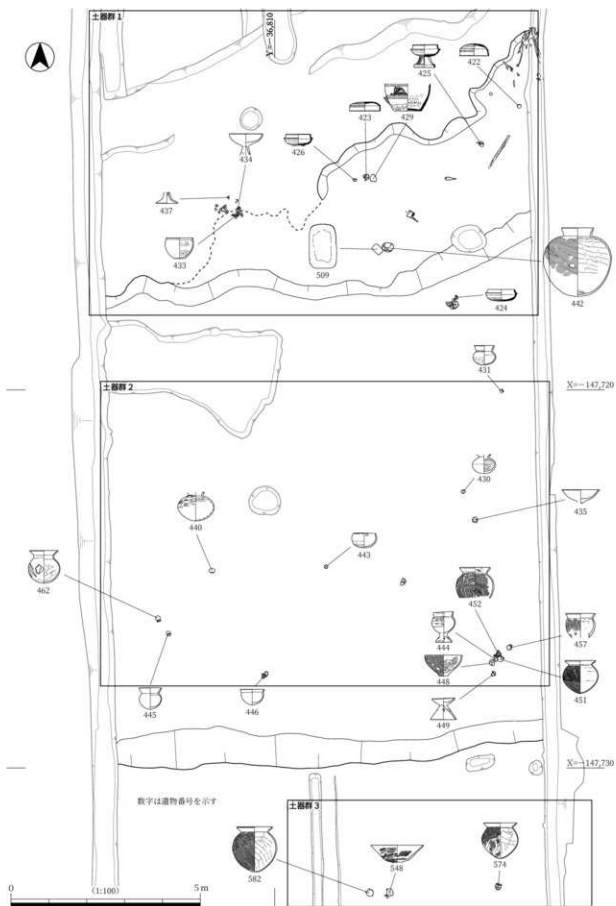


图 76 3区 240 流路・3 b 層上面遺物出土位置図



图 77 3区 土器群1 遗物出土状况图

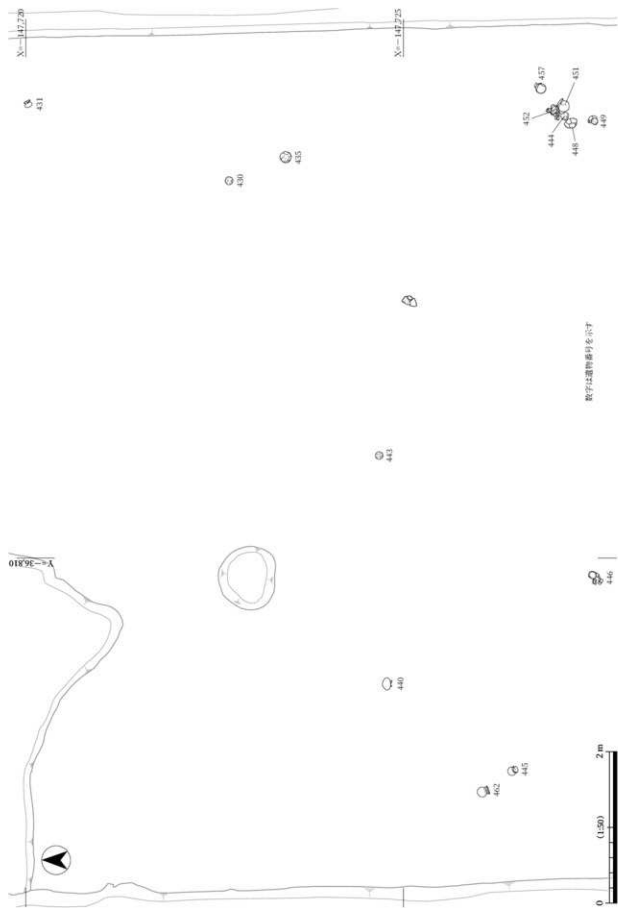


图 78 3区 土器群2 遺物出土状況図

調査区内を東西に横断し、流路の両端は調査区外にさらに続いている。検出高より約0.5m下がると溝幅が5.5～7.5m程度に狭まり、段落ちする平面形をとる。断面形は段落ちまでは平坦で、段落ちした箇所以下は南側に深くなるT字形を呈する(図81)。段落ちまでを上層、以下を中層から下層と捉えた。段落ちした240流路の南端に接して242溝が存在する。

上層には暗灰黄色から灰色シルトが0.2～0.3mの厚さで水平に堆積する。中層から下層になると粒径が粗くなり、黄褐色や黄灰色の極細砂から礫が0.6～0.8m単位で堆積する。堆積した砂層のラミナも水平以外に斜交するものもみられることから、数段階にわたって氾濫を繰り返していたと考えられる。

240流路の両肩や上層からは古墳時代初頭から中期の土師器(甕、鉢、高杯、小形器台他)や須恵器(杯身、杯蓋、高杯他)が出土した(図76～78)。須恵器は北東部にかたまって出土する傾向がある(土器群1)。また、240流路内の中心に近い箇所からは、小形丸底壺や小形丸底鉢、小形器台などの小型精製品が出土する傾向がある(土器群2)。中層から下層(図76・80)からは主に古墳時代初頭から前期の土師器(甕、小形丸底壺、高杯、小形器台)が多数出土した。最下層の240流路と3b層の境界からは庄内式期の甕が出土した(図81)。

土器は生駒山西麓産も含めた在地の土器の他に、他地域からの搬入土器やその影響を受けた土器が含まれる。240流路の中心から出土する遺物には小形丸底壺や鉢、小形器台などの小型精製品が多く、その他に意図的な打ち欠きのある土器(図85-462)が認められる。これらの器種は流路中に氾濫時に巻き込まれたのではなく、意図的に投棄された可能性もあり、水辺での祭祀行為に使用された可能性が示唆される。古墳時代初頭、庄内式期の土器と古墳時代中期の土師器や須恵器の両方を含むことから、240流路は古墳時代初頭から古墳時代中期まで機能した流路と考えられる。

240流路の西側に隣接する近畿自動車道天理～吹田線建設時の発掘調査でも、古墳時代中期から前期の遺物を含む河川1を検出しており、240流路は位置的にも規模的にもこれに合致する。240流路は河川1に連続する流路と考えられる(第5章第1節参照)。河川1は $X = -147,680$ 以北では検出されておらず約50mの川幅となるが、南限にあたるのが240流路となる。

242 溝(図76・80・81、写真図版18-1・2) 240流路の中層にあたる層位からは242溝を検出した。242溝は幅1.1～1.8m、深さ0.6mの溝である。埋土は単層で灰黄色から灰色の極細砂や、粗砂、シルトが埋積する。240流路の中心より南寄りを西側はやや蛇行して、東にいくほど直進して東西方向にのび、両端は調査区外へとびていく。

242溝の中央で溝に斜交する杭列が認められた(図80・81)。杭列は一重もしくは二重に杭を3～7本並べて0.5～1.0m間隔で打設していたようである。しかし、一直線に並ぶ列以外にもその西側や溝肩にも杭がみられるので、本来は2列以上の列があった可能性がある。杭列は水流に交差していることから、水流を調節する機能を果たしていたと考えられ、杭による水制の調整が行われていたと推測される。

242溝の肩や溝中からは土師器や製塩土器、土製品が出土した(図87・88)。土器は庄内式期後半を中心とする土器が主であることから、242溝は古墳時代初頭の遺構と考えられる。

また、242溝にあった杭列の杭を1本採取して樹種同定を実施した結果、アサダと判明した(図95-640、第4章第2節参照)。杭は周辺の植生から入所しやすい手近な材を利用して製作したと考えられるが、西岩田遺跡3区の立地は自然堤防上の砂礫層であるので、樹木が茂る環境とは言いがたい。

アサダは当遺跡から出土した木製品にはみられない樹種である。当遺跡出土木製品は目的に合わせて樹種を選択して製作されており、遠い地域から搬入されたと考えられるが、杭は手近な、それより調査



図79 3区 土器群3 遺物出土状況図

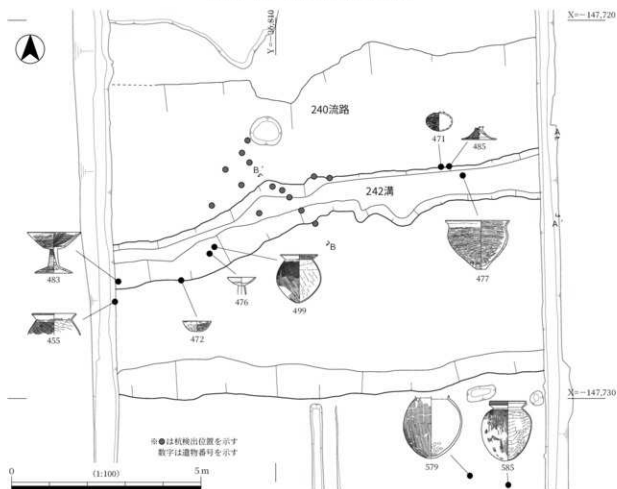


図80 3区 240流路・242溝遺物出土位置図

区に近い場所から搬入したのではと推測する。

3b層出土遺物・集石 (図82・83、写真図版18-3、19) 240流路、242溝外の3b層中からも、弥生時代後期末から古墳時代初頭の土師器や製塩土器、木製品、土製品などが多数出土した。そのうち出土地点が判明している遺物は図82に示した。3b層の土器は縄文時代中期から古墳時代中期までのものを含むが、庄内式期が中心となる。よって、3b層は庄内式期の流路堆積層と捉えられる。

3b層の最下面(4層上面)は灰色シルト層で砂礫に侵食されて凹凸が著しく、地表面では植物によ

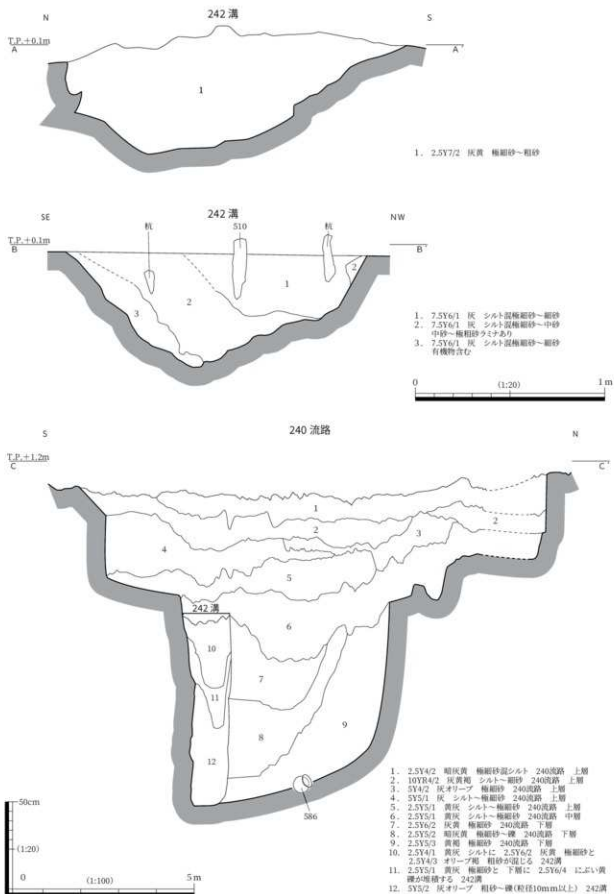


図 81 3区 240 流路・242 溝断面図

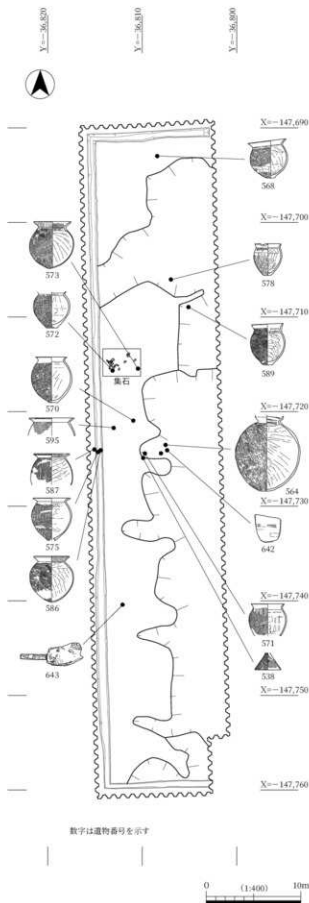


図82 3区 3b層遺物出土位置図

る侵食痕か足跡とみられるくぼみが認められる。4層上面はT.P.-1.6~-1.0mで検出した。木製品は4層上面から出土したものが多く。

X=-147,714~-147,715、Y=-36,810~-36,814間の南北1.8m、東西3.2mの範囲で、長径20~30cmの拳から人頭大の石が約20~30点かたまった状態で検出された(図83)。図83の他西壁内でも検出され、総数は40~50個と考えられる。3b層構成土は極細砂から礫層であるので、これらの石は意図的に搬入されたと言える。

石はいずれも自然石でローリングを受けるがさほど摩耗せず、面取りや加工痕は認められない。出土状況をもみても散在しており、列状に並んだ配石や、組み合わせて立体的な構造物にはなっていなかった。被熱痕跡をもつ石もあるが全てでなく、検出地点では火の使用痕跡は認められない。

搬入遺物とするなら、バラスト(脚荷、底荷)の可能性がある。バラストとは空荷の際に船の重量を増して喫水を上げたり、重量のバランス調整のために積み込む重しである。重心を下げて左右への傾きに対する安定性の効果を最大とするために、バラストは最も船底に積む。現在は海水をタンクなどに入れて使用する例が多いが、かつては砂利、土砂、石、丸太などが用いられた。出土資料として、海底沈没船の船底に不定形の石や磚、材木、陶片が大量に発見された例がある(長崎県教委2018、中田・池田2021)。

西岩田遺跡の南に位置する瓜生堂遺跡でも、弥生時代後期後半から庄内式期の遺構面で、砂礫層の上面に1000点以上の砂利や石、自然木が散乱する状況が報告されている(99-5区第18面S05190、99-6区第18面S061230など)。石材鑑定を実施した結果、石の種類として砂岩、チャート、花崗岩があげられ、石材の産地として和歌山県紀の川流域や海南市付近、大阪府の泉南地域であると鑑定された(富田2004、福永2002)。報告書では集石遺構として杭列や護岸施設が崩落したと考えていたが、上述の地域から空荷や軽い荷できた船

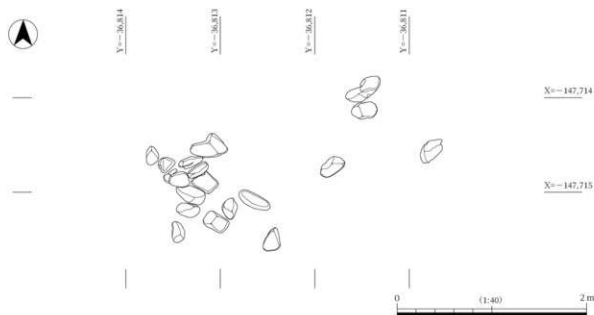


図83 3区 3b層中集石出土状況図

が、瓜生堂遺跡の船着き場でバラストを廃棄して荷を積んで帰ったと考え、遠隔地の石が大量に出土する理由に蓋然性が生じる。瓜生堂遺跡の集石を船着き場に置かれたバラストとする報告もある（深澤他2022）。西岩田遺跡でも3区周辺に船着き場があり、バラストに使用された石が船の積み荷と共に当地で降ろされたり廃棄された可能性も考えられる。

大阪市教育委員会の小倉徹也氏に肉眼鑑定を依頼した。集石の石材は閃緑岩や花崗閃緑岩で産地は決定できないが、意図的に搬入されたことは間違いないとの教示を得た。やや上層の2区32・33溝上層や2区、3区の広い範囲からも自然石剥片が多数出土したが、中央構造線上、三波川変成帯を産地とする緑泥石結晶片岩や紅籐石片岩で、和歌山県、三重県、徳島県から運ばれてきた可能性が考えられる。

240 流路の遺物 (図84～86・89・95、写真図版41、42、43-1・4・6、44-1・2、51-4)

土器

422～429は240流路の北東肩部から出土した須恵器である（土器群1、図76・77、写真図版17-2）。古墳時代中期に相当するものが多い。

422と423は杯蓋、424は杯身、425～427は有蓋高杯である。423は口径に対して器高が低く、時期が下ると思われる。427は脚部から裾部のみ残るが透孔がない。また、色調がやや白味が強く胎土も異なり、陶邑以外の窯産の可能性もある。

428は長さ、幅とも6.0cm程度の小片だが、6つの段をもつ。傾きから碗や鉢を想定したが、器種を特定できない。段をもつ須恵器は大府小阪遺跡や三重県六大A遺跡で体部に段をもつ古代の壺があるので、それに類するか。

429は把手付杯である。口縁部と把手のほとんどは欠損するが、把手は1側面にのみ装着する。底径11.6cm、体部最大径19.2cmと大形で、体部外面の上方は凹線で区画した上下4.0cmの範囲に3条の波状文を巡らす。外面下半底部近くにケズリが認められるが、ロクロ回転ケズリではなく、手持ちで斜め右上がりに施されたケズリである。体部内面上半はユビオサエのちなデで仕上げられているが、下半は粘土紐の継ぎ目やユビオサエが明瞭に残る。底部外面中央に1辺4.5cmの方形の押圧痕が残るが、土器を成形する際にロクロ盤中央の柄穴に下から心棒を差し込む箇所が底面に付いた痕跡（通称ゲタ）と思

われる（酒井1985）。この把手付杯は陶質土器の特徴をもち、器壁の厚さや胎土などは陶質土器（百済系）に似るが、波状文の施文技法などは須恵器（国産）と言える。清州新風洞古墳群出土遺物に類例があり、百済の職人が日本で製作したものではないかと陶質土器に詳しい松永悦枝氏の教示を得た。時期はTK208型式に相当する。

433・434・437・442も同じく240流路の北東肩部から出土した土師器である（土器群1、図76・77、写真図版17-2）。いずれも古墳時代中期である。

433は土師器鉢である。器高が深く口縁部は短く、外反する。底部は平底で、外面は摩滅のため調整不明、内面は粘土紐の襷目やユビオサエの痕跡が残る。434は椀形高杯の杯部から脚部で、浅い椀状の杯部に径の細い脚がつく。摩滅のため内外面の調整は不明瞭であるがヘラミガキか。脚部には直径0.5cmの円形の透孔が3カ所に入る。

437は高杯の脚部から裾部である。摩滅のため外面の調整は不明で、内面はヘラナデの痕跡が残る。

442は土師器壺である。球形に近い体部に直立気味に立ち上がる口縁をもつ。体部外面は粗いハケ、下半は摩滅のため不明瞭だが、幅1.0～2.0cmの横方向のヘラケズリと思われる。体部内面はヘラケズリで、肩部はヘラケズリ後無調整のため凹凸が著しい。内面下半はユビオサエ後ナデで仕上げられている。体部には打ち欠きによる縦横2.0cm程度の穿孔がみられる。

430～432、435・436・438～441、443～468は240流路上層から出土した土師器である（土器群2、図76・78、写真図版17-1・3）。

430は小形丸底壺である。体部外面下半は横のヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、体部外面上半は縦方向のヘラミガキか。器壁が厚く、体部内面は上半には粘土紐接合痕が残り、下半はユビオサエが残る。

431は小形丸底壺である。体部外面はヘラケズリ後ナデ、体部内面はナデ、口縁部ナデか。外面には煤が付着する。432は小形丸底壺で口縁部を欠損する。口縁部は意図的に打ち欠いたとみられるが、このような小形の土師器口縁部を打ち欠く例は、祭祀行為として他の遺跡でも散見される。流路からの出土で、小形精製土器が一定量みられることは水辺での祭祀を示唆する。器壁が厚く、体部外面下半はヘラケズリ、内面はヘラケズリがなくなり、ユビオサエ後ナデである。430～432は古墳時代中期である。

435は高杯で杯部底部と脚部のみ残存する。436は小形高杯である。摩滅のため調整不明だが、古墳時代中期である。脚部が八の字に開く器形から、西部瀬戸内以西、九州系の土器の可能性はある。

438は壺である。球形で体部最大径は中央よりやや上にある。口縁部は広くて短く、緩やかに外反する。口縁端部は細くつまみ上げる。内外面の調整は摩滅のため不明瞭だが、内面にはユビオサエが残る。

439は広口壺である。内外面ともに煤が付着するが、口縁部外面は斜め方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ、体部外面は太いヘラミガキ、内面頸部にはユビオサエが残る。器壁が厚く口縁端部は丸くおさめる。

440は直口壺である。算盤玉形の横に張り出す体部のみが残る。体部外面はヘラケズリ後横方向のヘラミガキ、体部内面はナデで体部と口縁部の境にはユビオサエが残る。

441は直口壺で口縁部先端は欠損するが、大きく外に開く。体部は長胴形で、体部外面、内面の下半に煤が付着する。底部外面も被熱のためか赤変しており、火にかけて使用されたことがうかがえる。体部外面は縦方向のハケの後、横方向のハケで底部未調整である。体部内面上半はユビオサエ後横方向のヘラケズリ、下半はユビオサエ後縦方向のヘラケズリである。口縁部外面は縦方向のハケ後ナデ、内面は横方向のハケである。438・440・441は古墳時代中期である。

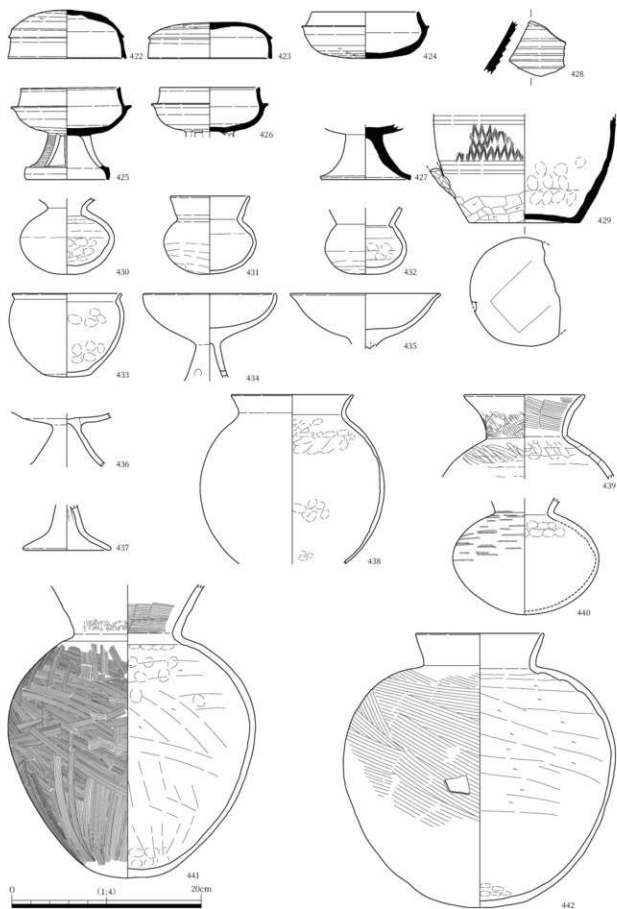


图 84 3区 240 流路出土文物实测图(1)

443は小形鉢である。口縁部内面縁辺の一部が肥厚しているが、故意に片口状にしたものかは不明である。外面下半はヘラケズリ、上半はナデを施し、外面には黒斑がある。古墳時代中期としては珍しく、生駒山西麓産胎土である。

444は小形脚付鉢である。体部外面には黒斑があり平行タタキを施すが、調整が粗く粘土紐の難き目痕が残る。内面はナデで仕上げる。球形に近い体部に大きく広がる口縁がつき、脚部は体部とのバランスを考えると小さい。曲線的に裾が広がり、4カ所に直径0.5cmの穿孔をもつ。東海系によく似た器形だが、胎土などから在地の土器と考える。

445は小形丸底壺である。内外面とも摩滅が著しく調整不明だが、外面に黒斑がある。底部が厚く、体部に対して大きく広がる口縁部を有する器形から、431よりは古い。古墳時代中期である。

446は小形丸底鉢である。内外面とも摩滅が著しく調整不明である。底部が厚く、体部に対して口縁部は大きく短く広がる。米田編年のB類、庄内式期Ⅱに相当する。

447は土師器壺の底部である。全体に摩滅が著しい。448は鉢である。約3分の2残存し、外面には平行タタキを、内面にはヘラミガキを施す。生駒山西麓産胎土である。

449は小形器台である。杯部は口径9.5cm、器高2.9cmと浅いが、脚部は底径10.8cm、器高6.2cmと高く、裾が大きく広がる。脚部に直径0.6cmの穿孔を4カ所に施す。摩滅のため調整は不明である。

450は椀形高杯である。深い椀形の杯部に、低い脚部、大きく広がる裾をもつ。外面はハケ後細い横方向のヘラミガキ、杯部内面は疎らな横方向のヘラミガキ後、放射線状のヘラミガキを施す。内面見込みには煤が付着する。脚部内面はハケ後ナデを施し、直径0.7cmの穿孔を4カ所もつ。

451は甕で、ほぼ穹形で体部最大径は上半にある。口縁部は鋭く外反して「く」の字を呈するが、端面を形成する。外面上半は平行タタキ後縦方向のハケ、下半はハケ、内面は縦方向のヘラケズリである。外面頸部から肩部を除いて煤が付着し、特に体部の胴部に厚く付着する。

452は甕である。体部最大径はほぼ中央にあり、球形を呈する。口縁部の外反は451ほど鋭くなく、口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。外面はやや右上がりの平行タタキ後下半には細かい縦方向のハケを、中央部にはその上から横方向のハケを施す。体部内面にはナデ後下半は縦方向のハケ、上半は横方向のハケを施す。体部外面の胴部中央より下には煤が付着する。

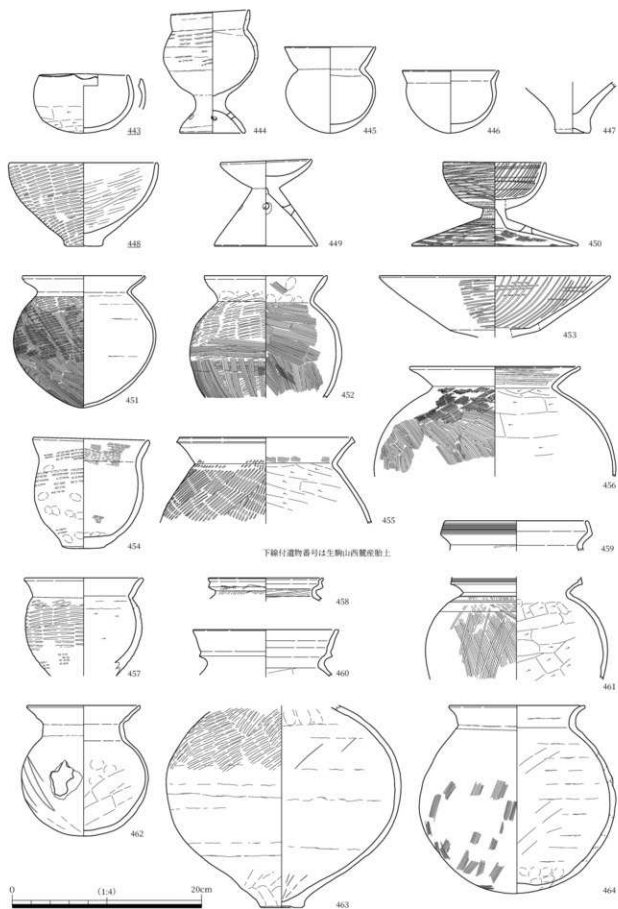
453は高杯で、外面は横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ後に放射線状のヘラミガキを施す。杯部が浅く、杯部は底面から直線的に立ち上がる。米田編年のB類、庄内式期Ⅱに相当する。

454は甕である。底部が厚く平底で、体部から口縁部が「く」の字に外反せずに緩やかに立ち上がるなど、弥生時代後期、V様式の特徴を残す個体である。外面は平行タタキ後口縁部は横方向のナデ、下半はユビオサエをナデ消す。内面は口縁部には横方向のハケ、体部は横方向のハケ後ナデである。外面全体と内面底部に煤が付着するのは、伏籠のように使用したものが。

455は甕で体部下半から底部は欠損するが、体部最大径が中央より上にあるやや長胴の器形と推測される。口縁部と頸部の境界や、口縁端部は平らな面をもつ。体部外面は右上がりの平行タタキ、体部内面は横方向のヘラケズリ、口縁内面はハケ後横方向のナデである。

456は甕で体部が大きく膨らむ球形を呈する。口縁部は端面をもち鋭く外反する。体部外面は頸部から肩部にわずかに右上がりのタタキが残るが、その上から細かいハケを施す。体部内面は横方向のヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のナデである。米田編年のB類、庄内式期Ⅱに相当する。

457は甕で、体部から口縁部が「く」の字に外反せずに緩やかに立ち上がる。弥生時代後期、V様式



下線付遺物器以生駒山西麓産胎土

图 85 3区 240 流路出土遺物実測图 (2)

の特徴を残す個体である。外面は平行タタキ後口縁部はヨコナデ、内面は横方向のヘラケズリである。

458は甕である。頸部外面は縦方向のハケ、頸部内面には横方向のハケ、口縁部外面に押し刺突が残ることから、東海地方のS字形口縁甕A類と判別できる。全体に煤が付着する。

460は有段口縁の甕である。口縁部外面には退化した凹線状のナデが、口縁部内面にはナデによる屈曲線が入る。頸部内面はヘラケズリの痕跡が認められる。山陰系の土器と判定できる。

459は吉備系甕の口縁部である。外面に擬凹線が入る。

461は甕である。短い口縁部を有するが端部は欠損し、口縁部外面には多条の擬凹線の沈線が入る。球形の体部外面は縦方向のハケ後ジグザクなヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリである。口縁部や体部外面の特徴、胎土が精良で器壁が薄いことから、吉備系の土器で高橋編年のX-a期に相当する。

462は二重口縁壺である。球形の体部から直線的に立ち上がる頸部と大きく外に広がる口縁部をもつ。体部外面は調整不明だが、工具痕が筋状の線刻と板ナデと思われる痕跡が残る。意図的な打ち欠きによる穿孔がある。内面はユビオサエ後横方向の板ナデである。在地の土器で、古墳時代中期である。

463は甕である。大きく膨らむ体部から底部はすぼまる。体部外面上半には右上がりの平行タタキが認められるが、部分的にナデ消す。体部下半は煤が厚く付着するため不明瞭だが、タタキ後ナデと思われる。内面はナデだが、全体的にナデが不十分で、内外面に粘土紐の継ぎ目が残る。

464は甕でほぼ完形である。球形の体部に短い口縁部がつく。口縁は広口で緩やかに立ち上がって外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は煤が付着するが、細い縦方向のハケをナデ消している。体部内面や口縁部はユビオサエ後斜め方向のナデだが、粘土紐の継ぎ目が顕著に認められる。口縁部の外反具合や、頸部に口縁部から垂れ下がるような粘土の段差をもつ点が、千葉型五領式甕（房総甕）の特徴と類似する。ただし、口縁部が波立たず、底部が平底でなく丸みを帯びる点などは五領式甕とは異なる。布留Ⅰ～Ⅱ式（平城下層 SD6030）に相当するか、在地の土器で古墳時代中期に下る可能性もある。

465～468は土師器甕もしくは鍋の把手である。465はナデによる成形で面取りされており、断面六角形を呈する。上面にはV字状の切り込みが、下面には直径0.4cmの竹管圧痕（刺突痕）をもつ。韓式系土器の様相をもつ把手である。

466は断面円形で、直線的に斜め上方にのびる長い円錐形の把手である。体部との装着方法は、外面からの貼り付けと思われる。

467は扁平な断面をもち、短く上方に反る形状の把手である。体部との装着方法は、外面からの貼り付けと思われる。

468は扁平な断面をもち、短く上方に反る形状の把手である。240流路から出土した把手、33溝出土甕や鍋のような体部と共に器形を復元し得るものはないが、形態も多様で、時期幅もある。流路という遺構の性格上とも言える。

製塩土器

3区では計15点の製塩土器が出土しているが、脚台式については八瀬和雄の分類によった。240流路からは469・470の2点が出土した。469・470共に脚台Ⅲ式の製塩土器の脚台部分のみが残存する。469は底径が5.6cm、470は底径6.0cm程度である。古墳時代前期（布留式期）のものである。

木製品

509は240流路の上層、北肩がさらに広がった位置で出土した（図76・77、写真図版17-2）。

長さ37.5cm、幅23.0cm、厚さ3.5cmの隅丸方形の板材である。表面は本来平坦な面であったと推測

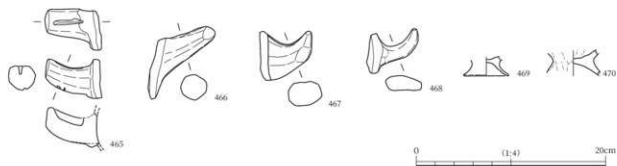


図 86 3区 240 流路出土遺物実測図(3)

するが、摩耗により中心がくぼんでいる。周縁は被熱して炭化した部分がみられる。裏は短辺に平行に、両端に幅3.0cm長さ20.0cm、深さ2.0cmの削り込みを一側辺側だけ2cmほど残して互い違いにつけており、この削り込みに別の材を差し込んで使用したと考えられる。表面が平らであることから槽や盤などでの容器でなく、裏面に脚をつけた案(組み合わせ式の机)ではないかと推測する。案は六大A遺跡で複数出土しているが、六大A遺跡出土品は平面形が長方形で、側面と平面が丁寧に面取りされ仕上げられている。互い違いの方向に削り込みをもつ形状は、六大A遺跡出土品と極めて類似する。

また、俎板は平城宮で4世紀の出土例があるが、脚は差し込み式ではなく削り出して作っている。ただ、509は俎板としては、裏面(差し込み納穴がある面)に多数の刃物傷が認められるのに、表面には認められない。従って、本来の用途を終えた後に俎板に転用された可能性もある。樹種はヒノキである。242 溝の遺物(図87~89、写真図版43-1~3・5・6、44-3~10、45)

土器

471~492はすべて土師器である。

471は小形丸底壺である。算盤玉状のやや横広がりの体部をもち、体部外面上半は縦方向のハケ後横方向のヘラミガキ、外面中央から下半はヘラケズリ後ヘラミガキ、体部内面はナデと思われる。

472は鉢である。平底で口縁部から体部は内湾して開く。底部は板ナデだが、体部外面は未調整、口縁部も調整が雑で歪んでいる。体部内面は横方向のハケである。

473は小形丸底壺である。口縁端部を欠損するが、外反する短い口縁部がつくと想定される。体部外面肩部はハケ、それ以外はヘラケズリ後ハケ後ヘラミガキ、体部内面はナデで頸部はユビオサエが残る。

474は小形丸底鉢でほぼ完形である。尖り気味の底部をもち口縁部は広く外に開く。体部外面はヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデ後ヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面は板ナデである。

475は小形鉢である。器壁が厚く、体部から口縁部は強く屈曲する。内外面ともにハケ後ナデで仕上げられている。胎土が赤褐色を呈し搬入土器の可能性もある。あるいは、弥生時代後期末の高杯か。

476は小形高杯で、杯部に対して太い脚柱部が垂直につく。内外面とも調整不明だが、杯部外面は横方向のナデと横方向のヘラミガキ、杯部内面は右上がりのヘラミガキ、脚部は縦方向のヘラミガキか。布留式と考えるが、古墳時代中期の可能性もある。

477は大形の鉢である。体部最大径を中心より上方にもち、それより下方は急速にすぼまる。口縁部は緩やかに立ち上がり、口縁部と体部の屈曲は弱い。体部外面下位には右上がりの粗いタキ後縦方向のハケか板ナデ、上半は太いヘラミガキで、口縁部外面には粘土紐の継ぎ目が残る。内面は底部に近い部分は縦方向のヘラミガキ、それ以外は横方向のヘラミガキである。外面と内面底部には煤が付着する。生駒山西麓産胎土である。

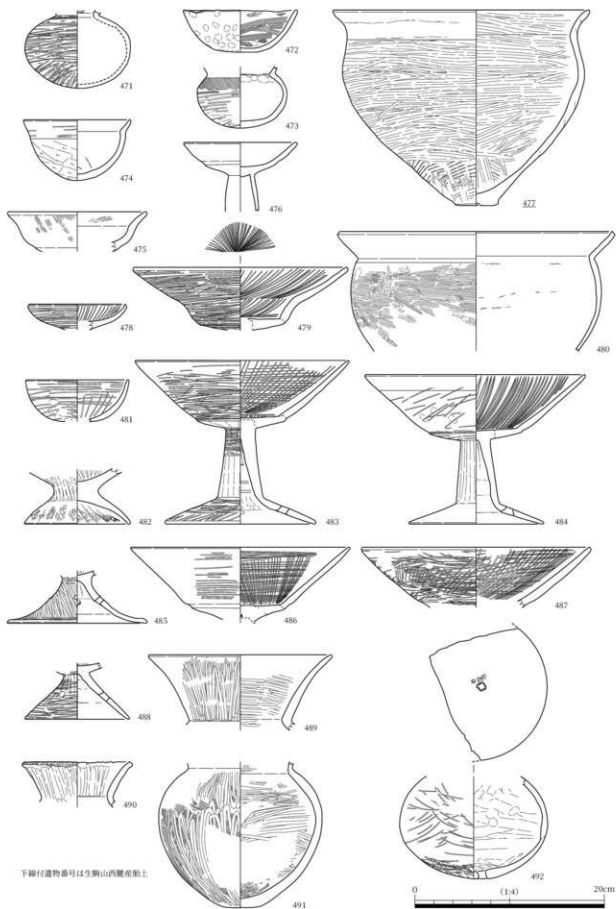


图 87 3区 242 冢出土遺物実測图 (1)

478は小形器台で杯部のみ残存する。口縁端部は上につまみ上げ、外面は細いヘラミガキ、内面は細い放射線状のヘラミガキを施す。胎土もきわめて精良で、全体に丁寧に作られている。

479は有稜高杯で杯部のみ残る。稜線から杯部が立ち上がり、大きく屈曲して外に広がる。口縁端部は平らで底部中心には脚部を差し込む孔をもつ。外面は横方向の細く密なヘラミガキ、内面は2段にわたって斜め方向のヘラミガキ、内面見込みは放射線状のヘラミガキを施す。庄内式期の高杯B類である。

480は鍋で、体部下半から底部を欠損する。体部最大径は中央よりかなり上方にある。口縁部は体部から「く」の字に屈曲し、口縁端部は肥厚気味で、内側にわずかに巻き込む。口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面は頸部に縦方向のハケが残り、その上から横および斜め方向のハケが施される。体部内面は横方向の板ナデだが、粘土紐の接合痕がところどころに残る。

481は椀形高杯の杯部である。小形の深い椀形を呈し、口縁端部は丸くおさめる。杯部外面はユビオサエ後疎な横方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ後横方向のヘラミガキで、内面見込みには放射線状のヘラミガキが入る。450と似ており、庄内式期後半である。

482は弥生土器脚付の壺か鉢である。底部と脚部の接合部は厚く、脚部は杯を伏せたような曲線的な形態をとる。脚部は内外面とも縦方向のハケ、底部はハケ後縦方向のヘラミガキである。

483は有稜高杯である。底部は平らで杯は段がついて、直線的にのびる。口縁端部は丸くつまみ上げる。杯部と脚部の接合部にヘラケズリ後外面は細く密な横方向のヘラミガキ、内面は横方向の粗い密なヘラミガキ後、見込みと立ち上がりに放射線状のヘラミガキを施す。脚部外面は工具による面取り後極細の横方向のヘラミガキを、内面はナデで絞りが残る。台部は透孔を4カ所もち、外面はナデ後極細の横方向のヘラミガキを施す。杯部が深い。

484は有稜高杯である。摩滅が著しいため調整不明瞭だが、杯部と脚部の接合部はヘラケズリ後ヘラミガキ、杯部外面はハケ後ユビオサエ後斜めのヘラミガキ、杯部内面はナデ後放射線状のヘラミガキである。脚部外面は面取りして成形され、裾部は残存状況が悪く、透孔は1カ所しか確認できない。

485は高杯の脚部から裾部である。内面に黒斑がみられ4カ所の穿孔がある。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。底部が薄く裾部が大きく広がる器形から、椀形高杯になる可能性がある。

486は有稜高杯で、484に似るが杯部のみ残存する。摩滅のため調整不明瞭だが、杯部外面は極細の横方向のヘラミガキ、杯部内面は極細の横方向のヘラミガキ後放射線状のヘラミガキである。

487は高杯で、杯部のみ残存する。483～487と比較すると器壁が厚く、杯部がやや浅い。杯部外面は細い斜め方向のヘラミガキ後、横方向のヘラミガキ、杯部内面は横方向のヘラミガキ後放射線状のヘラミガキが密に入る。483・484・486・487は米田編年のC類、庄内式期IIIに相当する。

488は小形器台で杯部は欠損する。脚部には透孔が3カ所入る。外面は縦後横方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。杯部内面見込みにもわずかにヘラミガキが認められる。

489は直口壺の口縁部である。大きく外反して開き、外面には縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが認められる。

490は直口壺の口縁部から頸部である。口縁端部に一見刻み目のような刻み痕が認められるが、等間隔に入り一方方向にのみ強く深くくぼむことから、タタキによる凹凸と判定できる。内外面ともに太い縦方向のヘラミガキを施す。淡路からの搬入土器である。

491は直口壺の体部で底部は平底で、体部最大径は中心よりやや上にある。体部外面はハケ後太いヘラミガキ、体部内面はヘラケズリ後に横方向のヘラミガキを施す。外面の一部に煤が付着する。

492は直口壺の体部で、頸部から上は欠損する。体部最大径はほぼ中心にあり、やや扁平な球形を呈する。体部外面底部近くはヘラケズリ後ヘラミガキ、上半は横方向のヘラミガキ、体部内面は板状のものでナデによって仕上げるが調整が粗く、粘土紐の接合痕やユビオサエが残る。底部外面の中心よりややずれた箇所0.8cm四方の方形の穿孔が認められるが、これは焼成前の穿孔である。また、その上方に直径0.3cmの小穴が3カ所並ぶが、これは内側のみ認められ外には貫通しない。

493～496は土師器である。493は壺で体部最大径が中心より下方の下膨れの、卵形の器形をとる。底部は平底で、体部下半は粘土紐の接合痕と板ナデが認められる。外面全体に太い縦方向のヘラミガキを施した後に頸部には横方向のヘラミガキ、肩部には斜めのヘラミガキを施す。内面底部はヘラケズリもしくは板ナデ、下半には縦方向のナデ後横方向のナデ、それより上は横方向のヘラミガキを施す。全体に粗雑なつくりである。

494は壺で、丸底で底部が厚くやや胴長の器形である。体部外面は細かいハケ、体部内面下半はヘラケズリ、上半から中央はハケ後ナデで、内面の一部に黒斑が認められる。

495は甕である。「く」の字に鋭く外反する口縁部、球形の体部、器壁の薄さなど、典型的な布留式古段階の甕である。口縁端部は平らになる過程である。外面は一面に煤が付着し、平行タタキ後縦方向のハケ後横方向のハケ、体部内面は頸部や底部にユビオサエが残るが、それ以外はヘラケズリ後ナデである。内面も底部から全体の3分の2は炭化して煤が付着し、煮炊きに使用されたことが分かる。

496は甕の口縁部である。外面は一面に煤が付着し、縦方向のハケ、内面は横方向のハケである。

497は弥生土器壺である。傾きおよび外面に簾状文、列点文が並ぶことから、壺の肩部片と判断した。外面は、頸部に近いところから2条の簾状文とその下に列点文を巡らせ、体部は縦方向のハケ後、頸部に近い部分は太い横方向のヘラミガキ、その下位は縦方向のヘラミガキを施す。内面は剥離が著しいがハケ後ナデである。近江などからの搬入土器の可能性もある。

498は弥生土器複合口縁壺の破片である。肩から直線的に立ち上がり、わずかに屈曲して口縁部に続くことから頸部と判断した。頸部外面は縦方向のヘラミガキで、肩部には簾状文がわずかに残る。特筆すべきは、黒色の漆状の物質が内面一面に付着している。弥生時代中期、生駒山西麓産胎土と思われる。

499～504は土師器である。499は甕で、口縁部は鋭く外反し口縁端部は平らな面をもつ。底部はわずかに平底の様相を残すが器壁が薄い。体部外面上半は平行タタキ後縦方向のハケ、下半は縦方向のハケのみである。体部内面はヘラケズリで、口縁部外面はナデ、内面はヨコハケである。米田編年のC類、庄内式期Ⅲに相当する。

500は甕で、体部外面は左上がりのタタキで煤が付着、内面はヘラケズリで口縁部は横方向のナデである。外面のタタキがこの1点のみ左上がりであることから、大和産の甕の可能性もある。

501は甕で、外面は横方向のハケ後縦方向のハケ、口縁部内面もハケである。外面には煤が付着する。

502は有段口縁の甕である。体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリである。二重口縁の器形から山陰系の甕と考えられるが、この時期の甕としては口縁部が開きすぎているため、古い型式の山陰の甕を踏襲して、在地で模倣して作った可能性もある。

503は甕である。やや内傾気味の口縁部外面には多条の擬凹線を巡らす。吉備系の甕である。

504は甕である。比較的狭い口縁部体部が急に広がる器形や口縁部を短く折り返す特徴、焼き上がりから阿波からの搬入土器である。内外面ともに煤が付着する。

242溝出土土器は古墳時代中期や弥生時代も若干含むが、ほぼ古墳時代初頭から前期に限定される。

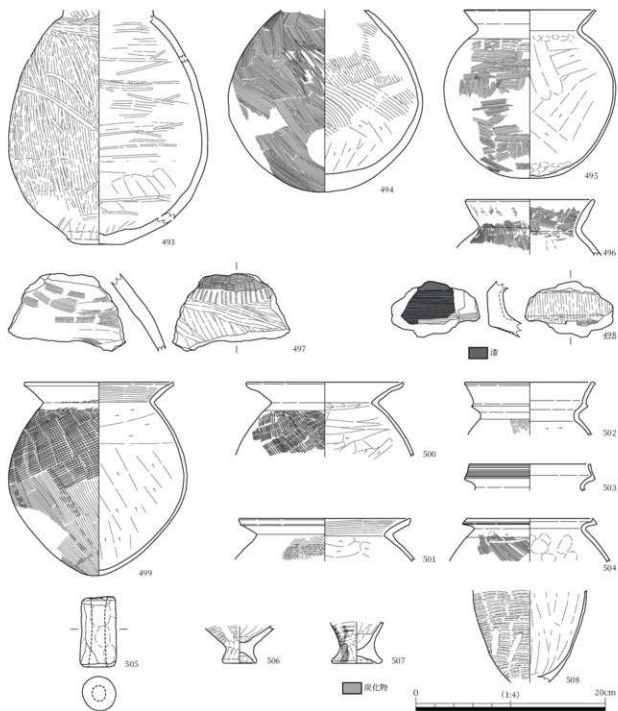


図 88 3区 242 溝出土遺物実測図(2)

土製品

505は管状土錐である。長さ7.4cm、直径3.8cmと大形の円筒形で、外面には焼成時の黒斑が残る。中心孔は直径2.0cmのほぼ正円で中心に位置し、635と同じく中心に棒を置き、粘土の板を巻き付けて成形したと考えられる。外面には粘土をなでつけたナデやユビオサエ痕が残る。

製塩土器

506～508は脚台式の製塩土器である。506は底径3.3cm、残存高3.9cmをはかる。体部下半から底部と脚台部のみ残存するが、一体成形の体脚部連続製作技法で仕上げられている。体部外面は平行タタキ後一部ナデ消し、体部内面はヘラケズリを施す。脚台部はナデとユビオサエで仕上げる。

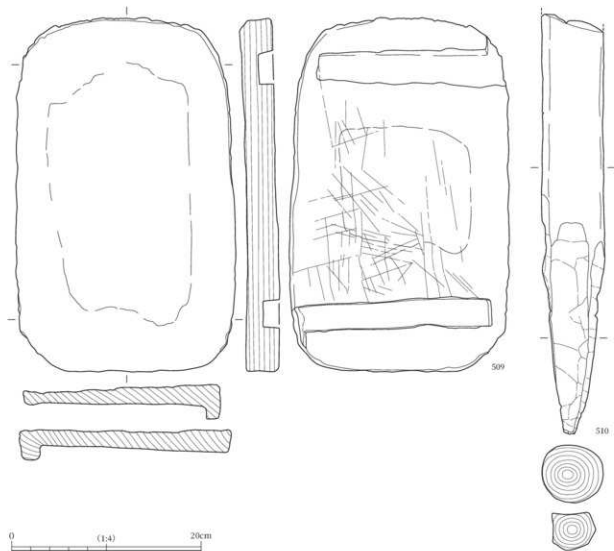


図89 3区 240流路・242溝出土木製品実測図

507は底径4.9cm、残存高4.4cmをはかる。体部下半から底部と脚台部のみ残存するが、一体成形の体脚部連続製作技法で仕上げられている。体部外面は平行タタキ後一部ナデ消し、体部内面はヘラケズリを施す。外面には薫状の炭化物が付着する。脚台部はナデとユビオサエで仕上げる。506・507は古墳時代前期の脚台Ⅲ式である。

508は深い鉢形で体部のみ残存する。体部最大径12.0cm、残存高9.7cm、器壁の厚さ0.4cmをはかる。体部外面は平行タタキ後一部ナデ消し、体部内面は縦方向のヘラケズリを施す。脚台部は失われ、体部はこのまま底部まで仕上げられており、脚部は後で接合されたとみられるので、体脚部分離製作技法である。体部外面は平行タタキ後一部ナデ消し、体部内面は縦方向のヘラケズリを施す。脚台Ⅰ式第1～第2段階、弥生時代Ⅴ様式後半に相当する。242溝の製塩土器は240溝出土より古いものを含む。

木製品

510は242溝に交差して並ぶ杭列の1本である(図80・81、写真図版18-1・2)。芯持ち丸太材の先端を六角形に面取りし尖らせる。樹種はアサダである。

3b層の遺物(図90～97、写真図版46～50、51-1～3)

土器

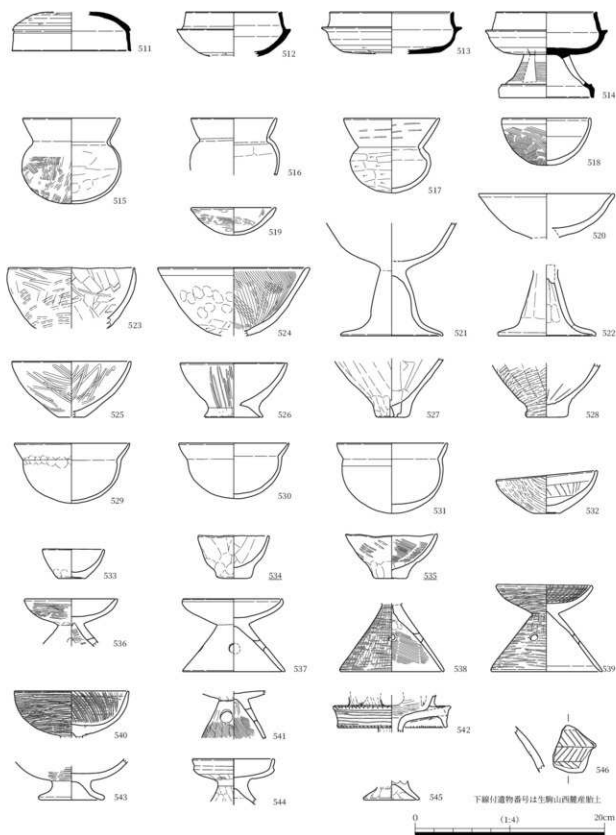


図90 3区 3b層出土遺物実測図(1)

511～514は須恵器である。511は杯蓋である。512・513は杯身であるが、512は有蓋高杯の可能性もある。514は有蓋高杯で、脚部にカキメと三角形の透孔が3カ所に入る。513の杯身は法量が大きく、TK208型式になるが、それ以外はTK23型式でいずれも古墳時代中期となる。

515～609は土師器である。515は小形丸底壺である。球形の体部に大きく開く口縁部がつく。口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面はハケ、内面はナデでユビオサエが残る。

516は小形丸底壺で515に似た器形をとる。口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面は摩滅のため不明、体部内面はナデである。

517は小形丸底壺である。体部が小さく口縁部が大きく長い器形をとる。口縁部内外面は疎らなヘラミガキ、体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はナデで粘土紐の織き目が残る。

518は小形丸底鉢である。底部は平底で口縁端部はやや斜めになる。体部外面は横方向のハケ、内面はナデで内外面に黒斑をもつ。

519は小形の鉢である。外面はナデ後横方向のハケで黒斑があり、内面にもハケの痕跡が残る。515～519は体部が小形化し、口縁部がのびることから古墳時代中期である。

520は高杯で摩滅のため内外面の調整は不明だが、器形から古墳時代中期の無稜外反形高杯と言える。

521も520と同器形の無稜外反形高杯で、口縁部先端を欠損する。摩滅のため調整は不明である。

522は高杯の脚部から裾部である。521と比較すると脚から裾部への屈曲が直線的である。摩滅のため調整は不明瞭だが、脚部外面は縦に削った後ヘラミガキか。内面にはユビオサエや粘土の絞り痕が残る。

523～525は鉢である。523は全体に粗雑なつくりで口縁部は歪む。外面はタタキ後下半が板ナデ、口縁部付近は横方向のヘラミガキを施す。内面は縦横に板ナデを施す。524は深い碗形で、口縁端部は丸くおさめる。外面体部はユビオサエで黒斑があり底部は横方向のヘラケズリ、内面は粗いハケである。古墳時代中期である。525は底部は平底で、内外面とも太いヘラミガキで仕上げる。

526は小形鉢で碗形器形に大きな底部をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向のケズリか。

527は有孔鉢で上半を欠損する。外面底部はユビオサエ、体部内外面は縦方向の板ナデである。

528は鉢としたが、裏になる可能性もある。外面は平行タタキ後板ナデ、内面は板ナデで仕上げる。

529～531は小形丸底鉢である。515・516・518と比較すると、体部が大きく口縁部が短い鉢の器形をとるので、より古い庄内式期の鉢と言える。

529は大きく開く口縁部をもつが、口縁は短く体部もやや浅い。器形は530に似るが、やや器壁が薄い。外面はユビオサエと板ナデ、内面はナデである。530は大きく開く口縁部をもつが、口縁は短く体部もやや浅い。内面はナデだが外面は調整不明である。531は大きく開く口縁部と厚底の体部をもつ。体部外面はヘラケズリ、内面はナデである。

532は鉢である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面口縁部は横方向のナデ、その下は板ナデである。

533はミニチュア鉢である。内外面とも摩滅が著しいが、てづくねで成形され、外面縦方向のハケ後横方向のナデ、内面縦方向のハケか。

534は弥生土器のミニチュア鉢である。てづくねで成形され、外面はナデとユビオサエ痕が明瞭に残る。内面は縦方向のヘラナデである。生駒山西麓産胎土である。

535は小形鉢である。てづくねで成形されたか、口縁は波打ち歪である。外面はタタキのちナデで、底部にはユビオサエが残る。内面は横方向のハケである。生駒山西麓産胎土である。

536は小形器台である。途中で欠損するため、透孔は1カ所のみ確認できる。537と同器形である。杯部外面はヘラミガキで黒斑がある。内面はナデで、脚部内面には横方向のハケを施す。

537は小形器台で透孔は4カ所確認できる。杯部が536より浅い。摩滅のため調整不明である。

538は小形器台の脚部である。円錐形の脚部で4カ所の透孔がある。外面は縦方向の太いヘラミガキ

後細い横方向のミガキ、内面はハケ後横方向のナデを施す。

539は小形器台でほぼ完形である。太い円錐形の脚部に3カ所の透孔がある。杯部は浅くて底部は厚く、口縁端部は丸みを帯びる。杯部外面は細い横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ後放射線状のヘラミガキを施す。脚部外面は細い横方向のヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。

540は小形高杯の杯部で、外面は極細の横方向のヘラミガキ、内面は極細の横方向のヘラミガキ後放射線状のヘラミガキを施す。

541は小形器台で、脚部はやや外に膨らみ、面取り後縦方向のハケを施す。内面は縦方向のハケで直径1.3cmの透孔が3カ所ある。脚部が直線的でなく曲線的であることや透孔が大きいことから、伊勢湾系の搬入土器と思われるが、弥生時代後期中葉の在地系土器の可能性もある。

542は装飾器台であるが、杯部や脚台部のほとんどが欠損し、杯底部の受部が約4分の3出土した(写真図版49-4)。中心に直径2.7cmの脚部をもち、上位には涙滴形の透しが上下交互におそらく10カ所入る。受部の口縁端部は垂下して端面上下に刻目が入り、側面も上下の刻目の間を疑凹線ではなくヘラ描沈線6条で施し装飾する。器壁が厚くわずかに残るたちあがりが開いていない、外面はヘラミガキで調整するか顕著でないなどの点は北陸地方に特有な装飾器台の特徴と異なる。器形が小形化しているので月影式ではなく白江式、庄内式併行期のものである。産地は北陸でも南西部周縁、敦賀周辺ではないかと赤澤秀明氏より教示を受けた。

543は低脚付杯である。杯に低い脚がついた土器だが杯部のほとんどを欠損する。杯部外面にわずかにヘラミガキが残る。山陰からの搬入土器と思われる。

544は小形脚付杯で、底部から垂直に立ち上がる杯部と杯部との接合部が太い脚をもつ。杯部底面はヘラケズリとハケの痕跡、杯部は強いナデにより凹線状の段をもつ。脚部はナデとユビオサエである。

545は低脚付杯の台部と考えたが、東部瀬戸内地域の製塩土器支脚の可能性も指摘された。ユビオサエで仕上げられるが支脚との接合部にわずかにハケが認められる。546は手焙形土器の小片で、傾きから覆部の一部と思われる。ヘラで綾杉(矢羽根)文が描かれる。近江湖東地域からの搬入土器である。

547~551は高杯である。547は有稜高杯で、V様式系の高杯A類である。杯部は内湾してたちあがり、口径に比して深い器高をとる。内外面ともナデ後ヘラミガキだが、ナデが不十分なため外面の粘土紐の痕跡やユビオサエが明瞭に残る。

548も有稜高杯である。杯部は底面から直線的にたちあがる。外面は細い横方向のヘラミガキ、内面底部は横方向のヘラミガキ、杯部は縦方向の細いヘラミガキである。

549は高杯の脚部である。脚部と裾部の境には強いヨコナデにより凹線状のくぼみが生じ、屈曲は直線的である。脚部外面には透孔が4カ所、ヘラで面取りされ、裾部は細い横方向のヘラミガキで黒斑がある。脚部内面はヘラナデで裾部との境にはユビオサエが残る。裾部内面はハケが残る。

550は高杯の脚部である。脚部と裾部の境は直角に近い角度で屈曲する。透孔を4カ所もつ。脚部外面はヘラで面取りされた後ハケ、縦横に細いヘラミガキを施す。裾部はハケ後細い横方向のヘラミガキである。内面はヘラナデで、杯部との境には絞り目が残る。調整不明瞭だが台部外面にハケが残る。

551は高杯の脚部である。脚部はやや膨らみ、曲線的に屈曲する。透孔を4カ所もつ。

552は広口壺である。頸部は直立気味にたちあがり、わずかに外に開いて口縁端部は斜め上方にのびる。体部最大径は中央付近にあるが、体部最大径より器高が高く平底である。外面には黒斑があり頸部から肩部は縦方向のハケ、体部中央横方向のハケ、体部下半はユビオサエ後ナデである。口縁部内外面

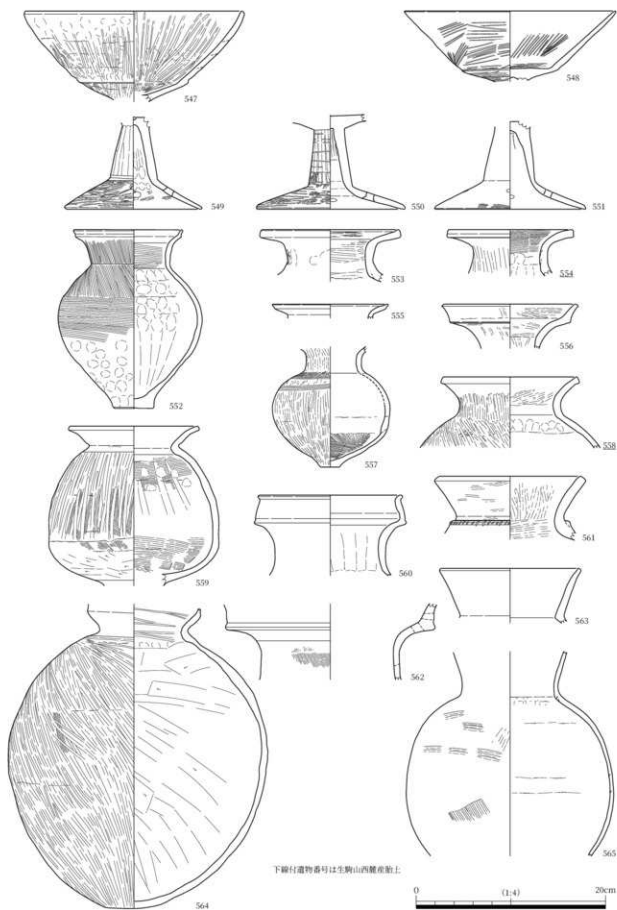


图 91 3区 3b层出土遗物实测图(2)

はヨコナデ、内面頸部は横方向のハケ、上半はユビオサエ後ナデ、下半は板ナデである。

553は広口壺である。頸部は直立し、口縁部はわずかに内に折り返す。摩滅のため調整不明瞭だが、外面にユビオサエや縦方向のハケの痕跡が、内面は横方向のヘラミガキが、内面に黒斑がある。

554は弥生土器壺で生駒山西麓産胎土である。頸部は垂直で口縁部は大きく開き口縁部は平らである。外面は縦方向のハケ後ヘラミガキ、口縁部内面はヨコハケ、頸部内面はユビオサエ後ナデである。

555は壺口縁部である。摩滅が著しく調整不明瞭だが、吉備系の搬入土器になる可能性がある。

556は北近畿、浅後谷南式の器台の可能性があると指摘を受けた。体部外面と口縁部内外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリである。弥生土器加飾壺の円形浮文がとれた可能性もある。

557は小形の壺で広口壺もしくは二重口縁部になると思われる。頸部が広く口縁部は外反し、底部は小さく、体部は横に張る器形をとる。外面は全体に縦方向のヘラミガキを施した後、肩部に2条の横描文、肩部と頸部の境に刻目を施す。体部外面には黒斑がある。内面はナデ後、体部下半にハケを施す。

558は弥生土器壺である。広口で口縁部は平らである。外面は、タタキ後頸部は縦方向のヘラミガキ、肩部は斜めのヘラミガキである。口縁部内面はナデ後ヘラミガキか、頸部から下はナデが不十分で粘土紐の縫ぎ目やユビオサエ痕が残る。生駒山西麓産胎土で、弥生時代後期と思われる。

559は脚付壺あるいは脚付甕であるが、脚部は欠損する。頸部から口縁部は屈曲が強く「く」の字形になり、口縁部は丸くおさめる。体部最大径が中心より下にあり、下膨れの器形をとる。底部は平底で底径約6.6cmの脚がつく。調整は口縁部がヨコナデ、肩部から体部は縦方向のハケ後、縦方向の太いヘラミガキを、底部はヘラケズリを施す。底部外面には煤が付着する。体部内面は横方向のハケ後ナデであるが、きれいにナデで仕上げるのは体部中央のみで、肩部と底部付近にはハケが残る。脚付の壺や甕で、外面調整などは伊勢湾系と呼ばれる東海地方のいわゆる「く」の字形甕に似ており、搬入土器の可能性もある。一方で、体部最大径が中心より下半にある器形や頸部の外反、口縁部は東海地方の土器と異なることから、東海系の土器を模倣して在地で作られた土器の可能性もある。

560は壺の口縁部である。広口の壺で頸部から口縁部は内傾し、口縁部は外方に少し開く。摩滅のため調整不明瞭だが、口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はハケか。頸部内面はユビオサエ後縦方向のナデである。器形は西部瀬戸内産の土器と似るが、施文がない点は異なる。

561は直口壺である。口縁部が平らで頸部に突帯を巡らせ、その上から刻目を施す。東海系の土器の可能性もある。

562は二重口縁部である。口縁部先端と頸部から下は欠損する。口縁は外に開き気味で、摩滅のため調整不明瞭だが、外面頸部にハケが残る。阿波からの搬入土器である。

563は壺口縁部である。口縁部は平らで調整不明である。564は壺で口縁部を欠損する。口縁部に比して大きく膨らむ卵形の体部をもつ。底部はわずかに平らな面をもつ。外面は肩部と体部下半に黒斑がある。外面はわずかにハケが残るが、その上から斜めや縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリで、口縁部はナデ後ヘラミガキ調整である。565は壺である。外面には平行タタキと下半にハケがわずかに残り、黒斑がある。内面は口縁と体部の接合部にはユビオサエが、体部には粘土紐の接合痕が残る。

566～590は庄内式期の甕である。

566は小形の甕で、口縁部の屈曲は緩やかで口縁部は端部を上方に拡張する。体部外面は平行タタキ、内面はヨコハケメである。

567は小形の甕で口縁部は丸くおさめる。体部外面は平行タタキで下半にハケはない。内面は板ナ

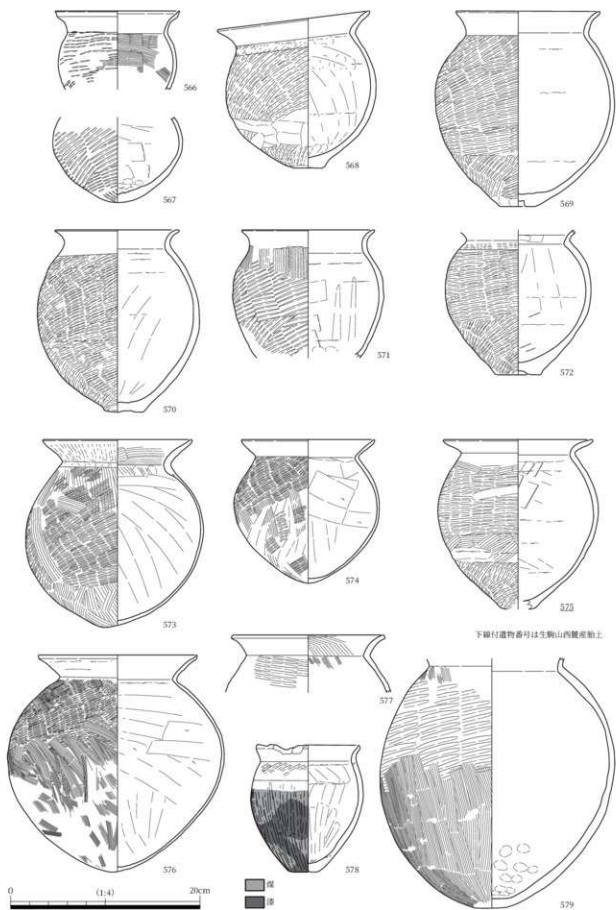


图 92 3区 3b层出土遺物实测图 (3)

デで底部にユビオサエが残る。底部は厚く平底から尖り底への移行段階と捉えるべきか。

568は甕でかなり歪である。内外面ともに煤が付着するが、特に体部外面の上半に厚く付着する。体部外面は頸部から底部まで右上がりの粗い平行タタキだが、底部近くに輪状にナデが認められる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はユビオサエ後板ナデだが、粘土紐の継ぎ目痕や、頸部や底部周辺にはユビオサエが残る。底部が平底でタタキの上にハケ調整がないことから、V様式系の甕と言える。

569は甕である。口縁部の屈曲は弱く直立気味で、口縁部はつまみ上げて丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデである。体部外面は底部までタタキだが、底部から上、体部の3分の1までは右斜め上がりのタタキ、頸部から3分の2は平行タタキ、体部はナデである。外面一面に煤が付着し、このタタキの方向の変化点より上に煤が厚く付着する。竈などの受け口のあるものにかけて使用したためか。また、内面も底から約3分の1の高さまで炭化物が付着しており、実際に穀物などを入れ煮炊きしたと考えられる。底部は平底だが中心にくぼみをもつ。弥生土器後期V様式に近い、庄内初期の甕と考えられる。

570は甕で口縁部は短く丸くおさめ、屈曲は緩やかである。口縁部内外面はヨコナデ、外面は右上がりのタタキで、口縁部から上部3分の2に煤が厚く付着する。体部内面は板ナデか、粘土紐の継ぎ目を右上がりのナデで消している。V様式系の甕で、庄内初期と考えられる。胎土に泥岩が多く花崗岩が入らないことから、在地産でなく搬入土器と考えられる。

571は甕である。口縁部は丸くおさめる。体部外面は粗い平行タタキ後に頸部から肩部に縦方向のハケで、体部下半に煤が付着する。体部内面はユビオサエ後板ナデである。

572は甕である。体部外面は底部までタタキだが、底部から上、体部の3分の1までは右斜め上がりのタタキ、頸部から3分の2は平行タタキ、体部内面は板ナデで体部下半3分の1に煤が付着する。

573は甕でほぼ完形である。大きく膨らむ体部から底部が尖り底になり、肩部から急に器壁が薄くなる。口縁部は丸くおさめ、口縁部外面は粗い縦方向のハケ後横方向のナデ、頸部から3分の2は右上がりの細いタタキ後粗い縦方向のハケ、その下3分の1は粗い縦方向のハケである。口縁部内面は粗い横方向のハケ、体部は底部から下半は垂直方向、中央は斜め方向、頸部付近は横方向のヘラケズリである。外面全体に煤が付着するが、体部を3分割した際の中央部分が特に厚く付着する。

574は甕でほぼ完形である。口縁部は丸くおさめ、口縁部は「く」の字に屈曲する。体部外面は右上がりの細いタタキ後、下半に粗い縦方向のハケ、その後ナデを施す。体部内面は横方向のヘラケズリで、下半はその上からナデである。

575は甕で生駒山西麓産胎土、弥生時代後期末に相当する。体部外面は底部までタタキだが、底部から上、体部の3分の1までは右斜め上がりのタタキ、頸部から3分の2は平行タタキで部分的にハケが認められ、体部全体に煤が付着する。体部内面は板ナデで、底部から上3分の1に炭化物が付着する。

576は甕である。器壁が薄く口縁部は上方に拡張し、わずかに内側に跳ね上げ端面をなす。体部外面は右上がりの細いタタキ後、下半に縦方向のハケを施す。内面はユビオサエ後ヘラケズリである。体部外面は肩より下に煤が厚く付着する。体部内面も下半に炭化物が付着する。573・574・576は米田編年の庄内式期IIIの甕C類である。

577は甕である。口縁部は端面をなし、体部外面は平行タタキ、体部内面は縦方向のハケ、口縁部内面は縦方向のハケを施す。

578は小形の甕でほぼ完形である。口縁部の屈曲は緩やかで、口縁部は上方に拡張し、底部は平らである。外面肩部は右上がりのタタキ後ナデ、体部は縦方向のヘラミガキである。内面はナデおよび板

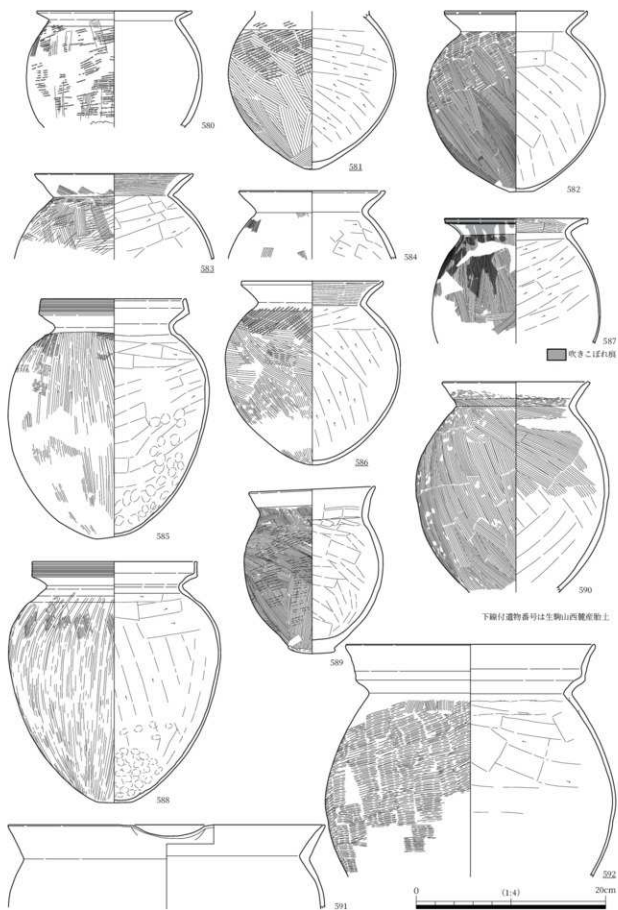


図93 3区 3b層出土遺物実測図(4)

ナデである。体部外面全体が黒色化するが、煤が付着する部分と光沢のある、おそらく漆が塗布された部分がある。また、口縁部には意図的な打ち欠きが認められる。搬入土器と思われる。

579は甕で口縁部を欠損する。体部最大径は中心にあり倒卵形の器形を呈する。底部は平らであるが厚さは薄い。外面肩部にハケが残るが体部はその後平行タタキ、さらに体部下半にはその上から縦方向のハケを施す。体部内面は強いユビオサエ後ナデである。外面下半に煤が付着するが、底部から2cmほど上がったところで、3cm幅で煤が輪状に薄い部分が観察でき、五徳のようなものにかけて使用したと推測される。高知県ひびのきサウジ遺跡、愛媛や四国東部（讃岐・阿波）に類例があり、搬入土器と考えられる。庄内式期併行か。

580は甕で、口縁部は短く折り返し端部は平らである。体部外面は細い平行タタキの上から縦方向のハケを施すが、剥離のため不明瞭である。内面はヘラケズリか。

581は甕で口縁部を欠損する。底部はわずかに平らな面を残す。体部外面は右上がりの平行タタキ後ハケ、内面は横方向のヘラケズリである。内外面全体に煤が付着する。生駒山西麓産胎土である。

582は甕である。口縁部は鋭く「く」の字に外反し、底部はかろうじて平らな面を残す。体部外面は右上がりの細い平行タタキ後、肩より下に縦方向のハケを施す。内面はヘラケズリで、一部被熱し煤が付着する。米田編年の庄内式期IIIの甕C類である。

583は甕である。口縁部外面はハケ後ナデ、口縁部内面はナデ、体部外面は平行タタキ後縦方向のハケ、体部内面はヘラケズリで内外面ともに煤が付着する。生駒山西麓産胎土である。

584は甕である。摩滅のため調整不明瞭だが、体部外面にはハケが、体部内面はヘラケズリが認められる。口縁端部を巻き込む特徴から布留系の甕と思われるが、北陸系の甕の可能性もある。

585は吉備系の甕である。受け口状の口縁部外面には、8条の擬凹線を巡らす。倒卵形の体部外面は横方向のハケ後縦方向のヘラミガキを施し、体部内面は底部辺にユビオサエが残るが、その上から肩部まで横方向のヘラケズリである。外面は口縁部から底部まで煤が付着するが、体部最大径より下位に特に厚く付着する。内面も全体に煤が認められる。高橋編年のIXc～Xa期、庄内式期併行の甕である。

586は甕でほぼ完形である。口縁部は鋭く屈曲し、口縁端部は内側につまみあげる。底部は尖り底で、体部外面は右上がりのタタキ後ハケを施す。口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はヘラケズリである。内外面とも煤が付着する。庄内式期III、庄内新段階の甕で生駒山西麓産胎土である。

587は甕で、口縁部は強く屈曲し口縁端部は平らである。倒卵形で口縁部内面および体部外面は細かいハケを施す。体部内面は横方向のヘラケズリを施す。内外面ともに煤が付着するが、外面は糊化の痕跡が残り、内面頸部まで炭化していることから、穀物等を入れて煮炊きした際に吹きこぼれた様子がうかがえる。土師器としたが、弥生時代後期中葉から末の可能性もある。胎土に角閃石が多くみられることや内面にユビオサエがないなどの特徴から、讃岐からの搬入品の可能性もある。

588は吉備系の甕である。受け口状の口縁部外面には8条の擬凹線を巡らす。倒卵形の体部外面は縦方向のハケ後ヘラミガキ、体部内面は底部辺にユビオサエ、その上は縦方向のヘラケズリ、肩部は横方向のヘラケズリである。外面は口縁部から底部まで煤が付着するが、体部最大径の周辺が特に厚く付着し、内面も体部上半や底部付近に煤が認められる。高橋編年のXa～Xb期の甕である。

589は甕である。口縁部は上方にのび、底部は平底で厚いなど、V様式系の甕と言える。体部外面は太い右上がりのタタキ後細かい縦方向のハケを、体部上半にはその上から横方向のハケを施す。体部内面は板ナデを施す。外面は一面に煤が付着し、内面は5分目くらいまで炭化物が付着する。V様式系の

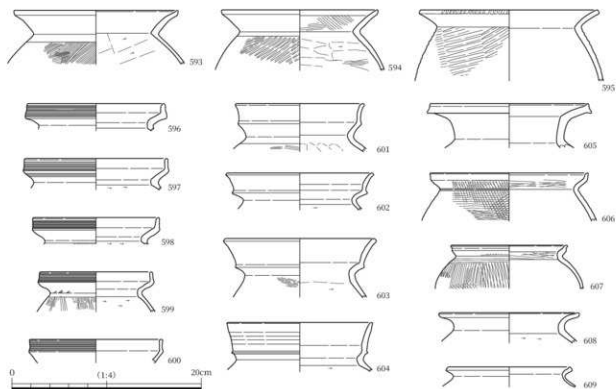


図94 3区 3b層出土遺物実測図(5)

甕で外面調整にハケが入るのは珍しい。

590は甕で、体部の器形は585に似るが、口縁部は折り返さず上方にのびる。外面は細かいハケを施す。体部内面はヘラケズリ後、頸部から体部上半までは横方向のハケを施す。外面に煤が付着する。

591は注口鉢で口縁部から肩部のみ残存する。摩滅のため調整は不明、口縁部がたわみ片口になる。

592は大形の鉢である。複合口縁の口縁部は頸部が短い。体部外面は細かいタタキ後、肩部のあたりにのみ縦方向のハケを施す。体部内面は横方向のヘラケズリである。体部の成形技法は在地のものである。生駒山西麓産の胎土であり、庄内式併行の吉備系の土器を模倣して在地で作られた土器と考える。

593は甕で、口縁部は鋭く外反して「く」の字を呈する。体部外面は細い縦方向のハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデである。

594は甕で、口縁部は鋭く外反して「く」の字を呈する。体部外面は右上がりのタタキ、体部内面はヘラケズリ、口縁部内面はハケである。

595は甕で口縁端部にタタキが入るが、タタキが粗く胎土も異なることから、淡路の土器を模倣した在地の土器と考えられる。体部外面は粗いタタキで、体部内面はナデである。

596～600は吉備系か、その可能性がある甕である。596は口縁部外面に擬凹線が退化した櫛描沈線が入る。口縁と肩の接合部が肥厚する。597も口縁部のみで、直立する口縁部外面に擬凹線が入る。口縁と肩の接合部が肥厚しない点が596と異なる。

598も口縁部のみで、直立する口縁部外面に擬凹線が8条入る。口縁と肩の接合部が肥厚していないが、それで高橋編年IXC期かXb期かの区分の目安になるかもしれない。

599は口縁部から肩部が残る。口縁部外面には7条の擬凹線が入る。外面頸部にはハケが残り、体部もハケ後ヘラミガキが残る。体部内面はヘラケズリである。口縁と肩の接合部、体部は肥厚していない。

600は甕の口縁部で、櫛描沈線が8条入る。

601は有段口縁の甕で、口縁端部は先細りせず丸みをもつ。口縁部外面に擬凹線は施されず、口縁部内面にユビオサエもみられない。若狭で少量出土する甕（敦賀市教育委員会2010）もしくは北近畿系甕であろう。602は有段口縁の甕である。口縁部はいったん突出するような稜線をもち上方にのびる。山陰系の土器である。

603は有段口縁の甕である。いったん段をなしてから口縁部が外に開く山陰系の甕である。外面にわずかに横方向のハケおよびナデである。

604は有段口縁の甕で、口縁部の突出はわずかで、斜め上方にのびる。山陰系の土器である。

605は壺で器形から吉備系と思われる。口縁端部に沈線がある可能性もあるが、調整不明である。

606は甕である。口縁部は緩やかに立ち上がる。外面は口縁部と頸部の境目に沈線が1条入る。外面は縦方向のハケ後横方向のハケ、肩部より下はさらに斜めのハケを施す。内面はナデで、口縁部内面には横方向のハケが残る。全面に煤が付着する。器形は近江系、胎土は山城（乙訓）辺との教示を受けた。

607は甕の口縁部から肩部であるが、球形に膨らむ肩部からきわめて短い口縁部がつき、断面S字状を呈する。東海系のS字壺B類で庄内式期併行である。外面は頸部直下に縦方向のハケ後、横方向のハケで、煤が付着する。体部内面はナデで一部に煤が付着し、口縁部内面はハケが残る。

608は甕口縁部で、外面はヘラミガキにより光沢をもつ。

609は甕の口縁部で小片であるが、片岩を含む胎土から阿波産の土器と判定できる。

610は弥生土器加飾壺の口縁部で2本の沈線の上に円形浮文を貼り付ける。生駒山西麓産胎土である。

611は土師器加飾壺の口縁部で、二重口縁に竹管文を施す。

612は弥生土器壺口縁部である。摩滅が著しいが、口縁部外面に刻目の痕跡が残る。

613は弥生土器加飾壺の口縁部で、円形浮文を貼り付ける。

614は弥生土器二重口縁壺の頸部から肩部である。外面はナデ後口縁部と頸部の境に刺突文を施す。内面は横方向のハケの痕跡がわずかに残るが、全体はナデか。生駒山西麓産胎土である。

615は弥生土器壺の頸部で、頸部の突帯の上から刻目を施す。生駒山西麓産胎土である。

616は弥生土器垂下口縁高杯の口縁部である。弥生時代中期後半のものである。

617は弥生土器大形甕の口縁部である。生駒山西麓産胎土で、弥生時代中期中葉から後葉のものである。口縁部外面に刺突があるものが多いが、これは本来ないのか摩滅で消滅しているか不明である。

618は弥生土器壺蓋である。623のような無頸壺の蓋になる。壺に装着するための紐通しの穿孔が2カ所にある。弥生時代中期か。

619は弥生土器広口壺である。口縁部外面には刻目を施し、外面頸部にヘラミガキ、口縁端に紐通しの孔が2カ所開く。煮炊具の壺で生駒山西麓産胎土は珍しい。

620は弥生土器甕である。端部は外に折れ曲がり4状の沈線を巡らす。弥生時代前期の甕で、生駒山西麓産胎土である。

621は弥生土器壺の口縁部である。弥生時代中期か。摩滅が著しいが口縁部に円形浮文を貼り付ける。

622は弥生土器無頸壺片である。口縁端部を外に折り返し、外面には簾状文を施す。蓋を装着するための紐通しの孔が2カ所ある。弥生時代中期後半か。

623は弥生土器鉢の口縁部と思われる。内外面に漆と思われる朱色の成分が塗布されている。

624は縄文土器深鉢片である。口縁部の文様帯の一部と思われるが、縄文を施した後、4～5条で1単位の沈線で直線や曲線の文様を描く。縄文時代中期末中頃から後期に近い、北白川C式に相当する。

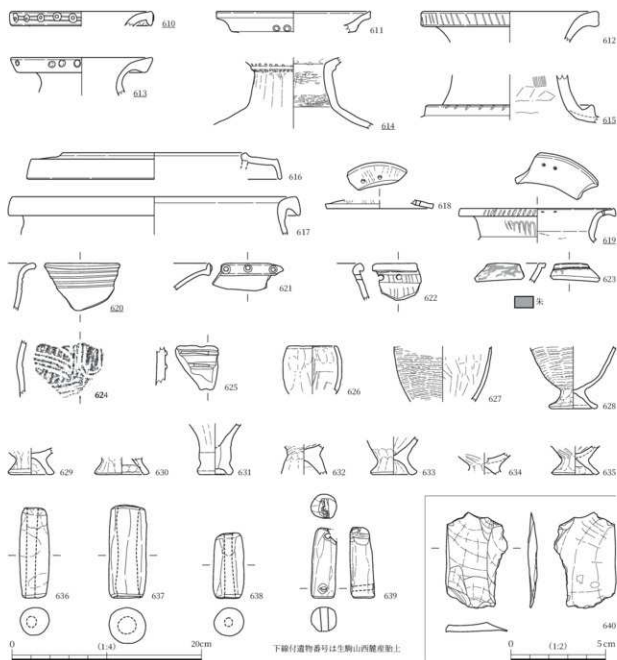


図95 3区 3b層出土遺物実測図(6)

625は縄文土器深鉢である。口縁部に近い部位で、二条突帯を巡らす。縄文時代晩期末と考える。

3b層から出土する土器は、縄文土器から古墳時代中期の土器まで含まれるが、主体となる土器は古墳時代初頭の土器である。外来系の土器が一定量含まれることも注目に値する。在地の土器は庄内式期Ⅲを中心とし、外来系土器も北陸であれば白江式、吉備系であれば高橋編年のXa期を中心とし、その前後の時期など、庄内式期後半併行となっている。

製塩土器

626は丸底形の製塩土器で、口縁部から体部が残し、底部は欠損する。口径4.6cm、残存高5.1cmをはかる。体部外面はナデとユビオサエ、体部内面は板ナデと、口縁付近はユビオサエを施す。外面がタタキでなくナデ調整であることから、紀淡海峡地帯や淡路島海岸部などの海岸部からの搬入品（焼塩を入れた土器）と思われる。古墳時代中期である。

627～635は脚台式の製塩土器で、627・628・630が脚台Ⅲ式、629・632・633が脚台Ⅱ式、634・635が脚台Ⅰ式となる。

627は深い鉢形の体部のみ残存する。体部最大径10.3cm、残存高5.9cm、器壁の厚さ0.3cmをはかる。体部外面は平行タタキ、体部内面は縦方向の板ナデを施す。古墳時代前期である。

628は底径4.6cm、残存高6.6cmをはかる。体部下半から底部と脚台部のみ残存するが、一体成形の体脚部連続製作技法で仕上げられている。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデを施す。接合部から下、脚台部は丁寧なナデとユビオサエで仕上げる。

629は体部が細長い円錐状の形状をとる。体部外面はタタキを施さず、脚柱部が長く直立し、台部も裾広がりというより肥厚した丸みをもつ。脚台の底径4.3cm、高さ2.8cm、厚さ1.0cm前後と脚台Ⅰ式の様相をもつが、底部と体部は一体化して作られている。古墳時代前期か。

632と634は底部の端面も欠損する。摩耗が著しく調整不明なものが多いが、629と635は被熱痕が残る。また、634と635は体部と底部が一体成形でなく、底部と体部の境に貼り付け痕跡が残る。

図化した製塩土器は2区で21点、3区で15点であるが、実際出土した個体数はもっと多い。2区出土品がすべて古墳時代中期の丸底式であったのに対し、3区出土品は1点を除いては古墳時代前期の脚台式であった。2区では古墳時代中期の溝から一括して出土し、3区では古墳時代前期以前に相当する3b層上面の遺構(240流路、242溝)や3b層中からの出土なので、明瞭に時期が分かれ、3b層出土遺物は時期幅がある結果となった。西岩田遺跡から一定数の製塩土器が出土したことは、河内湖や河内潟に面する地の利を活かして、水運を利用して塩が交易品として搬入されたことを物語っている。

土製品

636～639は管状土錐である。636は長さ9.5cm、直径3.1cmと大形の円筒形で、外面約2分の1に焼成時の黒斑や粘土紐の難き目が残り、裏面の一部は欠損する。中心孔は直径1.2cmで、位置が中心よりややずれる。637は長さ9.8cm、直径4.0cmと大形の円筒形で、外面の一部に焼成時の黒斑が残る。粘土板を棒状のものに巻き付けて成形したか、中心孔は正円で中心に位置し、厚さも一定であるが、両端にむかうと厚さは均等でなく、穴の位置も中心よりずれる。中心孔の直径は1.8～2.5cmである。638は長さ7.0cm、直径3.2cmの円筒形で、外面や下端に焼成時の黒斑が残る。中心孔の直径は0.8～1.5cmである。全体をナデで仕上げるが、ハケ状のナデ痕跡が残る。

639は他と異なり、長さ7.4cm、直径2.8cmの棒状で中空でなく、上下に長辺に直交する形で両端に2カ所直径0.5～0.8cmの穿孔をもつ。また、上面は約2分の1欠損するが、長辺に直交する方向に直径0.4cm、深さ0.4cmの筋状のくぼみがあり、穿孔途中か。今回の調査ではこのタイプの出土は1点のみだが、隣接する近畿自動車道の調査では古墳時代初頭の溝1から類例が出土している。

第3b面や3b層中で出土した土錐は、上層(古墳時代中期)の155土器群で出土した301と比較すると、大型で円筒形のものとなる。

石製品

640は3b層中から出土したサヌカイトのスクレイパーと思われる。刃部調整がわずかに認められる。

木製品

641は鋤身と思われる。柄を着脱する孔が見られないことから、一木鋤と思われるが、側面に列り込みをもち、中心から欠損するので、組み合わせ鋤の可能性も残す。身の全体の4分の1、右肩部分は欠損する。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

642は同じく鋤身である。上半を欠損する。表裏面の側面に幅1.2cmの単位で3カ所横ずれのような痕跡が認められる。紐状のもので緊縛した痕跡と考える。板目材で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

643は掛矢である。握りと身が一木を削り抜いて作られている。大きな木材をみかん割りした材から作られていると思われる。全長が53.0cmあり、断面は扁平な円形をなす。表裏面には使用による摩滅があり多数の擦痕が認められ、側面にはノミの加工痕が残る。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。農具や工具である鑿や掛矢は、木質が固いアカガシなどを積極的に原材料に選択していることが分かる。

644は一辺を斜めにした長方形の板で、角は丸みを帯びるように仕上げられている。表裏側面にノミの加工痕が明瞭に残る。厚さ3.0cmと厚く一側面にのみ被熱痕が残る。板目材で樹種はサワラである。

645は頭を円形に加工し、それより下はなだらかなカーブをつけて肩を作り出し、それより下は幅5.4cmの板状製品であるが、上端から19.0cmで下方は欠損する。くびに紐などを掛けて使用した建築材の一部か。榎目取りである。

646は半円形に外縁が丸みをもつ製品であるが、丸みの下には2カ所鋭角的な切れ込みが入る。断面は長方形の板目材である。

647は芯持ちの直径3.3cm程度の丸太の枝を払って六角形に面取りし、左右にくびれを作って、両端に頭を作り出した有頭棒である。左頭と棒部分の六面のうち二面は欠損している。頭の下に削った部分に紐などをかけて用いたか、軸棒に糸などを巻き付けた糸巻具などの紡織具になる可能性もある。樹種はモミ属である。

648は柄穴のある板である。平面形が長方形ではなく、上側が小さく下側が大きい台形である。右側は直線的だが、上側と左側は丸みをもち、曲物底板のように複数の板を組み合わせて、一つの製品とした可能性もある。右側より約2cm内側に入った上下2カ所に幅1.5cm、長さ3.5cmの長方形孔を、左側より約6cm入ったところに幅1.1cm、長さ4.7cmの長方形の孔をもつ。左側の孔には細い紐状の圧迫痕が残るので、この孔に紐などを通していたことがうかがえる。648同様の孔をもつ板は245、247、248、671など複数出土しているが、孔に樹皮を通して結束させて壁材とする例が六大A遺跡で報告されており、住居の一部が漂着した可能性も考えられる。板目材で、樹種はサワラである。

3b層中から出土した木製品は農具や板、紡織具、建築部材など多岐にわたっている。遺存状態も良好であり、流路の氾濫時に土砂を押し流す水流に浮いた状態で河内湖岸まで運ばれたと推測される。

〈参考文献〉

富田克敏 2004 「瓜生堂遺跡出土の石材—弥生時代後期遺構面の自然石—」『瓜生堂遺跡1』（財）大阪府文化財センター

中田敦之・池田榮史 2021 『元軍船の発見 鷹島海底遺跡』新泉社

深澤芳樹・浅井猛宏・荒木幸治・石井智大・杉山真由美・田中元浩・中居和志・三好玄・山本亮・渡邊誠 2022 「近畿地方南部地域における弥生時代中期から後期への移行過程の検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集

福永信雄 2002 「IV考察 3）配石遺構について」『瓜生堂遺跡第46、47—1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会

長崎県教育委員会 2018 『鷹島海底遺跡』

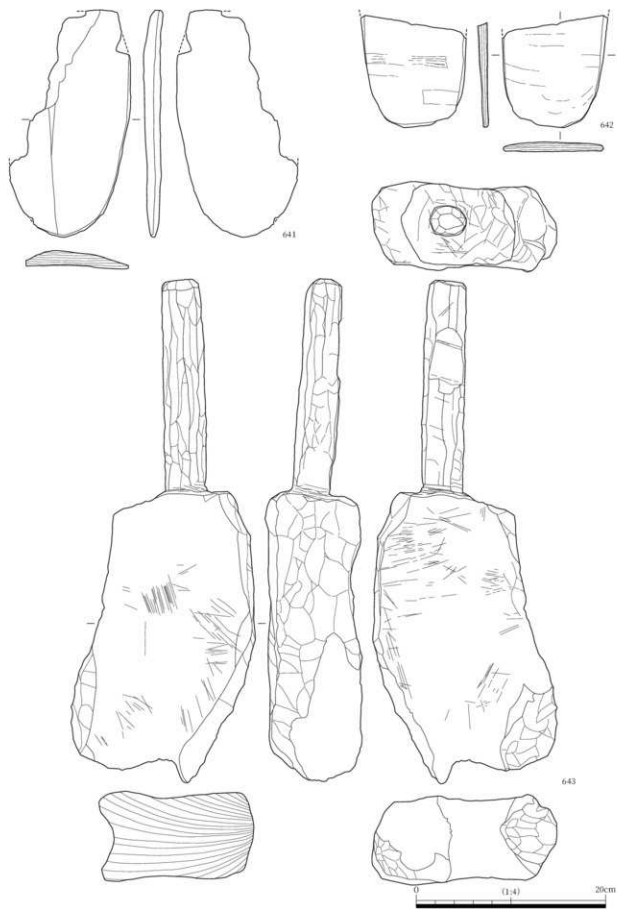


图 96 3区 3b层出土木製品実測图(1)

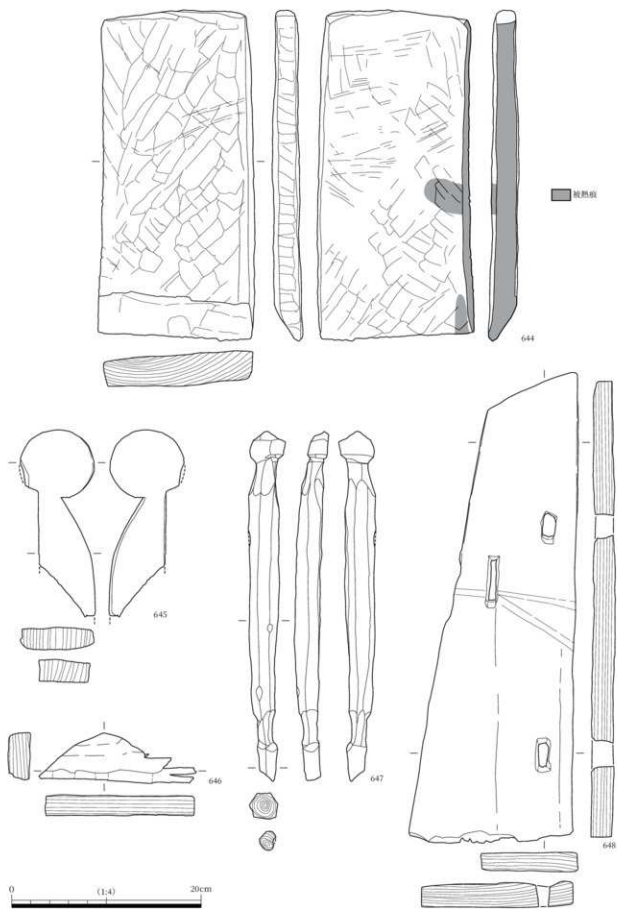


图97 3区 3b层出土木制品实测图(2)

第5節 4区の遺構と遺物

第1項 4区の概要・層序(図98~100)

4区は全調査区の中央より南に位置する調査区である。当初は東西幅7.1m、南北長40.0mの調査区として四周に矢板を打設して調査する予定であった。しかし、X=-147,834~-147,848の区間に関西電力の函渠や大阪府東部流域下水道事務所の立坑が存在し、この区間を鋼矢板で囲って掘削することが不可能と判明した。また、上記構造物築造の際に下層は攪乱されていることも予想された。そこで、大阪モノレール株式会社、大阪府教育庁、当センターで協議の結果、函渠や立坑が存在する区間はオープンカットで法をつけて掘削し、先に調査することとなった。掘削深度は古墳時代遺構面に到達するT.P.0.0mまでとすることとした。

従って、調査区が3つに分断されることとなり、北から調査区を4-1区、4-2区、4-3区と呼称した。オープンカットの区間(4-2区)を調査後に埋め戻して、その後4-2区より北(4-1区)と南(4-3区)は鋼矢板を打設し調査を実施した。また、当初予定していた空中写真測量も一度に撮影できる面積が減少したため、4区については実施しなかった。

4-2区は、令和4年1月中旬から機械掘削を開始し、1月末には調査を終了した。4-1区と4-3区は令和4年4月から鋼矢板圧入を開始、5月中旬より機械掘削を開始した。6月初旬より人力掘削を開始し、8月末で調査を終了した。

1・2・3区同様、現地表はT.P.+3.2m前後であり、T.P.+0.8m前後までは重機にて掘削した。T.P.+0.8m前後から人力掘削を開始し、T.P.-1.5mまで掘削および平面調査を行った。必要に応じて調査区の辺に沿って排水と土層観察を兼ねて側溝を設け、土層観察を行うために壁面を残した(4-1区は北壁、西壁、南壁を、4-2区は北壁と南壁を、4-3区では西壁を図化した)。4区ではクレーンによる空中撮影と図化は実施せず、レーザー測量による平面図化や高所作業車による全景写真撮影を行った。

4区の層序は図6の基本層序模式図でもわかる通り、3区に比較して標高が上昇する傾向にある。層位としては他の調査区同様に、4a層までを確認して終了した。

4-1区は現地表からT.P.+1.0m前後までは近現代の造成土や旧耕作土、次いで近世の耕作土層(1a層)、T.P.+0.5~0.0m前後は中世後半から近世の包含層(2a層)である。2a層は細分可能である。3a層はわずかに認められるが、層厚0.1m未満である。X=-147,822以北の北西部には、部分的に3a層の上層に層厚0.05~0.1mの細かい砂礫層が堆積する(西壁断面図の7が相当)。この砂礫層上面で掘立柱建物を検出し、砂礫層を除去した3a層上面からは南半では溝やピットを検出したため、砂礫層上面で第3面上面、3a層上面を第3下面とした(図101)。

T.P.+0.3~-1.0mには、3b層が約1.5mの厚さで堆積していた。ラミナも認められる極細砂から細砂の砂礫層で、ほぼ水平に堆積する。2a層から3b層までは弥生時代から中世の遺物をわずかに含む。3b層の下層にあたるT.P.-1.0~-2.0mには灰色シルト層および腐食した有機物、ヨシなどの水生植物の根茎を含んで黒色化したシルト層(4a層)が堆積していた。4a層は無遺物層と捉えられるが、4-1区北壁最下層(西壁断面図の15が相当)より弥生時代中期の甕(657)が出土した。

4-2区は上記の理由によりオープンカットで掘削したが、構造物を埋設した際の攪乱等が激しい上、掘削深度も現地表(T.P.+3.2m)からT.P.0.0mまでにとどまるため南北方向の地層断面を図化し得えず、北壁と南壁で断面計測を実施した(図99)。T.P.+2.8~+0.6mは盛土が1m以上堆積し、その下層

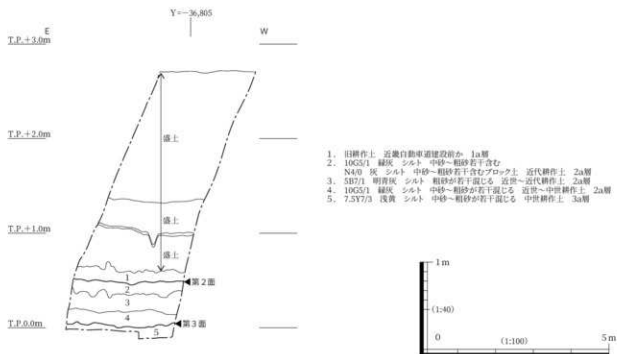


図99 4-2区 南壁断面図

には近代の耕作土（1 a層）が層厚0.1m、中世から近世の耕作土（2 a層）が層厚0.5mで堆積する。T.P.0.0mで第3面を検出した。いずれの層からも遺物は出土していない。

4-3区は1辺7.0m未満の調査区のため、西壁でのみ断面を計測した（図100）。隣接する4-2区同様、現地表はT.P.+2.8m前後で、T.P.+0.5m前後までは近現代の盛土や近世の旧耕作土（1 a層）が堆積していた。大きく攪乱されており上層が崩落したため、断面実測はT.P.0.0m以下で実施した。T.P.0.0～-0.4mまでは中世後半から近世の包含層（2 a層）が堆積する。その下層に3 a層は約0.1mの厚さで認められ、T.P.-0.8～-0.4mまでは3 b層が堆積する。T.P.-2.0～-0.8mまでは黒褐色シルトと灰色シルトが約0.1mの層厚で交互に堆積する（4 a層）。

4区の層序も他の調査区と大きく変わることはない。ただし、盛土から2 a層の堆積が厚く、本来存在していた3 a層が削平されたのか、4-1区では部分的に、4-2区と4-3区でもわずかに認められるに過ぎない。4-1区北西では3 a層上面に砂層が堆積し、遺構が検出できたが、この砂層も上面は削平された可能性がある。また、3 b層の層厚が南にいくほど薄くなり、かわって4 a層が高い位置で検出され、堆積も厚くなる。3 b層には弥生時代後期末から古墳時代前期の遺物が多く含まれるので、4 a層がそれ以前の堆積層と考えられる。弥生時代後期以前には、4区から南が4 a層の標高が比較的高かったと言える。

第2項 4-1区の遺構（図101～103、写真図版21～23）

遺構面としては、第3面上面と第3面下面の2面を検出した。

3 a層上層にあたる砂礫層が調査区北端からX=-147,822周辺まで部分的に堆積していた。砂礫層上面（第3面上面）では、調査区西側で掘立柱建物3を、掘立柱建物3内の413柱穴と416柱穴間で418ピットを、掘立柱建物3の東側で419ピットを検出した。

砂礫層を除去すると調査区北半では遺構は認められず、中央から南半の3 a層上面（第3面下面）で

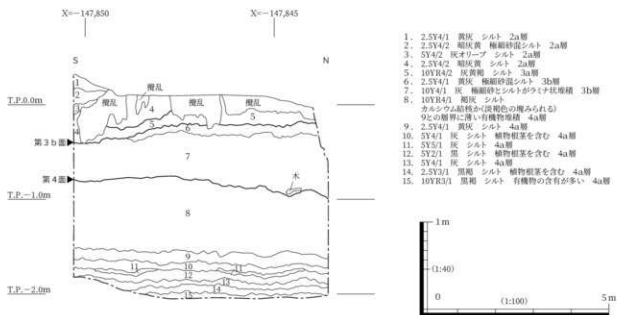


図100 4-3区 西壁断面図

は、404溝やピットを複数検出した。

第3面上面 (図101、写真図版21-1) 第3面上面はT.P.+0.5~+0.7mで検出した。調査区内は北西から南東に低くなる地形である。遺構としては、掘立柱建物1棟(掘立柱建物3)とピット2基を検出した。これらの遺構は調査区北西隅から調査区中央で部分的に堆積する砂礫層の上面で検出した。

掘立柱建物3 (図102、写真図版22、表3) 調査区の中央よりやや南、X=-147,818~-147,822、Y=-36,803~-36,806間で検出した。

東西柱筋は1間で規模は1.6m、南北柱筋は2間で規模は3.2mである。それぞれの柱間は1.6mである。柱穴は1辺0.5~0.7m、深さは0.1~0.3mをはかり、多くが隅丸方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、砂礫混じりのシルトが埋積する。いずれの柱穴からも柱痕跡あるいは柱の抜き取り痕跡が確認でき、その規模は直径が0.15~0.3m、深さは0.1~0.35mをはかる。さらに西に柱穴が存在する可能性がある。

いずれの柱穴からも遺物が出土していない。そのため明確な時期は決定できないが、柱穴の規模や形状は掘立柱建物1・2と似るため、古墳時代後期から奈良時代の遺構と推測される。

418・419ピット (図103) 418ピットは掘立柱建物3の413柱穴と416柱穴の間で検出した。直径0.2m、深さ0.05mをはかる。平面が円形のピットで、断面は皿形を呈する。

419ピットは掘立柱建物3の北東、413柱穴から約5.0mの距離で検出した。直径0.35m、深さ0.15mをはかる。平面が円形のピットで、断面は皿形を呈する。

第3面下面 (図101、写真図版21-2) 第3面下面是北西部にのみ堆積する砂層を除去した3a層上面にあたり、T.P.+0.35~+0.4mで検出した。調査区中央より南半で404溝や複数のピットを検出した。

404溝 (図103) 調査区中央西端から南東にのびる溝である。両端は調査区外に延長する。幅0.4m、長さ8.5m、深さ0.05mをはかる。深さがほとんどなく地形の高低差に沿う様に位置する。しかし、401~403ピットが407溝と切り合い、その角度が垂直となることから、地形に沿って自然にできたくぼみや落ち込みではなく、人為的につくられた溝と考えた。

401~403ピット (図103) 401・402・403ピットはほぼ同規模で、いずれも直径0.25~0.35m、深さ

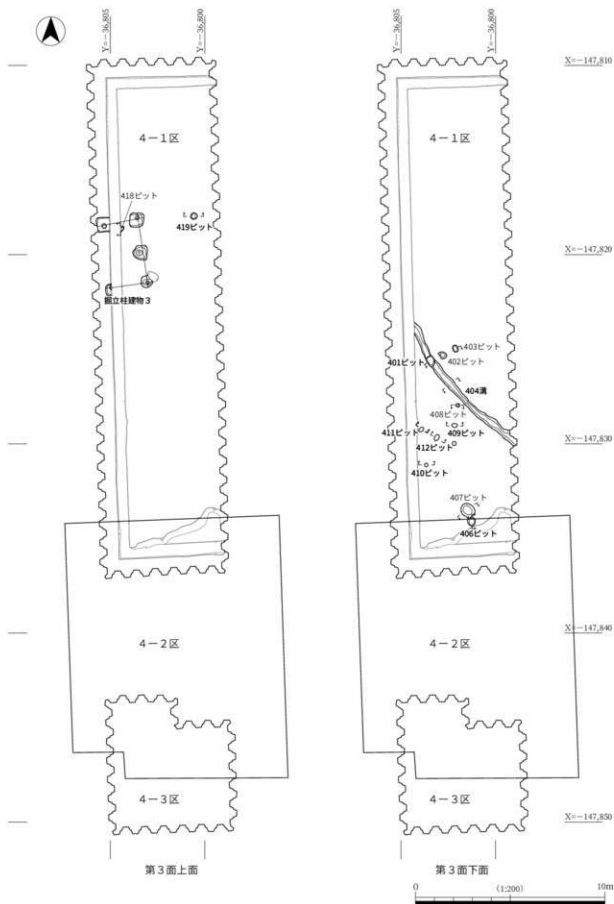
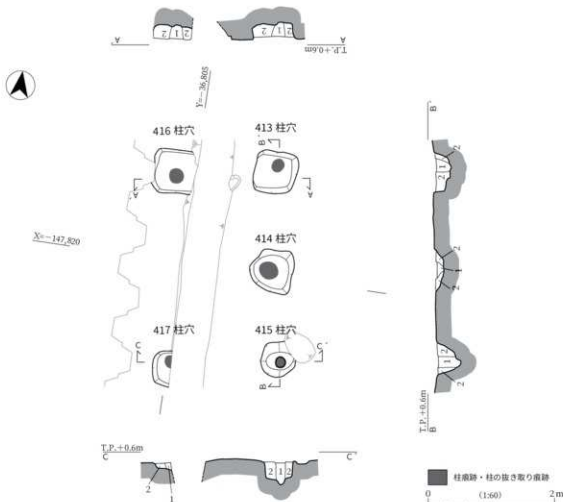


図101 4-1区 第3面上面、第3面下面平面図



- 413柱穴
 1. 5Y4/2 灰オリーブ 極細砂～シルト 柱痕跡か
 2. 10Y5/2 オリーブ灰 砂礫混シルトブロックと 2.5GY5/1 オリーブ灰 砂礫混シルトブロックが1:1で混じる
- 414柱穴
 1. 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂～シルト 柱の抜き取り痕跡か
 2. 2.5Y5/3 黄褐色 礫混細砂
- 415柱穴
 1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト 柱痕跡か
 2. 10Y5/2 オリーブ灰 砂礫混シルトブロックと 2.5GY5/1 オリーブ灰 砂礫混シルトブロックが1:1で混じる
- 416柱穴
 1. 7.5Y4/3 暗オリーブ シルト 柱痕跡か
 2. 5Y4/4 暗オリーブ 礫混極細砂と 7.5GY6/1 暗灰 礫混極細砂のブロックが1:1で混じる
- 417柱穴
 1. 10Y5/2 オリーブ灰 シルト 柱の抜き取り痕跡か
 2. 5Y4/4 暗オリーブ 極細砂と 7.5GY6/1 緑灰 極細砂のブロックが1:1で混じる

図102 4-1区 掘立柱建物3平・断面図

0.05～0.1mをはかる。401ピットは404溝を切り、404溝と交差するように3つのピットが0.4mの等間隔で並ぶ。

406～412ピット (図103) 406ピット、408ピットから412ピットも調査区中央より南半、404溝の南西で検出した。いずれも平面が円形もしくは長円形のピットで、直径0.25m、深さ0.05m程度である。機能、用途は不明である。

407ピットはやや大きく直径0.65m、深さ0.1mをはかるが、その他のピットはいずれも0.15～0.4m、深さ0.05～0.1m程度である。412ピットからのみ須恵器土器小片が出土したが、時期は不明である。

2 a層には中世から近世の陶器や瓦、黒色土器A類椀、古墳時代の須恵器が出土した。また、3 b層からは古墳時代の土師器や弥生土器が出土した。3 a層からの出土物がないが、第3面上面は掘立柱建物3が2・3区で検出された掘立柱建物と同時期とすると、古墳時代後期から古代の遺構面と考えら

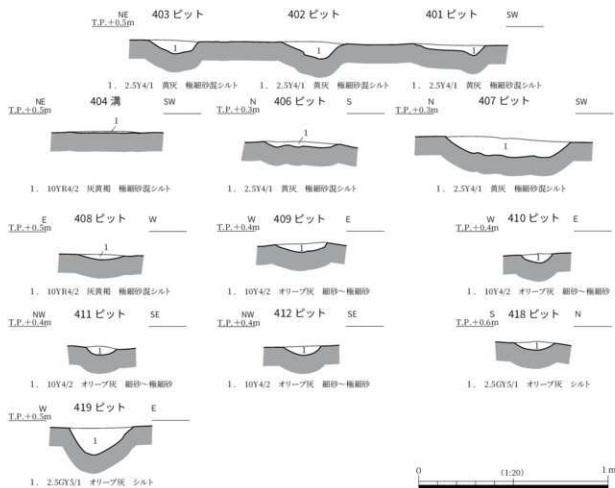


図103 4-1区 第3面遺構断面図

れる。第3面下面はそれ以前の遺構面となるが大きな時期差はなく、古墳時代中期から後期の遺構面と考えられる。

4-1区も平面調査はT.P.約-1.5mまでとしたが、断面調査についてはT.P.約-2.0mまで行った。

北壁の最下部、T.P.約-1.9m付近の4 a層に相当する層位で、弥生土器壺が1点出土した(図98、写真図版23-1)。

他の調査区では4 a層からは遺物が1点も出土せず、4 a層は無遺物層と考えられてきた。しかし、4-1区の4 a層、T.P.約-1.9mから出土した壺は、体部下半から底部、全形の4分の1程度を有している。ローリングを受けていないことから、流勢によって遠くから運ばれてきたのではなく、比較的近くで使用されていたが、近辺の集落から何らかの理由で遺棄されたと考えられる遺物である。時期は弥生時代中期前半、III様式と考えられ、生駒山西麓産胎土である(図105-657)。

4-1区調査以前に、2区の南壁で3 b層から4 a層の土壌サンプルを4点採取し、AMS年代測定委託を実施した(第4章第1節参照)。その結果、土器(657)出土層と同位と推定される4 a層下層については、紀元前4世紀半ばから紀元前1世紀半ば、弥生時代中期IIIからIV様式の年代が求められた。つまり、自然科学的測定で求められた絶対年代と土器の型式編年から考えられる実年代がほぼ一致したことになる。

また、これまで3 b層には主に弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が含まれるが、4 a層からは遺物の出土が皆無であった。全調査区中で1点のみの出土であるが、4 a層中から時期が明確に分かる遺

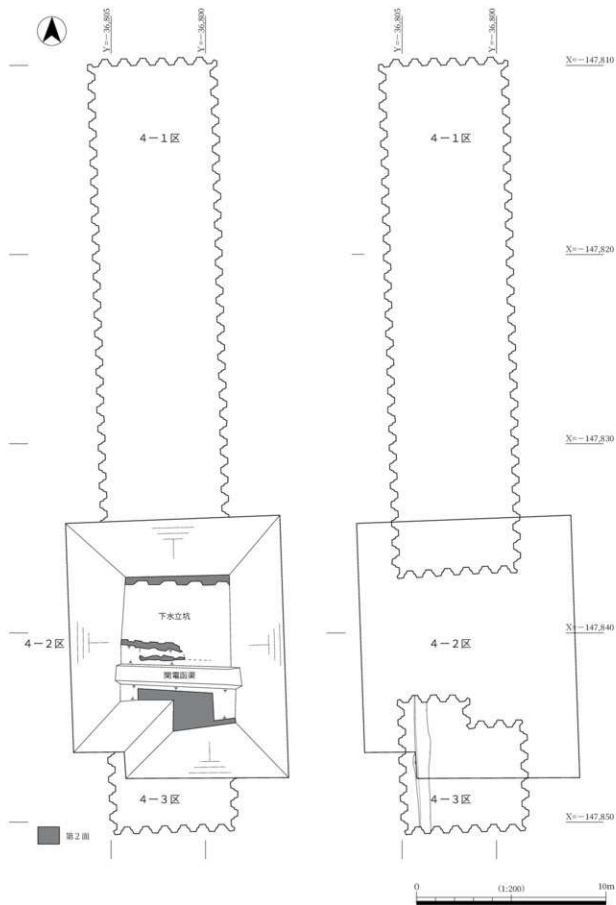


图 104 4-2区 第2面、4-3区 第3面平面图

物が出土した意義は大きい。

第3項 4-2区の遺構(図104、写真図版23-2)

オープンカットで掘削するため、掘削開始面は東西幅11.5m、南北長辺14.0m、南北短辺12.0mをとって、勾配をつけながら機械掘削を行った。

近現代の盛土(1a層)がT.P.+2.8~+0.6mまで、約2.2mの厚さで堆積していた。その後人力掘削を行ったが、2a層がT.P.+0.6~0.0mまで堆積していた。T.P.約+0.2mで関西電力の函渠が露出したため、これを第2面(2a層上面)として、電子平板を使用して平面実測を実施した。

次に、T.P.0.0~0.1mで3a層を検出し、標高等を計測して調査を終了した。4-2区の人力掘削範囲は東西幅7.0m、南北長辺8.0m、南北短辺7.0m、調査面積は約50m²である。

第2面は関西電力の函渠の埋設や東部流域下水道事務所立坑設置によって大きく攪乱されているため、遺構面の残存状況は悪い(図104のアミフセしてある範囲が遺構面)。遺構は検出できなかった。遺物はごく小片であるが、2a層中より須恵器が出土している。

他調査区では2a層を中世後半から近世の包含層と捉えており、それに準じるなら4-2区第2面の時期も中世後半以降となる。

第4項 4-3区の遺構(図104、写真図版23-3)

4-3区は全調査区中で最小の調査区で、東西幅7.0m、南北長辺7.0m、南北短辺6.0m、調査面積は約46m²である。4-1区と並行して機械掘削、人力掘削、調査を実施した。

4-2区の構造物設置時に攪乱を受けたと思われる、上層は大きく攪乱されて2a層も部分的にしか残存していなかった。3a層は認められず、2a層の下には3b層が約0.6mの厚さで堆積していた。3b層の下には4a層が約1.3mの厚さで堆積していた。遺構面は検出できず、遺物も2a層中より瓦器底部が出土したのみである。従って、2a層は中世の包含層と言える。

4-3区の特徴としては、3b層の堆積が他の調査区と比較すると0.5m程度と薄く、4a層の標高が高い。4-1区から南にいくほど4a層の標高は上昇する傾向がある。

第5項 4区の遺物(図105、写真図版25-2・6)

土器

649~653は4-1区の2a層から、654は4-1区の3a層から出土した。

652は須恵器杯蓋で天井部を欠損する。653と654は須恵器有蓋高杯である。653と654の有蓋高杯は2点とも脚部のみ残存するが、カキメを施す。654は三角形の透孔を有し裾部分は鋭角的に折り返すが、653は透孔がなく裾部にかけての折り返しがなだらかな器形をとる。須恵器はいずれも古墳時代中期に相当する。

649は陶器碗で、ロクロ成形され、成形後に内外面ともに施釉するが畳付は露胎である。底部は削り出し高台で成形され、唐津焼と思われる。

650は黒色土器A類椀の底部で摩滅が著しいが、高台径が大きく断面三角形で外に張り出すことから、10世紀代と考えられる。

651は平瓦の一部だが、凸面にはヘラケズリ、凹面には布目痕と縄状の紐と思われる痕跡が残る。凹

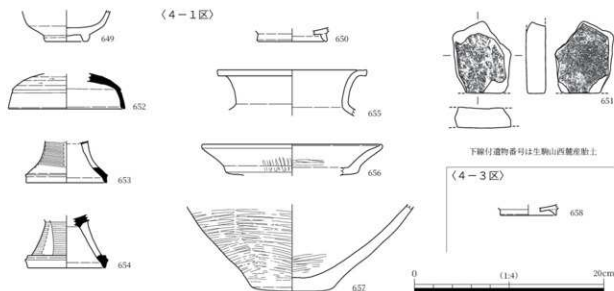


図105 4-1区・4-3区 出土遺物実測図

面にあてた布の継ぎ目か。649～651は中世後半から近世の遺物と考えられ、図化し得なかったが他に三足の付く瓦質土器羽釜も出土している。出土遺物の時期が広範囲にわたるが最も新しい遺物の時期から、4-1区の2a層出土遺物は中世後半もしくは近世に属するといえよう。

655・656は4-1区の3b層中からの出土である。655は土師器壺の口縁から肩部で、外面に大きく開き口縁端部は平坦である。656は弥生土器二重口縁壺の口縁である。従って、3b層は古墳時代以前の遺物を包含すると言える。

657は4-1区北壁最下層、4a層下層から出土した弥生土器甕である（写真図版25-6）。残存する部位は体部下半と底部のみであるが、さほど摩滅しておらず外面にヘラミガキ、内面下半にミガキを施す。生駒山西麓産胎土である。底部から体部が膨らんで大きく広がる器形から、弥生時代中期前半、Ⅲ様式に相当すると考えられる。

4a層中から遺物が出土したのは全調査区を通じて、657の1点のみである。657が出土した層位は、2区南壁断面で実施したAMS分析の試料4採取地点と一致しており、AMS分析結果からこの層位は紀元前4世紀半ばから紀元前1世紀半ばという絶対年代が得られている。土器の型式編年による相対年代から累積した研究によって考えられる年代観と、科学的分析によって求められた実年代とがほぼ一致する結果となった。

4-2区2a層からもわずかに須恵器が出土しているが、図化し得なかった。4-2区は、古墳時代の遺構面も存在していた可能性もあるが、後世に大きく攪乱を受けたため残存していないと思われる。

4-3区からは658の1点のみ図化し得た。658は2a層中より出土した和泉型瓦器椀である。底部のみ残存するが、高台断面が三角形を呈することから和泉型Ⅲ型式、12世紀後半から13世紀の所産と考えられる。従って、4-3区にも1区から3区で検出されたような、中世以降の遺構面が存在していた可能性はある。

第6節 5区の遺構と遺物

第1項 5区の概要・層序(図106・107)

5区は全調査区の最南に位置する調査区である。東西幅は南辺が11.0m、東西幅は北辺が7.0m、南北長37.0mであるが、東辺がX=-147,900辺りから北に向かって7.0mごとに幅2.0mずつ狭まり階段状になる、長方形が一部欠けた形状をとる。調査面積は341m²である。

令和4年10月から機械掘削を開始し、続いて11月から人力掘削を開始、令和5年3月下旬に大阪府教育庁の立会を受けて調査を終了した。

1区から4区同様に現地表面の標高はT.P.+3.2m前後であり、T.P.+1.0m前後までは重機で盛土や近現代の耕作土を掘削した。T.P.+1.0m前後から人力掘削を開始し、T.P.-1.5mまで掘削および平面調査を行った。調査区の北辺、西辺、南辺に沿って排水のために側溝を設け、その外側、外周に土層観察を行うために壁面を残し断面実測した。第3b面でラフテレーンクレーンによる空中撮影と図化を実施した。その他、レーザー測量による平面実測や高所作業車による全景写真撮影を必要に応じて数回行った。

5区の層序は以下の通りである。西壁と南壁断面を掲載した。

現地表からT.P.+0.5m前後までは、近現代の盛土や旧耕作土にあたる1a層が堆積する。T.P.+0.5～+0.1m前後は、中世後半から近世の包含層にあたる2a層が堆積する。1a層と2a層の層界は細かい波状に上下する。2a層は土壌としては締りが悪く、耕作地として使用するには不適当な環境だったと推測される。また、2区や3区で主要遺構面を構成する3a層の堆積は、5区では認められない。

3b層はT.P.+0.1m以下で約0.5～1.0mの層厚で堆積する。

T.P.-0.5～-2.0mには、灰色シルト層と腐食した有機物、ヨシなどの水生植物の根茎を含み、より濃色化してみえる黒褐色シルトの4a層が堆積していた。

4a層の下層では、灰色や青灰色シルト層と黒褐色シルト層が約0.1m幅の帯状に互層となってみられる。

2区や3区では3b層の堆積が厚さ2.0～3.0mにおよぶ箇所もみられる。水勢が強くと一挙に砂礫が堆積したためと考えられる。砂層の堆積状況を観察すると、ラミナが水平な範囲と斜交する範囲があることや、粒径の違いによって3b層が細分できる。堆積が何段階かに分けて起きたことが観察できる。4区や5区では3b層の厚さが約0.5mで、水勢や水量が2区、3区ほど強くなかったと推測される。

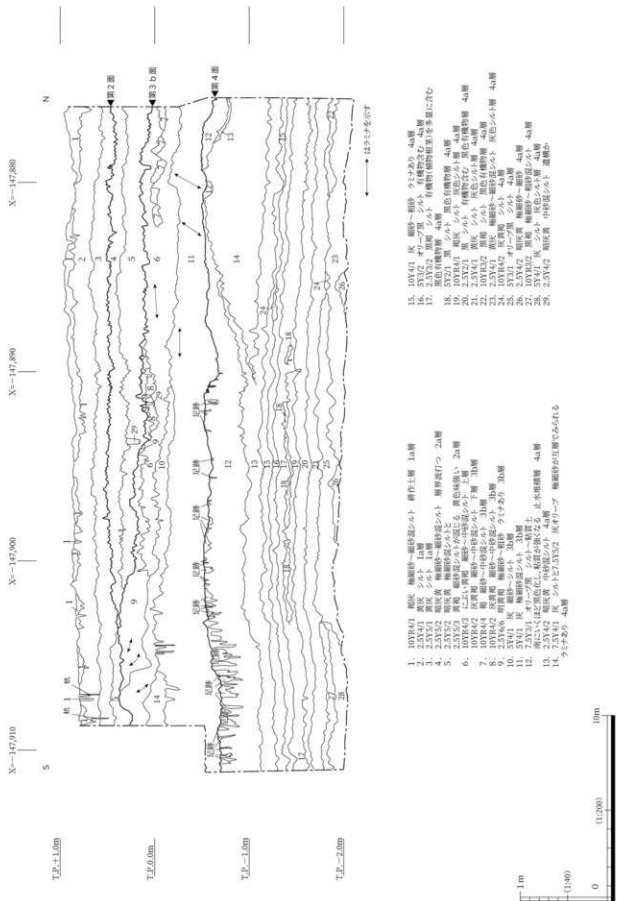
5区は4a層の堆積が厚いことが特徴である。湿潤な環境であったため有機物の遺存状態がよく、3b層と4a層の層界(第4面)からは木製品が多数出土している。

顕著な遺構は検出できなかったが、3b層上面や4a層上面で人の足跡を検出したので、それぞれを第3b面および第4面を遺構面として報告する。

第2項 5区第3b面の遺構(図108、写真図版24-1・2)

3b層の堆積が厚く、細分可能であった。2a層と3b層の境界ではなく、T.P.-0.2m前後で足跡が認められた砂層上面を第3b面とした。

調査区内は北から南に下がる地形であり、特にX=-147,900以南では、北東から南西に向かって下がる不定形の落ち込みが広がる。この落ち込みの中や落ち込みとの境界周辺で、人と思われる足跡や、



X=147,010 X=147,000 X=147,800

T.P. +1.0m

T.P. 0.0m

T.P. -1.0m

T.P. -2.0m

図106 5区 西壁断面図

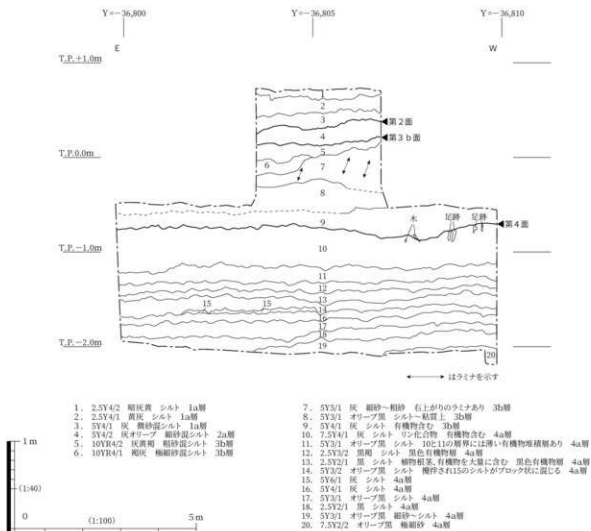


図 107 5区 南壁断面図

杭 (669) を検出した。

出土遺物はわずかだが、上層の 2 a 層最下層に古墳時代中期の須恵器や円筒埴輪片が含まれることから、第 3 b 面は古墳時代中期以前の遺構面と考える。

第 3 項 5区第 4面の遺構 (図108、写真図版24-3)

第 4 面は 4 a 層直上面にあたり、T.P.-0.6~-0.5m で検出した。北側および中央部がやや低く、北から南に下がる地形である。標高が低い部分は、4 a 層中でも有機物が多く含まれる層が不定形に広がる (有機物検出範囲として図示した)。

第 4 面は遺構は検出していないが、広範囲で人の足跡を多数検出した。なかでも、X=-147,903、Y=-36,810 付近を起点として西から東へ、あるいは南から北へと向かい、途中で東へと進行方向を変える人の足跡がみられた。5区第 4 面は湿地状の地盤であったため、居住や生産には適さない環境ではあったが、5区に近い箇所には人が住み、往来していたことが足跡から明らかになった。

第 4 面直上から古墳時代初頭の土師器が出土していることから、第 4 面は古墳時代初頭以前の遺構面と考える。また、4 a 層中からは櫛や紡織具などの生活用品と言える木製品が多数出土していることも、人が 5 区周辺で生活していた根拠となろう。



图 108 5区 第3b面・第4面平面图

第4項 5区の遺物（図109～111、写真図版25-3～5・7、52-1～3・5・6）

土器・埴輪

659～661はいずれも2 a層から出土した。

659は須恵器杯蓋である。天井部は欠損し、稜が鈍くなり不明瞭になる。660は土師器鍋か甕の把手であるが、断面は扁平で先端は上方にのびる。659・660とも古墳時代中期以降と思われる。661は土師質の円筒埴輪副片である。タガの断面が台形を呈するが、内外面の調整は不明である。

662～664は4 a層上面から出土した。

662・663は土師器甕である。662は体部下半から下を欠損する。口縁部は「く」の字に外反し、体部外面に右上がりのタタキを施し煤が付着する。663は口縁部と底部を欠損するが、体部は球形を呈し体部外面は右上がりのタタキを施す。664は土師器壺の頸部から肩部であるが、体部外面に平行タタキを施す。土器はいずれも庄内式期のもので、4 a層上面出土遺物は古墳時代初頭に属すると考えられる。

金属製品

中近世の耕作土（1 a層・2 a層）中からは、キセルの雁首2点と銅銭1点が出土している。

665は銅銭の永楽通宝で2 a層から出土した。15世紀以降、近世のものと思われる。666・667は羅宇煙管の雁首にあたり、銅もしくは真鍮でできている。666は1枚の板を丸めて円柱状にしてあり、継ぎ目は溶接してある。667も同様に板を丸めて作られているか、継ぎ目がある。666より雁首が短く、火皿の径は大きい。いずれも近世の所産である。

石製品

668は硯である。表採のため正確な出土位置や層位は不明であるが、1 a層か2 a層からの出土である。石材は粘板岩と思われ、上方約3分の1にあたる海部分は欠損し、陸部分もわずかに外縁が残るのみである。表裏面および側面に無数の擦痕が残るため、硯として使用された後に台石や俎板に転用された可能性がある。中世以降の製品と思われる。

木製品

669は第3 b面の落ち込みで検出した杭で、側面四方を削り四角く仕上げる（図108）。上部は欠損して杭先のみが残るが、杭先は斜めに削り出す。側面に擦痕がある。

669以外の木製品は3 b層と4 a層の境界から出土した。670は角杭で上方を欠損するが、欠損している部分には一面からみると幅約10.0cmの正方形もしくは長方形の孔がある。杭先近くには、表面からみると幅約5cmの長方形の孔が、裏面からみると幅約5cmの長方形の孔の下に同じ幅で約9.0cmのくぼみが続く。穴内に別の部材を通して組み合わせ、建築材として使用していたものであろうか。樹種はオニグルミで、柾目材である。

671は厚みのある板で、板の1側面は直線だが、それ以外の側面は弧を描くように丸みをもたせている。桶底板のように何枚かの板を組み合わせ、円形の板材として使用していたかもしれない。長い側面近くに直線状に正方形もしくは長方形の孔を4カ所穿つ。短い側面近くには比較的大きな長方形の孔を1カ所穿つ。これらの孔は複数の板を結束するための紐綴り孔と推測する。樹種はヤマガワで、板目材である。

672は先端に扁平な頭を面取りして作り出した棒状製品で、先端以外もきれいに磨かれており加工が丁寧である。紡織具の棒（紡いだ糸を巻き取る道具）で、支え木差し込み式の軸ではないかと推測する。あるいは糸巻具になる可能性もある。棒の横方向に圧痕があり何かを巻いていた痕跡と推測できる。ま

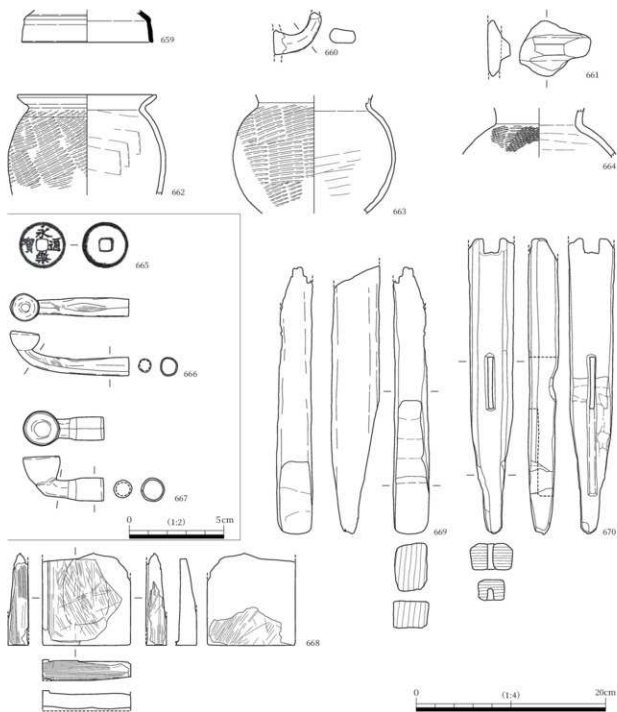


図 109 5区 出土遺物実測図

た、被熱痕があるがまだらに被熱していることから、製品として組み合わさった状態でなく、廃棄された後に被熱したと考えられる。樹種はヒノキである。

673は先端を削って頭を作り出した棒で、もう一方の先端は尖らせてある。建築部材としての用途が考えられる。樹種はスギである。

674は建築部材としての用途が考えられる。角材で欠けているが枘穴をもち、先端はさらに細くした角材となっている。枘穴に他の材を通したり、細くなっている部分を他の材の枘穴にはめ込むか組み合わせて使用したと推測する。また、一側面にのみ被熱痕がありまだらに被熱している。板目材で、樹種はヒノキである。

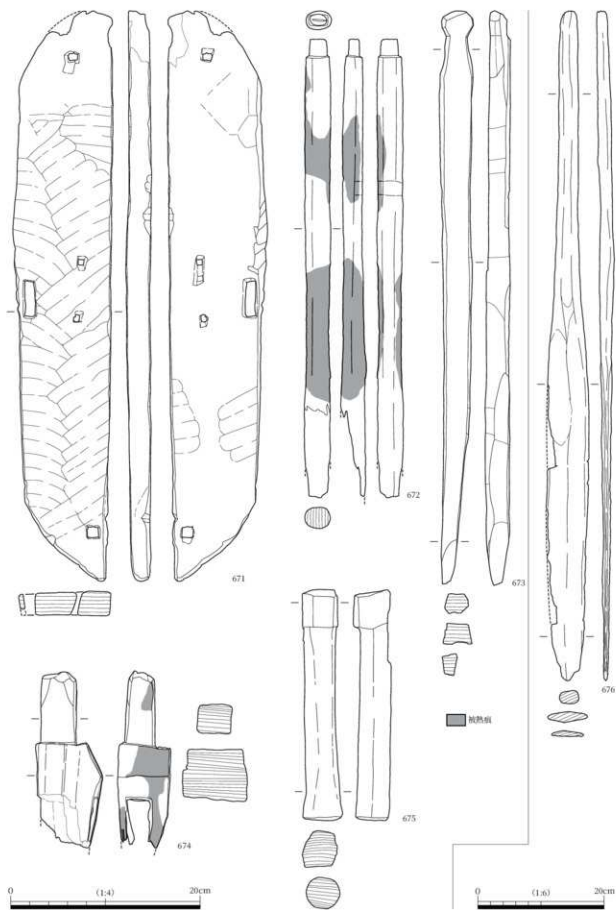


图 110 5区 出土木製品実測图(1)

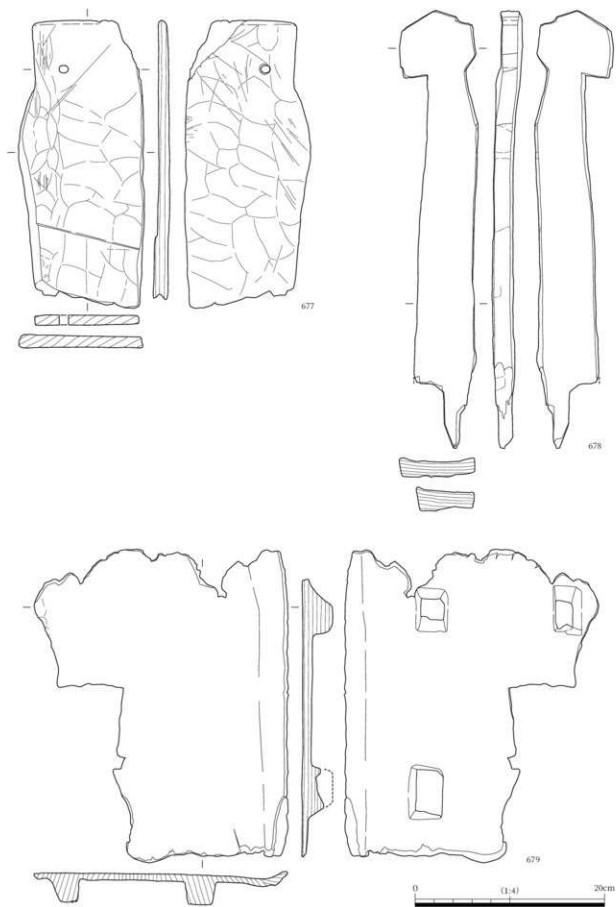


图 111 5区 出土木製品实测图(2)

675も頭を面取りして作り出した棒状製品である。完形で全長約24cmあり、下端もやや末広がりになっていることから、紡織具の認めかけの軸棒ではないかと推測する。675と似た形状の出土品に2区の246があり、それも認めかけと考えられる。樹種はサワラである。

676は櫂である。櫂は1区、2区、3区で各1点ずつ出土しているが、全形を保って出土しているのは676のみである。長さ105.7cm、最大幅6.4cmをはかる。水掻き部分はやや欠損し、握部にも使用による擦痕が認められる。樹種はモミ属である。

677は孔のある板で、柁目材である。下方が欠損し、上方は「く」の字状に抉り、丸い小孔を一つ穿つ。表裏面ともノミの加工痕が明瞭に残る。西岩田遺跡の近畿道の調査でも、AトレンチのⅧ層（第5章第1節表14）から類似した製品が出土している。

678は一端に頭を作り出した板で、くびれた部分に紐を結束させるなどして使用した何らかの部材と考える。板目材である。樹種はスギである。

679は板の裏面に脚がついた盤と考えられる。欠損が多いが、幅約27.0cm、残存長32.5cm、厚さ3.2cmの板で、裏面に長辺5.0～6.0cm、短辺4.0cm、厚さ2.0cm程度の脚が3カ所残るが、おそらく四脚であろう。脚は別の材をはめ込んでいるのではなく、一枚の板を削り出して作る一本作りである。右側は上方に反っているが、これが意図的な加工なのか、経年による木の収縮によるものかは不明である。柁目材で、樹種はクスノキである。

679は隣接する西岩田遺跡の近畿道の調査でもAトレンチのⅧ層から、裏面に長方形の脚が4点つく形状の似た角形容器が2点出土しているが、法量は異なる。

全調査区を通じて櫂が3点出土したことは、櫂を必要とする舟が近くにある環境であったこと、また、盤や建築部材などに日用品が多数出土することは近隣に集落の存在を示唆する。5区は顕著な遺構は検出できなかったが、多様な遺物の出土によって近隣に集落が存在していたことを確認できる調査結果となった。

第3章の遺物に関する参考文献を章末にまとめた。

〈遺物参考文献〉

全体を通して

- 大阪府教育委員会 2009 『大阪府埋蔵文化財調査報200-3 鹿屋北遺跡Ⅰ』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1980 『亀井・城山』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1982 『巨摩・瓜生堂』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1987 『新家(その1)』
(財)大阪文化財センター 1995 『若江北遺跡発掘調査報告書-第4次-』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1998 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』
(財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1999 『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』
(財)大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡Ⅰ』
(財)東大阪市文化財協会 1999 『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』
東大阪市教育委員会 2002 『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』

土器

- 愛媛県松前町教育委員会 1994 『作出遺跡とそのマツリー古墳時代松山平野の祭祀と政治-』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1992 『小阪遺跡 本文編』
(財)大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1996 『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ 本文編』
(財)大阪府文化財センター 2000 『大和川今池遺跡(その1・その2)』
(財)大阪府文化財センター 2006 『池島・福万寺遺跡概要33』
(財)大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
(公財)大阪府文化財センター 2007 『久宝寺・竜華遺跡Ⅶ』
(公財)大阪府文化財センター 2021 『上牧遺跡』
鹿児島大学総合研究博物館 2016 『大隅大崎神領10号墳の研究Ⅰ』
柏原市教育委員会 1996 『高井田山古墳』
国土交通省松江国道事務所・島根県教育委員会 2020 『京田遺跡2 中上Ⅱ遺跡』
島根県出雲土木事務所・出雲市教育委員会 2001 『下古志遺跡』
忠北大学校博物館・清州市 1995 『清州新風洞古墳群』
敦賀市教育委員会 2010 『大町田遺跡』
土佐山田町教育委員会 1990 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』
日本中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
日本中世土器研究会編 2022 『新版 概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2000 『茶山崎遺跡Ⅱ』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『福井県埋蔵文化財報告 第106集 林・藤島遺跡泉田地区 第1分冊-本文編-』
松山市教育委員会・松山市考古館・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2002 『海をわたって
きたひと・もの・わざ』
若狭三方縄文博物館 2023 『若狭町文化財調査報告書第4集 藤井遺跡 資料編(弥生土器)』
和歌山県立紀伊風土記の丘 2016 『平成26年度秋期特別展 須恵器誕生』

- 秋山浩三 2017 「吉備・近畿の交流と土器」『弥生時代のモノとムラ』新泉社
- 秋山浩三 2018 「近畿における吉備型甕の分布とその評価」『古墳時代のモノと墓』新泉社
- 飯塚信幸 2022 「煮炊具からみた古墳時代後期の須恵器生産—瓶形土器を中心に—」『古代学研究』232号
古代学研究会
- 市来真澄・森本徹 2009 「第5章第7節 土師器把手の分類」『讃良郡条里遺跡IX』（財）大阪府文化財センター
- 市村慎太郎 2019 「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理（1）」『古墳出現期土器研究』第6号 古墳出現期土器研究会
- 市村慎太郎 2023 「古墳出現期土器研究会の記録（8）」『古墳出現期土器研究』第10号 古墳出現期土器研究会
- 酒井清治 1985 「千葉市大森第2遺跡出土の百済土器」『古文化談義』第15号 九州古文化研究会
- 笹栗拓 2021 「第6章総括 第2節古墳時代集落の様相」『上牧遺跡』（公財）大阪府文化財センター
- 合田幸美 2000 「溝沓遺跡出土の外來系土器について」『溝沓遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 高橋潔 1988 「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』岡山県立博物館
- 土田純子 2017 『東アジアと百済土器』同成社
- 辻美紀 2002 「河内地域における古墳時代中期の土器」『長原遺跡発掘調査報告IX』（財）大阪市文化財協会
- 寺井誠 2016 「須恵器甕に見られる朝鮮半島の要素」『大阪歴史博物館研究紀要』第14号 大阪歴史博物館
- 中野咲 2015 「土師器長胴甕の受容と展開—古墳時代中・後期における土師器地域色の基礎的分析—」『韓系土器研究XIV』韓系土器研究会
- 中野咲 2021 「機内地域の中期土師器編年と外來系土器」『中期古墳研究の現状と課題V—古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって—』中国四国前方後円墳研究会第24回研究集会
- 中野咲 2023 「土器からみた河内湖北岸地域」『牧の景観考古学』六一書房
- 平井恭男 2010 「吉備における古墳出現期の土器編年」『研究報告30』岡山県立博物館
- 三吉秀亮 2014 「南予の初期須恵器」『愛媛大学法文学部論集 人文科学編』第36号 愛媛大学法文学部
- 三吉秀亮 2016 「伊予市場南組窯跡における初期須恵器生産」『平成26年度秋期特別展示記念シンポジウム 須恵器誕生 予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 三吉秀亮 2016 「市場南組窯跡須恵器の型式分類と編年」『古文化談義』第77集 九州古文化研究会
- 山之内志郎 2004 「第5章考察愛媛県内出土の渡來系遺物～作出・市場南組窯型須恵器の型式分類と分布～」『東山古墳群Ⅱ—3次・6次調査—』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内遺跡」『弥生文化博物館研究報告』第3集 弥生文化博物館
- 山田隆一 2006 「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」ふたかみ邪馬台国シンポジウム6『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』資料集 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 米田敏幸 1992 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』VII 庄内式土器研究会
- 製塩土器**
- （財）大阪府埋蔵文化財協会 1986 『脇浜遺跡』
- 石部正志 1988 「塩の生産（総論）」『考古学ジャーナル』No.298
- 才原金弘 1985 「東大阪市内出土の製塩土器」『財団法人東大阪市文化財協会研究紀要I』（財）東大阪市文化財協会

- 鈴木陽一 1993 「脚台式製塩土器について—湊遺跡出土の製塩土器からみて—」『湊遺跡—90—4区の調査』
泉佐野市教育委員会
- 塚本浩司 2019 「和泉南部の海岸遺跡について」『大阪文化財研究』第52号（公財）大阪府文化財センター
- 塚本浩司 2023 「藤屋北遺跡で出土した製塩土器の意味」『枚の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』六一書房
- 広瀬和雄 1994 「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店
- 広瀬和雄 1988 「近畿地方における土器製塩—大阪湾沿岸を中心として—」『考古学ジャーナル』No.298
- 宮地総一郎 2000 「脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 石製品・白玉**
- 市川創・島崎久恵 2005 「機内における集落出土の滑石製品」『第54回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』埋蔵文化財研究会・（財）大阪市文化財協会
- 大岡由紀子 2001 「南近江における滑石製玉生産」『古代学研究』154号 古代学研究会
- 河野一隆 2002 「石製模造品」『考古資料大観9 石器・石製品・骨角器』小学館
- 島崎久恵 2002 「第4章第1節石製玉類の分析」『亀川遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 篠原祐一 2005 「滑石の生産と使用をつなぐ視点」『第54回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』埋蔵文化財研究会・（財）大阪市文化財協会
- 廣瀬時習 2002 「池島・福万寺遺跡の「滑石製品」—出土滑石製品とその「生産」について—」『池島・福万寺遺跡2 分析考察編』（財）大阪府文化財センター
- 廣瀬時習 2006 「近畿における集落祭祀と滑石製品」『季刊考古学』第96号 有斐閣
- ガラス玉**
- 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『古川登さん 退職記念献呈考古学文集 いにしへの河をのぼる』『いにしへの河をのぼる』制作委員会
- 田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』95 物質文化研究会
- 田村朋美 2018 「日本出土ガラス小玉の産地と流通に関する研究」『埋蔵文化財ニュース 同位体分析と産地推定に関する最近の動向』174 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- 木製品**
- 島根県教育委員会 1990 『姫原西遺跡』
- （財）鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』
- （財）鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告Ⅰ 木製容器・かご』
- 奈良国立文化財研究所史料第27冊 1985 『木器集成図録—近畿古代編—』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所史料第36冊 1993 『木器集成図録—近畿原始編—』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所史料第92冊 2019 『木器集成図録—飛鳥藤原編Ⅰ—』奈良国立文化財研究所
- 兵庫県教育委員会 2000 兵庫県文化財調査報告書第197冊 『袴狭遺跡〔本文編〕』
- 三重県埋蔵文化財センター 2000 三重県埋蔵文化財調査報告115-17 『一般国道23号中勢道路（8校区）建設事業に伴う六六A遺跡発掘調査報告（木製品編）』
- 足立克己 2004 「琴板—絵画のある箱形製品—」『島根考古学会誌』第20・21集合併号
- 水野正好 1980 「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会

第4章 分析

第1節 放射性炭素年代測定（AMS法）

第1項 分析の目的と試料の採取

西岩田遺跡の今回の調査では、主要な遺構、遺物はほぼ、調査地の中央にあたる2区、3区で検出された。主な遺構は、古墳時代後期以降の掘立柱建物や、古墳時代中期の須恵器を大量に伴う溝等である（第3面）。

遺構検出面は3a層上面にあたるが、その下層は、流路堆積が全調査区におよび、1.0m以上にわたって砂礫層（3b層）や灰色シルト層が堆積していた（図75、写真16・19）。3b層中には古墳時代初頭、庄内式期を中心とする土器や木製品が含まれていた。

3b層以下には、灰色シルト層と有機物を含むため黒褐色にみえるシルト層が、互層のように堆積する（4a層）。灰色シルト層と黒褐色シルト層には明確な層境があるわけではなく、堆積速度と有機物の含有量によって色の濃淡が生じ、灰色と黒褐色にみえると思われる。有機物はヨシなどの植物の根茎と考えられることから、周辺一帯は水生植物が群生する湿潤な環境だったと推測される。3b層と4a層の境界では、自然木や種実に交じって木製品などの有機遺物が出土している。

4a層以下は層中に遺物が確認できないため、明確な時期決定が難しい。そこで、土壌中に含まれる有機物を用いて、加速器質量分析（AMS法）による放射性炭素年代測定を行うことで、4a層以下の無遺物層の年代を知る手がかりとなるのではと考えた。

その結果をもとに、西に隣接する近畿自動車道の調査成果、層序との比較から、周辺の地層堆積状況や自然環境を復元し、相対比較することを考えた。

試料の採取地点は2区の南壁から行った（図112）。2区南半に溝などの遺構が集中し、3b層と4a層の推移が観察しやすいことから、試料採取位置として南壁を選択した。

T.P.-0.7～-2.0mに相当する有機物を多く含む土壌層から、試料1～4の土壌ブロックを4点採取した（図14・113、写真1・2）。試料1・2が灰色シルト層、試料3・4がオリーブ黒色～黒褐色シルト層だが、いずれの層も量の多少はあるが有機物を含む。

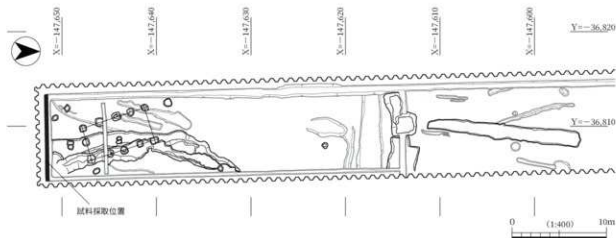


図112 試料採取位置図

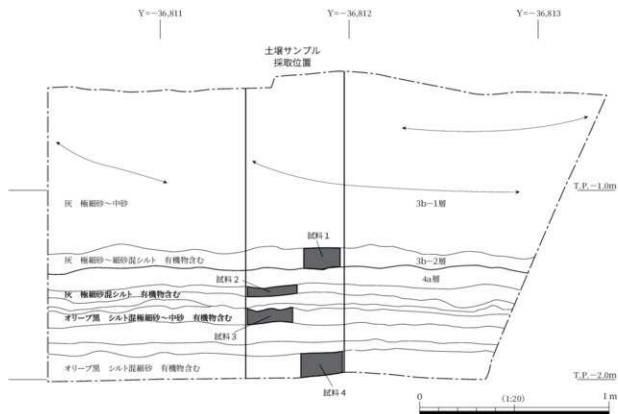


図 113 2区 南壁試料採取位置図

第2項 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4のとおりである。測定試料を写真3～10に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第3項 分析結果

表5・6に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図114に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同



写真1 2区 南壁

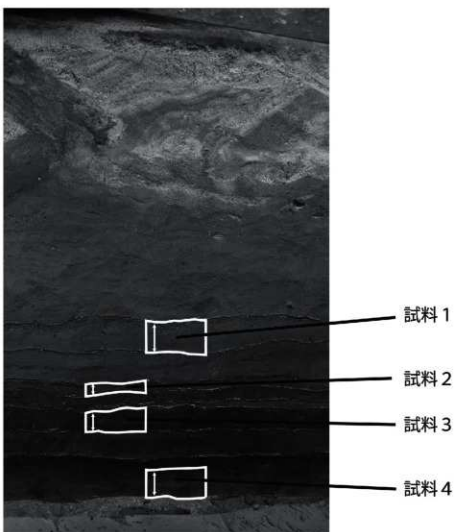


写真2 2区 南壁サンプル採取位置

表4 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46920	試料 No.1 サンプル No. 土 1	種類: 生の不明植物遺体 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-46921	試料 No.2 サンプル No. 土 3	種類: 生の不明植物遺体 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-46922	試料 No.3 サンプル No. 土 5	種類: 生の不明植物遺体 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-46923	試料 No.4 サンプル No. 土 7	種類: 生の不明植物遺体 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

第4項 考察

今回の測定試料は、暗色帯を形成する堆積層中に挟在する植物遺体である。試料を採取した層準では、複数の暗色帯が碎屑物主体の堆積層と互層をなして累重する。測定試料は、下位から試料 No. 4～試料 No. 1 の順で層位的に上位に向かって、比較的近接した層準で採取されている。

測定の結果（以下の較正年代は 2σ の値）は、以下のとおりである。試料 No. 1 (PLD-46920) は、 ^{14}C 年代が 1885 ± 20 BP、較正年代が $85-94$ cal AD (2.56%) および $118-217$ cal AD (92.89%) で、紀元後1世紀後半～紀元後3世紀前半である。

試料 No. 2 (PLD-46921) は、 ^{14}C 年代が 1875 ± 20 BP、較正年代が $122-225$ cal AD (95.45%) で、紀元後2世紀前半～紀元後3世紀前半である。

試料 No. 3 (PLD-46922) は、 ^{14}C 年代が 2075 ± 20 BP、較正年代が $160-41$ cal BC (92.56%) および $9-1$ cal BC (2.89%) で、紀元前2世紀前半～紀元前1世紀末である。

試料 No. 4 (PLD-46923) は、 ^{14}C 年代が 2140 ± 20 BP、較正年代が $344-318$ cal BC (13.58%)、 $203-97$ cal BC (77.57%)、 $71-57$ cal BC (4.30%) で、紀元前4世紀半ば～紀元前1世紀半ばである。

測定の結果、試料 No. 1 と試料 No. 2 は、層位的に逆転した年代値を示すが、その年代差は、非常に小さい。試料 No. 3 と試料 No. 4 は、層位的に矛盾のない年代値を示す。図115にマルチプロット図を示す。

なお、今回得られた年代値については、今村・設楽による日本列島の弥生土器の付着炭化物（今村・設楽2011）、春成他による奈良県桜井市を中心とした弥生時代後期から古墳時代の付着炭化物に関する年代学的研究（春成他2011）にもとづくと、以下のような年代観が示される。試料 No. 1 と試料 No. 2 は、ともに庄内3式期の炭素年代に対比される。試料 No. 3 と試料 No. 4 については、弥生時代中期のIII期～IV期に対比される。

追記:AMS分析をパレオラボに委託後の調査で、4-1区北壁の試料4に相当する層位、高さ（4a層）から、弥生時代中期前半の裏底部が1点出土した（図98）。試料4の示す年代と合致し、AMS法の年代を補充しうる貴重な資料といえる。



写真3 試料 No. 1 の植物遺体の挟在状況



写真5 試料 No. 2 の植物遺体の挟在状況



写真7 試料 No. 3 の植物遺体の挟在状況



写真9 試料 No. 4 の植物遺体の挟在状況



写真4 試料 No. 1 (PLD-46920)



写真6 試料 No. 2 (PLD-46921)



写真8 試料 No. 3 (PLD-46922)



写真10 試料 No. 4 (PLD-46923)

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果(1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46920 試料 No.1	-26.96 \pm 0.24	1885 \pm 19	1885 \pm 20	127-204 cal AD (68.27%)	85-94 cal AD (2.56%) 118-217 cal AD (92.89%)
PLD-46921 試料 No.2	-25.78 \pm 0.21	1875 \pm 18	1875 \pm 20	129-144 cal AD (16.10%) 154-194 cal AD (42.96%) 199-208 cal AD (9.21%)	122-225 cal AD (95.45%)
PLD-46922 試料 No.3	-19.10 \pm 0.20	2076 \pm 19	2075 \pm 20	146-141 cal BC (2.78%) 106-45 cal BC (65.49%)	160-41 cal BC (92.56%) 9-1 cal BC (2.89%)
PLD-46923 試料 No.4	-29.75 \pm 0.21	2138 \pm 19	2140 \pm 20	338-327 cal BC (8.04%) 199-149 cal BC (47.05%) 134-115 cal BC (13.18%)	344-318 cal BC (13.58%) 203-97 cal BC (77.57%) 71-57 cal BC (4.30%)

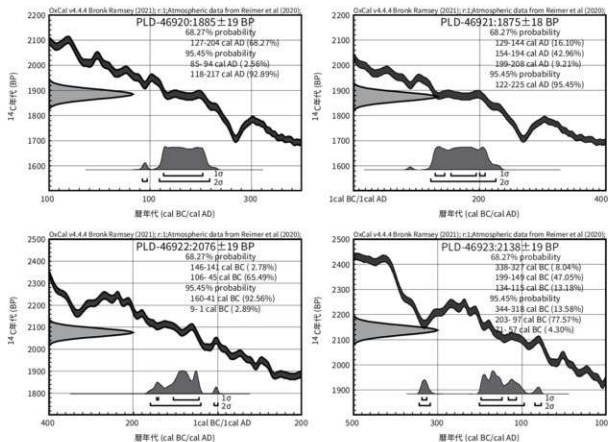


図 114 暦年較正結果

<引用・参考文献>

- 今村家雄・設楽博己 2011 「炭素14年の記録から見た自然環境—弥生中期—」 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学 3 多様化する弥生分析』48-69pp 同成社
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20pp 日本第四紀学会
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村家雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 2011 「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告 163』133-176
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) 337-360.

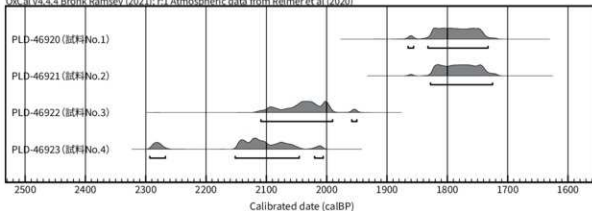


図 115 マルチプロット図

表 6 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲		^{14}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲	1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-46920 試料 No.1	-26.96 \pm 0.24	1885 \pm 19	1885 \pm 20	127-204 cal AD (68.27%)	85-94 cal AD (2.56%) 118-217 cal AD (92.89%)	1824-1746 cal BP (68.27%) 1832-1733 cal BP (92.89%)	1865-1856 cal BP (2.56%) 1832-1733 cal BP (92.89%)
PLD-46921 試料 No.2	-25.78 \pm 0.21	1875 \pm 18	1875 \pm 20	129-144 cal AD (16.10%) 154-194 cal AD (42.96%) 199-208 cal AD (9.21%)	122-225 cal AD (95.45%)	1821-1806 cal BP (16.10%) 1796-1756 cal BP (42.96%) 1751-1742 cal BP (9.21%)	1828-1725 cal BP (95.45%)
PLD-46922 試料 No.3	-19.10 \pm 0.20	2076 \pm 19	2075 \pm 20	146-141 cal BC (2.78%) 106-45 cal BC (65.49%)	160-41 cal BC (92.56%) 9-1 cal BC (2.89%)	2095-2090 cal BP (2.78%) 2055-1994 cal BP (65.49%)	2109-1990 cal BP (92.56%) 1958-1950 cal BP (2.89%)
PLD-46923 試料 No.4	-29.75 \pm 0.21	2138 \pm 19	2140 \pm 20	338-327 cal BC (8.04%) 199-149 cal BC (47.05%) 134-115 cal BC (13.18%)	344-318 cal BC (13.58%) 203-97 cal BC (77.57%) 71-57 cal BC (4.30%)	2287-2276 cal BP (8.04%) 2148-2098 cal BP (47.05%) 2083-2064 cal BP (13.18%)	2293-2267 cal BP (13.58%) 2152-2046 cal BP (77.57%) 2020-2006 cal BP (4.30%)

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 2020 *The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP)*. *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757 doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第2節 樹種・種実同定

第1項 同定の目的

西岩田遺跡の今回の調査では、古墳時代前期以前については、流路や溝以外に、人為的な遺構は認められなかった。また、出土遺物についても、3b層中からは庄内式土器を中心とする、弥生土器や古墳時代初頭から古墳時代中期の土器が出土するが、それ以前の堆積層になると3b層と4a層の層界で、木製品や種実などの有機遺物が出土するが、遺物は4-1区で弥生土器が1点出土したのみである。

よって、流路の堆積や砂礫層中（3b層）から出土した木製品の用材を知ることは、各時代における樹木資源の利用のありかた、またその変遷を考えるうえでの資料となりうる。また、地域の自然環境、植生と考え併せることにより、在地で制作されたものと広域流通品を判別する資料ともなると考えた。

そこで、各区から出土した木製品、および採取した種実の同定を委託することとした。報告書に掲載した木製品のうち15点は既に保存処理を委託しており、保存処理の過程で樹種の同定が行なわれるため除外し、それ以外の18点を対象とした。種実については、遺構から出土したものと3b層から出土したものから選択した（各調査区の遺物の記述や木製品観察表で、樹種同定および保存処理において判明した樹種は明記した）。

第2項 試料

今回同定対象となる大型植物遺体（木製品、種実）は、3b層上面か3b層中から出土した、（1）弥生時代後期末から古墳時代前期の木製品、（2）古墳時代の種実である。

（1）弥生時代後期末から古墳時代の木製品

3b層（弥生時代後期末から古墳時代前期）の堆積層や古墳時代初頭から前期の242溝から出土した。

鋤先、掛矢、槽、板、用途不明の板状・棒状を呈する製品等があり、農具や小形の生活用具が中心である。同定する遺物の点数は、18点である。

製品（生活用具）は製作地と消費（使用）地が異なる場合もあるが、溝に使用されていた杭は、遺構を検出した近辺で調達される可能性が高いと考えて、木製品の用材との対比のために同定番号18、242溝出土の杭も試料として選択した。

（2）古墳時代の種実

3b層（弥生時代後期末から古墳時代前期）の堆積層や、古墳時代初頭から前期の土坑から出土した。同定する遺物の点数は16点である。

なお、仕様書では試料数1点において同定を行なう点数は、材の樹種のみの場合5点程度、種実のみ100個を限度とする、と記載されている。今回の木製品の同定点数は18点であるので試料数に換算すると3点強、種実の同定点数は16点であり、試料数に換算すると1点弱となるので、木製品と種実を合わせて、試料数としては計4点として分析委託契約を実施した。

第3項 同定結果

（1）樹種（表7、写真11～16）

木材試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取し、封入剤ガムクロラールでプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。同定結果を表7に示す。

表7 樹種同定結果

同定番号	登録番号	遺物番号	部種	調査区	地区	遺構名・層名	樹種
1	1469	642	鎌身	3区	9H-1c	3 b層	コナラ属アカガシ亜属
2	1454	647	有刃棒	3区	9H-2d	3 b層	モミ属
3	1470	648	網穴のある板	3区	9H-2f	3 b層	サワラ
4	1454	644	板	3区	9H-2d	3 b層	サワラ
5	1428	641	鎌身	3区	9G-1j	3 b層	コナラ属アカガシ亜属
6	1458	643	掛矢	3区	9H-2e	3 b層	コナラ属アカガシ亜属
7	508	673	有刃棒	5区	9J-1i	3 b層	スギ
8	514	670	網穴のある板	5区	9J-1a	3 b層	オニグルミ
9	514	675	紡織具	5区	9J-1a	3 b層	サワラ
10	520	671	網穴のある板	5区	9J-1a	3 b層	ヤマグワ
11	521	674	部材	5区	9J-1a-1b	3 b層	ヒノキ
12	640	243	有刃棒	2区	9F-2h	3 b層	モミ属
13	655	247	網穴のある板	2区	9G-1e	3 b層	ヒノキ科
14	729	244	櫓	2区	9F-1j	3 b層	コナラ属アカガシ亜属
15	732	235	板	2区	9G-1c	3 b層	ヒノキ
16	770	242	御付容器	2区	9G-1d	3 b層	クロマツ
17	770	245	網穴のある板	2区	9G-1d	3 b層	スギ
18	1385	510	板	3区	9H-1c	242溝	アサダ

同定された樹種は10分類群で、針葉樹6分類群、広葉樹4分類群であった。

以下に同定の根拠となる細胞構造的記載をおこなう。

クロマツ (*Pinus thunbergii* Parl.) マツ科マツ属；晩材部の幅は広く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。垂直樹脂道は晩材部に限らず全体に散在する。放射柔細胞の内壁はアカマツほど激しく鋸歯状にならない。分野壁孔は大きな窓状である。

モミ属 (*Abies*)；早材から晩材への移行は緩やかで晩材部は薄い。放射柔細胞の壁は厚くじゅず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) ヒノキ科スギ属；晩材部の幅が広く年輪界が明瞭で樹脂細胞が晩材部に集中して分布する。放射組織はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に2個存在する。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.) ヒノキ科ヒノキ属；晩材部の幅は狭く、樹脂細胞が晩材部に偏って分布する。放射細胞の分野壁孔は縦に開く孔口のかなり小さいヒノキ型で1分野に2個存在する。

サワラ (*Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc.) ヒノキ科ヒノキ属；晩材部の幅は狭く、樹脂細胞が晩材部に偏って分布する。放射細胞の分野壁孔はヒノキよりやや大きく孔口が斜めに開くヒノキ～スギ型で1分野に2～3個存在する。

ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) アサ科クワ属；大きい道管が数列並びその後径が急減して小道管が不規則に集まって接線状あるいは斜めに分布する環孔材。道管は単穿孔でチロースが詰まることが多く、放射細胞は異性で1～5細胞幅程度である。

コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科；年輪界がやや不明瞭で中程度の道管があまり年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材で、道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列と広放射組織がある。

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam.) クルミ科クルミ属；年輪初めに大きな道管が単独ないし数個放射方向に複合して散在し、道管の穿孔板は単一で側壁は交互壁孔。軸方向柔細胞が接線方向に網状につながる放射組織は同性で1～4細胞幅。

表8 種実同定結果

同定番号	登録番号	遺物番号	器種	調査区	地区	遺構名・層名	分類群名	出土部位	個数
19	103	680	実	1区	9F-2f	暗灰色シルト層 (T.P.-1.5m)	トチノキ	種子	1
20	107	681	種	1区	9F-1f-1g	東壁砂層	カヤ	種子	1
							モモ	核半分	1
							ゴキツル	種子	1
21	644	682	種?	2区	9G-2e	3b-1層	コナラ属アカガシ亜属	果皮半分	1
							イネ	炭化胚乳完形欠け	2
							オナモミ	果実	1
22	649	683	種	2区	9G-2e	第3b面43土坑	ヒシ属	果皮破片	1
							ヒョウタン	種子	2
							タケ亜科	細破片に塗膜	多数
23	650	684	種	2区	9G-2e	第3b面43土坑	ヒョウタン	果皮破片	25
24	650	685	種	2区	9G-2e	第3b面43土坑	ヒシ属	種子	96
25	650	686	種	2区	9G-2e	第3b面43土坑	ヒシ属	果皮破片	12
							モモ	核	2
							オニグルミ	内果皮4分の3	1
26	653	687	実	2区	9G-1e	3b-1層	コナラ属	果皮破片	2
							モモ	核半分	3
							ヒョウタン	種子	1
27	698	688	種	2区	9F-1i-2i	3b-1層	コナラ属アカガシ亜属	殻斗	1
							モモ	核	1
							トチノキ	種子	1
28	724	689	種	2区	9F-2i	3b-1層	クロマツ	球果	1
							不明木本	樹皮片	1
							ヒョウタン	種子	48
29	770	691	種	2区	9F-1d	3b-1層	コハクウンボク	内果皮	1
31	1317	692	種	3区	9H-1a	第3面160溝	ムクロジ	幼種子	1
32	1444	693	実	3区	9H-2c	3b層	ヒノキ	球果	1
							コナラ属コナラ亜属	殻斗破片	1
							コナラ属アカガシ亜属	幼果	2
33	1446	694	種	3区	9H-2c	3b層	コナラ属	果皮破片	2
							バラ科	刺	1
							モモ	核	1
34	1467	695	種	3区	9H-1c	3b層	モモ	核	1

アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属: 中程度の道管が単独ないし数個放射方向に複合して散在する散孔材で道管は単穿孔。放射組織は上下に方形細胞がある異性で1~4細胞幅である。

(2) 種実 (表8、写真17)

種実試料は肉眼および実顕微鏡で観察、同定し分類群別部位別に計数し表8に同定結果を示す。なお、試料22の細片は実顕微鏡で観察したところ、木材様の組織がみられたため刃刀で薄い横断面を削り生物顕微鏡で観察した。

1区の試料番号19と20の種実出土層は無遺物のため古墳時代初頭より以前である。1区からは木本のカヤ、モモ、トチノキと草本のゴキツルの計4分類群を出土した。

試料番号21~34はいずれも3b層から出土した種実である。3b層からは木本のクロマツ、ヒノキ、バラ科、モモ、トチノキ、ムクロジ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属、オニグルミ、コハクウンボク、草本はイネ、タケ亜科、ヒョウタン、ヒシ属、オナモミの計16分類群を出土した。

以下に特筆すべき種実等の形態記載をおこなう。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.) ヒノキ科: 球果は8個の果鱗の先端が盾状に厚く発達し歪んだ多角形が組み合わさり、全体が角ばった球形に見える。

ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科: 幼種子は扁平な楕円体で表面は光沢が無い灰黒色で平滑、一端に一文字状のへそがある。

タケ亜科 (Bambusoideae) イネ科: 薄く細い破片に漆様の塗膜が残っている状態で出土した。横断面

表9 種類別樹種集計

樹種、部材	跡・伊矢	櫓	有頭棒	板	杭	部材	樹種計
コナラ属アカガシ亜属	3	1					4
サワラ			1	2			3
モミ属			2				2
スギ			1	1			2
ヒノキ				1		1	2
クロマツ		1					1
ヒノキ科				1			1
オニグルミ				1			1
ヤマグワ				1			1
アサダ					1		1
部種計	3	2	4	7	1	1	18

で泡状の細胞の中に維管束鞘が確認できたためタケ亜科とした。

ヒョウタン (*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. var. *siceraria*) ウリ科：種子はへそ側が狭い長三角形で、へそから上に向かって肋が2本伸び肋上に長さ0.5mmほどの軟らかい毛がある。本遺跡で出土した果皮は破片で、厚いスポンジ状で表面は平滑、内面はざらつく。

ゴキヅル (*Actinostemma lobatum* Maxim. ex Franch. Et Savat.) ウリ科：種子は9.2mmの楕円形で表面は光沢がなく暗灰色、縁付近に1周する浅い溝があり、背面は丸みがあり凹凸が激しい大きい網目模様があり腹面は平らで少ししわがある。

ヒシ属 (*Trapa*) ミソハギ科：果実は完形であれば菱形で2ないし4つの著しい突起があり、果皮は光沢が無くやや固く厚い壁である。突起の個数と外形はさまざまで地域変異もみられるため、種の区別は難しい。本遺跡では完形が破損した状態と破片の状態で出土している。

(3) 木材の樹種と種実からみた弥生時代後期末から古墳時代前期の環境と植物利用(表9・10)

本遺跡で出土した木製品の種類別に出土した樹種を表9に集計した。

本遺跡では18点中針葉樹11点に針葉樹が利用されており、針葉樹の利用比率が高いといえる。針葉樹は有頭棒、板、部材に利用されていた。

広葉樹材は柄穴のある板材と農具などに利用されており、中でもコナラ属アカガシ亜属は農具、工具、容器に4点利用されており、単独樹種では最も多く利用されていた。また、板材と杭に使われていた広葉樹はオニグルミやヤマグワなど河川沿いや二次林に生育する比較的成長が早い樹種で、周辺に生育していた材を利用した可能性が考えられる。

令和4年度の西岩田遺跡(支柱)木製品樹種調査では、5点すべてに針葉樹が使われ、1983年の大阪府教育委員会による弥生時代後期から古墳時代初頭出土の木製品樹種同定結果の報告でも、同定数177点のうちヒノキが板や杭のほか槽、鋤柄などに40点使われ、スギも11点が板や杭などに使われ(伊東他2012)針葉樹利用率は極めて高い。

弥生時代後期から古墳時代初頭は、それまで多用されてきたアカガシ亜属をはじめとする広葉樹材から針葉樹材へと用材樹種が転換する時期とされ(黒須2012)、今回の報告では針葉樹材の利用は高いものの道具類にアカガシ亜属が利用されており、広葉樹利用から針葉樹材への転換期にあるといえる。

本遺跡の流路や溝から出土した種実を分類群別に表10に集計した。出土個数が多いのはタケ亜科で次にヒョウタン、ヒシ属、モモと続く。

最も多かったのはタケ亜科であるが、細かい破片となっているため、破片の表面には黒い塗膜があり幅がほぼ一定であることから、元は編組製品であったものが堆積の過程でばらばらになったと考えら

表 10 3 b 層出土種実等集計

分類群名	部位等	個数	分類群名	部位等	個数
タケ亜科	縦破片に塗膜	多数	オニグルミ	内果皮	2
ヒョウタン	種子	147	オナモミ	果実	1
ヒョウタン	果皮破片	26	クロマツ	球果	1
ヒシ属	果皮破片	13	コハクウンボク	内果皮	1
モモ	核	7	トチノキ	種子	1
コナラ属アカガシ亜属	幼果、殻斗、果皮	4	ハク科	網	1
コナラ属	果皮破片	4	ヒノキ	球果	1
コナラ属コナラ亜属	殻斗破片	1	ムクロジ	幼種子	1
イネ	炭化胚乳	2			

れる。

ヒョウタンは果皮だけでなく種子も多く確認され、こちらも破片の状態であり、内部に種子が入ったままのヒョウタン果実が堆積の過程で割れた可能性がある。

ヒシ属は本来、ある程度水深がある湖沼などに生育する浮水植物であるが、完形果実が確認されておらず個数も少ないため、生育場所は離れた場所にあったと考えられる。コナラ属アカガシ亜属やコナラ亜属は、幼果や殻斗を出土していることから生育場所から供給され堆積したと考えられるが、こちらも個数が少なく一部欠けている。

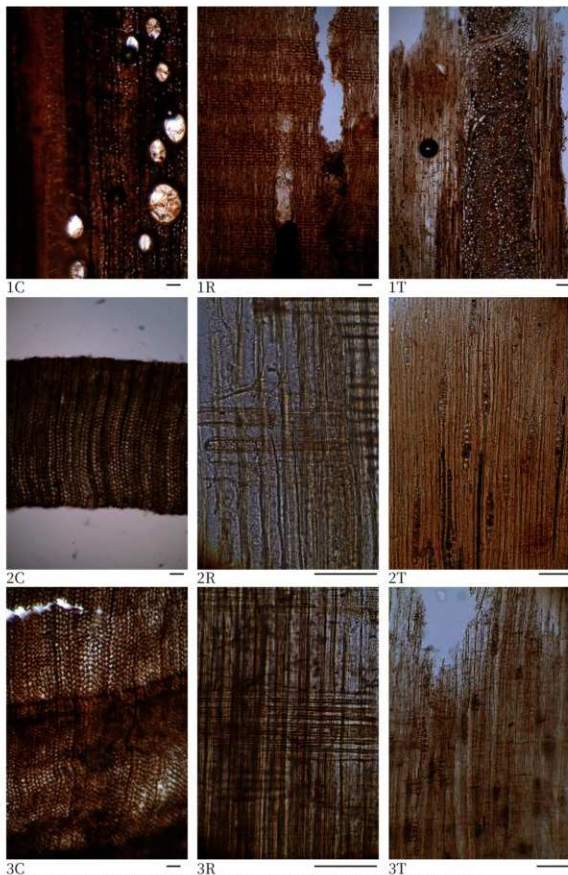
以上のように利用植物と考えられるヒョウタン、ヒシ属、モモ、イネ、オニグルミは、一部に利用の痕跡がみられるものの出土個数が少ない。また、1点ではあるがヒノキの球果が出土しており、ヒノキは本遺跡が立地するような、湿地から乾燥していく過程の河口付近のような場所には生育し難い。

本遺跡が当時大阪湾の汀線に近く、河内潟や河内湖となって後も河川の河口付近ということを考慮すると、これらヒノキやコナラ属、ムクロジ、クロマツ、コハクウンボクなどは上流から運搬され、利用植物などとともに堆積したと考えられる。

〈引用文献〉

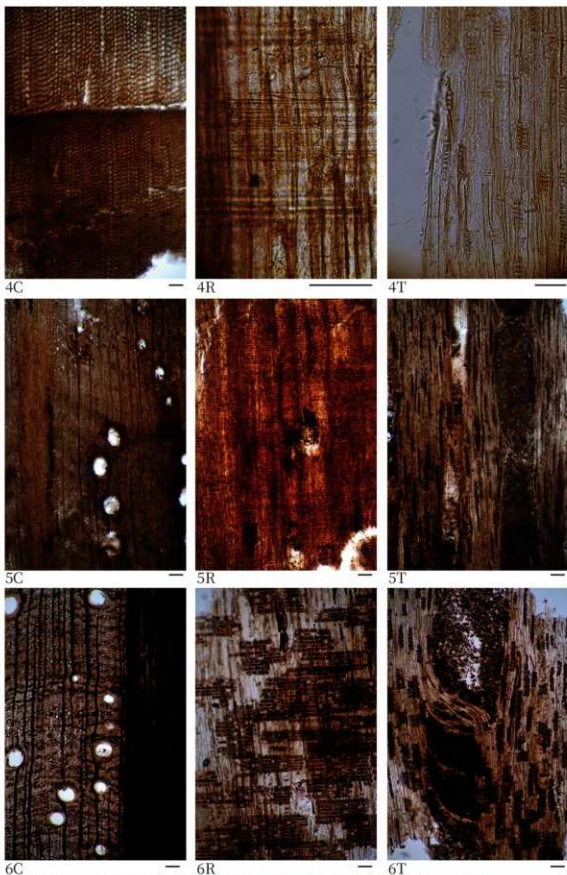
伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 449pp 海青社

黒須亜希子 2012 「V 遺跡出土木製品の種類と地域性 19章南近畿(1)ー大阪府・和歌山県ー」『木の考古学 出土木製品用材データベース』 241-257pp 海青社



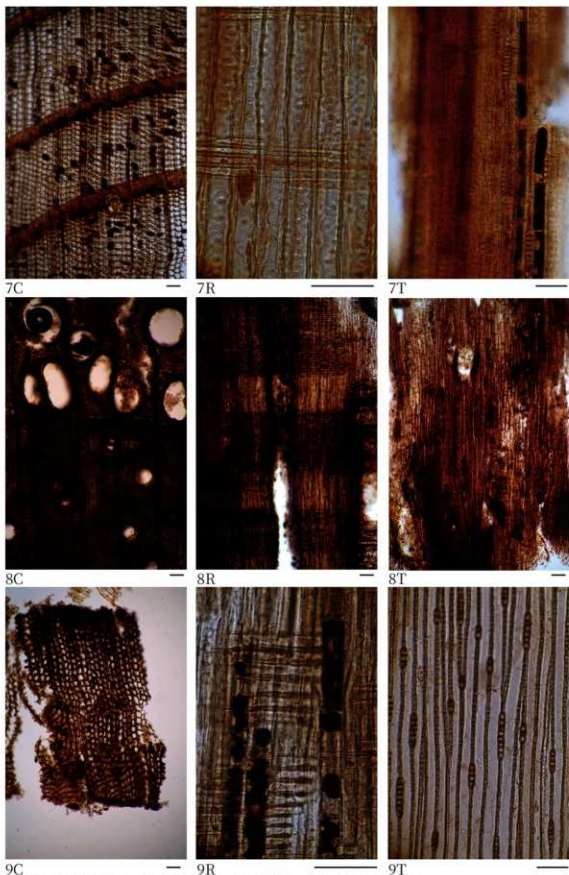
3C 3R 3T
 1. コナラ属アカガシ亜属 (No.1 鋸身) 2. モミ属 (No.2 有頭棒) 3. サワラ (No.3 納穴のある板)
 C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面、スケールは 0.1mm

写真 11 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (1)



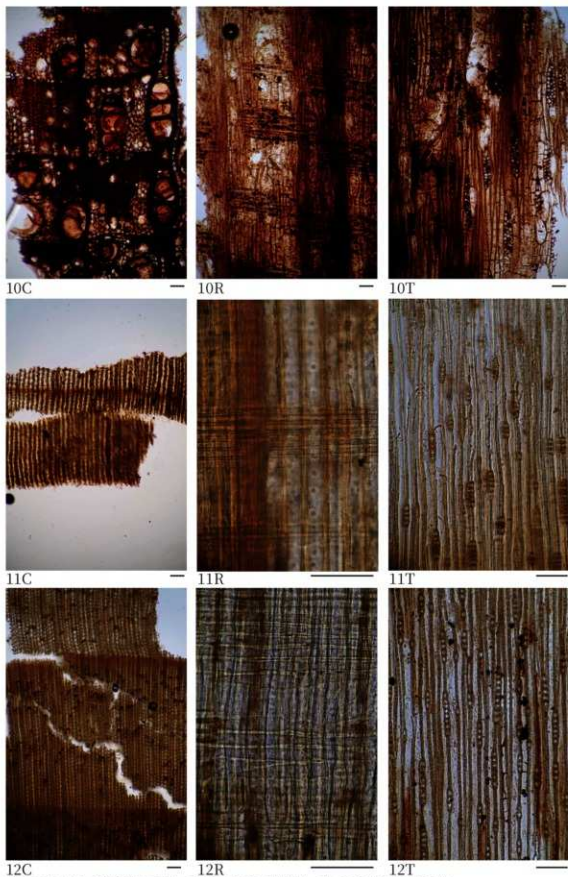
4. サワラ (No.4 板) 5. コナラ属アカガシ亜属 (No.5 鋤身) 6. コナラ属アカガシ亜属 (No.6 掛矢)
 C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面, スケールは 0.1mm

写真 12 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (2)



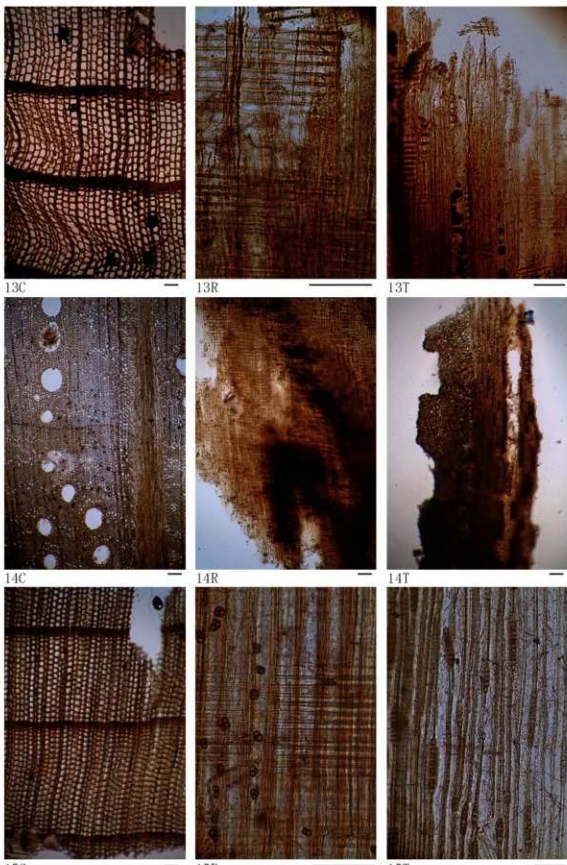
7. スギ (No.7 有頭棒) 8. オニグルミ (No.8 納穴のある杭) 9. サワラ (No.9 紡織具)
 C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面, スケールは 0.1mm

写真 13 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (3)



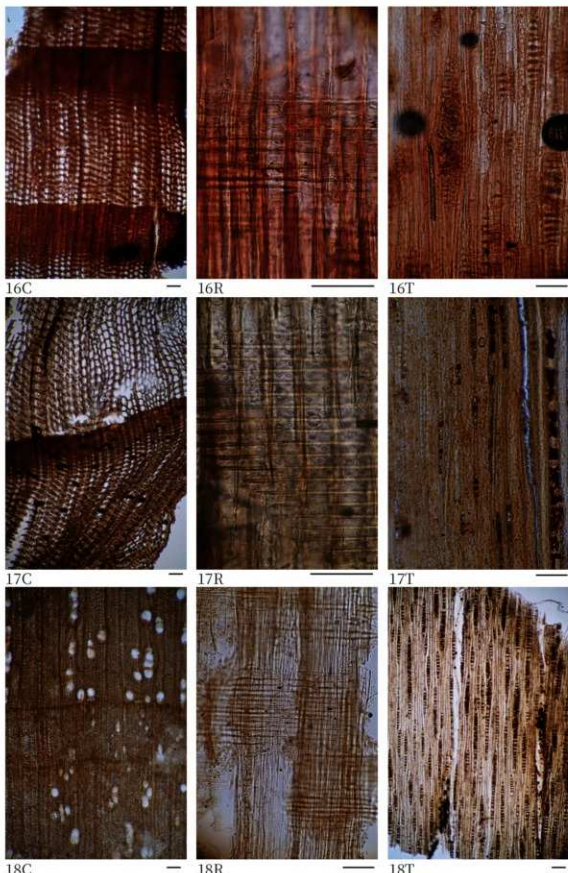
10. ヤマグワ (No.10 柃穴のある板) 11. ヒノキ (No.11 部材) 12. モミ属 (No.12 有頭棒)
 C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

写真 14 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (4)



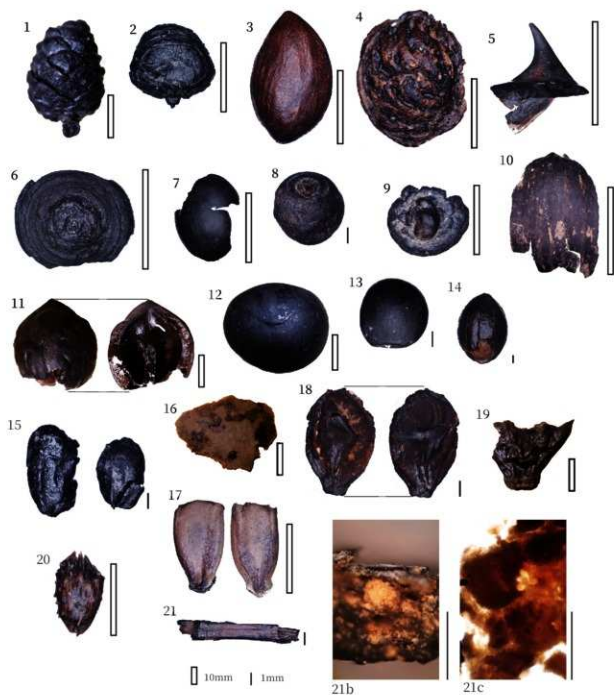
13C 13R 13T
 14C 14R 14T
 15C 15R 15T
 13. ヒノキ科 (No.13 枅穴のある板) 14. コナラ属アカガシ亜属 (No.14 槽) 15. ヒノキ (No.15 板)
 C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面、スケールは 0.1mm

写真 15 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (5)



16. クロマツ (No.16 脚付容器) 17. スギ (No.17 枅穴のある板) 18. アサダ (No.18 杭)
 C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm

写真 16 西岩田遺跡出土木材の顕微鏡写真 (6)



1. クロマツ、球果 (No.28) 2. ヒノキ、球果 (No.32) 3. カヤ、種子 (No.20) 4. モモ、核 (No.20) 5. バラ科、刺 (No.33)
 6～8. コナラ属アカガシ亜属 6. 殻斗 (No.27) 7. 果皮 (No.21) 8. 幼果 (No.33) 9. コナラ属、殻斗 (No.33) 10. コナラ属、
 果皮 (No.26) 11. オニグルミ、内果皮 (No.26) 12. トチノキ、種子 (No.27) 13. ムクロジ、幼種子 (No.31) 14. コハクウ
 ンボク、内果皮 (No.30) 15. イネ、炭化胚乳 (No.21) 16,17. ヒョウタン (16. 果皮 (No.22) 17. 種子 (No.22)) 18. ゴキッ
 ル、種子 (No.20) 19. ヒシ属、果実 (No.24) 20. オナモミ、果実 (No.21) 21. タケ亜科、b,c 横断面 (No.22)

写真 17 西岩田遺跡出土種実

第3節 ガラス玉の化学組成分析

第1項 分析の目的

3区第3面の北半の160溝からガラス玉が3点出土した(図116)。

160溝は3区でも北側にあたり、3b層の堆積によってT.P.+1.6mと他より小高くなった微高地に位置する、幅4.0~5.0mの溝である。逆L字形に微高地東辺と微高地南縁辺を巡り、北と西は調査区外にのびている(図59・62、写真図版13)。

160溝からは出土量は少ないが、主に古墳時代中期の須恵器や土師器が出土した(図72・73)。

160溝出土土器内の土壌を洗浄した際、あるいは遺構面の精査をした際に白玉1点とガラス玉1点が出土したため、160溝内の埋土を可能な限り採取してふるいにかけて洗浄し、微細な遺物の取り上げに努めた。その結果、埋土中からサヌカイト製石鎌やチップ、滑石製模造品、土玉2点、白玉約390点に混じって、ガラス玉が3点出土した。今回の調査では3区以外の調査区、3区でも160溝以外の遺構から玉類は出土していない。

古墳ではない平野部で、これだけの玉製品がかたまっても出土することは注目に値する。また、白玉については、製品の計測や観察の結果、当遺跡で製作されたものではなく、製品として他地域より搬入されたものであり、法量を他遺跡出土品と比較した結果、古墳時代中期に製作された可能性が高いと結論付けた(第5章第2節第4項参照)。

ガラス玉は蛍光X線による化学組成分析を行うことによって、個体を破壊することなくその材質を推定できる。また、最近の研究成果によって、成分組成が判明すれば原料の産地や作成時期も特定できることが明らかとなっている(田村2018)。

産地や作成時期が特定できれば、160溝の性格や特徴をより明確にできる。ひいては他地域からの搬入土器が多い西岩田遺跡での、土器以外の製品についての交易についても新たな知見を得るのではないかと考えた。

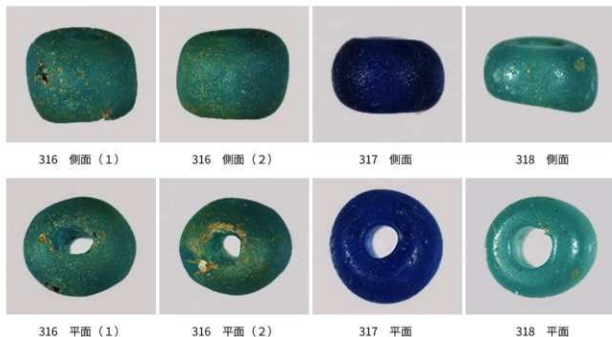


写真18 ガラス玉(316~318) 顕微鏡写真(×25倍)

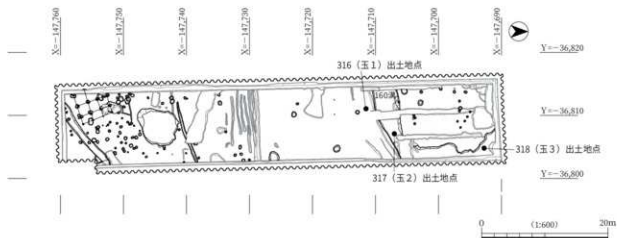


図 116 3区 ガラス玉出土位置図

そこで、ガラス玉の化学組成分析で長年研究を行い実績をあげている、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の田村明美主任研究員に蛍光 X 線による化学組成分析を依頼した。

第 2 項 資料

160溝から出土したガラス玉は316～318の3点である(図72、写真図版39-7、写真18)。写真18は顕微鏡による25倍拡大写真である。法量の計測は白玉と同様に、ノギスを用いて小数点第2位までを計測した。出土地、法量などを記した一覧は、表11にまとめた。

316は淡青色であるが緑味が強い、半透明のガラス玉である。直径4.96～5.56mm、厚さ4.16～4.43mmとやや大形で、中心に直径1.93mmの孔がある。玉の直径に対して、中心の孔径が小さい印象を受ける。側面はほぼ垂直であるが、厚さが均一でなく端面も平らでなく盛り上がっていびつであり、孔は中心よりややずれて偏りがある。外面に細かい擦れや摩耗による傷が目立つ。

317は紺色で透明のガラス玉である。直径3.25～3.31mm、厚さ1.97～2.19mmで、中心に直径1.14mmの孔がある小形の製品である。端面は平らに仕上げられ、側面形状は太鼓形に中心が膨らむ。孔は中心に位置し、ほぼ真円である。

318は淡青色のガラス玉である。316と比較すると同じ淡青色でも青味が強くて透明度が高く、法量も小さい。直径3.14～3.33mm、厚さ1.77～1.83mmで、中心に直径1.35mmの孔がある。側面は垂直で、端面の一面は平らだがもう一面は斜めに切断している。孔は中心に位置し、ほぼ真円である。

白玉や土玉と比較すると法量が小さいが、土玉は粘土を丸めて穿孔するか棒状のものに粘土を巻き付けて成形、白玉は薄片状の石材を切断し穿孔して周縁を丸くするなど、製作技法が異なる。中心に孔のあるガラス管を引き伸ばして作るガラス玉としては、他の遺跡出土品と比較しても、標準的なサイズといえる。

表 11 160 溝出土ガラス玉一覧

遺物 番号	検出 番号	写真図版 番号	実測 番号	登録 番号	調査区	地区別	層位 遺構名	色	法量 (mm)				材質
									直径 (現存)	孔径 (現存)	最大厚 (現存)	最小厚 (現存)	
316	72	39-7	玉1	1240	3区	91f-2b	第3b面積土	淡青色半透明	5.56	1.93	4.43	4.16	ソーダガラス
317	72	39-7	玉2	1307	3区	91f-1a	第3面160溝	紺色透明	3.31	1.14	2.19	1.97	ソーダガラス
318	72	39-7	玉3	1009	3区	91f-1j	第3面160溝	淡青色	3.33	1.35	1.83	1.77	ソーダガラス

第3項 分析結果

蛍光 X 線照射による化学組成分析の結果を図117～119に示した。

316は、SiO₂の含有量が多く、次いでNa₂Oが多い。よって、主成分はソーダガラスで、着色剤に銅、および微量の錫か鉛が含まれることが判明した。

317は、SiO₂の含有量が多く、次いでNa₂Oが多い。よって、主成分はソーダガラスで、着色剤にコバルトが含まれることが判明した。

318は、SiO₂の含有量が多く、次いでNa₂Oが多い。よって、主成分はソーダガラスで、着色剤に銅、および微量の錫と鉛が含まれることが判明した。

田村氏の論考によると、日本列島で弥生時代から古墳時代に出土するガラス玉は、鉛ガラス系、カリガラス系、ソーダ石灰ガラス系に大別される。各々はさらに、鉛ガラスであればバリウムの有無から2種類に、カリガラスであればAl₂O₃とCaOの含有量から中アルミナと高アルミナの2種類に、ソーダガラスであればAl₂O₃、CaO、MgO、K₂Oの含有量から5種類に分けられ、着色材によってさらに細分される(表12、田村2018)。

今回出土したガラス玉中、316と318はAl₂O₃が多くCaOが少ない、高アルミナタイプのソーダガラス(GroupSII B)に所属し、317は低Al₂O₃高CaOで、かつMgOおよびK₂Oが多い(>1.5%)植物灰タイプのソーダガラス(GroupSIIB)に所属することが明らかとなった。

この材質グループによって、生産地もおおよそ推定できる(表12・13、図120)。

それによると、316は南アジアから東南アジアを原産地とする製品である。317は西アジアから中央アジアを原産地とする製品である。318は南アジアから東南アジアを原産地とする製品である。

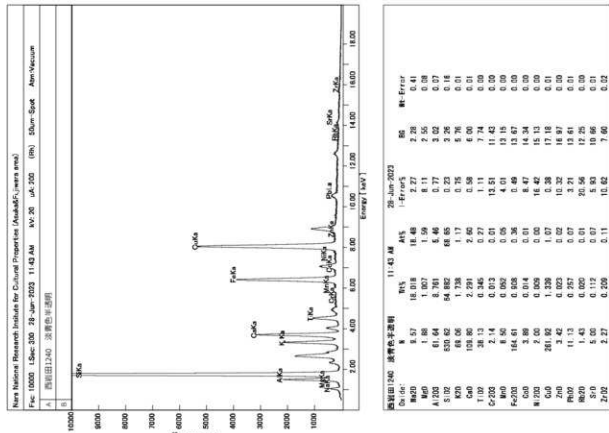


図117 316の成分分析結果

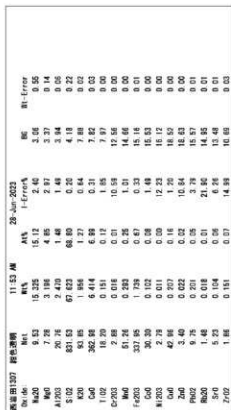
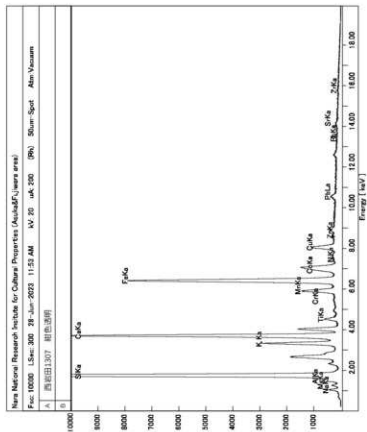


図 118 317 の成分分析結果

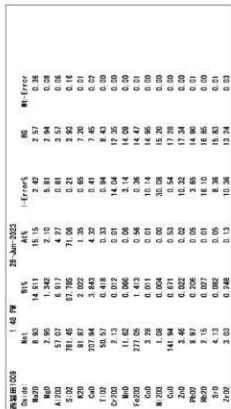
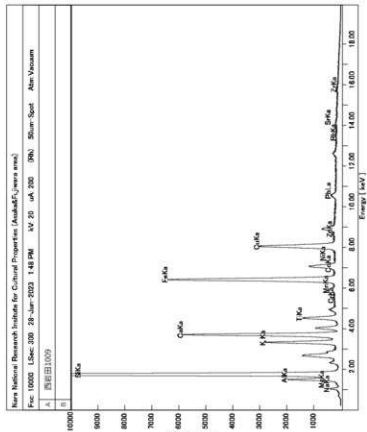


図 119 318 の成分分析結果

大賀氏の論考によると、日本では7世紀後半に、奈良県飛鳥池遺跡でガラスの製造が開始される以前は、生産地が異なるガラスが基本的には完形品として舶載された。同材質のガラスが長期間にわたって少しずつ舶載されるのではなく、異なる種類のガラスが比較的短期間に集中して舶載されるので、どの材質グループに所属するか判別できれば、時期も導き出せる(表13、大賀2020)。

316と318はGroup S II B、様相6であるので、古墳時代前期後半に相当する製品である。317はGroup S III B、様相9であるので、古墳時代中期後葉に相当する製品である。Group S III Bは日本列島や朝鮮半島の新羅で5世紀以降に出現し、大量に流通する。

160溝からは時期を判定できる遺物として、古墳時代初頭から前期の土師器や古墳時代中期の須恵器杯身等が出土している(図72、303~308)。また、第3b面を構成する3b層が古墳時代初頭を中心とすることが判明している。古墳時代前期後半と古墳時代中期後葉のガラス玉が舶載して出土することは、時期的にも合致する。

また、田村氏によれば316~318のいずれも、引き伸ばし法によって製作されているとのことである。引き伸ばし法とは、軟化したガラスを引き伸ばして中空のガラス管を製作し、それを分割してガラス玉を作る製法である。分割後に加熱整形して端面を整えたと考えられる(田村2015)。

素材ガラスの産地と玉への加工地は比較的近いとされ、引き伸ばし法による製作痕跡は日本や東アジアでみつからない。

飛鳥時代以前、日本で出土するガラス玉の多くが引き伸ばし製法によって製作されている。引き伸ばし法で製作されていることは、すなわち、古墳時代前期後半以降に南インドや中央アジアで玉として作られた製品が、日本に渡ってきたことを示す。

わずか3点のガラス玉であるが、化学組成分析を実施した結果、生産地や時期が判明した。このガラス玉の存在によって、160溝の時期決定にも大きな指標を示すこととなった。また、白玉や土玉を含めて一定量の玉製品が、散在した状況ではあるが160溝でのみ出土したことは、160溝の性格や西岩田遺跡の特徴を考える上でも意義深い。

〈参考文献〉

- 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『古川登さん退職記念献呈考古学文集 いにしへの河をのぼる』『いにしへの河をのぼる』制作委員会
- 田村朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』95 物質文化研究会
- 田村朋美 2018 「日本出土ガラス小玉の産地と流通に関する研究」『埋蔵文化財ニュース 174 同位体分析と産地推定に関する最近の動向』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

表 12 日本列島で流通したガラスの種類

材質分類		製成技法	着色剤	時期	推定 出土量	生産地	
大別	細別						
鉛 ガラス	鉛バリウム	Group L I A	巻き付け	銅	B.C.3c-B.C.2c	100±	中国東北部
		Group L I B	脱り巻き	銅、銅+黄青、黄青	B.C.1c-A.D.2c	2500±	中国南部
		Group L I C	包み巻き	銅	A.D.1c	200±	中国
	鉛	Group L II A	巻き付け	銅	A.D.1c-A.D.2c	1000±	中国
		Group L II B	巻き付け	銅、鉄	A.D.7c-	3000+	百済→日本
カリ ガラス	中アルミナ	Group P I	引き伸ばし、包み巻き、 加熱買入	コバルト、鉄、銅+マンガン	B.C.3c -(A.D.5c)	80000±	南アジア
	高アルミナ	Group P II	引き伸ばし	銅	B.C.1c -(A.D.3c)	60000+	ベトナム北平 ～中国南部
ソーダ ガラス	ナトロン	Group S I A	包み巻き、連珠	コバルト	A.D.2c	150±	地中海周辺
		Group S I Ba	巻き付け	コバルト	early A.D.5c	100±	地中海周辺
		Group S I Ib	包み巻き	コバルト	early A.D.5c	500±	地中海周辺
		Group S I Bc	包み巻き、連珠	コバルト	early A.D.5c		地中海周辺
		Group S II A	引き伸ばし	コバルト	latter A.D.1c -(A.D.5c)	5000±	南アジア 東南アジア
	高アルミナ	Group S II B	引き伸ばし、連珠	銅、銅+マンガン、鉄、 銅コロイド、酸化銅コロイド、 硫酸鉛、銅+硫酸鉛、 マンガン、コバルト	A.D.4c -A.D.6c	150000+	南アジア 東南アジア
		植物灰	Group S III A	包み巻き	鉄	late A.D.1c	10+
	Group S III B		引き伸ばし、連珠	コバルト、鉄	latter A.D.5c -A.D.6c	100000±	中央アジア ～西アジア
	Group S III C		変形的引き伸ばし	コバルト、銅、マンガン、 硫酸鉛、銅+硫酸鉛	early A.D.7c	10000±	中央アジア ～西アジア
	ナトロン 主体	Group S I V	引き伸ばし	コバルト	A.D.2c -(A.D.5c)	10000±	南アジア 東南アジア
	プロト 高アルミナ	Group S V A	引き伸ばし	銅+硫酸鉛、銅	latter A.D.1c -A.D.2c	5000±	南アジア 東南アジア
		Group S V B	連珠	銅	latter A.D.2c -A.D.3c	500±	不明
		Group S V C	加熱買入	銅	A.D.4c	500+	不明

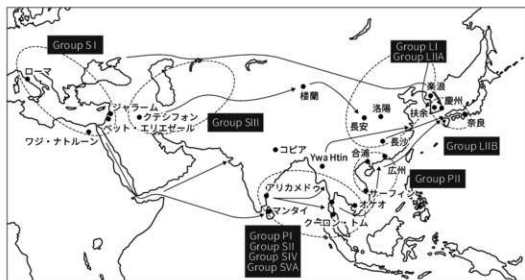


表 12・図 120 は田村明美 2018 「日本出土ガラス小玉の産地と流通に関する研究」 『埋蔵文化財ニュース』 174 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所埋蔵文化財センターより一部改定して転載

図 120 日本列島へ流通するガラス玉類の生産地と流通経路

表 13 ガラスの材質に基づいた様相区分

実年代	時期区分		主要時期区分指標				ガラス材質変遷				
	時期区分	船政育別院	甲冑	鉄砲	須磨館	組成	材質	種別・色調ほか	特記	代表例	
100	中	初期	多色顔文字			種相1	Group P I	紺小		古武高本	
		中葉					Group L I	トンボ玉		源の辻大原	
							Group L I	管玉 (TY I型)		古野*里(北垣白墓)	
		後葉	函院3期				Group L I	管玉 (TY II型)		三雲由小路	
							Group P II			立野	
	終末期							奈良岡			
	100	後	前葉	函院4期			種相3	Group P I	紺小		西古田
			中葉					Group P II			二宮七尾
								Group L I	管玉 (TY II型)		一ノ左右
			後葉								三船神社
										徳島台	
未葉		函院6期				Group S V A			舟登ヤリミヅ		
200		終末期					種相4a	Group S II A			須磨館船
								Group L II A			緑岡
								Group L I	管玉 (TY II型)		太山
								Group P I	紺大・紫葉		沙津彦(本船墓)
						Group S I A				船塚墓	
	終末期					種相4b				山田橋大山台	
								Group S I V			中原(土庫墓)
											長島
239	前	前1期	前文書神楽鏡 上方有字形式御成鏡 紅緑神楽鏡			種相5	Group P II		西流人	笠・燈古墳	
		前2期	三角縁神楽鏡	小札						矢張山古墳	
		前3期	船政1	基礎貫						安満宮古墳	
		前4期	船政2							藤地山51号墳	
		前5期	船政3							津古生跡古墳	
		前6期	船政4								
		前7期	船政5								
		前8期	船政6								
		前9期	船政7								
		前10期	船政8								
300	中	前1期	三角縁神楽鏡	型別転 奉籠知甲 方形取		種相6	Group S II B	淡青色半透明		新沢200号墳	
		前2期	三角縁神楽鏡	奉籠知甲 上群			Group S V C			白水郷塚古墳	
		前3期	三角縁神楽鏡	仿製1						池田新山古墳	
		前4期	三角縁神楽鏡	仿製2						手古塚古墳	
		前5期	三角縁神楽鏡	仿製3							
		前6期	三角縁神楽鏡	仿製4							
		前7期	三角縁神楽鏡	仿製5							
		前8期	三角縁神楽鏡	仿製6							
		前9期	三角縁神楽鏡	仿製7							
		前10期	三角縁神楽鏡	仿製8							
400	中	中1期		書金式 甲冑 (革編)	短距離 島古鏡	TG232	Group P I	紺大・紫葉	西流人	嵐吹山古墳	
		中2期					Group S I V		西流人	豊中大塚古墳	
							Group S II A		西流人	鞍馬古墳	
		中3期					Group S II B	淡青色半透明	西流人	丹ノ輪古墳	
							Group S II B	淡青色透明		門前寺1号墳	
		中4期					Group S II B	茶褐色不透明		野毛大塚古墳	
							Group S II B	茶褐色不透明			
		中5期					Group S I B	黒色不透明			
							Group S II B	褐色不透明			鎌倉塚古墳
		中6期					Group S II B	黄緑色半透明			天神山7号墳
									飯山正圓古墳		
500	後	後1期		書金式 甲冑 (多組式)	長距離	TK208	Group S II B			耶麻宮山古墳	
		後2期				TK23	種相9			塚船古墳	
						TK47				藤ノ森古墳	
		後3期					MT15	種相9			小田原山古墳
							TK10		Group S II B	褐色不透明	
		後4期					TK43	Group S II B	紫褐色透明		二方大塚古墳
											藤ノ木古墳
		後5期					TK209	Group S II B			藤ノ木古墳
							TK217	Group S II B	白濁産		藤ノ木古墳
		終末期									藤ノ木古墳
									藤ノ木古墳		
700	終末期	終末1期				飛鳥II	種相11				
		終末2期				飛鳥III					
		終末3期				飛鳥IV					
		終末4期				飛鳥V		Group I II B	日本列島産		
		終末5期				飛鳥V					
		終末6期				飛鳥V					
		終末7期				飛鳥V					
		終末8期				飛鳥V					
		終末9期				飛鳥V					
		終末10期				飛鳥V					

大貫克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『古川登志子退職記念祭皇考古学文庫』いにしへの河をのぼる」より転載

第5章 総括

第1節 西岩田遺跡の遺構の変遷

第3章では、1区から5区の調査区ごとに検出遺構、出土遺物について記述した。全調査区を通じての主要遺構面として、古墳時代初頭から中期に相当する第3b面、古墳時代中期から後期に相当する第3面、中世から近世に相当する第2面の計3面があることが判明した。

当節では今回の調査成果に合わせて、隣接する近畿自動車道天理～吹田線建設（以下、近畿道と記述）に伴う発掘調査成果も含め、上述の時代ごとの遺構の変遷や、そこから導き出される遺跡の特徴を概観する。

第1項 古墳時代中期以前（図121・122）

古墳時代初頭以前には、西岩田遺跡では人の生活痕跡は確認されていない。当地は縄文時代晩期には河内湖、弥生時代前期には河内湖の沿岸あたり、人が住むには不適切な環境だったと想像され、遺構・遺物ともに検出されていない。

弥生時代中期から後期になり、ようやく西岩田遺跡の近辺まで人が往来していた痕跡が認められる。その証左として、4a層中より1点のみだが弥生時代中期後半の甕が出土、あるいは、5区第4面で人の足跡が確認された。4a層は河内湖が埋没する過程において、岸辺の植物群生が有機物として土壌に混在した状態と推測される。

古墳時代初頭になると調査区全域に流路堆積が広がり、層中からは土器や木製品が多数出土する。

1・2区では流路堆積層である3b層の堆積が検出されるのみで、遺構は検出できていない。1・2区に隣接する近畿道の調査区、Aトレンチの南端で庄内式期の溝1を検出するのみである。それより南のBトレンチおよび3区では、北端から中央にむかって3b層の堆積が最も厚くなる。3b

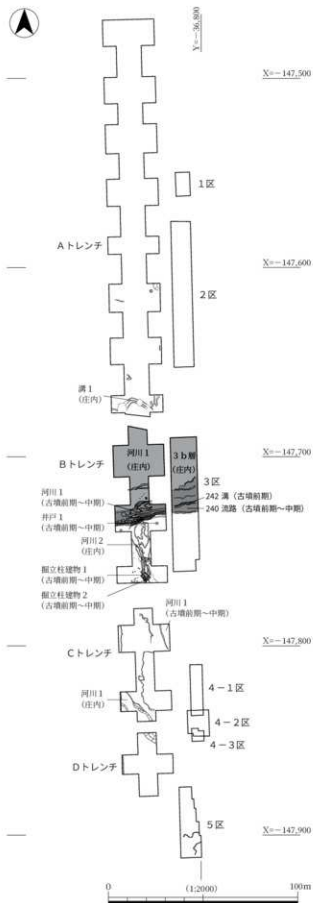


図121 古墳時代初頭～中期遺構平面図

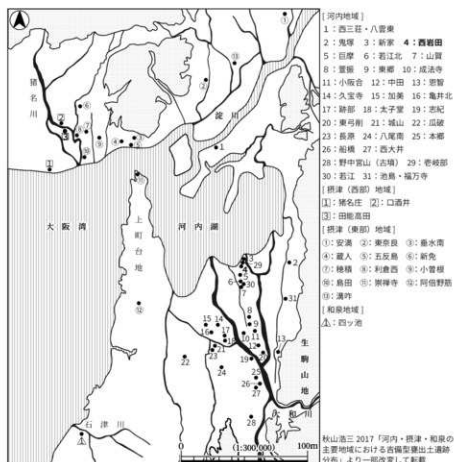


図 122 河内・摂津・和泉の吉備系土器出土遺跡

人為的な遺構は検出されていない。

古墳時代初頭になると出土遺物が飛躍的に増加し、調査地が居住域の中心と言えないまでも、周辺に普遍的に人が住んでいた様子がうかがえる。240流路や242溝中に土師器の小形精製品や意図的な穿孔をもつ土器が認められる事象は、水にまつわる祭祀行為も示唆される。

また、出土遺物にみられる木製品の榿や他地域から搬入された土器の存在は、西岩田遺跡が水辺に近い立地条件を活かして近畿圏、さらには山陰や山陽、四国、東海、北陸、九州や関東など遠方の地域と密接に交流していたことを物語っている。土器には明らかに他地域から搬入されたものと、器形や技法は他地域のものだが胎土は在地のものがあり、土器自体がもたらされた場合、土器を製作する工人が移動した場合、製作技術を模倣して在地の人が製作した場合と様々な場合が想定できる。

一例として吉備系土器をあげる。当遺跡から出土する外来系の土器のうち、吉備系(型)土器が約半数を占める(第5章第2節第3項参照)。従前より西岩田遺跡では早い時期から吉備系の土器が出現し、出土数も突出し(西岩田遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡出土点数が河内での吉備系土器出土数の4割強を占める)、甕以外の器種も認められることが指摘されてきた(秋山2017)。今回の調査でも計14点の吉備系甕や壺が出土し、さらに資料数を増加することとなった。

図122に河内・摂津・和泉の吉備系土器出土遺跡を秋山文献より一部改変して示した。掲載遺跡は河内湖岸や川岸に沿って点在するが、なかでも西岩田遺跡は河内湖岸の汀線跡にあり、かつ、旧大和川の西岸の水運交易に便利な場所に位置することがよくわかる。

同じく出土遺物の製塩土器については、脚台式と丸底式があり、丸底式はさらに、外面タタキ調整の

層の堆積はBトレンチでは庄内式期の河川Iと称されており、縄文時代から古墳時代初頭、主に庄内式期の遺物を多量に含む。

中央は低い場所をめがけて水流が流れ込むためか、古墳時代初頭以降も、古墳時代前期の242溝や古墳時代前期から中期の240流路、河川Iなどが繰り返し形成される(第3b面)。Bトレンチ南半で初めて、微高地上に掘立柱建物からなる居住域が散見される。さらに南の4区・5区・Cトレンチ・Dトレンチでは再び流路の堆積が認められるが、

ものとナデ、ユビオサエ調整のものに大別される。大阪湾を南下して泉州や紀淡地域から搬入される製塩土器（ナデ、ユビオサエ調整）と、より内陸部の部屋北遺跡などの河内湖北部（タタキ調整）からもたらされる製塩土器が併存する（第5章第2節第2項参照）。

当時代には、自然の汀線を利用した船着き場が西岩田遺跡周辺にあったと推測される。大阪湾から河内湖へ、河内湖から大阪湾へと舟が行き交い、交易や交流を行っていた様子が想像できる。あるいは当遺跡を經由して、川を北上してより内陸部へと物資が運ばれていた。西岩田遺跡は物流交易の拠点だったと考えられる。

第2項 古墳時代中期から古代（図123）

古墳時代中期になると、検出される遺構の範囲が2区から4区、Aトレンチ南半からDトレンチまでにおよび、南北長約0.3km、東西幅約0.05kmと一挙に広がる。当遺跡の中心となる遺構面である（第3面）。

各調査区の地形は第3b面でみられる高低差のある地形を踏襲する。すなわち、2区の南半から3区の北半が最も標高が高く、いったん低くなって、3区南半から4-1区にかけて、再び高くなる。1区や2区の北半は北に向かって、4-2区から5区にかけては南に向かって徐々に低地化する。微高地上には掘立柱建物や土坑、ピット、溝などの遺構が多数検出された。

2区では南半の微高地上で、蛇行して南北にのびる33溝、33溝を切る32溝、32溝を切る掘立柱建物1、土器を埋納する土坑などを検出した。32溝、33溝からは高杯35点、高杯蓋14点、杯身28点、杯蓋11点など総数98点の須恵器と、甕19点（長胴甕を含む）、甗5点を含む29点の土師器、製塩土器などが出土した。

土器はいずれも古墳時代中期に属し、器形が小形品は完形に近く、大型品も全形を復元しうものが多い良好な一括資料である。また、同器種が

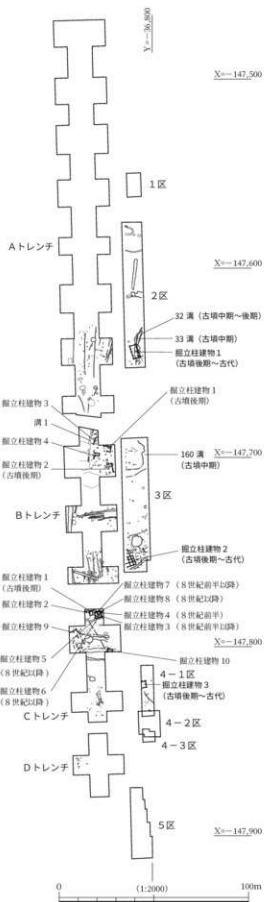


図123 古墳時代中期～古代遺構平面図

1カ所にかたまっているなど、出土状況からも意図的な埋納がうかがえる。点数は少ないが、生産地以外ではあまりみられない須恵器甕や古墳供献土器の器台が出土すること、愛媛県伊予市市場南組竊跡産須恵器壺が出土すること、土師器の鍋や長胴甕、甕などの煮炊具が一定量出土し、土師器も生駒山西麓産と非生駒山西麓産が併存することも特筆すべきである。2区出土遺物の主流は土師器から須恵器へと変化し、須恵器では他地域からの搬入品や大陸からの影響を受けて製作された土器がみられるなど、西岩田遺跡が交流の拠点であることをさらに裏付ける。

3区では、北側の微高地上で160溝を検出した。160溝は土器の出土は少量だが、ガラス玉3点、滑石製白玉388点などの微細な遺物が出土しており、古墳時代中期と目される。出土白玉は具体的な産地の同定は実施できていないが、ガラス玉については科学的分析により、南アジア～東南アジアや中央アジア～西アジアから伝播したことが判明した。

中央で検出した240流路は、上層には古墳時代中期の須恵器や土師器を含み、廃絶時期は古墳時代中期と思われる（古墳時代前期から連続する流路と捉えて、図121に掲載している）。

再び標高が高くなる3区南半の微高地では、掘立柱建物2や土坑、ピット、溝などが多数検出された。4-1区でも遺構は少なくなるが、掘立柱建物3を検出した。掘立柱建物は2区、3区、4-1区で各1棟、合計3棟が検出された。掘立柱建物1・2は南北を主軸とし、真北よりやや西にふるなどの共通点から同時期の遺構と捉える。掘立柱建物1が最も面積が大きく、掘立柱建物2は東辺に庇をもつなどの違いはあるが、掘立柱建物としてはさほど大規模ではない。ただし、第3面は後世に上面を大きく削平されており、旧地表面を留めるものではないため、掘立柱建物も柱掘方の規模、柱穴の深さなどはもっと大規模であった可能性が高い。

掘立柱建物は、柱穴に遺物をほとんど含まないため明確な時期決定の基準を欠くが、柱穴の形状や建物の規模、他の遺構との切り合い関係から古墳時代後期から奈良時代の遺構と捉える。

既往の近畿道の発掘調査では、古墳時代後期の掘立柱建物3棟、8世紀以降の掘立柱建物5棟、時期不明の掘立柱建物5棟の計13棟の掘立柱建物を検出している。建物の主軸方向が掘立柱建物1・2・3と異なるものもあり、同時期にすべての掘立柱建物が存在していたのではなく、やや時期差をもって複数の掘立柱建物が存在していたと考えられる。

遺構数が飛躍的に増加する古墳時代から古代（飛鳥時代、奈良時代）は安定した地盤で、居住域が営まれていたと考えられる。また、古墳時代中期から後期においても、西岩田遺跡では引き続き他地域との交流が活発であったことが出土遺物からうかがえる。

第3項 中世以降（図124）

平安時代から中世前半期は遺構はほとんど検出されていない。遺物も黒色土器A類、B類碗や土師器皿、瓦器等の破片が包含層中にごく少量含まれるのみである。土地利用がなかったと考えられる。

中世後半期になって再び、主に耕作地としての利用が再開される。土地利用にあたっては整地が行われたと考えられる。古代以前に微高地であった箇所は削平され、逆に低地部は埋め立てを行って平坦な地形を作り出したと思われる。

X＝-147,720以南では中世後半期の土坑や井戸などを、以北では近世の畝溝を検出した。1・2・3区でも南北方向の畝溝が検出されるが、X＝-147,730周辺になると東西方向の177溝、それに平行する鋤溝群が検出される。

南北から東西への主軸方向の変化が、条里地割に基づいた土地区画制度に起因するのではないかと考えた。そこで、調査区周辺の条里地割を調べることとした。

『西岩田』の報告書でも条里地割の復元を行っているが、玉串川が分岐して東の吉田川、西の菱江川となるが、西岩田から意岐部は菱江川の氾濫原に位置する自然環境に起因してか、条里地割はなく（条里復元図）、条里制の施行は江戸時代前期には廻り得ないとしている（村上他 1982）。

金村浩一氏は西岩田遺跡の南約1.0kmに位置する瓜生堂遺跡において検出された、13世紀前半以降の区画溝と、瓜生堂遺跡周辺に残る14世紀末には存在した条里地割との対比から、当地が九条E里25・36坪に相当するとした（金村 1999）。

この地割を瓜生堂遺跡の北に位置する西岩田遺跡まで延長してあてはめたのが、図124の推定条里境線である。すると、坪境には合致しないが、坪境より一段分、約100m北上がった箇所に3区の177溝他鋤溝群が合致する。また、Aトレンチでも南北畝溝を区画するように東西方向の畝溝が2カ所で見受けられる。その南北畝溝の位置が同じく坪境より一段北上がる、もしくは南に下がった箇所に合致する。

よって、西岩田遺跡で検出された生産遺構（畝溝や鋤溝）も当時の条里制を基盤とした土地区画割に基づいて造られたと言えるのではなかろうか。

最後に、当調査で使用した基本層序と近畿道の調査で使用している層序を対照表としてまとめた（表14）。当調査では、弥生時代中期後半と想定する層位までしか検出できなかったが、近畿道の調査では弥生時代前期までの層位を確認しており参考されたい。

今回の調査地に隣接した東側では、大阪モノレール軌道部分の発掘調査が令和4年度から5年度にかけて実施中であり、古墳時代を主とする遺構、木製仮面などの遺物が検出されている。その調査

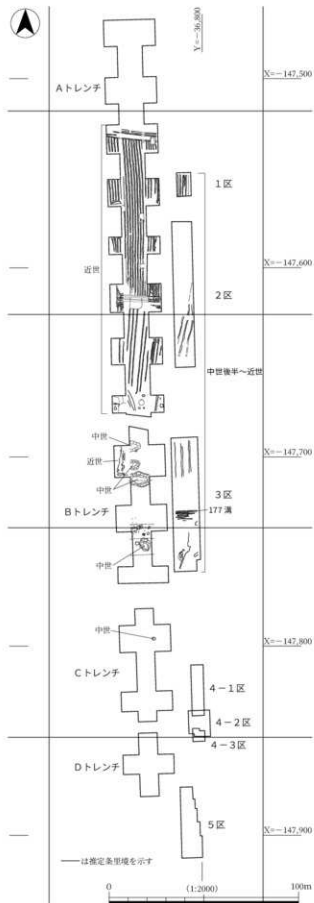


図 124 中世以降遺構平面図

表 14 西岩田遺跡基本層序対照表

時期	層序略号	西岩田（近畿道）						西岩田（車道）		AMS分析結果による年代
		Aトレンチ		Bトレンチ		C・Dトレンチ		層名	遺構・遺物	
		層名	遺構・遺物	層名	遺構・遺物	層名	遺構・遺物			
現代	I	盛土		盛土		盛土		盛土		
近現代	II	黒色腐植土	溝・木矢板	淡茶褐色土	溝・木矢板・井戸・土坑	淡茶褐色土	溝・ピット・落ち込み	旧耕作土		
近世以降	III	青黒色粘土	足跡・土坑	淡茶褐色粘質土	溝・ピット・落ち込み・土坑・磁器	淡茶褐色粘質土		1 a層	陶器・磁器	
中近世	IV	褐色泥じり青灰色粘土	縦状遺構・足跡 古墳～鎌倉の遺物包含層 木製品・漆器・銅銭		土坑	暗灰色粘土	古墳～近世の遺物包含層	2 a層	鉄溝・陶器・瓦器・瓦製品・銅銭	
		褐色泥じり青灰色粘土（上層より褐色強い）				灰黄色粘土				
古代	V （古墳中期）		溝・土坑・土師器・須恵器・玉類	黄褐色泥じり暗青灰色製砂粘質土	溝・柱穴・竪立柱建物・土師器・須恵器	黄褐色粘土 灰茶褐色土		3 a層	竪立柱建物・柱穴・溝・土坑・須恵器・土師器・製塩土器・木製品・銅銭・ガラス玉・白玉	
古墳IV										
古墳III	VI （古墳中期～前期）			淡黄褐色粗砂（布留河川堆積）	溝・土坑・井戸・竪立柱建物・土師器・須恵器・製塩土器	淡黄褐色粗砂（布留河川堆積）		3-2層か		
古墳II				淡黄褐色系砂（河川最終堆積）	落ち込み・河川・土師器	淡黄褐色系砂（河川最終堆積）	河川・土師器・木製品			
古墳I	VII （庄内）	a	灰青色粘土 シルト互層	上面に褐色粗砂 I	青灰色粘土	土坑・河川・土器群	青灰色粘土	河川・土師器（庄内）・木製品	溝・流路・土師器（布留・庄内）・須恵器・土器・木製品・弥生土器	
		b	灰青色粘土 I	溝 I・2・土師器（庄内）・木製品	黒褐色粘土 II	河川・土師器（庄内）・木製品	黒褐色粘土 II	河川・土師器（庄内）・木製品		
		c	灰青色粘土 2	III	黒褐色粘土		黒褐色粘土			
弥生後期	VIII	流水堆積砂層	流路・弥生土器・木製品多量		木製品		木製品			
弥生中期	IX	a	暗青色粘土	上面に木製品				4 a層	弥生土器 試料1 AD1c後半～3c前半	
		b	暗青色粘土（植物層を含む）		暗青色粘土（漸移層）		暗青色粘土（漸移層）			試料2 AD2c前半～3c前半 試料3・4 BC4c中頃～1c中頃
弥生前期	X I	灰色粘土	土器含む	ビート層		ビート層				
	X II	暗茶褐色粘土	無遺物							
縄文	X III	灰色砂礫	自然木	灰白色粗砂		灰白色粗砂		未調査		
	X IV	灰白色砂礫	貝を含む							

成果も合わせることによって、より東側までの調査成果を得ることができる。さらに東西方向に広がりをもった西岩田遺跡を概観することができるのではないかと、今後の調査成果に期待したい。

〈参考文献〉

- 秋山浩三 2017 「吉備・近畿の交流と土器」『弥生時代のモノとムラ』新泉社
- 石神幸子 1987 「西岩田遺跡」『河内平野遺跡群の動態 I』（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会
- 金村浩一 1999 「第5章 歴史時代の調査成果」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』（財）東大阪市文化財協会
- 村上年生・小山田宏一・宮野淳一 1982 「第II章 歴史的環境」『西岩田』（財）大阪府文化財センター・大阪府教育委員会

第2節 遺物から見た西岩田遺跡の様相

第1項 32・33溝出土須恵器

1. 器種構成

2区の32・33溝からは古墳時代中期から後期の土器が多く出土した。32・33溝出土実測土器を32・33溝上層、32溝、33溝、すべての合計ごとに須恵器と土師器の比率、器種構成比を示した(図125)。その結果、須恵器の比率が高く、約80%を占める。

須恵器では、高杯35個、杯身28個、高杯蓋14個、杯蓋11個、甕3個、甕2個、壺2個、鉢1個、器台1個、甕1個が出土しており、90%以上を供膳具(杯蓋・杯身・高杯蓋・高杯)が占める。特に、高杯と杯身が多く、蓋類の2倍を超える数量が出土しているのが特徴的である。また、高杯は、有蓋高杯と判断できる個体が28個と、圧倒的に多い。一方、土師器では、甕19個、甕5個、鍋4個、高杯1個が出土した。ほぼ煮沸具で構成されており、特に長胴甕を中心とした甕類が多い。中河内地域では、古墳時代中期の土師器は煮沸具にほぼ限られ、供膳具が減少するという特徴があり(辻2002)、32・33溝出土土器も同様の様相を示す。

また、出土状況から見ると、32・33溝の検出範囲全体から土器が出土しているが、その出土状況にはいくつか特徴がある(図126)。1つ目は、古墳時代中期に相当する須恵器高杯、高杯蓋、杯蓋、杯身が1カ所に集中して出土した点である。次に、土師器長胴甕、鍋の組み合わせが大別して3カ所にまとま

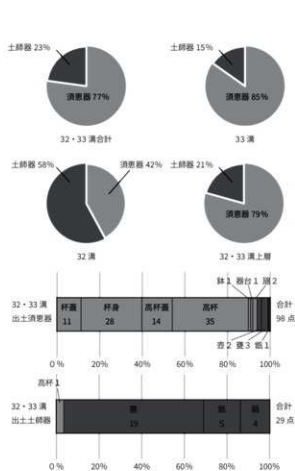


図125 2区 32・33溝出土土器器種構成

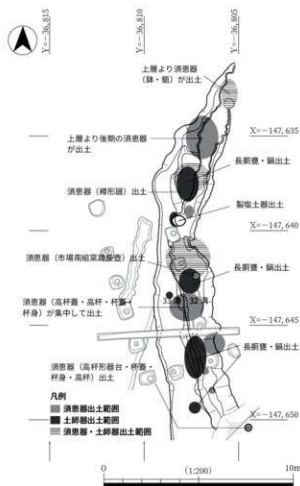


図126 2区 32・33溝土器出土位置概略図

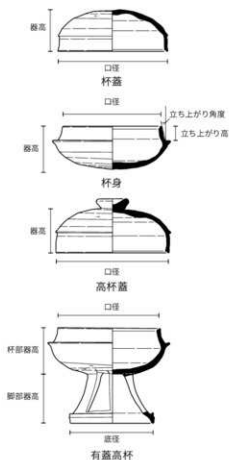


図 127 器種別計測箇所

は9～24度である。杯身の立ち上がり高は1.3～2.1cm、立ち上がりの傾斜は8～26度である(図128)。有蓋高杯の法量は規格性が見られ、TK23型式～TK47型式におさまると考えられる。一方、杯身はややばらつきがみられ、TK23型式～MT15型式におさまると考えられる(植田2012)。

高杯蓋の口径は11.8～12.6cm、器高は4.1～5.2cm、杯蓋の口径は11.6～13.0cm、器高は4.1～5.3cmに分布する(図129)。高杯蓋は口径がやや小形の個体(遺物番号119)を含むものの、有蓋高杯と同様に規格性をもつ。杯蓋は高杯蓋の法量に近似するが、小形品(遺物番号93)や大形品(遺物番号45)が混じる。有蓋高杯、高杯蓋は杯身、杯蓋と比較して規格化されている傾向がみられる。

続いて、有蓋高杯の底径と脚部高を計測し、脚部の法量を示した(図130)。口径の法量に規格性がみられたのに対し、底径はややばらつきがあると考えられる。また、口径・杯部器高と底径・脚部器高の規模は必ずしも比例しないようである。脚部には、外面にカキメ調整を施すものがあり、その調整を施す範囲から、カキメを脚部に施す個体、カキメを脚部から杯部まで施す個体に分けられる。法量とカキメ調整についてはあまり相関性がみられないが、脚部から杯部までカキメを施す個体は器高が4.5cm以下の低いものには認められない。

法量の傾向についてまとめてきたが、それ以外の所見として、ロクロの回転方向について説明する。32・33溝出土須恵器のロクロ回転を観察したところ、器種により異なる傾向がみられた(図131)。有蓋高杯は時計まわりの個体が占める割合が65%と高い。杯身は反時計まわりが65%と多く、杯蓋は反時計まわりが80%弱と圧倒的に多い。高杯蓋は反時計まわりが54%とやや多い。先学により、TK47型式以降、ロクロ回転の方向が時計まわりの個体が増加することが指摘されているが(田辺1968)、ロクロ回

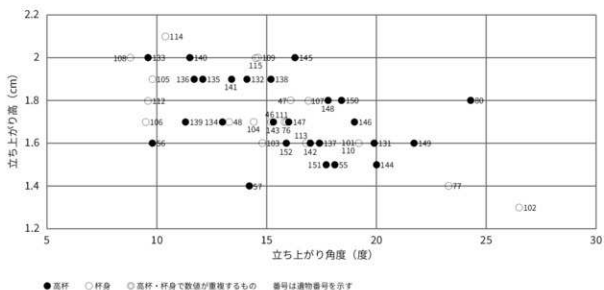
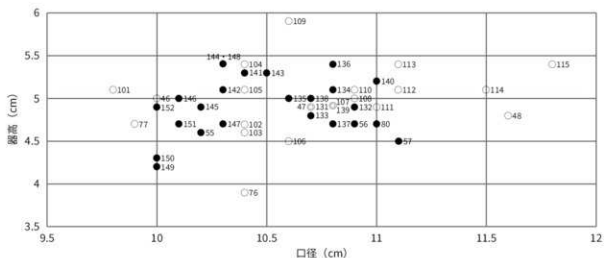
って出土したことがあげられる。これらの須恵器供膳具と土師器煮沸具は各地点に分かれて出土している傾向があり、意図的に配置された可能性がある。

2. 須恵器有蓋高杯の特徴

32・33溝では、古墳時代中期の須恵器供膳具が完形品に近い状態で一括して出土しており、とりわけ有蓋高杯の存在が目立つ。従来より須恵器杯身、杯蓋は古墳時代の編年の基準となっており、古墳時代中期から後期にかけて法量に変遷することが指摘されている(田辺1968)。

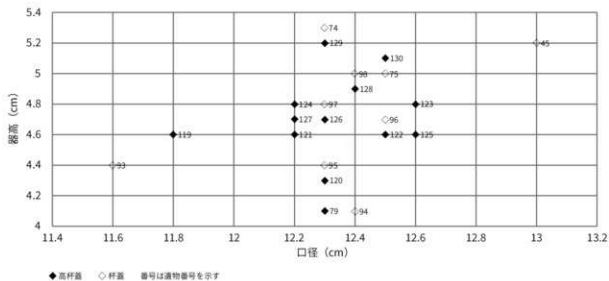
そこで、まず杯身、杯蓋、有蓋高杯、高杯蓋の法量を計測し、杯身と有蓋高杯、杯蓋と高杯蓋の計測値を比較して傾向を観察したい。各器種の計測箇所は図127で示した通りで、実測図上で完形に復元できる個体を対象とする。ただし、明確に時期差があると考えられる個体は省いた(遺物番号50～52)。また、杯身と有蓋高杯、杯蓋と高杯蓋を比較するため、有蓋高杯は杯部の器高のみを計測し、高杯蓋はつまみ高を除いた器高から判断する。

有蓋高杯の口径は10.0～11.1cm、杯部器高は4.2～5.4cm、杯身の口径は9.8～11.8cm、器高は3.9～5.9cmの範囲に分布する。高杯の立ち上がり高は1.4～2.0cm、立ち上がりの傾斜



● 高杯 ○ 杯身 ○ 高杯・杯身で数値が重複するもの 番号は通物番号を示す

図 128 須恵器有蓋高杯・杯身の法量



◆ 高杯蓋 ◇ 杯蓋 番号は通物番号を示す

図 129 須恵器高杯蓋・杯蓋の法量

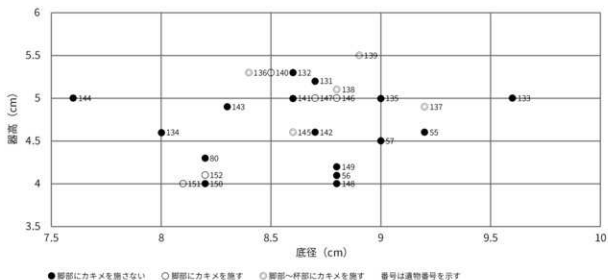


図 130 須恵器有蓋高杯脚部の量度

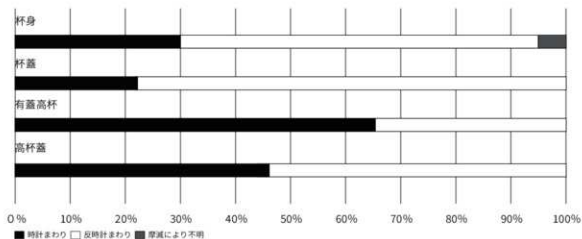


図 131 器種別ロクロ回転方向

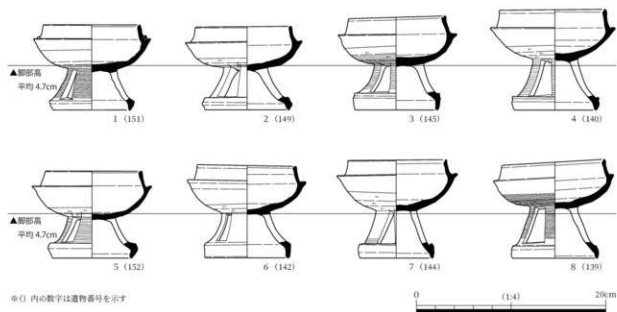


図 132 32・33 溝出土須恵器有蓋高杯

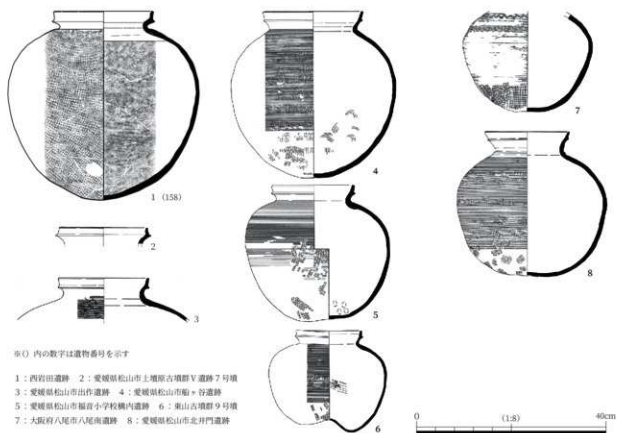


図133 市場南組窯産須恵器壺

※()内の数字は遺物番号を示す

- 1：西岩田遺跡 2：愛媛県松山市土壇原古墳群V遺跡7号墳
 3：愛媛県松山市出作遺跡 4：愛媛県松山市船ヶ谷遺跡
 5：愛媛県松山市福首小学校横内遺跡 6：東山古墳群9号墳
 7：大阪府八尾市八尾南遺跡 8：愛媛県松山市北井門遺跡

転の方向の割合については地域により差があるとの指摘もある（菅原2006）。有蓋高杯は時計まわりが多いため、他の器種よりも若干新しい時期の所産、もしくは器種によって生産地（窯）の割合が異なる可能性がある。

その他の特徴としては、有蓋高杯はいずれも長方形透孔を穿孔し、脚端部が下方に屈曲するという点あげられる。このような脚部をもつ個体は陶邑窯の高蔵寺地区・陶器山地区に多いとされる（菱田1992）。ただし、脚部の段をみると、明瞭な沈線を巡らせるものと、沈線が不明瞭なものが混在する。32・33溝から出土した有蓋高杯は脚部を成形する際に、長方形透孔を穿孔し、脚端部を下方に屈曲するという点を重視し、法量や細部については個体差が認められることから統一されていなかった可能性がある（図132）。また、色調や胎土、焼成について観察すると、色調は紫灰色や青灰色で胎土が精緻なものが多い一方、色調が灰白色で焼成が甘く粗雑なものが少数含まれる。そのため、有蓋高杯が全て同一の窯で焼かれたのではなく、複数の窯で生産された可能性も考えられる。

3. 市場南組窯跡産須恵器壺

33溝では愛媛県伊予市市場南組窯跡で生産されたと推測される壺（図133-1、遺物番号158）が出土した。市場南組窯跡は松山平野南部に所在し、初期須恵器を生産していたことで知られる。市場南組窯跡で生産された須恵器は、陶邑窯跡産の須恵器とは異なる特徴の形態や文様を施す器種が認められる。壺についても、その口縁部から頸部にかけての形態や調整技法について注目されてきた（定森1993）。市場南組窯跡での須恵器生産はTK216型式以前から開始され、TK23型式併行期まで継続していたとされており、これまでに三吉秀充氏による型式分類と編年が提示されている（三吉2016）。三吉氏の分類では市場南組窯跡の壺は8種類の型式に分けられ、3段階の編年（Ⅰ段階：TK216型式以前、Ⅱ段階：

TK216型式～TK208型式、Ⅲ段階；TK208型式～TK23型式）が設定されている。西岩田遺跡出土資料は壺D類に分類され、口縁部から肩部は図133-2・3と同じ特徴をもつと考えられる。体部は壺C類（図133-4～6）に似ると考えられる。壺D類は時期としてはⅡ段階に位置するとされる。32・33溝から出土する遺物はTK23型式～TK47型式に属するものが多く、当資料はそれよりもやや古い様相を示す可能性があるが、消費地であるため時期差が生じたのではないかと考えられる。

市場南組窯跡で生産された須恵器は愛媛県外では近畿（大阪府、奈良県、兵庫県）、瀬戸内海沿岸（山口県、広島県、岡山県）、九州（大分県、宮崎県、鹿児島県）と広範囲で確認されている（註1）。

大阪府内で市場南組窯産と推測される須恵器壺はこれまでに2点確認しており（山之内2004）、出土した遺跡は、西岩田遺跡と同じく中河内地域に分布する。図133-7は八尾市八尾南遺跡から出土したものである。口縁部が欠損しているため、全形は不明ではあるが、偏球状を呈し、底部は平底で、肩部外面に波状文、底部外面に格子タタキを施す。三吉氏の型式では壺A類に分類されると考えられる。また、未報告資料ではあるが、大阪市瓜破遺跡からも出土しており（松山市教育委員会他2002、和歌山県立紀伊風土記の丘2014）、図133-8と特徴が類似することが指摘されている（山之内2004）。

今回、河内湖南岸の縁辺に位置する西岩田遺跡で、市場南組窯跡で生産された須恵器が出土したことは、古墳時代中期における河内湖南岸の集落と瀬戸内海沿岸との関係を検討する上で重要な事例になるのではないかと考えられる。

〈註〉

1 松永悦枝氏よりご教示頂いた。

〈参考文献〉

松山市教育委員会・松山市考古館・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2002 『海を渡ってきたひと・もの・わざ～陶質土器・初期須恵器からみる朝鮮半島と伊豫の国際交流～』

和歌山県立紀伊風土記の丘 2014 『和歌山県立紀伊風土記の丘 秋季特別展 須恵器誕生～新しい土器は古墳時代をどう変えたか～』

植田隆司 2012 「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍谷大学考古学論集Ⅱ－網干善教先生追悼論文集－』龍谷大学考古学論集刊行会

定森秀夫 1993 「出作遺跡の非陶器系須恵器・陶質土器」『出作遺跡1』松前町教育委員会

菅原雄一 2006 「陶器古窯跡の地域差と技術拡散」『考古学研究』第53巻第1号 考古学研究会

田辺昭三 1968 『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ研究論集 第10号 平安学園考古学クラブ

辻美紀 2002 「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告IX』（財）大阪市文化財協会

菱田哲郎 1992 「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会

三吉秀亮 2016 「市場南組窯跡須恵器の型式分類と編年」『古文化談叢』77 九州古文化研究会

山之内志郎 2004 「考察 愛媛県内出土の渡来系遺物」『東山古墳群2』松山市文化財調査報告書97 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

〈挿図出典〉

（図131-2～8：山之内2004）

第2項 製塩土器

3区の3b層中、240流路、242溝より脚台式製塩土器、2区32溝を中心に丸底を有する製塩土器が出土した。

1. 脚台式

まず、今回の出土資料で出土した脚台式製塩土器について、広瀬和雄氏の分類に基づき説明する（広瀬1994）。全形が判明する個体はないが、計14点を図化した（図134-1～14）。

図134-1、2は240流路より出土した。いずれも体脚部連続製作技法により、脚部にナデ調整が認められることから、脚台Ⅲ式に分類されると考える。図134-3～5は242溝から出土した。3・4は脚台Ⅲ式に分類される。5は体部のみ残存しており、体脚部分離製作技法によると考えられることから脚台Ⅰ式に分類される。3区3b層はやや時期幅があり、脚台Ⅰ式（図134-6・7）、脚台Ⅱ式（図134-8～10）、脚台Ⅲ式（図134-11～13）が認められる。

全体的に脚台部は中実のものがほとんどであるが、図134-14は中空であった可能性がある。調整にみられる特徴として、図134-12のように体部外面をタタキ成形することが多いようである。

240流路、242溝は脚台Ⅲ式が中心となる。3b層は弥生時代後期後半から布留式期にあたり、他の遺物の年代とも整合する。そのほか、図134-15は低脚付杯として報告したが、東部瀬戸内の製塩土器の可能性もある。

2. 丸底式

次に、丸底を有する製塩土器について説明する。ほとんどが32溝から出土した（図134-29のみ3区3b層より出土）。いずれも広瀬氏の分類における「丸底Ⅰ式」にあたる。報告では計22点を図化したのが、図134では口縁部から体部を復元できた14点を掲載する。

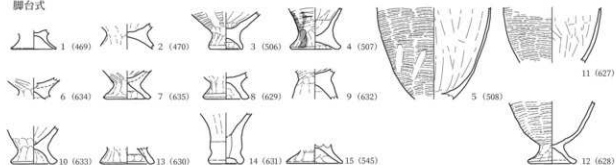
法量は、口径4.5cm未満で比較的小形のもの（図134-16～24）、口径4.5cm以上のもの（図134-25～29）に大別できる。基本的にコップ形を呈するが、口径4.5cm以上になると鉢形に近い形態も認められる。底部が復元できる個体は少ないものの、口径4.5cm未満では丸底（図134-16）、口径4.5cm以上では平底（図134-25・26）が認められる。

西岩田遺跡ではこれまでの調査でも丸底を有する製塩土器を確認している。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査では、古墳時代中期（TK208～TK23型式）の遺構である土壇6の上層より製塩土器と炭化物が集中して出土した。土壇6から出土した製塩土器は、口縁部から体部の形状を基準とした分類がなされている（図135、大文セ他1983）。Ⅰ類からⅢ類が丸底Ⅰ式に相当し、Ⅰ類は口縁部によりⅠa類からⅠc類の3つに細分される。土壇6の出土資料はⅠa類・Ⅲ類が多い傾向がみられた。また、調整は主にナデを施し、一部の個体は外面にタタキ調整や、内面に貝殻条痕が認められるようである。

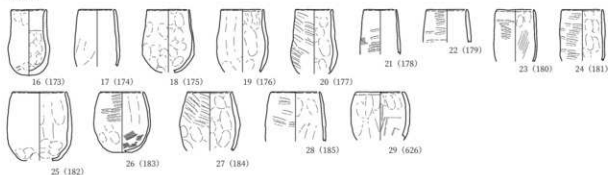
今回出土した資料を図135を参考に分けると、Ⅰa類が2点（図134-23、24）、Ⅱ類が3点（図134-16・19・20）、Ⅲ類が8点（図134-17・18・21・22・25～29）となる。Ⅲ類が多い点については、土壇6と同様である。しかし、土壇6では、Ⅲ類と同じ数量のⅠa類が含まれていたが、32溝では少数しか認められなかった。また、口径4.5cm未満の個体はⅠa類、Ⅱ類、Ⅲ類が混在するのに対し、口径4.5cm以上の個体はいずれもⅢ類に分類されるという特徴を示す。

続いて、調整について観察していきたい。外面調整は、ナデ・ユビオサエによるものと、タタキを施すものに分かれる。その割合を図136に示した。今回、出土した資料には個体として復元できなかった細片が多く含まれるため、実測図掲載分は個体数と重量を計測し、未掲載分については重量のみをはか

脚台式



丸底式



◎ 内の数字は当報告書の遺物番号を示す

図 134 出土資料

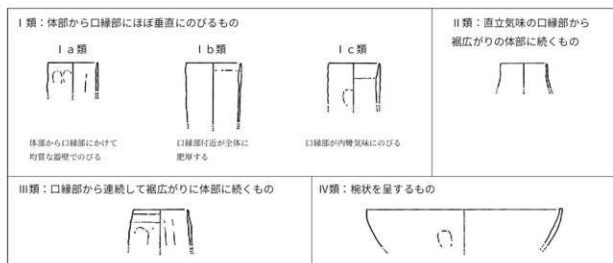


図 135 『西岩田』における製塩土器分類

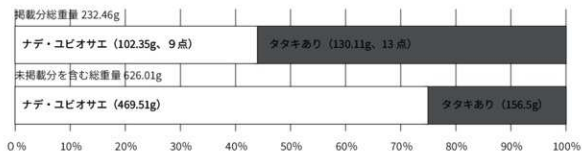


図 136 丸底を有する製塩土器の外面調整の割合

った。掲載分では、ナデ・ユビオサエは44%、タタキ調整は56%となり、外面にタタキ調整を施すものが過半数を占めるという結果になった。形態別にみると、Ⅱ類は3点中2点がナデ・ユビオサエにより調整し、Ⅲ類は8点中5点、Ⅰa類は2点全てにタタキ調整が認められた。その他の特徴として、ナデ・ユビオサエによる個体は胎土に砂粒が多く、粒径が大きい(3~5mm)傾向がみられる。また、タタキ調整を施す個体は胎土に砂粒が少なく、雲母を含む割合が高い。未掲載分を含めると、ナデ・ユビオサエが75%、タタキ調整が25%となり、ナデ・ユビオサエによるものが4分の3を占める。そのため、本来は土壌6出土資料と同様にナデ・ユビオサエによる個体が中心であった可能性がある。

3. 小結

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての製塩土器を確認した。3区では、流路堆積層である3b層と、その上面で検出された240流路・242溝より脚台Ⅰ式から脚台Ⅲ式が出土した。弥生時代後期から古墳時代初期の調査地周辺は水郷が広がっており、人々が居住する環境ではなかったと想定される。また、層中より散在して出土したことから、調査地周辺の集落より流れてきたと考えられる。

古墳時代中期から後期の遺構である32溝では丸底式の製塩土器が出土した。32溝、33溝では多くの須恵器供膳具が出土しており、土器祭祀が行われたと考えられる。製塩土器も1カ所に集中していたため、意図的に廃棄された可能性がある。

32溝から出土した製塩土器の特徴として、外面調整がナデ・ユビオサエによるものと、タタキ調整を施すものが混在するという点があげられる。前者は紀淡海峽地域に多いとされ、後者は河内湖北岸等の内陸部に多い傾向がみられる(塚本2023)。河内湖北岸の遺跡である部屋北遺跡では、コップ形で平底をもち、外面にタタキ調整を施すものが中心となって多く出土しており(府教委2010)、32溝出土土器にも類似する個体が含まれる(図134-26)。このような個体は河内湖北東岸地域で生産されたと指摘されている(岩崎2021)。古墳時代中期、西岩田遺跡は河内湖南岸に立地していたため、海岸部と内陸部の中継地点となり、複数の地域から運ばれた生産品が流通していたと推測される。

<参考文献>

- 大阪府教育委員会文化財保護課 2010 『部屋北遺跡Ⅰ』大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
岩崎郁実 2021 「大阪府交野市森遺跡出土製塩土器の検討」『交野市文化財だより』第32号 交野市教育委員会
才原金広 1980 「東大阪市内出土の製塩土器」『東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度』東大阪市遺跡保護調査会
才原金弘 1985 「東大阪市内出土の製塩土器」『財団法人東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』(財)東大阪市文化財協会
塚本浩司 2023 「部屋北遺跡で出土した製塩土器の意味」『牧の景観考古学』六一書房
広瀬和雄 1994 「大阪府」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店
<挿図出典>
(図135:大文セ他 1983 『西岩田』に基づいて作成)

第3項 外来系土器

1. 対象資料

今回の調査では、3区の遺構(240流路・242溝等)や3b層を中心に、外来系土器(註1)が出土している。時期としては、弥生時代後期から古墳時代中期と年代幅があり、九州から南関東までの特徴をもった土器が出土し、広い地域との関連がうかがわれる。

はじめに、今回の出土資料に加え、既往調査および研究を参考に、西岩田遺跡から出土した外来系土器を説明する。西岩田遺跡では、これまでに西は九州系から東は東海系(東海西部・伊勢湾岸を指す)の土器が出土している。過去に外来系土器として報告された実測遺物に、今回の資料を含めて数量を計算し地域別比率を示した(図137)。吉備系が約40%を占めており、その後には山陰系、東海系が続く。また、四国・瀬戸内系は阿波系・讃岐系を合わせると14%を占める。

西岩田遺跡では、1970年代に実施した中央南幹線下水管渠築造に伴う発掘調査で、庄内式甕と吉備系甕(図138の3-1~6)が共伴して出土したことで知られており、かねてより吉備系土器が出土することが認識されていた(調査会1971)。器種としては甕が多く、その他に壺、鉢がある。庄内式期I~布留式期Iに相当すると考えられる(註2)。3区3b層より出土した大形鉢(図138の1-14)は胎土が生駒山西麓産であり、吉備系土器を模倣した在地の土器と考えられる。

山陰系は甕が90%以上を占め、その他に低脚付杯(図139の1-6)が出土した。今回の調査では全形が判明した資料は出土しなかったため時期を判断するのは難しいが、口縁部の特徴から庄内式期から布留式期にかけて年代幅があると考えられる。図139の3-2は球胴状の体部をもち、丸底を呈する。肩部外面に縦方向のハケ後、波状文を施す。

東海系としては主に甕が出土している。これまでに庄内式期IIIから古墳時代中期に相当する資料が報告されている(山田1998)。3区240流路より出土した口縁部(図139の1-26)は口縁部外面に刺突を有し、頸部内面にハケが認められることから、S字甕A類に分類される(赤塚1990)。これまでに、大阪府内では能勢町原田遺跡、堺市下田遺跡でA類が確認されているが、中河内地域では出土例が報告されていなかった。この他に東海系の可能性がある資料として、脚が付く壺もしくは甕、壺、小形脚付鉢、小型器台がある。

四国・瀬戸内系は甕、壺、鉢が出土している。図139の2-12は胎土が生駒山西麓産と報告されており、四国系複合口縁壺を模倣した在地の土器と考えられる。図139の1-11は胎土や内面調整の特徴から讃岐系としたが、弥生土器の可能性もある。

この他に、摂津系(甕)、北陸系(装飾器台、甕)、近江系(湖東・湖南地域産、甕・手焙形土器)、山城(近江系受口状口縁甕)、淡路系(甕)、九州系(高杯・北部九州系支脚形土製品)を確認した。図139の1-20は北近畿系としたが、北陸系(若狭)である可能性もある。図139の1-24は外面に左上がり

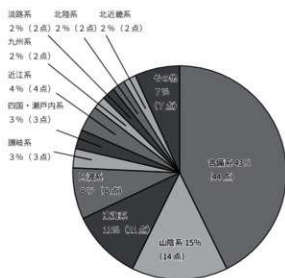


図137 西岩田遺跡出土外来系土器の比率

のタタキを施しており、大和の庄内式甕の特徴を有するものの、河内産である可能性も考えられる。図139の1-32は南関東系（五領式）である可能性がある。その他、地域は不明ではあるが、外来系土器と考えられるものが3点ある。

2. 遺構における様相

今回の調査で弥生時代後期から古墳時代中期の土器が多く出土した。3区240流路では、当該時期の土師器の16%、242溝では18%、3区3b層では26%を外來系土器が占める。240流路、242溝では出土量が少ないため傾向が見出せないが、3区3b層から出土した外來系土器は吉備系土器が目立つ。

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査では、Bトレンチで河川Ⅰを検出しており、出土位置や堆積状況から240流路に連続する遺構と考えられる。河川Ⅰでは、240流路と同様に弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土しており、その中には外來系土器（吉備系・山陰系・阿波系・瀬戸内系・摂津系・北部九州系）も含まれる（大文セ他1983）。特に吉備系土器が多く、甕口縁部の特徴に時期幅があることが指摘されている（秋山他2000）。

3. 小結

中河内地域では、これまでに吉備や瀬戸内といった西日本の地域との関連が指摘されており（山田

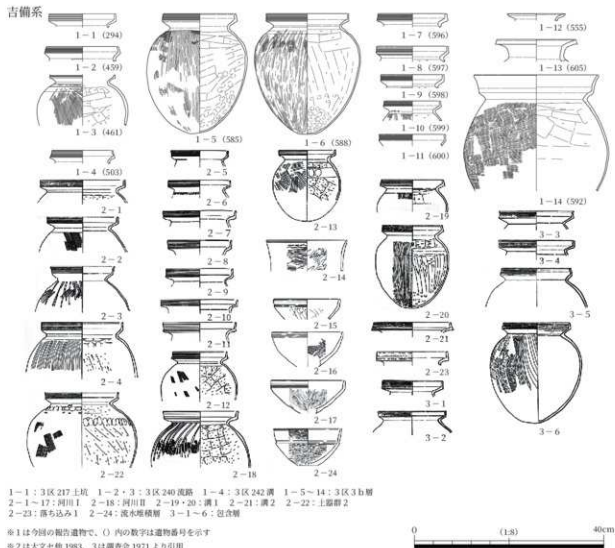


図138 西岩田遺跡出土外來系土器(1)

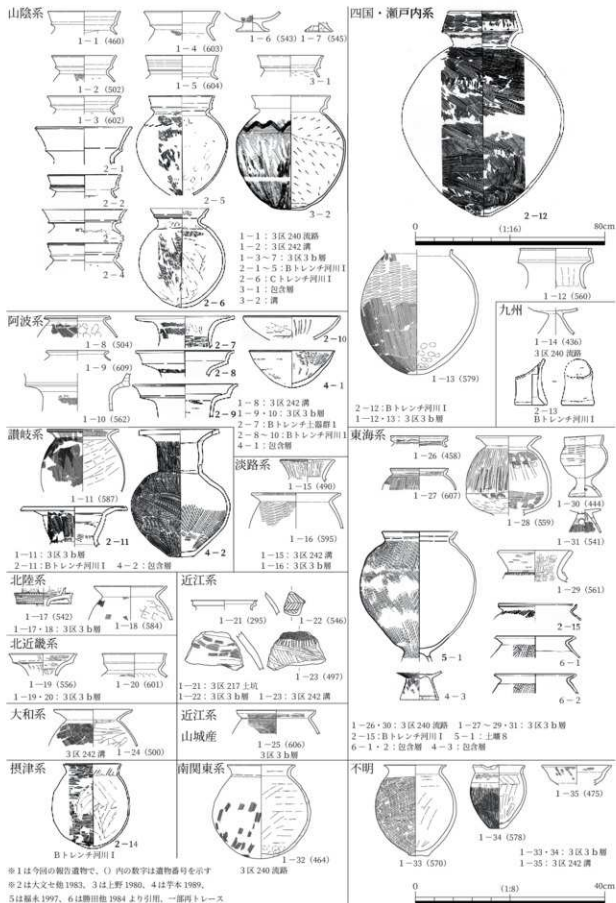


図139 西岩田遺跡出土外来系土器(2)

※1は今回の報告物で、○内の数字は遺物番号を示す
 ※2は大分文士8 1983, 3は上野1980, 4は宇水1989,
 5は藤本1997, 6は藤田他1984より引用、一部トレンクス

1994)、西岩田遺跡もそれらの地域と交流する拠点の一つであったと考えられる。今回の調査においても、過去の調査と同様に、吉備系土器をはじめとする西日本を起源とする土器が多く出土した。さらに、過去の調査では報告されていなかった地域の土器も出土しており、より広範な地域間交流を想定できると考えられる。

〈註〉

1. 他地域から搬入された、もしくは他地域の土器に影響を受けたと考えられる在産土器を指す。
2. 年代観は米田氏の編年に基づき（米田1991）、各地域との併行関係については市村氏の成果を参考にした（市村2019・2020）。

〈参考文献〉

- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器について」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書10
- 秋山浩三・小林和美・後藤理加・山崎頼人 2000 「近畿における吉備型甕の分布とその評価」『古代吉備』第22集
- 市村慎太郎 2019 「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理（1）」『古墳出現期土器研究』第6号 古墳出現期土器研究会
- 市村慎太郎 2020 「中河内からみた庄内・布留式における列島各地との併行関係の整理（2）」『古墳出現期土器研究』第7号 古墳出現期土器研究会
- 芋本隆裕 1989 「西岩田遺跡第11次試掘調査概報」『財』東大阪市文化財協会概報集1988年度（財）東大阪市文化財協会
- 上野利明 1980 「西岩田遺跡出土の土師器について」『調査会ニュース No16』東大阪市遺跡保護調査会（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1998 『河内平野遺跡群の動態IV』（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
- 勝田邦夫・才原金広 1984 「瓜生堂・西岩田遺跡発掘調査概報」『財』東大阪市文化財協会年報1983年度（財）東大阪市文化財協会
- 中央南幹線西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 『西岩田遺跡』
- 福永信雄 1997 「西岩田遺跡第10次発掘調査概報」『東大阪市文化財協会概報集—1996年度（1）—』（財）東大阪市文化財協会
- 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府立弥生文化博物館
- 山田隆一 1998 「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会
- 山田隆一 2006 「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 米田敏幸 1991 「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の考古学』6 雄山閣
- 〈挿図出典〉
- （図138-1・図139-1：今回の報告遺物、図138-2・図139-2：大文セ他1998、図138-3：調査会1971、図139-3：上野1980を一部再トレース、図139-4：芋本1989、図139-5：福永1997を一部再トレース、図139-6：勝田他1984を一部再トレース）

第4項 白玉の分類と属性

3区第3面160溝からはガラス玉3点（遺物番号316～318）、土玉2点（遺物番号314・315）、白玉389点（遺物番号319～399）や石器、石製品など多数の微細遺物が出土している（図72・73、写真図版39－2・7）。160溝周辺の精査や土器を取りあげた際に偶然白玉を発見したため、160溝の掘削土をふるいにかけて洗浄したところ、これらの遺物が出土した。従って、白玉が1カ所にかたままって出土していたかなどの出土状況は不明である。また、160溝以外の遺構や包含層にも玉製品を包含していた可能性も皆無ではないが、精査や遺物洗浄で1点も出土していないので可能性は低い。よって、160溝から相対的に多数の玉製品が出土したことは間違いない（図140）。

白玉については、肉眼による色分類や法量、形状を計測して表15にまとめた。その一覧をもとにグループピングを行い、西岩田遺跡出土白玉の特徴や傾向を調べた。その中で属性として特に色と法量に着目して、他遺跡との比較を試みた。材質についてはすべて滑石としたが、肉眼によって推定したのみで化学的分析による産地同定は実施していない。

1. 白玉の分類と計測

分類項目は『亀川遺跡』、市川・島崎の論考の計測項目をもとに作成した（亀川2002、市川・島崎2005）。色、側面の形状、側面の研磨方向、端面の形状、残存状況である（図141）。

色については亀川遺跡に倣ったが、個人によって識別が異なり1、2、5の判別が難しく、判断がたい場合は1に含めた。側面の形状は大別すると中央が膨らむもの（A・B）と直線的なもの（C・D・E）に分けられる。側面の研磨方向は横、縦、斜め、不明に分類した。端面の形状は平らか斜めかで分類した。残存状況は15～25%単位で欠損部分を分類した。法量については、ノギスを用いて小数点第2位までを計測した。分類と計測については奇数名で行い、分類が異なる際は多数決によった。法量については平均値をとった。白玉の出土点数は389点としたが、破損して計測できなかったもの、白玉でないと判断したものもあり、最大分母数は388点とする。

2. 分類項目別観察結果

各分類項目ごと、色と側面形状、側面形状と研磨方向の観察結果をグラフにして示した（図142）。

色は識別しがたいものは1（緑）に含めたこともあり、1が圧倒的に多く60%以上を占め、次いで4（赤褐色）、2（黒に近い緑）が多い。1、2、4で約9割を占める。側面形状は側面が膨らむA・Bと

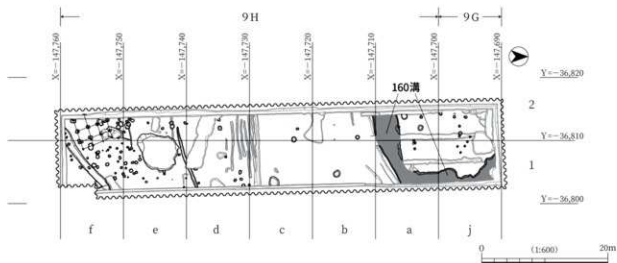



















図140 3区 160溝白玉出土位置図

色	1 緑 薄いもの～ 濃いものあり	2 黒に近い緑	3 白 半透明・濁った ものあり	4 赤褐色 赤みがかった白	5 灰色 青みが強いもの	6 その他
側面の形状	A	B	C	D	E	
						
	側面に陵をもつもの	側面が太鼓状に膨らむもの	側面が直線的なもの	側面が直線的で直径以上の厚さをもつもの	側面が直線的で直径以下の厚さであるもの	
側面の研磨	1	2	3	4		
						
	横方向	斜め方向	縦方向	ほとんど研磨痕（擦痕）が観察できないもの		
端面の形状	I	II				
						
	側面を垂直方向に置いた時、両端面が水平となるもの	側面を垂直方向に置いた時、端面が水平にならないもの				
残存状況	1	2	3	4	5	
						
	■が欠損部分、3～5については1個体と数える					

市川則・島崎久恵「権内における集落出土の滑石製品」2005『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』の図1 第54回埋蔵文化財研究集会、および「第4巻第1節 亀川遺跡石製玉類白玉計測項目」2002『亀川遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター、より一部改変して転載

図141 白玉の分類

直線的なC・D・Eは半々である。その中でもA（算盤玉形）とB（太鼓形）はほぼ同数である。直線的なタイプでは直径より厚さが長いDは1点のみで、直径より厚さが薄いEが圧倒的に多かった。側面の研磨方向は斜めが半数を占め、次いで縦方向、横方向はなかった。出土地区は面積に応じた結果となった。端面形状はI（平ら）が61%、II（斜め）が38%である。残存状況は4分の3以上残るものが97%を占める。

色の違いは原材となる石の産地の違いではないかと考えられる。製作技法の違いを最も端的に示すのが側面形状ではないかと考えて、色との相関関係をみた。色3ではBがみられない、色2でもBが少ないなどの傾向はあるが、大きな偏りはみられなかった。また、側面の形状によって研磨の方向が分かれる、稜線をもつタイプは斜めに磨き、直線的なものは縦に磨くなど、側面形状に応じて研磨方向に違いが生じるのではないかと考えたが、これも顕著な傾向は生じなかった。

以上、分類項目に従って観察を試みたが、分母となる出土点数が少ないこともあり、明確な特徴は見

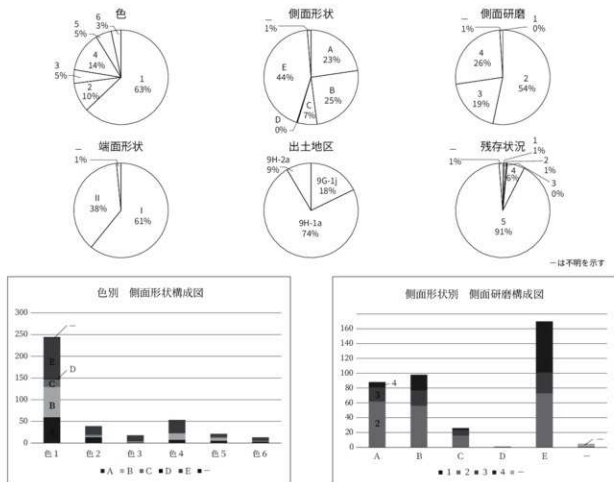


図 142 分類項目別観察結果

いだせなかった（参考とした亀川遺跡では9000点、近隣の池島・福万寺遺跡の福万寺遺跡Ⅰ期地区では3264点、それ以前の調査でも4000点を超える白玉が出土している）。

ただし、残存状況からみてもほとんどが欠損がなく、穿孔途中品（図73-385）や周縁を丸く整えていない製品（図73-396～398）もごくわずかである。このことから、西岩田遺跡で白玉生産が行われたのではなく、他の場所で生産された白玉が製品として搬入されたのは間違いないだろう。端面が斜め（端面形状Ⅱ）や側面研磨が観察できないもの（側面研磨4）が一定量あるが、これらは未製品でなくこの状態で流通していたと考えるのが妥当だろう。西岩田遺跡出土製品は側面の稜線が明瞭に造り出されていたり、研磨も丁寧な製品が多い。

次に、色によって法量に差があるように見受けられたため、直径、厚さ（高さ）を縦横の軸とする散布図として図示した（図143）。その結果、色ごとにある程度のまとまりをもつことが明確になった。色3が最も小さく直径3.3～5.5mm、厚さ1.5～3.0mmの範囲に集中する。色5は直径が色3とさほど変わらないが、厚さ1.5～3.7mmとやや細長くなる。大形品も少量存在する。色2は直径5.0～6.5mm、厚さ2.0～3.5mm、色4は直径5.0～7.5mm、厚さ1.7～4.8mmと大形化する。色1は個数が多いためばらつきがあるが、直径4.0～5.5mm、厚さ2.6～3.4mmと直径4.0～6.0mm、厚さ3.6～4.5mmの2群に大別できる。

色によって法量にまとまりがあることは、すなわち色の異なる石材、産地ごとに異なる規格で白玉が生産されたことを示唆する。つまり、複数の生産地から白玉が西岩田遺跡に運ばれた可能性が高い。

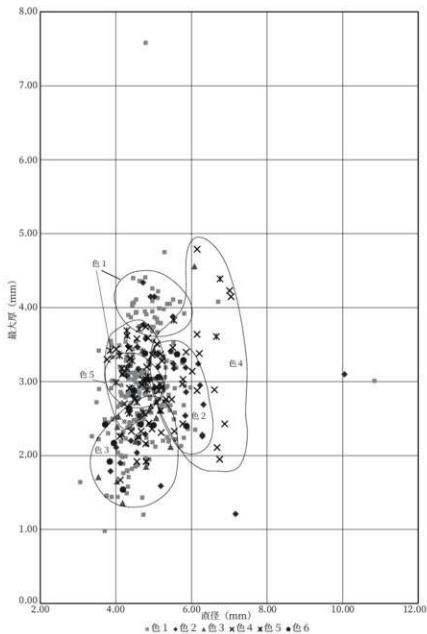


図 143 白玉法量散布図

(図146)。すると、時期が新しくなるにつれ、直径が大形化する傾向がみてとれる。このヒストグラムと西岩田遺跡を比較すると、最大のピークは長原2期から長原3期に相当するのではないかと考えられる。160溝から出土した土器は須恵器杯身などわずかである(図72)。確実な年代決定に欠ける部分もあったが、白玉の法量変遷によって導き出された時期が、160溝の年代決定に一助になると考えられる。

また、160溝の北に隣接する2区の32・33溝では、長原3期に相当する須恵器が一括して出土しており、この年代観があてはめられるなら、2区の32・33溝と3区の160溝は同時期か時期的に近い遺構として相互により関係性があり、遺構の性格を考える上でも重要になってくると思われる。

〈参考文献〉

市川創・島崎久恵 2005 「畿内における集落出土の滑石製品」『第54回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』埋蔵文化財研究会・(財)大阪市文化財協会

島崎久恵 2002 「第4章第1節 石製玉類の分類」『亀川遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター

さらに、色ごとの直径のピークをヒストグラムにし、亀川遺跡と比較してみた(図144・145)。すると、亀川遺跡では直径のピークは4.5～6.5mmにほぼおさまり、最も多い色2では直径5.5mmがピークとなる。西岩田遺跡では直径のピークは色によってやや分散し、色1では4.3mm前後、色4では4.7mm前後など、4.3～5.3mm前後にくる大多数を占める一群と、5.5～6.3mmの一群とに二極化している。

市川・島崎は畿内の古墳時代集落遺跡である、大阪府長原遺跡、亀川遺跡、池島・福万寺遺跡、薮屋北遺跡、京都府下植野南遺跡を対象として検討を行った(市川・島崎2005)。

長原遺跡を基本として前1期から5期までの時期区分と須恵器型式の対応、実年代観を想定し、白玉直径を0.3mm刻みのヒストグラムで表した

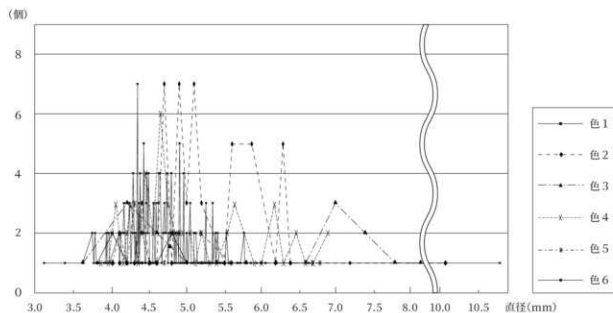
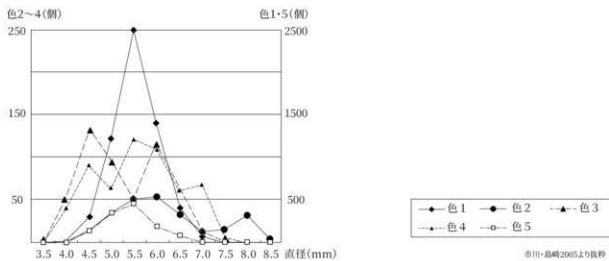
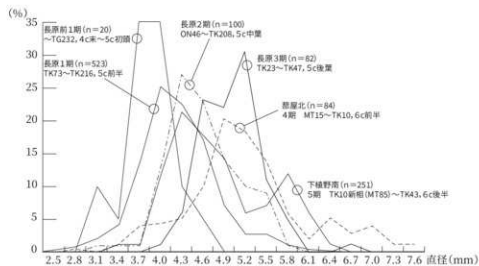


図 144 西岩田遺跡の色別白玉直径



市川・島崎2005より抜粋

図 145 龍川遺跡の色別白玉直径



市川・島崎2005より抜粋

図 146 白玉直径の変遷

表 15 160 清出土白玉一覽

遺物番号	標記番号	写真図版番号	実測番号	登録番号	地区別	色	法量 (mm)				形状分類			石材	残存状況	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	側面形状	側面研磨	端面形状			
319	73	—	玉151	1307	9H-1a	1	5.49	1.98	3.26	2.68	A	2	I	滑石	5	
320	73	39-7	玉178	1307	9H-1a	1	4.71	1.92	2.58	1.97	A	2	I	滑石	5	
321	73	—	玉256	1318	9H-1a	1	4.80	1.47	3.38	3.18	A	2	I	滑石	5	
322	73	—	玉261	1318	9H-1a	1	4.14	2.11	3.16	2.64	A	2	I	滑石	5	
323	73	—	玉312	1351	9H-2a	1	5.32	2.32	3.19	2.80	A	2	I	滑石	5	
324	73	—	玉299	1318	9H-1a	1	3.37	1.50	2.26	2.07	A	2	I	滑石	5	
325	73	—	玉380	1481	9G-1j	1	5.60	2.19	3.19	2.01	A	2	II	滑石	5	
326	73	—	玉67	1265	9H-1a	1	5.56	2.40	2.58	1.46	A	2	II	滑石	5	
327	73	—	玉119	1265	9H-1a	1	4.70	1.96	2.58	1.70	A	2	II	滑石	5	
328	73	—	玉143	1307	9H-1a	1	5.70	2.00	4.08	1.84	A	2	II	滑石	4	
329	73	—	玉20	1009	9G-1j	1	5.34	2.06	2.74	1.60	A	2	II	滑石	5	
330	73	—	玉166	1307	9H-1a	1	4.44	1.77	4.03	3.29	A	2	II	滑石	5	
331	73	—	玉187	1307	9H-1a	1	4.13	1.82	2.28	1.72	A	2	II	滑石	5	
332	73	—	玉188	1307	9H-1a	1	4.54	2.02	4.11	2.59	A	2	II	滑石	5	
333	73	—	玉41	1186	9H-1a	1	4.66	1.97	3.11	2.79	A	3	I	滑石	5	
334	73	—	玉330	1351	9H-2a	1	5.10	1.99	3.67	3.32	A	3	I	滑石	5	
335	73	—	玉348	1398	9H-2a	1	5.47	1.89	3.40	3.00	B	2	I	滑石	5	
336	73	39-7	玉386	1481	9G-1j	1	5.19	2.01	3.79	2.94	B	2	I	滑石	5	
337	73	—	玉280	1318	9H-1a	1	4.54	1.42	2.24	1.90	B	2	I	滑石	5	
338	73	—	玉201	1307	9H-1a	1	4.90	1.91	2.77	2.30	B	2	I	滑石	5	
339	73	—	玉316	1347	9H-1a	1	5.18	2.18	2.66	1.95	B	4	I	滑石	5	
340	73	39-7	玉55	1188	9H-1a	1	5.12	2.05	4.22	3.27	B	4	II	滑石	5	
341	73	39-7	玉328	1351	9H-2a	1	4.48	1.55	4.07	3.62	C	2	I	滑石	5	
342	73	39-7	玉388	1481	9G-1j	1	3.56	1.36	2.90	2.69	C	2	I	滑石	5	
343	73	—	玉217	1307	9H-1a	1	3.55	1.75	3.42	2.30	C	2	II	滑石	5	
344	73	39-7	玉246	1318	9H-1a	1	4.78	1.87	4.41	4.05	C	3	I	滑石	5	
345	73	—	玉344	1351	9H-2a	1	4.10	1.38	3.39	2.40	C	3	II	滑石	5	
346	73	39-7	玉327	1351	9H-2a	1	4.79	2.01	5.58	6.89	D	4	I	滑石	5	
347	73	39-7	玉75	1265	9H-1a	1	5.11	1.84	4.13	3.57	E	2	I	滑石	5	
348	73	—	玉110	1265	9H-1a	1	5.05	1.91	2.86	2.28	E	2	I	滑石	4	
349	73	—	玉154	1307	9H-1a	1	4.53	1.72	3.93	3.43	E	2	I	滑石	5	
350	73	39-7	玉207	1307	9H-1a	1	4.34	1.29	1.71	1.53	E	2	I	滑石	5	
351	73	—	玉194	1307	9H-1a	1	3.49	1.34	2.72	2.40	E	2	I	滑石	5	
352	73	—	玉199	1307	9H-1a	1	3.79	1.67	2.45	1.52	E	2	II	滑石	5	
353	73	—	玉123	1265	9H-1a	1	4.23	1.69	2.46	1.80	E	2	II	滑石	5	
354	73	—	玉130	1265	9H-1a	1	3.89	1.54	1.44	0.55	E	2	II	滑石	4	
355	73	—	玉375	1481	9G-1j	1	5.24	2.01	2.69	1.47	E	2	II	滑石	5	
356	73	—	玉49	1186	9H-1a	1	4.39	1.53	2.85	2.15	E	2	II	滑石	5	
357	73	—	玉290	1318	9H-1a	1	4.14	1.68	2.00	1.46	E	3	I	滑石	5	
358	73	—	玉297	1318	9H-1a	1	3.71	1.42	2.49	2.15	E	4	I	滑石	5	
359	73	—	玉315	1325	9H-1a	1	3.71	0.88	0.98	0.87	E	4	I	滑石	5	
360	73	—	玉322	1347	9H-1a	1	4.73	1.98	1.20	0.60	E	4	II	滑石	5	
361	73	—	玉340	1351	9H-2a	1	4.98	1.49	2.41	1.58	E	4	II	滑石	5	
362	73	39-7	玉71	1265	9H-1a	2	5.08	2.29	3.37	2.90	A	2	I	滑石	5	
363	73	—	玉5	1003	9H-2a	2	6.32	2.61	2.69	2.01	A	3	I	滑石	5	
364	73	—	玉65	1265	9H-1a	2	5.86	2.37	2.86	1.95	B	2	I	滑石	4	磨組あり
365	73	39-7	玉310	1325	9H-1a	2	4.92	2.00	4.15	2.64	C	2	II	滑石	5	
366	73	39-7	玉156	1307	9H-1a	2	4.29	1.48	3.08	3.03	C	4	I	滑石	5	
367	73	—	玉57	1188	9H-1a	2	4.35	1.62	3.22	3.03	E	2	I	滑石	5	
368	73	39-7	玉63	1265	9H-1a	2	6.23	2.07	2.95	1.91	E	2	I	滑石	4	
369	73	—	玉93	1265	9H-1a	2	4.92	1.96	3.03	1.79	E	2	II	滑石	5	
370	73	—	玉114	1265	9H-1a	2	4.62	1.91	2.54	2.31	E	4	I	滑石	5	
371	73	—	玉230	1307	9H-1a	2	(7.17)	(1.82)	(1.21)	(1.09)	E	4	I	滑石	2	
372	73	39-7	玉353	1408	9G-1j	3	3.54	1.69	1.71	1.65	A	2	I	滑石	5	
373	73	39-7	玉133	1307	9H-1a	3	6.08	2.20	4.56	3.14	B	2	II	滑石	5	
374	73	39-7	玉111	1265	9H-1a	3	4.70	1.83	3.42	3.19	C	2	I	滑石	5	
375	73	39-7	玉29	1009	9G-1j	3	5.45	2.32	1.12	1.41	E	4	I	滑石	5	
376	73	39-7	玉244	1318	9H-1a	3	5.08	1.43	2.73	2.30	E	2	I	滑石	5	
377	73	39-7	玉300	1325	9H-1a	4	6.21	2.24	3.38	2.23	E	2	I	滑石	5	
378	73	—	玉225	1307	9H-1a	4	4.35	2.05	3.45	1.06	B	2	II	滑石	5	
379	73	—	玉356	1416	9G-1j	4	5.08	1.81	2.93	2.39	B	4	I	滑石	5	
380	73	39-7	玉112	1265	9H-1a	4	4.79	1.99	3.74	2.74	C	4	II	滑石	5	
381	73	—	玉373	1481	9G-1j	4	4.88	1.11	2.44	2.21	E	2	I	滑石	5	
382	73	—	玉376	1481	9G-1j	4	5.19	2.01	2.61	1.77	E	2	II	滑石	5	

器物番号	柄図番号	写真図版番号	実測番号	登録番号	地区別	色	法量 (mm)				形状分類			石材	残存状況	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	側面形状	側面研磨	端面形状			
383	73	39-7	玉384	1481	9G-1j	4	4.85	2.22	3.59	2.14	E	2	II	滑石	5	
384	73	39-7	玉56	1188	9H-1a	4	4.79	1.15	2.16	1.65	E	4	I	滑石	5	
385	73	39-7	玉372	1481	9G-1j	4	5.78	(2.52)	3.03	2.30	E	4	I	滑石	5	
386	73	—	玉227	1307	9H-1a	4	4.51	1.93	2.77	1.36	E	4	II	滑石	5	
387	73	—	玉8	1001	9H-2a	5	4.56	1.94	2.72	1.93	A	2	II	滑石	5	
388	73	39-7	玉148	1307	9H-1a	5	6.66	2.17	3.61	1.34	A	2	II	滑石	3	
389	73	—	玉180	1307	9H-1a	5	3.85	1.26	3.42	3.33	C	3	I	滑石	5	
390	73	39-7	玉234	1318	9H-1a	5	6.76	2.28	4.39	3.69	E	4	I	滑石	4	
391	73	39-7	玉126	1265	9H-1a	6	4.19	1.47	1.54	1.46	A	4	I	滑石	5	
392	73	39-7	玉136	1307	9H-1a	6	5.62	1.77	3.37	2.24	B	2	II	滑石	5	
393	73	39-7	玉203	1307	9H-1a	6	4.66	1.75	2.42	2.02	E	2	I	滑石	5	
394	73	39-7	玉312	1325	9H-1a	6	3.72	1.33	2.42	2.33	E	4	I	滑石	5	
395	73	—	玉58	1188	9H-1a	6	4.77	1.72	3.38	1.06	E	4	II	滑石	5	
396	73	39-7	玉232	1308	9H-1a	1	10.84	1.55	3.01	1.76	—	—	—	滑石	—	
397	73	39-7	玉233	1308	9H-1a	4	6.75	1.39	1.95	1.66	—	—	—	滑石	—	
398	73	—	玉59	1199	9H-1a	4	6.68	1.32	2.11	2.04	—	—	—	滑石	—	
399	73	—	玉326	1348	9H-1a	2	10.05	(2.17)	3.10	1.17	—	—	—	滑石	—	
—	—	—	玉4	960	9H-2a	2	4.79	1.95	3.58	1.87	E	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉6	1003	9H-2a	2	5.45	1.88	3.41	2.87	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉7	1003	9H-2a	2	5.54	2.22	3.18	1.54	E	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉9	1009	9G-1j	4	6.88	2.12	2.43	1.37	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉10	1009	9G-1j	1	6.71	2.36	4.08	1.92	B	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉11	1009	9G-1j	1	5.43	1.92	4.05	3.41	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉12	1009	9G-1j	1	5.76	1.96	3.25	2.70	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉13	1009	9G-1j	4	5.51	1.98	3.46	2.53	B	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉14	1009	9G-1j	1	5.35	1.90	3.28	3.07	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉15	1009	9G-1j	1	4.99	1.97	3.55	3.37	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉16	1009	9G-1j	1	6.10	2.47	2.35	1.84	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉17	1009	9G-1j	4	5.77	2.15	2.43	2.13	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉18	1009	9G-1j	1	5.73	1.99	2.13	1.91	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉19	1009	9G-1j	4	5.33	1.94	2.76	1.37	A	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉21	1009	9G-1j	1	5.80	2.16	2.68	2.04	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉22	1009	9G-1j	1	5.27	2.33	2.88	1.52	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉23	1009	9G-1j	3	5.19	1.49	3.06	2.58	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉24	1009	9G-1j	1	4.94	1.82	2.58	2.35	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉25	1009	9G-1j	3	4.88	1.22	2.62	2.46	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉26	1009	9G-1j	1	4.88	1.32	2.42	1.64	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉27	1009	9G-1j	1	5.36	1.91	2.25	1.34	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉28	1009	9G-1j	2	5.19	1.81	1.59	1.34	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉30	1009	9G-1j	4	4.69	1.86	2.96	2.08	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉31	1009	9G-1j	4	4.56	1.94	3.58	3.14	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉32	1009	9G-1j	4	3.77	1.62	3.30	2.75	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉33	1009	9G-1j	1	4.15	1.88	2.95	2.38	B	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉34	1009	9G-1j	4	4.60	1.61	2.25	1.82	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉35	1009	9G-1j	1	3.93	1.58	2.16	1.95	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉36	1009	9G-1j	2	4.12	1.39	1.90	1.86	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉37	1009	9G-1j	4	(4.12)	(1.37)	(1.67)	(1.67)	E	4	I	滑石	5	計測中破損
—	—	—	玉38	1009	9G-1j	1	(3.06)	(1.31)	(1.64)	(1.28)	E	4	I	滑石	—	計測中破損
—	—	—	玉39	1186	9H-1a	2	5.84	2.11	2.54	2.01	A	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉40	1186	9H-1a	2	5.85	2.27	3.19	1.88	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉42	1186	9H-1a	2	4.73	1.97	3.77	3.12	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉43	1186	9H-1a	5	4.43	1.69	3.28	2.53	B	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉44	1186	9H-1a	1	4.62	1.42	2.92	2.29	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉45	1186	9H-1a	1	4.62	1.94	2.93	2.17	B	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉46	1186	9H-1a	2	5.01	1.94	2.91	2.39	E	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉47	1186	9H-1a	1	4.89	1.42	1.95	1.35	A	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉48	1186	9H-1a	1	4.37	1.84	2.45	1.81	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉50	1186	9H-1a	1	3.80	1.29	2.30	1.83	E	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉51	1186	9H-1a	1	3.90	1.62	3.01	1.69	E	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉52	1187	9H-1a	5	4.82	1.44	2.89	2.05	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉53	1187	9H-1a	1	4.53	1.82	2.99	2.35	B	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉54	1188	9H-1a	1	5.27	1.96	3.98	2.81	E	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉60	1496	9H-2a	6	5.13	2.07	3.06	1.92	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉61	1496	9H-2a	3	4.52	1.49	2.19	1.77	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉62	1265	9H-1a	2	6.29	2.36	2.28	1.98	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉64	1265	9H-1a	2	6.29	2.47	2.26	1.91	E	2	I	滑石	4	

器物编号	类别编号	写真图版编号	实测编号	登錄编号	地区别	色	法量 (mm)				形状分期			石材	残存状况	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	侧面形状	侧面研磨	端面形状			
--	--	--	玉66	1265	9H-la	6	5.87	2.11	2.40	1.14	B	3	II	滑石	4	
--	--	--	玉68	1265	9H-la	1	5.27	2.06	3.34	2.90	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉69	1265	9H-la	1	5.29	2.37	4.75	2.27	B	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉70	1265	9H-la	1	5.09	2.05	3.85	3.46	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉72	1265	9H-la	1	5.22	2.08	3.31	2.59	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉73	1265	9H-la	2	5.02	1.88	4.15	2.52	A	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉74	1265	9H-la	1	5.15	2.22	3.99	3.28	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉76	1265	9H-la	4	5.09	2.02	3.51	3.42	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉77	1265	9H-la	1	5.28	1.89	2.73	1.85	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉78	1265	9H-la	5	5.18	1.97	2.96	2.71	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉79	1265	9H-la	1	5.41	2.13	2.21	1.86	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉80	1265	9H-la	1	4.97	1.87	4.09	2.76	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉81	1265	9H-la	4	4.97	1.54	3.36	2.64	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉82	1265	9H-la	5	4.62	2.01	3.71	2.96	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉83	1265	9H-la	1	4.77	1.76	3.95	2.22	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉84	1265	9H-la	4	4.82	1.82	3.20	2.63	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉85	1265	9H-la	1	4.46	2.04	4.40	2.35	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉86	1265	9H-la	2	5.12	2.06	3.20	2.38	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉87	1265	9H-la	1	4.90	1.84	3.74	3.31	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉88	1265	9H-la	1	4.73	1.71	3.11	3.02	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉89	1265	9H-la	1	4.73	1.68	3.42	2.08	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉90	1265	9H-la	1	4.53	2.03	3.13	2.77	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉91	1265	9H-la	2	4.32	2.15	3.48	2.93	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉92	1265	9H-la	2	5.08	2.09	3.05	2.81	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉94	1265	9H-la	1	4.38	1.78	3.31	3.18	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉95	1265	9H-la	1	5.16	1.74	2.92	2.50	A	3	I	滑石	4	
--	--	--	玉96	1265	9H-la	1	4.68	1.90	2.51	2.33	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉97	1265	9H-la	1	4.63	1.64	4.56	2.53	C	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉98	1265	9H-la	4	4.01	1.52	3.44	2.99	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉99	1265	9H-la	1	4.81	2.28	3.91	2.27	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉100	1265	9H-la	1	4.33	1.71	3.07	2.46	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉101	1265	9H-la	1	4.91	1.96	2.80	2.45	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉102	1265	9H-la	1	4.58	2.03	2.86	2.22	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉103	1265	9H-la	1	4.27	1.69	3.28	2.70	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉104	1265	9H-la	1	4.73	1.97	2.91	2.24	E	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉105	1265	9H-la	1	4.31	1.88	2.86	2.26	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉106	1265	9H-la	1	4.15	1.68	2.81	2.50	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉107	1265	9H-la	2	4.60	2.26	3.17	2.64	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉108	1265	9H-la	1	4.62	1.80	2.79	2.30	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉109	1265	9H-la	1	4.13	2.09	2.86	1.96	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉113	1265	9H-la	4	4.36	2.12	2.91	2.15	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉115	1265	9H-la	2	4.78	1.54	2.29	2.03	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉116	1265	9H-la	2	4.59	1.88	2.17	1.56	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉117	1265	9H-la	2	4.56	2.05	2.04	1.92	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉118	1265	9H-la	1	4.44	1.69	2.26	1.91	B	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉120	1265	9H-la	1	4.81	1.90	2.24	1.38	B	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉121	1265	9H-la	1	4.61	1.78	2.42	1.70	B	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉122	1265	9H-la	2	4.01	1.23	2.11	1.94	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉124	1265	9H-la	1	4.32	1.66	1.58	1.23	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉125	1265	9H-la	1	4.29	1.51	1.49	1.22	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉127	1265	9H-la	1	4.05	1.85	1.44	1.26	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉128	1265	9H-la	2	3.86	1.02	1.79	1.47	E	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉129	1265	9H-la	1	4.20	1.97	1.76	1.21	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉131	1265	9H-la	1	(5.17)	--	(3.05)	(1.56)	--	4	--	滑石	1	
--	--	--	玉132	1307	9H-la	4	6.15	2.23	4.79	4.16	B	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉134	1307	9H-la	1	5.81	1.82	3.92	3.06	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉135	1307	9H-la	1	5.36	1.94	4.05	2.71	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉137	1307	9H-la	1	5.53	2.31	3.52	2.76	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉138	1307	9H-la	1	5.91	2.15	2.36	1.69	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉139	1307	9H-la	2	5.53	2.01	3.24	1.69	A	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉140	1307	9H-la	1	5.40	1.88	2.19	1.74	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉141	1307	9H-la	1	5.25	2.04	2.20	1.47	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉142	1307	9H-la	1	5.45	2.12	2.68	2.37	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉144	1307	9H-la	4	5.76	2.02	2.97	1.66	E	2	II	滑石	4	
--	--	--	玉145	1307	9H-la	4	6.15	2.14	2.88	1.59	A	2	II	滑石	4	
--	--	--	玉146	1307	9H-la	1	(5.98)	(2.09)	(2.92)	(0.64)	B	3	--	滑石	4	

器物番号	树纹番号	写真 图版 番号	实测 番号	登録 番号	地区别	色	法量 (mm)				形状分期			石材	残存 状况	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	侧面研 磨	侧面研 磨	端面形 状			
--	--	--	玉147	1307	9H-1a	1	5.54	1.96	2.49	2.09	A	4	I	滑石	4	
--	--	--	玉149	1307	9H-1a	1	5.14	1.93	3.40	1.96	A	3	I	滑石	4	
--	--	--	玉150	1307	9H-1a	1	4.90	1.87	3.23	2.94	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉152	1307	9H-1a	3	5.01	1.80	3.43	3.00	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉153	1307	9H-1a	1	5.11	2.21	3.80	3.09	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉155	1307	9H-1a	1	4.90	1.49	3.29	3.15	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉157	1307	9H-1a	1	4.54	1.99	3.54	2.88	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉158	1307	9H-1a	1	4.71	1.71	3.77	3.17	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉159	1307	9H-1a	1	4.96	2.31	3.68	2.77	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉160	1307	9H-1a	1	4.69	1.41	3.15	2.64	A	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉161	1307	9H-1a	1	4.61	1.60	3.07	2.67	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉162	1307	9H-1a	1	4.87	1.46	3.03	2.67	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉163	1307	9H-1a	1	4.40	1.61	3.21	2.64	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉164	1307	9H-1a	1	4.31	1.83	3.36	2.75	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉165	1307	9H-1a	1	4.10	2.23	3.49	3.05	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉167	1307	9H-1a	1	4.63	1.84	2.85	2.54	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉168	1307	9H-1a	1	4.40	1.35	3.87	3.28	C	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉169	1307	9H-1a	1	4.33	2.11	3.90	2.80	B	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉170	1307	9H-1a	1	4.26	1.39	3.54	2.94	C	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉171	1307	9H-1a	1	4.50	2.02	3.10	2.54	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉172	1307	9H-1a	1	4.16	1.61	2.83	2.73	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉173	1307	9H-1a	2	4.45	1.94	2.81	2.70	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉174	1307	9H-1a	1	5.00	2.10	3.04	2.23	A	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉175	1307	9H-1a	1	4.80	2.16	2.84	2.05	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉176	1307	9H-1a	1	4.42	2.09	3.29	2.82	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉177	1307	9H-1a	1	4.33	1.76	3.04	2.76	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉179	1307	9H-1a	5	4.36	1.79	2.57	1.92	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉181	1307	9H-1a	5	4.01	1.61	2.99	2.47	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉182	1307	9H-1a	5	4.28	2.02	3.18	2.44	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉183	1307	9H-1a	1	3.87	1.65	3.55	3.15	C	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉184	1307	9H-1a	3	4.07	1.20	2.53	2.32	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉185	1307	9H-1a	1	4.40	1.39	2.44	2.26	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉186	1307	9H-1a	6	3.95	1.64	2.17	1.96	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉189	1307	9H-1a	1	4.29	1.71	3.62	2.59	B	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉190	1307	9H-1a	1	4.59	1.76	3.14	2.17	E	3	I	滑石	4	
--	--	--	玉191	1307	9H-1a	1	4.39	1.72	2.61	2.33	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉192	1307	9H-1a	4	4.18	1.80	3.10	2.57	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉193	1307	9H-1a	1	4.17	1.91	3.10	2.66	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉195	1307	9H-1a	1	4.26	1.57	2.80	2.56	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉196	1307	9H-1a	1	4.41	1.39	3.12	2.41	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉197	1307	9H-1a	4	4.38	1.91	3.31	2.26	B	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉198	1307	9H-1a	1	4.36	2.00	3.31	1.85	B	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉200	1307	9H-1a	1	3.91	1.84	2.49	1.55	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉202	1307	9H-1a	3	5.16	1.94	2.61	2.50	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉204	1307	9H-1a	3	5.07	1.42	2.51	1.92	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉205	1307	9H-1a	4	4.56	1.85	1.92	1.58	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉206	1307	9H-1a	1	4.43	1.44	1.82	1.71	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉208	1307	9H-1a	1	4.79	1.38	1.96	1.57	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉209	1307	9H-1a	3	4.03	1.46	1.65	1.53	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉210	1307	9H-1a	3	4.18	1.23	1.36	0.88	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉211	1307	9H-1a	1	4.58	1.38	1.87	1.04	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉212	1307	9H-1a	1	3.76	1.00	1.46	1.35	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉213	1307	9H-1a	1	4.58	2.05	2.50	1.47	A	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉214	1307	9H-1a	4	4.41	2.29	2.33	1.64	E	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉215	1307	9H-1a	1	4.68	1.44	2.98	1.63	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉216	1307	9H-1a	1	4.77	1.71	2.83	1.77	A	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉218	1307	9H-1a	1	4.31	1.96	3.16	2.02	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉219	1307	9H-1a	1	4.23	2.03	3.11	1.84	A	3	I	滑石	4	
--	--	--	玉220	1307	9H-1a	1	4.06	2.15	2.04	1.62	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉221	1307	9H-1a	1	4.20	2.01	2.32	1.32	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉222	1307	9H-1a	1	4.27	2.14	2.23	1.74	B	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉223	1307	9H-1a	1	4.26	2.06	1.99	1.06	B	3	II	滑石	5	依据
--	--	--	玉224	1307	9H-1a	1	4.36	1.46	2.42	1.41	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉226	1307	9H-1a	5	4.17	1.99	3.18	1.23	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉228	1307	9H-1a	4	4.80	1.93	1.92	1.05	B	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉229	1307	9H-1a	4	(5.48)	(2.32)	(2.76)	(2.36)	E	3	II	滑石	2	

器物番号	树纹番号	写真 图版 番号	实测 番号	登録 番号	地区別	色	法量 (mm)				形状分類			石材	残存 状況	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	側面形 状	側面研 磨	端面形 状			
--	--	--	玉 231	1307	9H-la	1	(3.91)	--	(3.33)	(2.49)	E	4	II	滑石	1	
--	--	--	玉 235	1318	9H-la	2	6.18	2.63	3.24	3.01	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 236	1318	9H-la	1	5.31	2.15	2.92	1.68	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 237	1318	9H-la	1	5.37	1.93	2.94	2.38	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 238	1318	9H-la	1	5.58	2.18	2.22	1.35	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 239	1318	9H-la	1	5.80	2.09	2.24	1.68	B	3	II	滑石	4	
--	--	--	玉 240	1318	9H-la	1	5.30	2.30	3.06	1.90	A	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉 241	1318	9H-la	1	5.36	1.99	2.67	2.18	A	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 242	1318	9H-la	1	5.14	2.13	2.76	2.29	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 243	1318	9H-la	1	5.05	1.91	2.12	1.55	E	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 245	1318	9H-la	6	5.00	1.78	2.41	2.15	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 247	1318	9H-la	2	4.72	1.72	4.34	3.90	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 248	1318	9H-la	2	5.51	2.09	3.88	2.58	A	3	II	滑石	5	
--	--	--	玉 249	1318	9H-la	4	5.18	2.19	3.37	2.28	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 250	1318	9H-la	1	4.48	1.90	3.03	2.68	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 251	1318	9H-la	1	4.59	1.91	3.18	2.78	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 252	1318	9H-la	1	4.55	1.73	3.94	2.80	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 253	1318	9H-la	1	4.86	1.96	3.27	2.00	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 254	1318	9H-la	5	4.30	1.68	3.62	2.93	C	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 255	1318	9H-la	5	4.29	1.90	3.69	3.07	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 257	1318	9H-la	1	4.79	1.89	3.59	3.24	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 258	1318	9H-la	1	4.31	1.84	3.14	3.00	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 259	1318	9H-la	1	4.45	1.75	3.36	3.05	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 260	1318	9H-la	1	4.28	1.98	3.33	2.78	C	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 262	1318	9H-la	1	4.31	1.98	3.08	2.79	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 263	1318	9H-la	1	4.40	1.35	2.71	2.61	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 264	1318	9H-la	1	4.45	2.03	3.44	2.20	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 265	1318	9H-la	1	4.36	1.93	3.04	2.78	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 266	1318	9H-la	1	4.45	1.80	2.92	2.46	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 267	1318	9H-la	1	4.46	1.51	2.92	2.11	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 268	1318	9H-la	6	4.48	1.55	2.88	2.79	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 269	1318	9H-la	1	4.56	1.80	2.57	2.27	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 270	1318	9H-la	6	4.35	1.49	2.63	2.42	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 271	1318	9H-la	3	4.17	1.45	2.29	1.52	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 272	1318	9H-la	1	4.36	1.35	2.43	1.82	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 273	1318	9H-la	1	4.52	1.27	1.85	1.64	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 274	1318	9H-la	1	4.87	1.92	2.89	2.03	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 275	1318	9H-la	1	4.37	1.78	2.68	2.01	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 276	1318	9H-la	1	5.05	2.38	2.72	1.81	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 277	1318	9H-la	1	4.69	1.95	2.61	2.36	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 278	1318	9H-la	1	4.60	1.61	2.43	2.15	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 279	1318	9H-la	1	4.62	1.94	2.17	1.88	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 281	1318	9H-la	1	4.74	1.41	2.50	1.74	A	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 282	1318	9H-la	5	4.32	1.81	2.61	1.99	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 283	1318	9H-la	1	4.45	2.02	2.90	1.94	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 284	1318	9H-la	1	4.48	1.96	2.83	2.42	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 285	1318	9H-la	1	4.49	2.24	2.78	1.93	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 286	1318	9H-la	1	4.82	1.66	2.95	1.77	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 287	1318	9H-la	5	4.73	1.48	2.58	1.82	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 288	1318	9H-la	1	4.79	1.41	2.55	2.14	B	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 289	1318	9H-la	1	4.31	1.33	2.38	2.01	E	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 291	1318	9H-la	3	4.04	1.54	2.39	2.04	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 292	1318	9H-la	1	4.14	1.84	2.19	1.50	E	4	I	滑石	5	破損
--	--	--	玉 293	1318	9H-la	4	4.23	2.00	2.70	1.50	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 294	1318	9H-la	1	4.20	1.99	1.89	1.71	B	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 295	1318	9H-la	4	4.11	1.53	2.26	1.74	A	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 296	1318	9H-la	6	3.84	1.05	1.92	1.78	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 298	1318	9H-la	1	3.92	1.63	3.01	2.50	B	3	I	滑石	5	
--	--	--	玉 301	1325	9H-la	5	5.14	1.97	2.88	2.33	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 302	1325	9H-la	1	5.12	1.90	3.21	2.76	A	2	I	滑石	5	
--	--	--	玉 303	1325	9H-la	5	4.79	2.17	2.98	2.30	B	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 304	1325	9H-la	1	4.40	1.36	2.93	2.26	E	4	I	滑石	5	
--	--	--	玉 305	1325	9H-la	4	4.80	1.68	3.03	2.17	E	2	II	滑石	5	
--	--	--	玉 306	1325	9H-la	1	4.48	2.04	2.48	1.51	B	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 307	1325	9H-la	1	4.63	1.68	2.25	1.69	E	4	II	滑石	5	
--	--	--	玉 308	1325	9H-la	1	4.30	1.56	1.80	1.46	E	4	I	滑石	5	

器物编号	类别编号	写真图版编号	实测编号	登錄编号	地区别	色	法量 (mm)				形状分期			石材	残存状况	備考
							直径 (残存)	孔径 (残存)	最大厚 (残存)	最小厚 (残存)	侧面形状	侧面研磨	端面形状			
—	—	—	玉309	1325	9H-1a	1	4.97	2.10	4.26	3.96	C	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉311	1325	9H-1a	1	4.11	1.85	3.20	2.74	B	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉313	1325	9H-1a	1	3.55	1.35	2.22	2.17	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉314	1325	9H-1a	1	3.88	1.49	2.91	2.51	C	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉317	1347	9H-1a	1	4.90	2.14	2.79	2.55	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉318	1347	9H-1a	3	4.93	1.70	2.67	2.15	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉319	1347	9H-1a	1	4.83	2.12	1.88	1.60	B	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉320	1347	9H-1a	1	3.89	1.62	3.49	3.23	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉321	1347	9H-1a	2	4.40	1.45	2.20	1.90	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉323	1347	9H-1a	2	4.57	2.02	3.47	3.26	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉324	1347	9H-1a	1	4.38	1.98	2.81	2.03	B	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉325	1347	9H-1a	1	4.51	1.88	3.05	1.53	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉329	1351	9H-2a	1	4.63	1.82	3.75	3.49	C	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉331	1351	9H-2a	1	5.00	2.18	3.74	3.27	C	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉333	1351	9H-2a	5	4.84	1.89	3.07	2.42	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉334	1351	9H-2a	1	4.97	1.57	3.95	2.52	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉335	1351	9H-2a	4	5.21	1.62	2.93	2.74	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉336	1351	9H-2a	1	5.33	1.99	2.92	2.21	A	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉337	1351	9H-2a	1	4.88	2.25	2.59	2.32	B	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉338	1351	9H-2a	1	5.43	2.09	2.61	1.76	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉339	1351	9H-2a	4	4.96	1.54	2.36	1.45	E	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉341	1351	9H-2a	1	4.78	1.68	3.13	1.53	B	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉342	1351	9H-2a	1	4.41	1.72	2.87	2.29	A	3	II	滑石	5	
—	—	—	玉343	1351	9H-2a	1	4.70	1.98	1.43	1.05	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉345	1351	9H-2a	1	4.05	1.82	2.66	2.28	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉346	1351	9H-2a	1	4.11	2.08	2.69	2.35	B	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉347	1351	9H-2a	5	4.10	1.82	3.35	2.16	B	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉349	1398	9H-2a	1	5.08	1.94	2.49	1.90	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉350	1398	9H-2a	1	4.97	1.74	2.18	1.71	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉351	1398	9H-2a	1	4.26	1.91	2.79	2.19	A	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉352	1408	9G-1j	4	5.22	2.11	3.28	1.78	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉354	1408	9G-1j	4	6.02	2.55	3.14	1.42	A	2	II	滑石	4	
—	—	—	玉355	1410	9H-2a	1	5.40	2.38	2.82	1.60	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉357	1416	9G-1j	4	4.72	2.14	3.03	2.42	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉358	1416	9G-1j	4	5.20	1.68	2.31	1.10	B	4	II	滑石	5	
—	—	—	玉359	1416	9G-1j	1	4.83	1.47	2.15	1.97	E	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉360	1416	9G-1j	1	4.31	1.43	1.79	1.63	E	3	I	滑石	5	
—	—	—	玉361	1427	9G-1j	4	7.01	1.92	4.23	2.68	B	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉362	1427	9G-1j	6	5.79	2.22	3.29	2.49	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉363	1427	9G-1j	1	5.52	2.33	4.11	2.88	E	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉364	1427	9G-1j	4	6.15	2.29	3.64	2.85	A	3	I	滑石	4	
—	—	—	玉365	1427	9G-1j	4	4.79	1.39	3.03	2.92	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉366	1427	9G-1j	4	4.67	1.04	2.33	1.85	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉367	1464	9G-1j	5	5.54	2.38	3.83	2.92	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉368	1464	9G-1j	1	4.61	1.98	2.98	2.58	A	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉369	1481	9G-1j	4	7.05	1.78	4.15	3.52	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉370	1481	9G-1j	4	6.61	2.26	2.89	2.40	E	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉371	1481	9G-1j	1	5.83	2.31	2.94	2.49	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉374	1481	9G-1j	1	5.56	2.28	2.91	1.38	E	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉377	1481	9G-1j	1	4.69	2.06	2.45	2.11	A	2	I	滑石	5	
—	—	—	玉378	1481	9G-1j	1	4.18	1.39	1.98	1.51	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉379	1481	9G-1j	1	3.92	1.49	2.50	2.22	B	4	I	滑石	5	
—	—	—	玉381	1481	9G-1j	4	5.86	1.76	3.40	1.18	E	2	II	滑石	4	
—	—	—	玉382	1481	9G-1j	1	5.48	1.97	3.41	2.70	E	2	II	滑石	4	
—	—	—	玉383	1481	9G-1j	1	5.03	1.98	3.87	2.94	C	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉385	1481	9G-1j	1	4.60	2.14	3.45	1.33	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉387	1481	9G-1j	1	4.44	2.10	4.06	3.36	A	2	II	滑石	5	
—	—	—	玉389	1481	9G-1j	4	5.55	2.25	2.33	1.54	E	4	I	滑石	4	
—	—	—	玉390	1481	9G-1j	3	4.80	1.42	1.85	1.33	E	4	I	滑石	4	
—	—	—	玉392	1481	9G-1j	1	(4.22)	(2.09)	(3.09)	(2.45)	B	2	II	滑石	2	

第5項 木製品

1. 出土木製品の種類と樹種

西岩田遺跡の今回の調査では、砂礫層の3b層や有機物を多く含む4a層との境界から、多数の木製品が出土した。報告書に掲載した41点のうち15点は、保存処理委託の際に樹種同定を実施した。また、未保存処理製品のうち19点については種実と共に樹種同定を委託し、結果を第4章第2節に掲載した。判明した樹種は、本文および表21の木製品観察表にも記載した。第4章第2節では各試料の同定後、種類と樹種の相関性や、種実も含めた周辺環境や植物利用について検討を行っている。本項では、保存処理を実施した木製品も含めて再考し、種類と樹種の相関性、出土点数が分かるように表16にまとめた。

また、表16の右列には近畿自動車道天理～吹田線建設（以下、近畿道と略称）に伴う発掘調査で出土した木製品について、報告書の記載をもとに種類と樹種を分類、集計した（大文セ1983）。ただし、調査担当者の本文報告記載、付章の樹種同定結果、樹種（一覧）表、写真図版等によって出土遺物の名称や分類が異なるものもあり、板や棒、杭、部材などはどれに含めているのか不明なものもあった。そこで、表16の種類については当調査担当者の判断によって分類したが、大まかな樹種と出土量の目安として捉えていただきたい。

今回の調査でも杭や部材などは多数出土しており、出土木製品の総数は100点を超える。本報告書にはそのうち43点のみを図化掲載し、樹種同定を実施したのは計34点である。

樹種は針葉樹の方が多いが広葉樹もあり、用途に応じて樹種が選択されていると言える。例えば、鋤先や支柱などの農具は堅牢な点からか、圧倒的にコナラ属アカガシ亜属が使用されており、その他にはアワブキ属、ヤブツバキ、クスギなどがみられる。これは他遺跡出土木製品の使用木材の特徴とも一致する（例えば六大A遺跡など）。西岩田遺跡の立地環境を裏付けるように漁撈具も一定みられるが、比較的多様な樹種が選択されている。今回出土した樺は、3点中2点が広葉樹で山地に自生するスダジイであった。近畿道の調査ではスギやヒノキの針葉樹も併用している。

槽・盤などの刳物容器は加工のしやすさ、刳り抜きやすさからか、針葉樹のヒノキやスギ、クスノキなどが選択されている。板はヒノキ、スギ、サワラが多い。杭に関しては樹種がかなり多種にわたり、入手しやすい材を選択して作られたと思われる。紡織具や棒状製品もスギやヒノキ、サワラなど針葉樹が多く使われている他、板材や棒にオニグルミやヤマグワ等河川や二次林に生育する、比較的生育の早い樹種が使用されているのは、入手しやすさからと指摘されている（第4章第2節参照）。

紡織具は糸巻や認めかけの軸棒として糸を巻き付けたり回転するために、両端に頭を作り出し、軸棒は削って頭より細くしているが、両端が細く中央が太い曲線的な影みがあるなど、造りの丁寧な製品も多い。加工のしやすさから柔らかな木材を選択したと考えられる。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、広葉樹から針葉樹へと用材にする樹種の変換があったとされている。西岩田遺跡で出土した木製品の多くは古墳時代初頭から中期の流路堆積から出土しており、まさにこの時期に合致している。使用樹種も針葉樹、広葉樹共に出土しており、多様な樹種が使用されていることが判明した。

また、祭祀に関連する木製品が近畿道の調査では4点出土しているのに対して、当調査では出土していないが、東側に隣接する大阪モノレール軌道部分の調査では、古墳時代初頭の木製仮面が出土した。当調査も含めて被熱した材も見受けられ、土器と合わせて水鎮め等の祭祀行為に使用した可能性も考えうる。その他、長さ約1.8mと大形で厚く、側面は加工して凹凸をもたせた板が出土した（図49-249）。

表 16 種類別樹種一覧

分類	種類	西若田(華西)出土木製品樹種	点数	〈参考〉西若田(近畿道)出土木製品樹種	点数
農具・工具	鋤先	コナラ属アカガシ亜属 (641・642) - 2	2	カシ	10
	鋤頭・鍬	コナラ属アカガシ亜属 (232)	1	カシ	3
	型杵	アワヅバキ (234)、ヤブヅバキ (237)	2	カシ-1、クスギ-1	2
	掛矢	コナラ属アカガシ亜属 (643)	1		0
	田舟		0	コウヤマキ-1	1
漁具	手浮網		0	カキ-1、ヒノキ-1、クスギ-2、サカキ-3	7
	籠	スダジイ (10・236) - 2、モミ属 (676)	3	カキ-1、スギ-1、ヒノキ-3、カシ-1、 シイノキ-7、サクラ-2、サカキ-1、ユズリハ-1	17
舟用具	たも		0	サカキ	1
	アサカキ		0	スギ-1、クスノキ-2	3
容器	脚付容器	クロマツ (242)	1		0
	槽	スギ (233)、コナラ属アカガシ亜属 (244)	2	不明	1
生活具	盥	クスノキ (679)	1	ヒノキ	2
	釜(机)	ヒノキ (509)	1		
紡織具	紡織具	スギ (246)、ヒノキ (672)、サワラ (675)	3	布巻具(ヒノキ-4、スギ-1、シイノキ-2、 クスノキ-1、サカキ-1)	9
祭祀具	祭祀具		0	角形木製品(ヒノキ)、鳥形木製品(サカキ)、 刺形木製品(ヒノキ)、透串状木製品(クスノキ)	4
板	板(木船板?)	ヒノキ (249)	1		0
	文様のある板(等か (大・小))	ヒノキ (238・239) - 2	2		0
	板	未同定 (9)、ヒノキ (235)、サワラ (644)	3	イヌマキ、コナラ、ケヤキ、サクラ、ヒノキ、モミ、カシ、 クスノキ、スギ、シイノキ、マツ、コウヤマキ、モミ	45
	孔・納穴のある板	スギ (245)、ヒノキ科 (247)、未同定 (248)、サワラ (648)、 ヤマグワ (671)、未同定 (677)	6		
棒	有頭棒・棒	有頭棒 (未同定 (240)、モミ属 (241・243・647) - 3、 スギ (673))	5	有頭棒(サカキ)-2、棒(コウヤマキ、スギ、ヒノキ、 カシ、シイノキ、サキミ)	13
	柄穴のある杭	オニグルミ (670)	1	サカキ、モミ、カシ、ユズリハ、エゴノキ、モッコク、 ケヤキ、カキノキ、ヤブヅバキ、ウズミザクラ、マツ、 シイノキ、シャシャンボ、ヤナギ、ヒノキ、サキミ、 クスギ	25
杭	扱りのある杭	未同定 (11)	1		
	杭	未同定 (250・669)、アサダ (510)	3		
部材	部材	ヒノキ (674)	1	梯子(サカキ、ヒノキ)-2、柱材(シイノキ、サカキ、 ヤマグワ、コナラ、カキノキ、 シャシャンボ、モミ)-15	17
	部材(有頭板)	スギ (678)	1		
不明		未同定 (645・646)	2	ヤマグワ、ヒノキ、ヤブヅバキ、カシ、モミ、コナラ、 サクラ他	多数

() 内の数字は遺物番号、樹種後の数字は出土点数を示す。

大阪モノレール軌道部分の調査でも同様の板が出土している。材がヒノキであることから、組み合わせ式木棺の一部となる可能性も示唆される。

平面の端に円形や長方形の孔をもつ板も多数出土した(図48-245・247・248、図97-648、図110-671、図111-677)。孔は他の板や棒を結合させるための紐通し孔と考えられ、樹皮や蔓を通していたと思われる。近畿道の調査でも、氾濫堆積から孔に樹皮を通した板が出土している(大文セ1983、第41図-W097)。あるいは、孔に細い角材などを差し込んでいた可能性もある。板の厚さにもよるが住居の壁板材に結合孔をもつ報告例があり、倒壊した住居の一部が漂着した可能性も考えられる。

その他、出土遺物として取り上げ不可能であるが、竹藪を組編みした籠状製品も1区で確認されている(図10)。2区では、漆状の黒色塗料の塗膜が残る竹の破片が土坑内から出土しており、幅が一定なため編組製品の一部と推定されている(図29)。この43土坑からは他に、完形に近い土器器数点やヒョウタンの果皮と種、モモの核、ヒシの果皮も出土しており、土坑内に籠や土器と共に、あるいはその中にヒョウタンが入られた可能性もある。

近畿道の調査で実施した花粉分析では、3区南半に隣接するトレンチで、弥生時代後期から古墳時代はイネ科、スゲ科、ヨモギ属、キク亜科などからなる草地にマツ属、ハンノキ属、コナラ亜属が若干生育していたとされる。1区に近い北では弥生時代後期に変化がみられ、古墳時代にはイネ科の草地の周囲にスギ属、アカガシ亜属、シイノキ属、コナラ属の樹木が生育していた一方、オモダカ属、ミクリ属、

ミズワラビ属の検出によって池沼の存在も指摘されている。

調査区周辺は、弥生時代後期以前は湿地化しており、樹木が生育するには適した環境とは言いがたい。古墳時代初頭以降、流路堆積の一部が陸地化し、人も定住することとなった。より内陸部、上流（北側）で生育、伐採された樹種を使用して製作された木製品が、土器などと共に搬入されたか、砂礫と共に当地に流入したと考えられる。近隣に土器のみならず、これら木製品の農具や生活用具を使用し生活を営んでいた生活環境があったことがうかがえる。

2. 文様のある板について

今回の出土木製品で目を引くのが、沈線状に刻んだ直線と曲線で文様を表現したヒノキの板である(図147-1・2、遺物番号238・239)。2区の3b層中から出土し、古墳時代初頭以前の遺物と思われる。

大きい板(238)は全長81.0cm、最大幅13.6cm、厚さ1.5cmをはかる。表面の中心に円弧状の文様を表現し、その両側には各5本の直線を線刻で描く。裏面両端には別材をはめ込むためと思われる溝を有し、その両端に孔を開けて榫細工(板の樹皮)の綴じ紐を通してある。1側面は加工時の状態で残存し、もう1側面は欠損しているが、木釘孔が1カ所認められる。小さい板(239)は残存長28.2cm、最大幅5.2cm、厚さ1.5cmをはかる。238と接点はなく、形状も長方形でなく先端は丸みをもたせるなどの違いはあるが、厚さや文様構成から同一もしくは同種の板の一部と考えられる。239は表面の円弧上の文様以外に、裏面にも中心に円状の削り込みがつけられている。2点とも漆の塗布などは認められなかった。この板に刻まれた文様は明らかに装飾的な意味をもつが、同じ装飾を施した板の類例は確認できなかった。

ただし、近畿道の調査では、亀井遺跡、新家遺跡、巨摩遺跡で似た形状や規模の板状製品が出土し、琴に分類されている(大文セ1980・1982・1987、奈文研1993)。琴と総称される弦鳴楽器は、現代の箏に近い和琴に至るまで数段階の変化を経ており、琴と総称されるが現代の楽器と比較すると多様な種類の楽器に相当する可能性がある。縄文時代後期の筥形木製品は手にもつバイオリンのような使用方法だったと考えられ、弥生時代から古墳時代になると棒作り、板作り、槽作りの琴が出土する。弦を張る突起を尾部にもち、頭に集弦孔をもつ部分が棒から板へと変化し、板に共鳴槽をつける形態への変遷や分類は水野正好他によって論じられてきた(水野1980他)。ほぼ上板のみしか出土せず、槽は一本造りと考えられているものが多いが、槽部分が箱になるものもある。上板の分量も次第に大型化し全長1m以上のものが多くなる。琴の形態による分類もなされている(奈文研2019他)。

槽作り琴の出土例を西岩田遺跡に近い遺跡も含めてまとめた。巨摩遺跡では、弥生時代中期後半の沼状遺構から出土している(大文セ1982、図149-1)。残存長59.9cm、現存幅14.9cm、厚さ2.5cmをはかる。裏面の尾部突起部に近い縁に沿って溝があり、溝近辺に2つの孔がある点が238と似る。新家

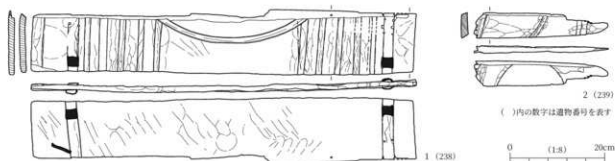
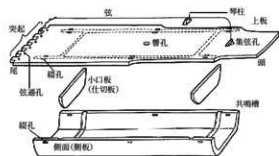


図147 西岩田遺跡出土の文様のある板



※京文研2019 fig6・fig8より引用

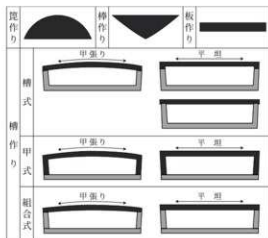
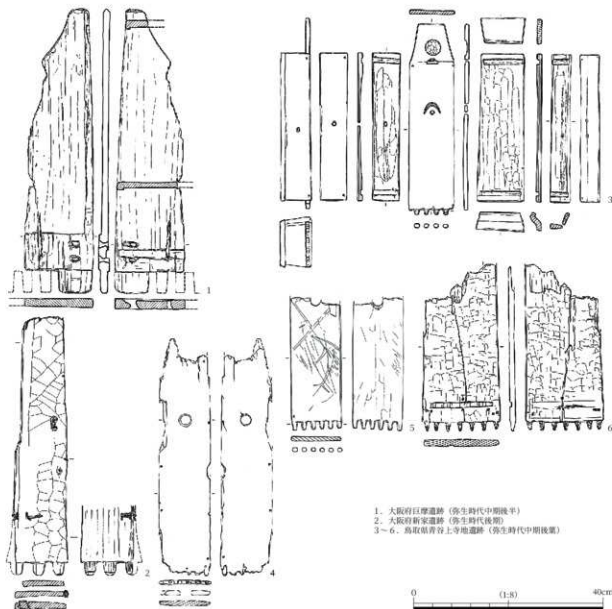


図 148 竇の部分名称、構造と横断面形態



1. 大坂府白摩遺跡 (弥生時代中期後半)
2. 大坂府新家遺跡 (弥生時代後期)
- 3~6. 高取県青谷上等地遺跡 (弥生時代中期後半)

図 149 槽作り琴出土資料

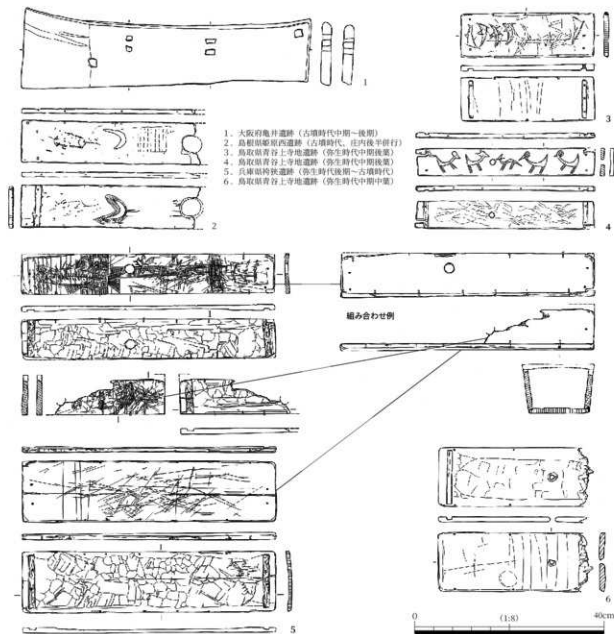


図150 琴板出土資料

遺跡では弥生時代後期の包含層から槽作りの琴面が出土している(大文セ1987、図149-2)。残存長54.8cm、現存幅11.2cm、厚さ1.8cmをはかる。尾部に3本の突起をもち、尾部が最も厚く、頭部にむかうにつれ狭く薄くなる。小孔が3カ所あり、その1つには蔓が残る。表面に装飾的な文様をもたない点は異なるが、板の長さや厚み、琴面と槽を結束するための孔を有し、蔓が残る点は238と似る。

鳥取県青谷上寺地遺跡^{アサカカミコ}では弥生時代前期後葉から中期後葉にかけて、9点の出土例がある(門脇2023)。そのうち槽作り琴と思われるものを図149-3～6に掲載した。(鳥取財団2001・2002)。

4～6はいずれも尾部に6、7本の突起をもち、4と5は中央に円形孔をもつ。4は両側縁に木釘孔があり、木釘で箱形に固定されていたと考えられる。6は裏面に小口板を受ける溝状の削り込みがあり、表面はその位置に平行線を施す。この溝(小口板)と両側板を挟むように2個1対の紐通し孔が3カ所ある。溝と紐通し孔の位置関係が238と似る。5は表面にサメの線刻絵画がある。裏面に小口板を受ける溝はなく、小孔は1つのみなので箱状であったかは不明で、箱としても紐で固定していたと思われる。

3は上板、底板、側板2枚、小口板2枚が揃って出土した稀有な例である。槽部分が組合式の箱になっており、全長40.2cm、幅9.6cm、厚さ0.9cmの小型品である。上板尾部に4本の突起が、頭部には半月形の集弦孔と円形の削り込みが、胴部には三日月形と円形の孔がある。裏面には小口板を受ける溝が端を残して入る。側板の1枚には1つの、もう1枚には2つの共鳴孔がある。側板の小口板を受ける溝は端から端まで貫通して削り込まれている。四隅にのみ小孔があることから、上板は結合後に紐で縛って固定していたと推測される。図示した以外にも滋賀県赤野井遺跡や服部遺跡、福岡県辻田遺跡などで槽作り琴の出土例がある（水野1980他）。

槽作り琴の特徴は、①上板に弦をかけるための6本程度の突起、集弦孔、響（共鳴）孔をもつこと（図149-3のように側板にも共鳴孔をもつものもある）、②上板の固定方法は弦の張替えのためか木釘孔が少なく紐で固定していたこと、③全長が1m以上と大型であるので、置いて演奏したか膝に乗せて演奏したと考えられること、④琴板と比較すると装飾が少ないことがあげられる。和琴、箏につながる形態で琴柱を有し、指かピック状のもので弾いて演奏したと考えられる（門脇2023）。

次に琴板と思われる一群をとりあげる。琴板は槽作り琴の上板から尾部の突起を除いた形状でありながら、楽器としては似て非なるものである。琴が弦を張る弦楽器であるのに対し、琴板は箱形容器の上面を撥（ヤナギの枝など）で叩いて演奏する打楽器である。現在も出雲大社と神魂神社、熊野大社の神事に使用されている（足立2004、千家1993）。

亀井遺跡から古墳時代中期の琴板と思われる板が出土している（大文セ1980、図150-1）。長方形ではなく撥状で、表面の中央に1カ所、長辺に沿った場所に5カ所の方形や長方形の孔が開く。

島根県姫原西遺跡で出土した琴板は、島根県松江市神魂神社に伝わる伝製品ときわめて類似することから、その用途が特定され注目された（島根県教委1999、図150-2）。胴部に円形と三日月形の孔があり、両者の間には簾状の9本の条線をもつ。長辺に3対3カ所の木釘孔をもつので木釘で固定し、開閉できない箱として組み立てられていたと推測される。神魂神社の琴板は長さ1.38mと大きい、裏面に姫原西遺跡と同様の円形孔と三日月形の孔（共鳴孔）をもち、上面を打ち鳴らす楽器として新嘗祭などの神事に使用されている。円と三日月の孔は、陰陽思想に基づいた日月の表現と捉えられている。姫原西遺跡出土品は裏面には小口板を嵌め込む溝があり、側板とされる。古墳時代初頭、庄内式期後半併行の包含層から出土した。

鳥取県青谷上寺地遺跡では、箱形になる木製品の一部が出土し、琴板と考えられている（図150-3・4・6）。3は長さ28.2cmの小形の板で長辺4カ所、短辺3カ所に木釘孔があるので、木釘によって固定されていたと分かる。表面にはサメが線刻され、裏面の溝が端までおよばないため上板と思われる。4も長さ37.8cm、幅6.2cmと小形で、琴板の側板とされる。小口板を受ける溝の両端に2個1対の4カ所、両側板を固定する木釘孔は6カ所あるので、四方を木釘で固定されていたと分かる。それ以外にも木釘孔より大きい孔が残り、上板は紐で固定されていた可能性もある。中央に円形孔、孔を挟んで2頭と3頭のシカと思われる動物が線刻される。6は溝の削り込みが両端までおよばず、装飾がないことから底板と考えられる。円孔を一つもち、側縁に3対6カ所の木釘孔を有する。弥生時代中期中葉から後葉である。青谷上寺地遺跡出土品は、図149-6以外は他の遺跡出土品と比較すると小形で、6枚の板を箱形に組み合わせ木釘で固定する形状から琴板に近いとされる（足立2004）。

兵庫県袴狹遺跡では、弥生時代後期から古墳時代の遺構面から、2枚の側板と1枚の底板が出土した（図150-5）。底板の溝は両端までおよんでいない。側板2枚は円孔と小口板をはめ込む溝が上下両端

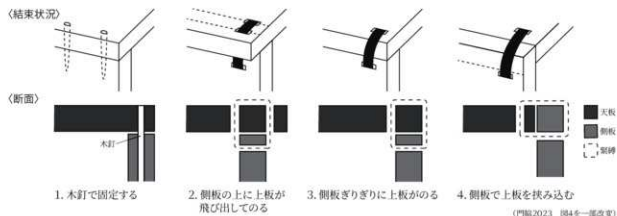


図 151 上板固定方法の模式図

まで作られている。ほぼ全形が残る側板の長辺には2対6カ所、短辺には2カ所の木釘孔を有し、外面にはサケ、シカ、シュモクザメや重画文が線刻で描かれる。欠損した側板も長辺に2対3カ所の木釘孔を有し、外面にカツオやサメ、重画文、平行線が描かれる。底板にも4本の平行線や斜線が描かれる。3枚の板を組み合わせると断面逆台形の箱になり、琴板と考えられる。

琴板の特徴は、①6枚の板を組み合わせた箱で各板は木釘で固定する（叩いて使用するため）、②側板（あるいは底板）に共鳴（響）孔があること、③長さが30～60cm程度と比較的小型なこと、④上板や側板に線刻絵画などの装飾を施すことがあげられる。神事写真を見る限り台状の机に置いて演奏される。

では、西岩田遺跡で出土した板は槽作り琴か琴板のどちらかになるのか、なるとしたらどの部分にあたるのかを考えたい。238は長さ81.0cmで、全長が判明している槽作り琴の上板が長さ80～160cm程度、琴板が30～60cm程度であるので、法量は槽作り琴に似る。槽作り琴であれば尾部の突起や集弦孔がなく、裏面の小口板を受ける溝が端までのびることから、上板でなく側板と考えられる。側板であれば上板とどう固定していたのだろうか。

門脇氏が青谷上寺地遺跡の琴（図149-3）復元にあたって、他遺跡も参考にまとめた上板固定法模式図に一部加筆した（図151）。1は木釘で固定する方法で、図149-3～6や図150-2～6など琴板はほぼこれになる。2～4の上板と側板の双方に孔を開けて綴紐を通すのが図149-2（綴紐の蔓が残る）や図150-1である。西岩田遺跡出土板（238）の長辺両端に残る樹皮は板の短辺、小口板をはめ込む溝に平行に表裏を一周しているが、上板と固定するには長辺に対して平行でなければ不可能である。また、綴紐としては幅広で、裏面の溝に側板と同じ高さまで小口板を差し込むと小口板と接する面の樹皮がつぶれる。つまり、小口板はこの樹皮部分より上で止まる上げ底になる必要がある。

238の欠損している長辺には溝部分に2ないし6つの小孔があり、1つの孔には細い紐が残る。側面にも木釘孔が1カ所認められる。この長辺を上板と接して綴紐で固定していたと仮定して復元した（図152）。下辺にあたる部分が直線的に加工されているので、箱状の組合式槽作り琴と考える。上板と側板の上方を細い綴紐を通して結束させ、その紐を下方にのぼして、ベルトのバックルのように幅広の現存する樹皮に通していたのではないだろうか。図152では側板ぎりぎりに上板がのるように復元したが、上板が飛び出すか側板が上板を挟み込む場合もあり得る。

また、239が小口板ではないかと考え、裏面にある削り込みの円が中心にくると想定し横幅32.0cm、高さ9.0cm程度の小口板として復元してみた。復元図に従うと側板は上面に対して弧を描き、小口板は天にむかって弧を描く円（太陽を表現するか）と直線の線刻文で外面を装飾された琴となる。239の内

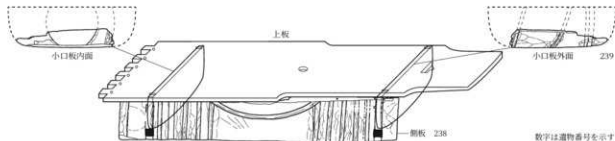


図 152 西岩田遺跡出土琴復元図

面にある円形のくり込みは、図149-3の上板頭部にあるくり込みと非常に似るが、見えない内面に存在するので装飾以外の用途が考えられる。ただし、槽式の琴の小口板であれば239の曲線部が層の底部に沿ったカーブと考えられるが、組合式の琴であれば底板に接する辺が直線的で、小口板の形状が方形や逆台形になる方が隙間なく組み立てられるので、やや矛盾をもつ。また、前述のように小口板は側板の幅（高さ）より短かく、底板が上げ底の構造になる必要がある。

239が小口板でなく上板の頭部になる可能性もある。その場合は円形のくり込みがある面を表面とし、線刻がある面を裏面とすると図149-3と似た形態の上板となるが、上板の見えない裏面に線刻文が施されていたことになる。槽部分は組合式以外である以外不明だが、底板の上に側板がのる可能性ももつ。

琴板としても238は側板になるが、装飾性が高い他は大きさがかなり大きく共鳴孔がない、底板や天板に固定する木釘孔が少ないなどの相違点がある。西岩田遺跡から出土した板は、槽作り琴と琴板の両方の特徴を兼ね備えた中間的な製品と言える。槽作り琴は出土品のほとんどが上板上で、槽部分はあまり例がない（もしくは出土していても認識されていない可能性が大きい）。現時点では、今回出土した板（238）は、槽作り琴の側板の可能性が最も高いと思われる。

〈参考文献〉

（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1998 『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』

（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1980 『亀井・城山』

（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1982 『巨摩・瓜生堂』

（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1983 『西岩田』

（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1987 『新家（その1）』

（財）鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』

（財）鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』

鳥根県教育委員会 1999 『姫原西遺跡』

奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録-近畿原始編-Ⅰ』

奈良国立文化財研究所 2019 『木器集成図録-飛鳥藤原編Ⅰ-Ⅰ』

兵庫県教育委員会 2000 『袴狭遺跡』

三重県埋蔵文化財センター 2000 『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』

足立克己 2004 「琴板-絵画のある箱形木製品-」『鳥根考古学会誌』第20・21集合併号 鳥根考古学会

門脇隆志 2023 「青谷上寺地遺跡の琴について-活用に向けた評価と復元-」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2021』鳥取県地域づくり推進部文化財局・とっとり弥生の王国推進課・青谷かみじち史跡公園準備室

千家和比古 1993 「出雲大社と祭祀-その祭主、出雲国造の祭儀-」『古代を考える 出雲』吉川弘文館

水野正好 1980 「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会

表17 土器観察表

※法量の()は検存、[]は推定を示す。

遺物番号	検出層	写真(99番)	種類	器形	調査区	地区別	期位名	遺物名	法量(cm)				色調	胎土	焼成	備考		
									口径	最大径	底径	器厚						
1	II	—	瓦部	椀	1区	9F-2b	3b層	—	(15.0)	—	(5.4)	—	(5.0)	外:2.5YR2/1黒 内:7.5YR2/1黒 断:2.5YR6/3にぶい黄	密	良	一部にヘラミガキ痕	
2	II	25-1	土師器	皿	1区	9F-1b	3b層	—	(12.8)	—	—	—	(2.1)	外:10YR/4にぶい黄 内:10YR/4にぶい黄 断:10YR/74にぶい黄	密	良	口縁部ココナデ	
3	II	25-1	須恵器	杯蓋	1区	9F-2b南	3b層	—	(10.6)	—	—	—	(2.8)	外:N6.0R 内:N7.0R白 断:N6.0R	密	良	内外面回転ナデ	
4	II	—	須恵器	杯身	1区	9F-1f北	3b層	—	(12.6)	—	—	—	(3.2)	外:N3.0R灰 内:N7.0R白 断:N7.0R白	密	良	外面底面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ	
5	II	—	須恵器	杯身	1区	9F-1f南	3b層	—	(15.6)	—	—	—	(3.0)	外:N5.0R 内:N5.0R 断:N5.0R	密	良	内外面回転ナデ	
6	II	25-1	須恵器	杯身	1区	9F-2b南	3b層	—	(13.2)	—	—	—	(2.6)	外:N7.0R白 内:N7.0R白 断:N7.0R白	密	良	内外面回転ナデ	
7	II	25-1	須恵器	蓋	1区	9F-2b南	3b層	—	—	—	—	—	(4.5)	外:N7.0R白 内:N6.0R 断:10R5.71赤灰	密	良	内外面回転ナデ	
8	II	—	瓦	平瓦	1区	9F-2e北側(2a層西)	—	—	—	—	—	—	—	外:5Y7.1灰白 内:N2.0R 断:N8.0R白	密	良	口縁ヘラケズリ 凸面ハケ	
12	17	—	磁器(白磁)	碗	2区	9G-2d	1a層	—	(15.8)	—	—	—	(1.9)	輪:5Y8.1灰白 素地:5Y8.1灰白	密	良	内外面施軸	
13	17	—	陶器	皿	2区	9G-1b	1a層	—	(7.3)	—	3.8	—	1.5	輪:2.5Y8.2灰白 素地:10YR8/2灰黄 断:10YR8/2灰白	密	良	内外面施軸 削り出し凸面 内面底面付着	
14	17	—	土師器	杯	2区	9G-2c	1a層	—	(12.5)	—	—	—	—	3.2	外:10YR/3にぶい黄 内:7.5YR8/3灰黄 断:7.5YR8/3灰黄	中や密	中や良	口縁部ココナデ 外面底面付着
15	17	—	土師器	皿	2区	9G-2d	1a層	—	(8.6)	—	—	—	—	(3.0)	外:10YR6/3にぶい黄 内:7.5YR5.1にぶい黄 断:10YR3/3黄	密	良	内外面ナデか
16	17	—	須恵器	杯身	2区	9G-1e	1a層	—	(12.1)	—	—	—	—	(3.8)	外:N6.0R 内:N7.0R白 断:N7.0R白	密(1mm以下 下黄色むすかを含む)	良	外面底面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
17	17	—	須恵器	蓋	2区	9G-1d	1a層	—	(21.5)	—	—	—	—	(3.8)	外:5Y7.2灰白 内:5Y6.1灰 断:N5.0R	密	良	(1mm黄色 を含む)
18	17	—	瓦土器	羽釜	2区	9F-2j	—	—	—	—	—	—	—	(3.4)	外:N3.0R灰 内:N3.0R灰 断:N6.0R	密	中や良	外面強いユビオサエ、ナデ による削り付け
19	17	35-5	土器(青磁)	碗	2区	9F-1j	2-1a層	—	—	—	(7.2)	—	(2.4)	輪:5Y7.2灰白 素地:5Y8.1灰白 断:5YR8/1灰白	密	良	内外面施軸 削り出し凸面 龍草葉	
20	17	35-5	磁器(白磁)	碗	2区	9G-1d	2-1a層	—	—	—	(6.9)	—	(2.4)	輪:7.5Y7.2R 素地:N8.0R白 断:N8.0R白	密	良	内外面施軸 削り出し凸面	
21	17	—	陶器	おとし皿	2区	9G-1a	2-1a層	—	—	—	(7.6)	—	(1.6)	輪:2.5Y8.2灰白 素地:7.5Y8.2灰白 素地:2.5Y8.1灰白 断:N8.0R白	密	良	外面底面全切縁 内外面施軸 削り出し凸面	
22	17	—	瓦部	椀	2区	9G-2a	2-1a層	—	(13.0)	—	—	—	—	(2.3)	外:N3.0R灰 内:N3.0R灰 断:N8.0R白	密	良	きわめて 精良
23	17	35-5	瓦部	椀	2区	9G-1a	2-1a層	—	—	—	—	—	—	(2.2)	外:N2.0R 内:N4.0R 断:N8.0R白	密	中や良	外面ユビオサエ 削り付け凸面 内面ヘラミガキ
24	17	—	瓦土器	羽釜	2区	9F-2b	2-1a層	—	—	—	(7.2)	—	—	(4.9)	外:7.5YR5.2灰 内:7.5YR5.2灰 断:10YR8/2灰白	中や密 (2mm以下 粉粒を含む)	良	外面ココナデ 内面ナデ、復付着 いよし鏡不良
25	17	35-5	須恵器	鉢	2区	9G-2a	2-1a層	—	—	—	(7.5)	—	—	(4.5)	外:N6.0R 内:N6.0R 断:N6.0R	中や密(1~ 5mmの粉少 量含む)	良	内外面ナデ 龍草葉
26	17	—	須恵器	鉢	2区	9G-1a	2-1a層	—	—	—	(8.1)	—	—	(4.0)	外:N7.0R白 内:N7.0R白 断:N7.0R白	中や密(2 mm以下粉 少量含む)	中や良	内外面ナデ 口内 龍草葉
27	17	—	須恵器	杯蓋	2区	9G-1d	2-1a層	—	(13.6)	—	—	—	—	3.5	外:N7.0R白 内:N7.0R白 断:N6.0R	密(1~3 mmの粉少量 含む)	良	外面大井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
28	17	—	須恵器	杯身	2区	9G-1d	2-1a層	—	(12.7)	—	—	—	—	(3.5)	外:7.5Y7.1灰白 内:7.5Y6.1灰 断:7.5Y5.1灰	密(1~3 mmの粉少量 含む)	良	外面底面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
29	17	—	磁器(青磁)	碗	2区	9G-2c	2-3a層	—	(12.2)	—	—	—	—	(2.4)	輪:2.5GY6/6 オリーブ灰 断:N8.0R白	密	良	内外面施軸 龍草葉
30	17	—	陶器(黄磁)	すり鉢	2区	9G-1b	2-3a層	—	—	—	(8.5)	—	—	(5.2)	外:2.5YR4/3 にぶい赤 内:2.5YR5.2灰赤 断:2.5YR5.2灰赤	粗 (5mm以下 粉粒を含む)	良	内外面ナデ 口内
31	17	35-5	瓦部	椀	2区	9G-2c	2-3a層	—	(10.0)	—	—	—	—	(2.8)	外:N3.0R灰 内:N3.0R灰 断:5Y8.1灰白	密	中や良	外面口縁部ココナデ、体部 ユビオサエ 内面ココナデ後ヘラミガキ
32	17	35-5	瓦土器	すり鉢	2区	9G-1e	2-3a層	—	(30.0)	—	—	—	—	(6.3)	外:N4.0R 内:N4.0R 断:N8.0R白	密(1mm以下 粉粒を含む)	中や良	内外面口縁部ココナデ
33	17	—	須恵器	短冊蓋	2区	9G-1e	2-3a層	—	(17.0)	—	—	—	—	(9.3)	外:N7.0R白 内:N7.0R白 断:N7.0R白	密(2mm以下 粉粒少量 含む)	良	外面回転ナデ 内面口縁部ココナデ、体部 同内文で付着痕ナデ
34	17	—	須恵器	提灯口 横板	2区	9G-1d	2-3a層	—	(7.3)	—	—	—	—	(5.7)	外:N7.0R白 内:N7.0R白 断:7.5YR7.1明黄	密 (2mm以下 粉粒少量含む)	中や良	外面タキ後ココナデ、 内面ココナデ、断面タキナデ

車種 番号	積荷 番号	写真 の 番号	種別	形状	調査 区	地区別	期位名	通車 名	寸法(cm)				色調	船主	機成	備考			
									口径	最大径	径深	船高							
35	17	35-5	覆蓋 (白紙)	輿	2区	9G-2b	2-4 a	—	(15.4)	—	—	(3.2)	外: 2.5YR5/1灰白 断: 10YR5/2灰白	密	良	内外面塗軸			
36	17	35-5	瓦葺	輿	2区	9G-2d	2-4 a	—	(15.7)	—	(6.2)	—	外: N3/0暗灰 内: N3/0暗灰 断: 5YR5/1灰白	密	中 良	内外面ヘラミガキ 貼り付け高台			
37	17	—	瓦葺 土葺	羽塗	2区	9G-1a	2-4 a	—	—	—	—	(5.0)	—	密	良	外面ナデ 内面ハケカ			
38	17	—	須磨器	杯蓋	2区	9G-1e	2-4 a	—	(12.4)	—	—	—	外: N2/0黒 内: N2/0黒 断: 7.5YR5/1灰白	密	良	外面天目御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ			
39	17	—	須磨器	蓋	2区	9G-2a	2-4 a	—	(23.0)	—	—	—	外: N7/0灰白 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面口縁御焼転ナデ、脚蓋 タタキ後ナデ、体部タタキ 内面御焼転ナデ、体部 タタキ後ナデ、脚蓋タタキ 内面御焼転ナデ、体部 同色内文当て具後ナデ			
40	17	—	須磨器	蓋	2区	9G-2d	2-4 a	—	(22.8)	—	—	—	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: 5YR5/2青期	密 (1～2mm 粒含む)	中 良	—			
41	17	—	土御器	組 御 車	2区	9G-1d	2-4 a	—	—	月 5.9	—	—	3.0	(7.4)	外: 2.5YR5/6暗期 内: 7.5YR5/6暗期 断: 7.5YR5/6暗期	中 密 チート、多 量の赤カサ 粒多く含む)	中 良	外面手づくね、体部口縁 ハ 内面ヒトキヤエ 把手外面磨り付け	
45	30	26-1	須磨器	杯蓋	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(13.0)	—	—	—	—	—	5.2	外: N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面天目御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
46	30	—	須磨器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(10.0)	—	—	—	—	—	5.0	外: N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
47	30	—	須磨器	杯身	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(10.7)	—	—	—	—	—	4.9	外: N6/0灰 内: 7.5YR5/2灰期 断: 10YR7/2によい青期	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
48	30	26-2	須磨器	杯身	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(11.6)	—	—	—	—	—	4.8	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: N6/0灰	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
49	30	—	須磨器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(11.6)	—	—	—	—	—	(4.9)	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: N6/0灰	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
50	30	26-3	須磨器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	12.9	—	—	—	—	—	3.9	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: N7/0灰白	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
51	30	—	須磨器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	12.2	—	—	—	—	—	4.0	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: N7/0灰白	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
52	30	—	須磨器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	12.0	—	—	—	—	—	4.1	外: N7/0灰白 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密 (細い石粒 含む)	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御転ナデ
53	30	—	須磨器	高杯蓋	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	(8.9)	—	—	—	—	(2.4)	外: N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面天目御焼ヘラケズ リ内面御転ナデ
54	30	—	須磨器	有蓋 高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(10.2)	—	—	—	—	—	(5.0)	外: N7/0灰白 内: N7/0灰白 断: N5/0灰	密 (1mm粒石 含む)	良	外面杯蓋下平御焼ヘラケ ズリ内面御転ナデ
55	30	—	須磨器	有蓋 高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(10.2)	—	(9.2)	—	—	—	9.3	外: SP4/0黄青灰 内: SP4/1黄青灰 断: SP4/1暗黄灰	密 (1mm以下 粒石、赤色 含む)	良	外面杯蓋下平御焼ヘラケ ズリ内面御転ナデ
56	30	—	須磨器	有蓋 高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	10.9	—	(8.8)	—	—	—	9.2	外: SPB5/1青灰 内: N6/0灰 断: N7/0灰白	密 (細小白色 粒含む)	良	外面杯蓋下平御焼ヘラケ ズリ、体部御焼転ナデ 内面御転ナデ、量石粗
57	30	—	須磨器	有蓋 高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	11.1	—	9.0	—	—	—	9.2	外: SPB5/1青灰 内: N6/0灰 断: N7/0灰白	密	良	外面杯蓋下平御焼ヘラケ ズリ、体部御焼転ナデ 内面御転ナデ、量石粗
58	30	26-4	須磨器	無蓋 高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(16.0)	—	(9.9)	—	—	—	12.1	外: N7/0灰白、N4/0灰 内: N7/0灰白 断: 5B6/1赤灰	密 (1mm以下 白色粒含む)	良	外面杯蓋底状文、杯蓋下平 内面御転ナデ
59	30	26-5	須磨器	高杯	2区	9F-1d	第3面	32-33調 上期	—	—	(15.3)	—	—	—	(16.1)	外: N7/0灰白～N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密 (1mm以下 粒石、赤色 粒含む)	良	外面底面御焼転ナデ
60	30	—	須磨器	高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	—	—	8.7	—	—	—	(5.9)	外: SP4/0黄青灰 内: SP4/1黄青灰 断: SP4/1暗黄灰	密 (1mm以下 粒石、赤色 含む)	良	内面御焼転ナデ
61	30	—	須磨器	高杯	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	—	(11.8)	—	—	—	(8.6)	外: N6/0灰 内: N6/0灰 断: 10YR7/2によい青期	密 (1～3mm 粒石含む)	良	内面御焼転ナデ 一部生焼けで赤い
62	30	—	須磨器	高杯	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	—	10.6	—	—	—	(3.6)	外: N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N6/0灰	密 (1mm粒石 含む)	良	内面御焼転ナデ
63	30	—	須磨器	高杯	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	—	11.5	—	—	—	(6.2)	外: N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面御焼転ナデ、同転ナデ 内面御焼転ナデ
64	30	—	須磨器	鉢	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	(20.2)	12.6	—	—	—	(11.9)	外: N5/0灰 内: N7/0灰白 断: N7/0灰白	密	良	外面底面御焼ヘラケズリ 内面御焼転ナデ、杯蓋 粘土積直し
65	30	—	須磨器	蓋	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(21.2)	—	—	—	—	—	(5.2)	外: N7/0灰白 内: N7/0灰白 断: N8/0灰白	密 (1mm以下 粒石、赤色 粒含む)	良	内面自然御 内面御転ナデ
66	30	—	須磨器	短脚 皿	2区	9F-1d	第3面	32-33調 上期	(5.7)	—	—	—	—	—	(6.6)	外: 2.5Y7/1灰白 内: 2.5Y7/1灰白 断: 2.5Y7/1灰白	密 (1～3mm 粒石含む)	中 良	内面御焼転ナデ
67	30	26-6	須磨器	皿	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(28.0)	—	(14.4)	—	—	—	(26.9)	外: N7/0灰白～N6/0灰 内: N7/0灰白 断: N6/0灰	密 (1mm以下 粒石、赤色 粒含む)	良	外面口縁御焼転ナデ、体部 同転ナデカミ後タナナデ 内面ヒトキヤエ、少ケケ 内面上下御焼転ナデ、下平ヒ トキヤエ、ヘラケズリ 底面御焼転ナデ、内面 4層有すると推測
68	31	—	土御器	高杯	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	—	—	(10.0)	—	—	—	(6.2)	外: 5YR6/6青 内: 5YR6/6青 断: 5YR6/6青	密	中 良	外面御転ナデ 内面ヒトキヤエ

観音番号	観音番号	種類	形	調査区	地区	順位	遺構名	遺構 (cm)				色調	船上	構成	備考	
								口径	最大径	径差	器高					
69	31	—	土師器	甕	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(15.9)	—	—	(3.1)	外:2.5Y4/1黄灰 内:10YR7/3にぶい黄橙 断:5YR6/6橙	中~密 (5mm以下 多量含む)	良	内外器ナデ
70	31	—	土師器	甕	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	19.9	—	—	(8.5)	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙 断:10YR7/3にぶい黄橙	密	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
71	31	—	土師器	長頸 甕	2区	9G-1e	第3面	32-33調 上期	(21.0)	—	—	(38.9)	外:7.5YR1/1黒 内:7.5YR5/4にぶい黄 断:7.5YR6/6橙	中~密 (5mm以下 多量含む)	中~良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
72	31	26-7	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	(30.7)	—	—	(26.4)	外:7.5YR7/4にぶい黄 内:10YR7/2にぶい黄橙 断:10YR7/2にぶい黄橙	密	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 瓶口付 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
73	31	—	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	32-33調 上期	—	編 (9.9)	—	LI	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR7/3にぶい黄橙 断:10YR7/3にぶい黄橙	密	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
74	32	27-1	須恵器	杯蓋	2区	9G-1d	第3面	32調	(12.3)	—	—	—	外:N6/0灰 内:N6/0灰 断:N6/0灰	密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
75	32	27-2	須恵器	杯蓋	2区	9G-1e	第3面	32調	12.5	—	—	—	外:SP8/6黄灰 内:SP8/5黄灰 断:SP8/6黄灰	密 (1~4mm 以下長尺、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
76	32	27-3	須恵器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32調	10.4	—	—	—	外:N8/0灰白 内:N7/0灰白 断:N7/0灰白	密 (1~5mm 以下長尺、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
77	32	27-4	須恵器	杯身	2区	9G-1e	第3面	32調	9.9	—	—	—	外:N7/0灰白 内:N7/0灰白 断:N7/0灰白	密 (1~4mm 以下長尺、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
78	32	—	須恵器	杯身	2区	9G-1d	第3面	32調	(13.2)	—	—	—	外:7.5YR1/1黒白 内:10YR8/2黄白 断:7.5YR8/3黄橙	中~密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	中~良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
79	32	27-5	須恵器	高杯蓋	2区	9G-1d	第3面	32調	(12.3)	—	—	—	外:SP8/6黄灰 内:SP8/5黄灰 断:7.5Y6/2黄赤	密 (1mm以下 長尺、黄橙 含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
80	32	27-6	須恵器	有蓋 杯身	2区	9G-1e	第3面	32調	11.0	—	(8.2)	—	外:5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白 断:5Y7/1灰白	密 (1~4mm 以下長尺、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
81	32	27-7	須恵器	蓋	2区	9G-1d	第3面	32調	(12.3)	—	—	—	外:N3/0灰 内:N3/0灰 断:10R4/2黄赤	密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
82	32	28-1	土師器	甕	2区	9G-1e	第3面	32調	11.2	12.9	—	—	外:5YR5/4にぶい赤黄 内:5YR5/4にぶい赤黄 断:7.5YR8/4にぶい赤黄	密 (3mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
83	32	28-2	土師器	甕	2区	9G-1d	第3面	32調	(19.6)	(25.1)	—	—	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:7.5YR6/4にぶい黄橙 断:7.5YR6/6橙	密 (1~3mm 以下長尺、右灰、黄 橙含む)	中~良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
84	32	—	土師器	甕	2区	9G-1d	第3面	32調	(14.2)	(8.0)	—	—	外:7.5YR6/4にぶい黄 内:7.5YR6/4にぶい黄 断:5YR6/6橙	密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
85	32	—	土師器	甕	2区	9G-1d	第3面	32調	(19.0)	—	—	—	外:10YR5/3黄灰 内:10YR7/3にぶい黄橙 断:2.5Y4/1黄灰	中~密 (2mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	不良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
86	32	—	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	32調	(30.0)	—	—	—	外:10YR6/4にぶい黄橙 内:10YR6/4にぶい黄橙 断:10YR6/2黄灰	密 (1~5mm 以下長尺、右灰、黄 橙含む)	中~良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
87	32	27-8	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	32調	(26.8)	—	—	—	外:10YR6/6明黄 内:10YR6/6明黄 断:10YR6/6明黄	密 (1~4mm 以下長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
88	32	28-5	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	32調	(27.0)	—	16.0	—	外:7.5YR6/3にぶい黄 内:7.5YR6/3にぶい黄 断:10YR7/3にぶい黄橙	中~密 (3mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産
89	33	—	土師器	長頸 甕	2区	9G-1d	第3面	32調	(20.0)	(23.6)	—	—	外:7.5YR6/4にぶい黄 内:7.5YR6/4にぶい黄 断:7.5YR7/4にぶい黄	中~密 (3mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
90	33	28-4	土師器	長頸 甕	2区	9G-1e	第3面	32調	(17.7)	25.0	—	—	外:7.5YR6/4にぶい黄 内:7.5YR6/4にぶい黄 断:7.5YR7/2明黄	密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
91	33	—	土師器	長頸 甕	2区	9G-1d	第3面	32調	20.4	25.4	—	—	外:5YR5/6赤黄 内:5YR5/6赤黄 断:5YR5/6赤黄	密 (1mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面
92	33	28-3	土師器	長頸 甕	2区	9G-1e	第3面	32調	19.0	24.2	—	—	外:5YR4/6赤黄 内:5YR4/6赤黄 断:5YR4/6赤黄	密 (3mm以下 長尺、右灰、黄 橙含む)	良	外面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 内面口縁部コナデ、体部 タハハ、底面 生駒山西麓産

器具番号	器具種別	写真(図)番号	種別	器形	調査区	地区別	階位名	建群名	寸法(cm)				色調	筋土	構成	備考	
									口径	最大径	底径	器高					
93	34	29-1	須臾器	杯蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	11.6	-	-	-	4.4	外:N7:0R白 内:SP6:1黄灰 断:N5:0R	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
94	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	12.4	-	-	-	4.1	外:N7:0R白 内:SP7:1黄灰 断:SPB5:1黄灰 断:SPB5:1黄灰 断:N7:0R白	新(1~2mm)長石、黒色粒を含む	良	外周天井部回転ヘラケズリ、 内面回転ナデ
95	34	29-2	須臾器	杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	12.3	-	-	-	4.4	外:SPB5:1黄灰 内:N7:0R白 断:N7:0R白	(1~3mm)長石、黒色粒を含む	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
96	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	12.5	-	-	-	4.7	外:SPB7:1黄灰 内:N6:0R 断:N5:0R	密 (1~4mm 砂粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ、 内面回転ナデ
97	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	12.3	-	-	-	4.8	外:SPB7:1黄灰 内:N6:0R 断:N6:0R	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
98	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	12.4	-	-	-	5.0	外:N5:0R 内:SP6:1黄灰 断:SP6:1黄灰	密 (1~4mm 砂粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ、天井部わずかな同心1文当て具類
99	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	12.5	-	-	-	4.2	外:N6:0R 内:N6:0R 断:SP7:1黄灰	密(1mm未満)長石、黒色粒を含む	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
100	34	-	須臾器	杯蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	16(0)	-	-	-	(4.6)	外:N7:0R白 内:SV7:1灰 断:SV7:1灰	密	中々不良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
101	34	30-1	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	9.8	-	-	-	5.1	外:N4:0R~N8:0R白 内:N6:0R 断:SV6:1灰	中々粗 (1~4mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ、 粘土片含む 内面回転ナデ
102	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	10.4	-	-	-	4.7	外:N7:0R白 内:N7:0R白 断:N7:0R白	密 (1~3mm 長石含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
103	34	30-2	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.4	-	-	-	4.6	外:SP5:1黄灰 内:SP6:1黄灰 断:SPB6:1黄灰	密 (2~4mm 長石、黒色粒を含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
104	34	29-4	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.4	-	-	-	5.4	外:N6:0R 内:N6:0R 断:N6:0R	密(1mm未満)長石含む	良	外周底部回転ヘラケズリ、 内面回転ナデ
105	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	10.4	-	-	-	5.1	外:N6:0R 内:N7:0R白 断:N6:0R	密(1mm未満)砂粒含む	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
106	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	10.6	-	-	-	4.5	外:SPB6:1黄灰 内:N5:0R 断:N5:0R	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
107	34	29-3	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.8	-	-	-	4.9	外:N6:0R 内:SP4:1黄灰 断:SPB4:1黄灰	密 (1~2mm 長石、黒色粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ、 粘土片、黒色粒 内面回転ナデ
108	34	29-5	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	10.9	-	-	-	5.0	外:N7:0R白 内:N6:0R 断:N6:0R	密(1~2mm)長石、黒色粒含む	良	外周底部回転ヘラケズリ、 粘土片 内面回転ナデ
109	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.6	-	-	-	5.9	外:N7:0R白~N5:0R 内:N6:0R~N5:0R 断:SV5:1灰	密 (1~4mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
110	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.9	-	-	-	5.1	外:N5:0R、2.5Y6/1R 内:2.5YR6/3c、土色 断:2.5YR7/4に土色 2.5Y6/1灰	密 (1~6mm 砂粒含む)	外面 自 内面 不良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ、黒色粒子による酸化生成
111	34	29-6	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	11.0	-	-	-	4.9	外:N6:0R 内:N7:0R白 断:N7:0R白	密 (1mm)長石、 長石含む	良	外周底部回転ヘラケズリ、 粘土片 内面回転ナデ
112	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	11.1	-	-	-	5.1	外:N6:0R 内:N6:0R 断:N6:0R	密 (1~4mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
113	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	11.1	-	-	-	5.4	外:2.5YR1(灰白) 内:N8:0R白 断:N8:0R白	中々粗(1~2mm)長石、黒色粒、赤茶色粒を含む	良	外周底部回転ヘラケズリ、 白粉状層 内面回転ナデ
114	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	11.5	-	-	-	5.1	外:N7:0R白 内:N7:0R白 断:N6:0R	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
115	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	11.8	-	-	-	5.4	外:2.5YR1(灰白) 内:N8:0R白 断:N8:0R白	中々粗(1~5mm)長石、黒色粒を含む	不良	外周底部回転ヘラケズリか 内面回転ナデ
116	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.5	-	-	-	(4.5)	外:N6:0R 内:N6:0R 断:N6:0R	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
117	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1d	第3面	33溝	10(0)	-	-	-	(3.5)	外:N5:0R 内:N5:0R 断:N5:0R	密	良	内外面回転ナデ
118	34	-	須臾器	杯身	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	-	13.8	-	-	(4.5)	外:N7:0R白 内:N8:0R白 断:N8:0R白	中々粗(1~5mm)長石、黒色粒含む	中々不良	外周底部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
119	34	-	須臾器	高杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	11.8	-	-	-	5.7	外:SPB4:1黄灰 内:SPB5:1黄灰 断:SPB6:1黄灰	密 (1~3mm 砂粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
120	34	30-3	須臾器	高杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	12.3	-	-	-	5.0	外:N6:0R 内:SP5:1黄灰 断:SPB6:1黄灰	密(1~2mm)長石、黒色粒含む	良	外周天井部回転ヘラケズリ、 回転カキメ 内面回転ナデ
121	34	30-4	須臾器	高杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	12.2	-	-	-	5.4	外:N6:0R 内:N6:0R 断:N6:0R	密 (1~4mm の長石含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
122	34	-	須臾器	高杯蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	12.5	-	-	-	5.6	外:N6:0R 内:SP6:1黄灰 断:N6:0R	密 (1~4mm 長石、黒色粒含む)	良	外周天井部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ

番号	種別	写真 (90%)	種別	樹形	地区	樹位	樹名	径 (cm)				色調	樹上	樹成	備考		
								口径	最大径	直径	樹高						
123	34	—	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.6	—	—	—	5.9	外:No.09 内:No.06 断:No.05	葉(1~5 mm)長,茶 褐色(含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
124	34	—	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.2	—	—	—	5.9	外:SPB6/1青灰 内:SPB6/1青灰 断:SPB6/1青灰	葉(1~1.5 mm)長,黒 色(含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
125	34	—	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.6	—	—	—	5.3	外:No.09~N3.0樹皮 内:SPB6/1青灰 断:N3.0樹皮	葉(1~2mm 樹皮含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
126	34	30-6	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.3	—	—	—	5.6	外:N5.0樹皮 内:N7.0樹皮 断:N5.0樹皮	葉(1~5mm 樹皮含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 回転カキメ 内面回転ナデ
127	34	30-7	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.2	—	—	—	5.6	外:SPB5/1青灰 内:SPB4/1樹皮 断:2.5YR4/3 にふい赤樹	葉(1~6 mm)長,黒 色(含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
128	34	30-5	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.4	—	—	—	5.8	外:N5.0樹皮 内:SPB5/1青灰 断:N5.0樹皮	葉(1mm樹皮 含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ つまみ上黒色樹皮付着
129	34	30-8	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.3	—	—	—	6.3	外:SBG5/1青灰 内:SB6/1青灰 断:—	葉(1~2 mm)樹皮 含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
130	34	—	須磨郡	高林	2区	9G-le	第3面	33溝	12.5	—	—	—	6.1	外:SBG5/1青灰 内:SBG5/1青灰 断:SBG6/1青灰	葉(1~3mm 樹皮含む)	良	外面下部回転ヘラケズリ 内面回転ナデ
131	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.7	—	8.7	—	10.1	外:N5.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(1~3 mm)樹皮少量 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
132	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.9	—	8.6	—	10.2	外:SB6/1青灰 内:SBG6/1青灰 断:7.5Y6/1灰	葉(1~2mm樹 皮含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
133	35	30-10	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.7	—	9.6	—	10.4	外:2.5Y6/1灰 内:7.5Y6/1灰 断:7.5Y6/1灰	葉(1mm以下 樹皮含む)	中,良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,同心円文当 て具現
134	35	31-1	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.8	—	8.0	—	9.9	外:N5.0樹皮 内:No.05 断:N6.0樹皮	葉(1~3 mm)樹皮少量 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,同心円文 当て具現
135	35	30-9	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.6	—	9.0	—	10.1	外:SP4/1樹皮 内:SP4/1樹皮 断:SPB4/1樹皮	葉(1mm以下 樹皮含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
136	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.8	—	8.4	—	11.0	外:N6.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(1~5 mm)樹皮少量 含む)	良	外面下部下半一部回転 ナデ,内面回転ナ デ
137	35	31-2	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.8	—	9.2	—	10.4	外:N6.0樹皮 内:2.5Y7/1灰白 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(2mm樹皮 わずかに含む)	良	外面下部下半一部回転力 太ムシ,樹皮 回転ナデ,樹皮 回転ナデ
138	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.7	—	8.8	—	10.4	外:N4.0樹皮 内:SPB4/1樹皮 断:SB5/1樹皮	葉(4mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部下半一部回転 ナデ,同心円文 当て具現
139	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.8	—	8.9	—	10.4	外:2.5YR6/2灰 内:7.5YR6/3にふい赤 断:7.5YR6/3にふい赤	葉(2mm以下 長,右英赤 含む)	不良	外面下部下半一部回転 ナデ,同心円文 当て具現
140	35	31-3	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	11.0	—	8.5	—	10.6	外:SPB6/1青灰 内:SPB6/1青灰 断:SPB6/1青灰	葉(1mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転カ キメ,内面回転 ナデ
141	35	31-4	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.4	—	8.6	—	10.4	外:SBG5/1青灰 内:SB5/1青灰 断:SB5/1青灰	葉(2mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
142	35	31-5	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.3	—	8.7	—	9.8	外:SBG5/1青灰 内:N5.0樹皮 断:N5.0樹皮	葉(1mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
143	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.5	—	8.3	—	10.5	外:N6.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(1~1 mm)樹皮少量 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
144	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.3	—	7.6	—	10.4	外:SPB5/1青灰 内:SPB5/1青灰 断:SPB4/1樹皮	葉(5mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転カ キメ,同心円文 当て具現
145	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.2	—	8.6	—	9.9	外:SPB5/1青灰 内:SPB6/1青灰 断:SPB6/1青灰	葉(10mm以下 長,右英赤 部分含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転カ キメ,樹皮回転 ナデ,内面回転 ナデ
146	35	31-6	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.1	—	8.8	—	10.7	外:N5.0樹皮 内:N5.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(2~4 mm)樹皮わず かに含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
147	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.3	—	8.7	—	10.3	外:N5.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(1~4 mm)樹皮少量 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転カ キメ,内面回転 ナデ
148	35	31-7	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.3	—	8.8	—	9.7	外:N5.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:N6.0樹皮	葉(2mm以下 長,右英赤 含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
149	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-I	第3面 (高樹)	33溝	10.0	—	8.8	—	8.8	外:N5.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:SB5/1赤樹	葉(2mm以下 長,右英赤 含む)	中,良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
150	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-II	第3面 (高樹)	33溝	10.0	—	8.2	—	9.4	外:N5.0樹皮 内:N6.0樹皮 断:SB5/1赤樹	葉(1~3 mm)樹皮少量 含む)	中,良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転ナ デ,内面回転ナ デ
151	35	—	須磨郡	有葉 高林	2区	9G-le	第3面	33溝	10.1	—	8.1	—	9.0	外:N7.0樹皮 内:SB6/1青灰 断:SP6/1樹皮	葉(2~4mm 石炭,黒 色(含む)	良	外面下部回転ヘラケ ズリ,樹皮回転カ キメ,同心円文 当て具現

設計 図号	補修 箇所	写真 の 番号	種別	形状	調査 区	地区区	順位名	選別名	法量 (cm)				色調	肌土	構成	備考		
									口径	最大径	底径	器厚						
152	35	31-8	須磨器	有蓋 高料	2区	9G-1e	第3面	33溝	10.0	-	8.2	-	9.2	外:5P8/1青灰 (2/3に 酸化塩成で褐色) 内:5R5/1青灰 断:5YR7/2黄赤灰	密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底下平回転ヘラケ ズ、回転軸ホウキメ 内面回転ナデ	
153	35	-	須磨器	有蓋 高料	2区	9G-1e	第3面	33溝	(11.2)	-	-	-	(5.7)	外:5P4/1紫赤灰 内:N6/0赤 断:N6/0赤	密 (1mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底下平回転ヘラケ ズ、 内面回転ナデ	
154	35	-	須磨器	有蓋 高料	2区	9G-1e	第3面	33溝	(10.4)	-	-	-	(6.8)	外:5P6/1紫灰 内:N6/0赤 断:N7/0白	密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底下平回転ヘラケ ズ、 内面回転ナデ、重ね 焼き肌	
155	36	33-1	須磨器	樽型 蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	-	新径 (9.2)	-	-	(8.9)	外:N3/0黄灰 内:5P6/1黄灰 断:5R4/1黄赤灰	密 (1mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部底状 文1条、両口立文3条以上、 断面の凹凸文 内面回転ナデ 側面内面未調査	
156	36	32-1	須磨器	高料 形 蓋	2区	9G-1f	第3面 (前壁)	33溝	38.0	-	27.0	-	33.9	外:N4/0赤 内:N4/0赤 断:5R4/1黄赤灰	密 (5mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部上 下平回転軸ホウキメ後取付文、 下平回転軸ホウキメ後取付文 の付合部分々々、断面の 凹凸文後取付文、上段二 角形溝3、中段二角形溝 4、下段二角形溝1から 内面同方向文で具面 回転ナデ、断面内面格子目 々々、回転ナデ	
157	36	-	須磨器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	頸部 6.5	13.5	-	-	(11.6)	外:2.5YR5/1灰 内:2.5YR5/1灰 断:2.5YR5/1灰	密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部上平 回転軸ホウキメ、中央回転ヘ ラケズ、 内面回転ナデ	
158	36	32-2	須磨器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	120.9	(40.4)	-	-	39.9	外:7.5Y7/1灰白 内:N7/0赤白 断:5YR5/1黄灰	密 (4mm以下 砂礫少量 含む)	良	外面部底側立文、体部上平 回転ナデ目々々後ホ キメ 内面格子目々々後ホ キメ 断面格子目々々後ホ キメ	
159	37	-	須磨器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	21.0	(45.6)	-	-	(15.8)	外:N6/0赤 内:N6/0赤 断:10R5/2赤赤	密 (3mm以下 砂礫少量 含む)	良	外面部底側立文、体部上 平回転軸ホウキメ 内面格子目々々後ホ キメ、 断面格子目々々後ホ キメ	
160	37	-	須磨器	蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	(43.0)	(80.2)	-	-	-	口縁 部 体部 (5.9) 断面 (5.0)	外:N4/0赤 内:7.5Y5/1灰 断:10YR5/2赤赤	密 (2mm以下 砂礫少量 含む)	良	外面部底側立文、断面側 回転ナデ、体部タタキ、断面 体部タタキ後ホキメ 内面格子目々々後ホ キメ、 断面格子目々々後ホ キメ
161	38	33-2	土師器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	13.0	18.5	-	-	19.1	外:2.5YR5/4にぶい褐 内:5YR6/6橙 断:5YR6/6橙	中々密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ 内面格子目々々後ホ キメ	
162	38	33-3	土師器	蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	12.8	(15.8)	-	-	(11.5)	外:5YR4/4にぶい赤褐 内:5YR4/4にぶい赤褐 断:5YR4/4にぶい赤褐	密 (2mm以下 の長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
163	38	-	土師器	蓋	2区	9G-1d	第3面	33溝	(13.6)	(17.0)	-	-	(13.2)	外:5YR6/6橙 内:5YR5/2黄褐 断:5YR6/6橙	密 (1mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ 内面格子目々々後ホ キメ	
164	38	-	土師器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	(16.4)	(22.4)	-	-	(14.2)	外:2.5YR6/4にぶい褐 内:2.5YR6/4にぶい褐 断:2.5YR5/4にぶい褐	密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ 内面格子目々々後ホ キメ	
165	38	-	土師器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	16.8	22.3	-	-	(16.8)	外:2.5YR5/4にぶい褐 内:2.5YR5/4にぶい褐 断:2.5YR5/4にぶい褐	密 (4mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
166	38	-	土師器	蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	(20.6)	(23.2)	-	-	(12.0)	外:2.5YR5/4にぶい褐 内:2.5YR5/4にぶい褐 断:2.5YR5/4にぶい褐	密 (5mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
167	38	-	土師器	高脚 蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	17.8	22.5	-	-	(27.9)	外:2.5YR1/7土 内:10YR7/3にぶい黄褐 断:10YR7/3にぶい黄褐	中々密 (3mm以下 砂礫多 含む)	中々良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
168	38	33-4	土師器	高脚 蓋	2区	9G-1e	第3面	33溝	20.1	26.2	-	-	36.5	外:10YR7/3にぶい黄褐 内:10YR7/3にぶい黄褐 断:10YR6/3にぶい黄褐	密 (1mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
169	38	33-5	土師器	瓶	2区	9G-1d	第3面	33溝	(24.0)	-	-	-	(13.0)	外:2.5YR5/8赤赤 内:2.5YR5/8赤赤 断:2.5YR5/8赤赤	中々密 (6mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
170	39	33-6	土師器	瓶	2区	9G-1e	第3面	33溝	28.4	-	-	-	25.5	外:2.5YR5/4にぶい褐 内:2.5YR3/1黒褐 断:10YR7/3にぶい黄褐	密 (3mm以下 長石,石英 含む)	良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	
171	39	-	土師器	瓶	2区	9G-1e	第3面	33溝	26.0	-	-	-	27.0	外:2.5YR5/4にぶい褐 内:2.5YR5/4にぶい褐 断:2.5YR5/4にぶい褐	密 (1~3mm 砂礫少量 含む)	中々良	外面部底側立文、体部 上平回転軸ホウキメ、 内面格子目々々後ホ キメ	

建番	棟号	写真 図号	種別	形状	地区別	階位	通称名	法量 (cm)				色調	肌土	構成	備考		
								口径	最大径	径長	器厚						
172	39	—	土師器	圓	2区	9G-1e	第3面	33溝	27.2	—	—	—	25.0	外: 7.5YR4/3弱 内: 7.5YR3/0弱 断面: 7.5YR3/0弱	中~中下 (5mm以下 長尺, 右系, 黒母含む)	貝	外面口縁部ココナデ, 体部ハテ, 把手貼り付け差し込みが不明 外面口縁部ハテ, 体部ハテ ツズリ
173	40	27-9	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	3.6	—	—	—	6.9	外: 2.5YR 2/6白 内: 10YR 8/4黄褐色 断面: 7.5Y6/1R	中~中下 (4mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面口縁部ユビオサエ, 肌土ユビオサエ 内面調整不明
174	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	3.8	—	—	—	6.0	外: 10YR 7/3にぶい黄褐色 内: 10YR 6/3にぶい黄褐色 断面: 10YR 6/6明黄褐色	中~中下 (1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面ナデか 内面調整不明
175	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	4.4	—	—	—	6.6	外: 5YR 7/6弱 内: 7.5YR 8/4黄褐色 断面: 5YR 7/8弱	中~中下 (2mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	内外面ユビオサエ
176	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	4.4	—	—	—	6.6	外: 7.5YR 8/4黄褐色 内: 7.5YR 8/4黄褐色 断面: 7.5YR 8/4黄褐色	中~中下 (5mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面ナデか 内面口縁部ナデ, 体部ユビ オサエ
177	40	27-9	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	3.8	—	—	—	6.8	外: 7.5YR 8/4黄褐色 内: 7.5YR 8/4黄褐色 断面: 7.5YR 8/4黄褐色	中~中下 (3mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面ユビオサエ
178	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	3.4	—	—	—	4.7	外: 10YR 6/2黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR 7/3にぶい黄褐色	中~中下 (2mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ+ハテカナデ 内面調整不明
179	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	4.3	—	—	—	3.3	外: 10YR 7/4にぶい黄褐色 内: 7.5YR 6/4にぶい黄褐色 断面: 5YR 6/6弱	中~中下 (1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面調整不明
180	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	3.9	—	—	—	5.3	外: 10YR 7/3にぶい黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR 6/4にぶい黄褐色	中~中下 (1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面体部タタキ 内面ユビオサエ, ハテ
181	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	4.2	—	—	—	5.4	外: 7.5YR 7/6弱 内: 7.5YR 7/6弱 断面: 7.5YR 6/6弱	赤(1.3mm以下 砂粒, 赤色鉄, 黒母含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面ユビオサエ
182	40	27-9	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	5.6	—	3.8	—	7.2	外: 7.5YR 8/4黄褐色 内: 7.5YR 8/4黄褐色 断面: 7.5YR 8/4黄褐色	中~中下 (3mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面ナデか, 肌土ユビオサエ 内面ナデ, 肌土ユビオサエ
183	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	4.5	—	—	—	6.4	外: 10YR 6/2黄褐色 内: 10YR 6/3にぶい黄褐色 断面: N3.0弱	赤(1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面上半タタキ, 下半ユビ オサエ, 復行 内面ナデ, 肌土ハテ
184	40	27-9	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	4.6	—	—	—	6.2	外: 7.5YR 8/4黄褐色 内: 7.5YR 8/4黄褐色 断面: 7.5YR 8/4黄褐色	中~中下 (4mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面上半タタキ, 下半ユビ オサエ 内面ユビオサエ
185	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	5.0	—	—	—	5.2	外: 7.5YR 6/4にぶい黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: 2.5Y7/1R白	中~中下 (4mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面ユビオサエ, ナデ
186	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	—	4.9	—	—	6.0	外: 10YR 7/3にぶい黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR 7/3にぶい黄褐色	中~中下 (5mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	内外面ユビオサエ
187	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	—	4.8	—	—	3.3	外: 2.5Y7/2黄褐色 内: 2.5Y7/2黄褐色 断面: 2.5Y7/2R黄	中~中下 (1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	内外面ユビオサエか
188	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	—	3.6	—	—	1.0	外: N6.0灰 内: N6.0灰 断面: N6.0灰	赤(1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面ナデ 内面工具痕
189	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	—	5.6	—	—	6.4	外: 10YR 7/3にぶい黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: N5.0灰	中~中下 (3mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ後ナデ, 肌土ユビ オサエ 内面調整不明
190	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	—	5.2	—	—	6.2	外: 5YR 6/6弱 内: 2.5Y5/1黄褐色 断面: 2.5Y5/1黄褐色	中~中下 (1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面調整不明
191	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	—	4.8	—	—	4.9	外: 10YR 7/3にぶい黄褐色 内: 10YR 7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR 6/1黄褐色	中~中下 (2mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面ユビオサエ後タタキ 内面調整不明
192	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32-33溝 上期	—	—	3.0	—	4.9	外: 10YR 4/1弱 内: 7.5YR 7/6弱 断面: 10YR 3/2黄褐色	中~中下 (3mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ, 肌土ナデ 内面ナデ後ナデ
193	40	—	土師器	割出 土器	2区	9G-1d	第3面	32溝	—	5.0	—	—	4.6	外: 10YR 7/4にぶい黄褐色 内: 10YR 7/2にぶい黄褐色 断面: 7.5Y5/1R	中~中下 (3mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面タタキ 内面調整不明
194	40	—	埴輪	円筒 輪	2区	9G-1e	第3面	33溝	—	輪 (7.3)	—	0.8	4.2	外: 7.5YR 7/6弱 内: 7.5YR 7/6弱 断面: 7.5YR 7/6弱	赤	貝	外面ハテ, 変形貼り付け 内面ツズリ
195	41	—	瓦器	椀	2区	9G-2b	第3面	24溝 5凸	32.0	—	—	—	2.7	外: N3.0弱 内: N3.0弱 断面: N8.0灰白	赤	貝	外面口縁部ココナデ, 体部ユビオサエ 内面陶文
196	41	—	瓦器	椀	2区	9F-1a-2a	第3面	24溝 5凸	—	輪 (4.2)	—	—	2.5	外: N2.0弱 内: N2.0弱 断面: N6.0灰白	赤	貝	外面口縁部ココナデ 内面陶文
197	41	—	瓦	平瓦	2区	9F-1a-2a	第3面	24溝 5凸	長 60.0	輪 (7.5)	—	2.5	—	外: 5YR 6/4にぶい黄褐色 (いこし, 焼不目のため) 内: 2.5YR 6/4にぶい黄褐色 断面: 10YR 6/1黄褐色	赤 (2mm以下長尺, 右系, 黒母含む)	中~中 貝	両面目録 右面輪刺3痕
198	41	34-1	須恵器	杯身	2区	9G-2e	第3面	31溝	13.4	—	—	—	4.5	外: N6.0弱 内: N6.0弱 断面: N6.0弱	赤(1mm以下砂粒, 赤色鉄, 黒母 含む)	中~中 貝	外面底面陶文+ハラケズリ 内面口縁部ナデ
199	41	34-2	須恵器	杯身	2区	9G-1e	第3面	31溝	13.2	—	—	—	2.8	外: N8.0弱 内: N8.0弱 断面: N8.0弱	赤	中~中 軟質	外面底面陶文+ハラケズリ 内面口縁部ナデ
200	41	34-2	須恵器	高杯	2区	9G-1d-1e	第3面	31溝	—	—	19.6	—	5.2	外: 2.5YR 5/4にぶい黄褐色 内: 2.5YR 5/4にぶい黄褐色 断面: 2.5YR 5/4にぶい黄褐色	赤	中~中 軟質	内外面陶文ナデ

建群番号	棟別番号	写真図の番号	種別	部材	調査区	地区区分	階位名	建群名	寸法 (cm)				色調	肌土	焼成	備考	
									口径	最大径	経径	部材					部材
201	41	34-2	土師器	鉢	2区	9G-1e	第3面	観立柱 群1 群柱 群1 柱穴	(13.4)	-	-	-	(3.8)	外:5YR6/6 内:7.5YR5/2灰層 断:7.5YR5/2灰層	密	良	外面口縁部コナダ、体部ハナク 内面口縁部コナダ、体部ヘラタシ
202	41	34-2	土師器	甕	2区	9G-1e	第3面	観立柱 群1 群柱 群1 柱穴	-	6.0	-	2.0	(22.3)	外:7.5YR4/2 内:10YR5/4にぶい黄層 断:2.5Y5/2黄層	密(3mm以下 金属質 含む) 石灰 含む	良	壁口(開口部)の脚部コナダ、軌状の上に貼り付け オオエ、土質 高直ヘラツク工具
203	41	-	須恵器	杯身	2区	9G-1e	第3面	36 ピット	(10.0)	-	-	-	(3.6)	外:5P4/1暗赤灰 内:5S0/5 断:5S0/6	密	良	内外面顔コナダ 底面焼キ
204	41	34-6	須恵器	甕	2区	9F-11	第3面	26上坑	(21.8)	42.3	-	-	(47.0)	外:N4/0灰 内:N6/0灰 断:7.5Y6/1黄層	中中密 (1~2mm 粒少 含む)	中中良	外面口縁部顔コナダ、体部 焼キ(多量)後焼キキヌ 内面口縁部コナダ、体部 コナダ
205	42	34-4	土師器	甕	2区	9G-2e	第3面	43上坑	13.6	-	-	-	(7.1)	外:N2/0黄 内:2.5Y7/2灰黄層 断:2.5Y7/2灰黄層	中中密 (1~2mm 石灰、赤 色砂、他色粒 含む)	良	外面口縁部一筋部コナダ コナダ、体部コハナク部コナ ダ、体部コハナク部コナ ダ、体部コハナク部コナ ダ、体部コハナク部コナ ダ
206	42	-	土師器	甕	2区	9G-2e	第3面	43上坑	-	(21.8)	-	-	(15.7)	外:N2/0黄 内:2.5Y7/2灰黄層 断:2.5Y7/2灰黄層	中中密 (1mm以下 石灰、赤色砂 含む)	良	外面口縁部コナダ、体部 コハナク部コナダ、体部 コハナク部コナダ、体部 コハナク部コナダ
207	42	-	土師器	甕	2区	9G-2e	第3面	43上坑	(15.2)	(22.0)	-	-	(23.4)	外:N2/0黄 内:10YR4/1黄層 断:10YR6/2にぶい黄層	中中密 (1~2mm 石灰、赤石 含む)	良	外面口縁部一筋部コナダ コナダ、体部コハナク部 コナダ、体部コハナク部 コナダ、体部コハナク部 コナダ
208	42	34-5	土師器	甕	2区	9G-2e	第3面	43上坑	13.8	16.9	-	-	16.1	外:10YR8/3黄層 内:5S1/1黄層 断:10YR7/2にぶい黄層	中中密 (1~2mm 石灰、赤石 含む)	良	外面口縁部一筋部コナダ コナダ、体部コハナク部 コナダ、体部コハナク部 コナダ、体部コハナク部 コナダ
209	42	34-3	土師器	小形 杯身	2区	9G-2e	第3面	43上坑	11.6	-	-	-	(4.0)	外:10YR6/3にぶい黄層 内:5YR6/3にぶい黄層 断:10YR6/3にぶい黄層	密	良	外面ヒヨオサ後ヘラタシ 内面ヘラミガキ
210	44	-	須恵器	杯身	2区	9G-2e	3b層 (灰黄層)	-	(10.8)	-	-	-	4.9	外:5YR6/2黄層 内:5YR6/2黄層 断:5YR6/4にぶい黄層	密 (1~1mm 粒少 含む)	良	外面杯部下平部コナダ コナダ、内面杯部下平部 コナダ
211	44	-	須恵器	有蓋 高杯	2区	9G-2e	3b層 (灰黄層)	-	(11.2)	-	(8.8)	-	9.4	外:5S1/1黄層 内:2.5YR5/3 にぶい黄層	密 (1~1mm 粒少 含む)	良	外面杯部下平部コナダ コナダ、内面杯部下平部 コナダ
212	44	-	須恵器	瓶	2区	9G-1d	3b層 (灰黄層)	瓶部 6.2	10.0	-	-	-	(7.9)	外:5S1/0灰 内:N6/0灰 断:10YR5/2赤	密	良	外面口縁部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
213	44	-	須恵器	蓋形 高杯	2区	9G-1e	3b層 (灰黄層)	-	(29.4)	-	-	-	(9.9)	外:5YR5/1黄層 内:2.5YR5/2黄層 断:5YR6/2黄層	密	不良	外面口縁部顔コナダ、杯部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ
214	44	-	弥生土器	甕	2区	9G-2b	3b層	-	(14.0)	-	-	-	(6.5)	外:2.5Y6/2灰黄層 内:2.5Y4/1黄層 断:2.5Y4/1黄層	密(3mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面ヘラミガキ、体部コ ナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
215	44	-	弥生土器	甕	2区	9G-1a-2a	3b層	-	(12.0)	-	-	-	(4.6)	外:10YR5/3にぶい黄層 内:10YR5/3にぶい黄層 断:10YR2/1	密(3mm以下 石灰、赤石 含む)	良	内外面ヘラミガキ
216	44	-	弥生土器	甕	2区	9F-1b-2h	3b層	-	(10.8)	-	-	-	(4.6)	外:10YR7/3にぶい黄層 内:2.5Y4/1黄層 断:2.5Y4/1黄層	密	良	外面口縁部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
217	44	35-4	弥生土器	甕	2区	9G-21-2c	3b層	瓶部 10.2	26.8	2.9	-	-	(21.5)	外:5YR6/6黄 内:10YR2/1黄 断:10YR6/1黄層	中中密 (5mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面瓶部下平部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
218	44	35-3	弥生土器	甕	2区	9F-2h	3b層	瓶部 8.3	21.2	5.0	-	-	(22.0)	外:7.5YR7/4にぶい黄層 内:7.5YR6/4にぶい黄層 断:10YR5/1黄層	密(5mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面瓶部下平部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
219	44	-	弥生土器	甕	2区	9G-2e	3b層	瓶部 10.4	(21.8)	-	-	-	(7.7)	外:10YR4/3にぶい黄層 内:10YR4/3にぶい黄層 断:10YR4/1黄層	密(2mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ
220	44	35-1	土師器	二重 口縁部	2区	9G-1e	3b層	-	11.3	14.5	2.8	-	15.8	外:10YR5/3にぶい黄層 内:10YR5/3にぶい黄層 断:10YR6/1黄層	中中密 (1mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面口縁部ヘラミガキ、瓶 部コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ、 体部コナダ、体部コナダ
221	44	-	土師器	甕	2区	9G-2c	3b層	-	(14.6)	-	-	-	(4.0)	外:10YR6/3にぶい黄層 内:10YR6/3にぶい黄層 断:10YR4/1黄層	密(5mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面口縁部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
222	44	-	土師器	甕	2区	9F-2b	3b層	-	(12.8)	-	-	-	(4.9)	外:10YR5/2灰黄層 内:10YR5/2灰黄層 断:10YR5/2灰黄層	密(3mm以下 石灰、赤石 含む)	良	外面口縁部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ、体部 コナダ、体部コナダ
223	44	-	土師器	甕	2区	9G-2d	3b層	-	(15.3)	-	-	-	(4.1)	外:7.5YR7/4にぶい黄層 内:7.5YR7/4にぶい黄層 断:7.5Y4/1灰	中中密(1~ 3mm粒少 含む)	中中良	内外面顔不明
224	44	-	土師器	甕	2区	9G-2d	3b層	-	(7.9)	-	-	-	(3.4)	外:2.5Y7/2灰黄層 内:10YR7/2灰黄層 断:7.5Y6/6黄	中中密 (1mm以下 石灰、赤石 含む)	中中良	外面顔不明 内面コナダ
225	44	-	土師器	甕	2区	9F-1b-2h	3b層	-	(15.4)	-	-	-	(2.3)	外:7.5YR4/2黄層 内:2.5YR5/3にぶい黄層 断:7.5YR5/3にぶい黄層	密(7mm以下 石灰、赤石 含む)	良	内外面コナダ 外面顔不明

建群番号	棟別	写真(階番号)	種別	部材	調査区	地区別	階位名	建群名	寸法(cm)				色調	施工	構成	備考	
									口径	最大径	径差	部厚					
226	44	-	土師部	糞	2区	9G-2c	3b層 (内側部)	-	(13.0)	-	-	(10.9)	外:5YR4/6赤黒 内:7.5YR5/2灰緑 断:10YR4/1黒灰	中心部 (2mm以下 長径,合表含 含む)	良	外面口縁部コナテ,体部 ハテ,横目 内面口縁部ハテ,体部 ヘラミギキ	
227	44	-	土師部	糞	2区	9F-2f	3b層	-	(11.2)	(12.4)	-	(7.9)	外:5YR4/2黄赤 内:7.5YR5/4,2c黄 断:10YR4/1黒灰	密 (2mm以下 長径,合表含 含む)	良	外面口縁部コナテ,体部 ハテ,横目 内面口縁部ハテ,体部 ヘラミギキ	
228	44	-	弥生土	高杯 or 高脚	2区	9F-2f	3b層 (内側部)	-	-	-	13.4	(6.7)	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5Y6/4黄 断:2.5Y6/6黄	密 (1~3 mmの粒多く 含む)	良	外面ハテ 内面ハ 内径差1.5	
229	44	35-2	土師部	高杯	2区	9G-2e	3b層	-	-	(15.4)	-	(10.4)	外:2.5YR7/4c,2c黄 内:2.5YR6/6黄 断:2.5YR6/6黄	密	良	外面口縁部取付,ヘラミギキ 内面口縁部コナテ,取部 ユビオ 内径差1.4	
230	44	-	埴輪	円筒 埴輪	2区	9G-1e	3b層	-	-	縦 (6.0)	-	1.3	(6.0)	外:2.5Y7/3黄 内:2.5YR6/6黄 断:2.5YR6/6黄	密	良	外面ハテ,実物は低い右側 内面部分のハテ後ナテか 断は横長の埴輪片か
251	56	-	陶器 (瀬戸)	土目 茶碗	3区	9H-2f	1a~2 a層 (内側部)	-	(12.5)	-	-	(4.1)	輪:5YR5/4,2c黄赤 5YR2/1黒 胴部:5YR6/1c,2c黄 断:10YR4/2黄赤	密 (1mm以下 長径)少量含 含む)	良	内外面施釉	
252	56	-	磁器 (青磁)	碗	3区	9H-1f	1a~2 a層 (内側部)	-	-	(4.6)	-	(4.9)	輪:5YR5/1灰白 断:N8/O灰白	密	良	内外面施釉 腹に露出	
253	56	-	磁器 (白磁)	碗	3区	9H-1c	1a層か (内側部)	-	-	(9.0)	-	(5.0)	輪:N8/O灰白 断:N8/O灰白	密	良	内面無施釉,露出ナテ 露出露出	
254	56	-	磁器 (白磁)	碗	3区	9H-1c	1a層か	-	-	(4.6)	-	(2.5)	輪:5YR5/1灰白 露出:5YR1/灰白 断:N8/O灰白	露出	良	外面体部露出,ヘラミギキ, 露出,露出露出, 露出露出	
255	56	-	磁器 (白磁)	碗	3区	9H-1b	1a層か	-	(12.8)	-	-	(3.2)	輪:2.5G7/8灰白 断:N8/O灰白	露出	良	全面施釉,口縁部に露出 露出	
256	56	-	土師部	埴輪 高脚	3区	9H-2a	横溝	-	(8.0)	-	-	1.8	外:2.5YR7/4c,2c黄 内:2.5YR6/6黄 断:7.5YR7/4c,2c黄	密 (2mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面天部ナテ,口縁部 コナテ 内面コナテ,口縁部 コナテ	
257	56	-	土師部	杯	3区	9G-2f	1a層 (内側部)	-	(14.1)	-	-	(4.7)	外:10YR5/2黄赤 内:10YR4/3黄赤 断:10YR4/3黄赤	密 (石,瓦,貝, チャート等 含む)	良	外面口縁部コナテ,体部 ハテ後ナテ, チャート含む	
258	56	-	土師部	杯	3区	9H-2b	西側溝	-	(14.0)	-	-	(4.5)	外:7.5YR7/4c,2c黄 内:10YR4/3黄赤 断:7.5YR7/4c,2c黄	密 (1mm以下 長径,少量 色粒含む)	良	内外面調整不明	
259	56	-	磁器 (白磁)	碗	3区	9H-1e	2a層 (内側部)	-	(15.3)	-	-	(3.8)	輪:5YR7/1灰白 露出:5YR1/灰白 断:5YR1/灰白	露出	良	外面体部露出,ヘラミギキ, 内面輪の下にハテ	
260	56	-	陶器 (信濃)	碗	3区	9H-1e	2a層	-	-	(4.4)	-	(2.0)	輪:5Y3/3灰オリーブ 露出:5YR7/3c,2c黄 断:N7/O灰白	密 (1mm以下 長径)含む	良	外面口縁部ナテ 露出し露出	
261	56	-	陶器 (瀬戸)	土目 鉢	3区	9H-2c	2a層	-	(25.0)	(17.2)	-	(6.3)	外:N7/O灰白 内:2.5Y5/1黒灰 断:N7/O灰白	密 (2mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面体部露出ナテ,ナテ, ユビオオテ,横溝	
262	56	40-1	陶器 (瀬戸)	鉢	3区	9H-1f	2a層	-	(12.3)	-	-	(4.6)	外:10YR5/1黒灰 N5/O 内:N5/O 断:10R6/2赤	密 (1mm以下 長径)含む	良	内外面露出ナテ	
263	56	40-1	瓦葺 土師	埴輪 (土師)	3区	9H-1c-2c	2a層 (内側部)	-	(26.6)	-	-	(5.8)	外:2.5Y8/1灰白 内:2.5YR1/灰白	密 (1mm以下 長径)含む	良	外面口縁部コナテ 内面ハテ	
264	56	-	土師部	皿	3区	9H-1f	第2面	Z15.1坑	(8.2)	-	-	(1.3)	外:10YR7/2c,2c黄 内:10YR7/3c,2c黄 断:10YR7/2c,2c黄	密	良	外面口縁部コナテ,底部 ナテ,ユビオオテ 内面口縁部コナテ,底部 ナテ	
265	56	40-1	瓦葺	皿	3区	9H-1b	2-2a層	-	(9.6)	-	-	1.4	外:N4/O赤, N8/O灰白 内:N3/O灰白	密 (1mm以下 長径,黒色 粒含む)	良	外面口縁部コナテ,底部 ナテ 内面コナテ	
266	56	-	瓦葺 土師	盤	3区	9H-1f	2a層	-	(48.9)	-	-	(5.8)	外:N3/O暗灰 内:N3/O暗灰 断:5YR1/灰白	密 (1mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面口縁部コナテ,体部 ナテ後ヘラミギキ 内面コナテ後ナテ後 ヘラミギキ	
267	56	-	瓦葺	椀	3区	9H-2c	2-2a層	-	-	(4.4)	-	(2.3)	外:2.5Y7/3黄 内:N4/O 断:2.5YR1/灰白	密 (1mm以下 長径,黒色 粒含む)	中心部 不良	外面体部ナテ,高台コナテ 内面ヘラミギキ	
268	56	-	黒色 土師	椀	3区	9H-2e	2a層	-	(14.5)	-	-	(3.8)	外:N3/O暗灰 内:N3/O暗灰 断:N8/O灰白	密 (微小石 含む)	中心部 不良	内面ヘラミギキ	
269	56	40-1	瓦葺 土師	鉢	3区	9H-2b	2-2a層	-	(22.2)	-	-	(6.9)	外:N4/O赤 内:2.5Y4/1黄赤 断:2.5Y7/2灰黄	密 (1mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面口縁部~露出コナテ, 体部ヘラミギキ,横目 内面口縁部コナテ,体部 ナテハテ	
270	56	40-1	陶器 (瀬戸)	糞	3区	9H-1b	2-2a層	-	(33.9)	-	-	(7.9)	外:10YR6/1黒灰 内:N6/O 断:2.5YR1/灰白~N6/O灰	密 (2mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面口縁部ナテ 内面ナテ	
271	56	-	磁器	碗	3区	9H-2f	2-2a層	-	(12.1)	-	-	(2.9)	輪:5YR1/灰白 断:N8/O灰白	露出	良	外面一全面施釉,露出文 内面口縁部露出と赤玉文	
272	56	-	土師部	高杯	3区	9H-2e	2a層	-	(24.4)	-	-	(5.8)	外:7.5YR7/4c,2c黄 内:10YR7/4c,2c黄 断:10YR7/3c,2c黄	密 (2mm以下 長径,露出粒 含む)	良	外面体部ハテ後ヘラミギキ 内面コナテ後ヘラミギキ 内外面露出	
273	56	-	磁器 (青磁)	碗	3区	9H-1e	2-2a層	-	長 (6.0)	幅 (4.2)	-	(0.4)	輪:5Y6/2灰オリーブ 断:N8/O灰白	露出	良	外面露出でカキ文 内面露出で曲線~露出文 露出露出	
274	56	-	陶器	皿	3区	9H-1a-2e	2a層	-	-	-	(4.0)	(1.6)	輪:2.5YR6/4c,2c黄 露出:10YR7/3c,2c黄 断:10YR7/3c,2c黄	中心部 (1mm以下 長径)含む	良	外部ヘラミギキ露出輪,横 目出し露出 内面露出,露出露出	

建号	棟号	写真 の 番号	種類	形状	調査 区	地区区分	階位名	階名	造形 (cm)				色調	船上	構成	備考		
									口径	最大径	径差	器厚					器高	
275	56	—	陶器	鉢	3区	9H-1e-2a	2a層	—	—	—	[8.6]	—	(3.4)	外:10YR6/2灰黄緑 内:7.5YR5/1褐灰 断:7.5YR7/3にぶい黄緑	密	良	外面調整ヘラケズリ 内面調整ナデ	
276	56	40-1	陶器 (磁器?)	大目茶碗	3区	9H-2c	2-2a層	—	(12.5)	—	—	—	(3.4)	輪:5YR2/1黒褐 断:5Y7/1灰白	密	良	内外面調整	
277	56	40-4	陶器	高杯	3区	9H-2d	2a上層(内側)	—	(20.7)	—	—	(6.0)	外:7.5YR7/4にぶい黄緑 内:7.5YR7/4にぶい黄緑 断:5YR7/6黄	密(1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	心不 良	外面口縁部コナデ,体部 ニオオエ後ハケ,黒染 内面ハケ		
279	56	—	瓦	丸瓦	3区	9H-1f	2a層	(10.5)	幅 (11.4)	—	—	—	19	外:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y5/2灰黄緑 断:N4.0灰	密(1mm以下 長尺,黒色 粘含む)	心不 良	内面有目紋	
286	71	—	土師器	小形丸底鉢	3区	9H-1f-2f	第3面	102調	11.7	—	—	—	(3.9)	外:7.5YR6/6黄 内:7.5YR7/3にぶい黄緑 断:10YR7/3にぶい黄緑	密	良	内外口縁部コナデ,体部 ナデ	
287	71	—	須恵器	杯	3区	9H-1f-2f	第3面	102調	13.4	—	—	—	(3.6)	外:N7.0灰白 内:N7.0灰白 断:N7.0灰白	密 (2~3mm 長尺含む)	良	外面天井部調整ヘラケズリ 内面調整ナデ	
288	71	—	土師器	甕	3区	9H-2f	第3面	観文社 器物2 1869(7)	(16.7)	—	—	—	(3.2)	外:10YR6/2灰黄緑 内:10YR7/2にぶい黄緑 断:10YR6/1灰白	心不密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	内外面コナデ	
289	71	—	土師器	高杯	3区	9H-2f	第3面	観文社 器物2 1382(7)	—	(17.0)	—	—	(3.9)	外:7.5YR6/4にぶい黄緑 内:7.5YR7/4にぶい黄緑 断:7.5YR6/4にぶい黄緑	心不密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面調整不明 内面ナデ,ニオオエ, 目紋透孔1	
290	71	39-3	土師器	甕	3区	9H-2e	第3面	215土坑	(16.4)	—	—	—	(5.2)	外:7.5YR3/3黒褐 内:7.5YR3/3黒褐 断:7.5YR3/3黒褐	密 (2mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	内面口縁部コナデ,体部 ヘラケ 生動物の痕跡	
291	71	—	土師器	甕	3区	9H-2e	第3面	215土坑	肩部 (14.8)	—	—	—	(5.6)	外:10YR7/2にぶい黄緑 内:10YR7/2にぶい黄緑 断:10YR8/2灰白	心不密 (3mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面口縁部コナデ,体部 タタキ付ハケ	
292	71	—	土師器	短冊	3区	9H-2e	第3面	215土坑	(14.6)	—	—	—	(8.3)	外:10YR7/2にぶい黄緑 内:10YR6/1灰白 断:10YR6/1灰白	密 (2mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面体部コナデ後ハケ 内面口縁部ヘラミギキ,体部 ニオオエ	
293	71	39-6	須恵器	甕	3区	9H-1c	第3面	217土坑 (壁部)	肩部 7.2	15.0	—	—	(10.7)	外:上半N5.0灰 下半N4.0灰 内:SP.1灰 断:N8.0灰白	密	良	外面体部上平部コナデ,下 平部ハケ 内面体部上平部コナデ,下 平部ニオオエナデ	
294	71	—	土師器	甕	3区	9H-1b	第3面	217土坑	(14.0)	—	—	—	(3.0)	外:N2.0黒 内:10YR7/2にぶい黄緑 断:7.5YR7/2にぶい黄緑	心不密 (1mm以下 短尺,黄緑 粘含む)	中 心不 良	外面調整不明,縦付 古染	
295	71	—	土師器	甕	3区	9H-1b	第3面	217土坑	(13.8)	—	—	—	(1.9)	外:N2.0黒 内:10YR8/2灰白 断:N4.0灰	心不密 (4mm以下 短尺,黄緑 粘含む)	良	内外面コナデ,外面調整 着 近江(黒染)	
296	71	—	土師器	甕	3区	9H-1f	第3面	127 ビツト	—	(9.6)	—	—	(4.1)	外:10YR7/2にぶい黄緑 内:7.5YR6/4にぶい黄緑 断:7.5Y7/3にぶい黄緑	密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	心不 良	内外面調整不明	
297	71	39-5	土師器	甕	3区	9H-2d	第3面	174 土師群	11.9	—	—	—	(7.3)	外:10YR7/2にぶい黄緑 内:10YR7/2にぶい黄緑 断:10YR7/2にぶい黄緑	密 (石,黄緑 粘含む)	心不 良	内面口縁部コナデ	
298	71	—	土師器	甕	3区	9H-2d	第3面	175 土師群	15.9	—	—	—	(4.5)	外:10YR7/1灰白 内:10YR7/3にぶい黄緑 断:2.5Y4/1黄灰	心不密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面コナデ 内面口縁部コナデ,体部 ヘラケズリ	
299	71	39-4	土師器	甕	3区	9H-2e	第3面	155 土師群	(15.2)	(24.4)	—	—	(18.1)	外:10YR7/3にぶい黄緑 内:10YR7/3にぶい黄緑 断:10YR7/2にぶい黄緑	密	良	外面口縁部コナデ,体部 タタキ後コナデ 内面口縁部コナデ,目紋 ヘラケズリ,体部ナデ後コ ナデ	
300	71	—	土師器	甕	3区	9H-2e	第3面	155 土師群	(15.8)	—	—	—	(7.4)	外:10YR7/2にぶい黄緑 内:10YR7/2にぶい黄緑 断:10YR7/2にぶい黄緑	密	良	外面口縁部ニオオエ後 ナデ,目紋 内面口縁部コナデ,体部 ナデナデ	
302	71	—	土師器	鉢	3区	9H-2a	第3面	195土坑	(29.8)	—	—	—	(7.5)	外:5YR6/8黄 内:5YR6/8黄 断:10YR6/1灰白	密	良	外面口縁部コナデ,体部 ハケ 内面口縁部コナデ,体部	
303	72	—	磁器 (青磁)	陶 (小 鉢)	3区	9G-1j	第3面	160調	(13.2)	—	—	—	(4.0)	輪:2.5GY5/1 オリーフ灰 断:N8.0灰白	密	良	内外面調整 能成茶器	
304	72	39-1	須恵器	杯	3区	9H-2a	第3面	160調	14.2	—	—	—	4.8	外:N6.0灰 内:N6.0灰 断:N6.0灰	密	良	外面調整不明ヘラケズリ 内面調整ナデ	
305	72	—	土師器	広口甕	3区	9H-2a	第3面	160調	(13.6)	—	—	—	(6.3)	外:5YR6/6黄 内:5YR6/6黄 断:5YR6/6黄	密 (石,黄緑 粘含む)	良	外面口縁部コナデ,体部 ナデ 内面調整不明	
306	72	—	土師器	甕	3区	9H-1a	第3面	160調	(13.2)	—	—	—	(4.2)	外:7.5YR7/6黄 内:7.5YR7/6黄 断:2.5Y6/1黄灰	密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面口縁部コナデ,体部 ナデ 内面口縁部コナデ,体部 ヘラケズリ	
307	72	—	土師器	甕	3区	9H-2a	第3面	160調	長 7.4	—	—	—	2.6	(5.9)	外:2.5YR5.5胡赤黄 内:2.5YR5.5胡赤黄 断:2.5Y5.2胡赤灰	密 (5mm以上 長尺,黄緑 粘含む)	良	外面調整 部分的にハケ
308	72	—	土師器	甕	3区	9H-2a	第3面	160調	長 5.8	—	—	—	1.5	(5.9)	外:7.5YR8.4浅黄緑 内:7.5YR8.4浅黄緑 断:5YR7/6黄	密	良	ナデ
400	74	—	瓦	椀	3区	9H-1b	2-3a層	—	(11.1)	—	—	—	(2.9)	外:2.5YR1.0灰白 内:10YR1.0灰白 断:2.5Y7/1灰白	心不密 (1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	心不 良	外面口縁部コナデ,体部 ニオオエ,ナデ	
401	74	—	瓦	椀	3区	9H-1b	2-3a層	—	—	(6.0)	—	—	(1.2)	外:2.5Y7/1灰白 内:10YR1.0灰白 断:2.5Y7/1灰白	密(1mm以下 長尺,黄緑 粘含む)	心不 良	外面高台部コナデ,体部 ナデ 内面調整不明	

建号 部号	棟号 区分	写真 の 番号	種別	形状	調査 区	地区別	階位名	建名	法量 (cm)				色調	船上	構成	備考	
									口径	最大径	底径	壁厚					
402	74	-	照窓部	鉢	3区	9H-2d	2-3 a	-	(19.0)	-	-	(C1)	外:N7:09白 内:N7:09白 断:N7:09白	密 (1mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	良	外面口縁部ココナテ,体部 ナテ 内面ココナテ	
403	74	-	照窓部	杯蓋	3区	9H-1b	2-3 a	-	(14.0)	-	-	(C7)	外:N7:09白 内:N7:09白 断:N7:09白	密 (1mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	良	外面下縁部内へラケズリ 内面ココナテ	
404	74	-	照窓部	杯身	3区	9H-1a	2-3 a	-	(12.2)	-	-	(C8)	外:N6:09 内:N6:09 断:N6:09	密 (4mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	良	内面内面ココナテ	
405	74	-	照窓部	杯身	3区	9H-1b	2-3 a	-	(11.6)	-	-	(C2)	外:N5:09 内:N8:09白 断:N3:09	密 (2mm以下 長尺含む)	良	内面内面ココナテ	
406	74	40-2	照窓部	杯蓋	3区	9G-2j	3 a	相	(15.3)	-	-	-	外:N3:09 内:N6:09 断:S8/1非灰	密 (2~5 mm 長尺含む)	良	外面天井部内へラケズリ 内面ココナテ	
407	74	40-8	照窓部	肥子 無蓋 杯	3区	9H-3c	2-3 a	-	(15.4)	-	-	(S3)	外:N4:09 内:S16/1灰 断:S8P/7陶質灰	密 (1mm以下 長尺含む)	良	外面口縁部ナテ,底面ナテ,肥 子ナテ 内面ココナテ	
408	74	-	照窓部	コップ 形 杯	3区	9H-1b	3 a	相	(9.8)	-	-	(4.9)	外:N7:09白 内:N7:09白 断:N8:09白	密	良	外面口縁部 2段変形 2段の 部ナテ	
409	74	40-8	照窓部	筒形 杯	3区	9H-2a	2-3 a	-	(11.2)	-	-	(10.7)	外:S16/1灰 内:N7:09白 断:N7:09白	密 (1mm以下 長尺含む)	良	外面2条の凹線より上は 縁部カメイロココナテ後 縁部ナテ,凹線より下は縁 部カメイロココナテ後列直 内面ココナテ	
410	74	40-8	照窓部	高形 杯 台	3区	9H-1b	2-3 a	-	-	(16.2)	-	(S7)	外:2.5Y7/2R黄 内:2.5Y7/2R黄 断:N7:09白	密 (3mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	中 不良	外面口縁部ナテ後縁直 内面ココナテ	
411	74	40-8	照窓部	無蓋 高形 杯	3区	9H-3c	2-3 a 取込部 側部	-	(15.6)	-	-	(S5)	外:N6:09~N5:09 内:N6:09 断:S8P/7陶質灰	密 (1mm以下 長尺含む)	良	外面口縁部ナテ,杯蓋下平 内面ココナテ	
412	74	-	照窓部	壺	3区	9H-1b	2-3 a	-	(15.4)	-	-	(S1)	外:N6:09 内:N6:09 断:S8/1非灰	密 (1~2 mm 長尺含む)	良	外面口縁部ココナテ,底 面ナテ 内面ココナテ	
413	74	40-3	上脚部	小形 高形 台	3区	9G-2j	2- 3 a 取込 側部	-	9.8	-	-	(6.2)	外:7.5YR6.5黄 内:5YR6.6黄 断:7.5YR6.6黄	密 (2mm以下 長尺含む) 黄色粒を含む	良	外面口縁部ココナテ後 縁部ナテ 内面ココナテ	
414	74	-	上脚部	小形 高形 台	3区	9H-2d	2- 3 a 取込 側部	-	(12.9)	-	(9.7)	-	7.9	外:7.5YR7/3に 近い黄 内:7.5YR7/3に 近い黄 断:7.5YR7/3に 近い黄	密 (1mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	良	外面口縁部ココナテ,杯蓋 下平ナテ 内面ココナテ
415	74	40-5	上脚部	壺	3区	9H-2e	3 a	相	(14.0)	(17.8)	-	(12.6)	外:8YR5/3に 近い黄 内:8YR5/3に 近い黄 断:8YR6/3に 近い黄	中 不良 (1mm以下 長尺,白 粒含む)	良	外面口縁部ココナテ後 縁部ナテ,杯蓋下平 内面ココナテ	
416	74	-	瓦	平瓦	3区	9H-1b	2-3 a	-	長 (9.3)	幅 (6.4)	-	2.4	外:N5:09~N6:09 内:N5:09 断:N7:09白	中 不良 (5mm以下 長尺含む)	良	外面口縁部ナテ 内面ココナテ	
417	74	-	上脚部	不明 上脚 品	3区	9H-3c	2-3 a	-	長 (8.3)	幅 (6.4)	-	2.7	外:8YR6/3に 近い黄 内:8YR6/3に 近い黄 断:8YR6/3に 近い黄	中 不良 (1mm以下 長尺,黄色 粒を含む)	良	外面口縁部ナテ 内面ココナテ	
422	84	41-3	照窓部	杯蓋	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	12.4	-	-	-	外:N6:09 内:N5:09 断:N5:09	密 (1~2 mm 長尺,白色 粒を含む)	良	外面天井部内へラケズリ 内面ココナテ	
423	84	-	照窓部	杯蓋	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	13.0	-	-	-	外:N7:09白 内:N7:09白 断:N7:09白	密	良	外面天井部内へラケズリ, 一部浴 内面ココナテ	
424	84	-	照窓部	杯身	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	11.2	-	-	-	外:SP6/1青灰 内:S8P/6青灰 断:S8P/6青灰	密	良	外面口縁部内へラケズリ 内面ココナテ	
425	84	41-4	照窓部	有蓋 高形 杯	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	10.4	-	8.6	-	外:N6:09 内:N6:09 断:N6:09	密	良	外面杯蓋下平内へラケ ズリ,杯蓋下平ナテ 内面ココナテ	
426	84	-	照窓部	有蓋 高形 杯	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	10.4	-	-	(S2)	外:SP5/1青灰 内:SP4/1陶質灰 断:S8/1非灰	密	良	外面杯蓋下平内へラケ ズリ,杯蓋下平ナテ 内面ココナテ	
427	84	-	照窓部	有蓋 高形 杯	3区	9H-2e	第3 b 面	240取 部	-	9.4	-	(S8)	外:N7:09白 内:N7:09白 断:S8/1非灰	密	良	外面口縁部ナテ 杯蓋下平内へラケズリ 内面ココナテ	
428	84	-	照窓部	不明 品	3区	9H-3c	第3 b 面	240取 部	-	幅 (6.0)	-	0.7	(S9)	外:N4:09 内:N4:09 断:N4:09	密	良	内面内面ココナテ 外面に6つの段あり
429	84	41-1	照窓部	肥子 行杯	3区	9H-1b	第3 b 面	240取 部	-	19.2	11.6	-	(11.5)	外:N6:09 内:N8:09白 断:N5:09 断:80R5/2R赤	密 (4mm以下 長尺,白色 粒を含む)	良	外面上平段状ナテ,下平 ナテ,下平ナテ,下平ナ テ,4.5cm四方内径 内面ココナテナテ 幅1.5cm
430	84	41-2	上脚部	小形 高形 壺	3区	9H-3c	第3 b 面	240取 部	10.0	-	-	(8.0)	外:8YR6/2に 近い黄 内:8YR6/2に 近い黄 断:8YR5/1灰	密	良	外面口縁部上平ナテ ミガキ,下平へラケズリ 後口ナテ 内面口縁部ココナテ	
431	84	41-2	上脚部	小形 高形 壺	3区	9H-1b-1c	第3 b 面	240取 部	8.2	9.9	-	-	8.3	外:8YR6/3に 近い黄 内:8YR6/3に 近い黄 断:5YR7/4に 近い黄	密	良	外面口縁部上平ナテ 後口ナテ,下平へラケズリ, 内面ココナテ
432	84	41-2	上脚部	小形 高形 壺	3区	9H-2e	第3 b 面	240取 部	幅部 6.2	8.6	-	-	(7.0)	外:7.5YR5/4に 近い黄 内:7.5YR5/4に 近い黄 断:8YR7/2に 近い黄	密 (石質,黄 粒含む)	良	外面口縁部上平ナテ,下平 ナテ 内面口縁部ココナテ 口縁直上欠き

建号	棟号	写真 図号	種別	形状	調査 区	地区別	階位名	階層名	造形 (cm)				色調	船土	構成	備考	
									口径	最大径	径差	器厚					
433	84	41-7	上脚部	鉢	3区	9H-2b	第3b面	2400径	11.4	11.1	5.0	-	8.8	外:HV8R7/2にぶい黄青 内:HV8R7/2にぶい黄青 断:7.5VR7/6粉	密(2mm以下 長石,石英 含む)	良	外面調整不明 内部ニボオサエ,黒肌 底部平直
434	84	-	上脚部	椀形 高鉢	3区	9H-2b	第3b面	2400径	(13.8)	-	-	-	(9.2)	外:7.5VR8/2灰白 内:7.5VR8/2灰白 断:5VR7/3にぶい青	密(1mm以下 長石,石英, 赤色粒含む)	良	内面へうろミガキか 円形透孔3
435	84	-	上脚部	高鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	15.8	-	-	-	(5.5)	外:7.5VR8/4黄青 内:HV8R4/4黄青 断:2.5V6/1黄灰	中心部 (2mm以下 長石,石英, 黄青含む)	良	内外面調整不明
436	84	-	上脚部	小形 高鉢	3区	9H-2c	第3b面	2400径	-	(0.0-4)	-	-	(5.7)	外:HV8R/3黒肌 内:HV8R/3黒肌 断:5VR4/6赤黒	密	良	内外面調整不明 内面船土内面西九州系小
437	84	-	上脚部	高鉢	3区	9H-2b	第3b面	2400径	-	-	(8.8)	-	(4.8)	外:7.5VR8/4黄青 内:7.5VR8/4黄青 断:2.5VR6/6粉	密	良	外面調整不明 内面へうろ工具痕
438	84	-	上脚部	壺	3区	9H-2b	第3b面	2400径	(12.8)	19.4	-	-	(17.9)	外:5VR7/4にぶい青 内:7.5VR7/3にぶい青 断:5VR7/4にぶい青	密(4mm以下 長石,黄色 粒含む)中心 粗い	中心 不良	外面調整不明 内面体部ニボオサエ,ナデ
439	84	-	上脚部	広口 壺	3区	9H-1c	第3b面	2400径	(12.5)	-	-	-	(8.9)	外:2.5V7/2灰黄 内:2.5V6/2灰黄 断:5VR7/3灰白	密(10mm以下 長石,黄色 粒含む)中心 粗い	良	外面口縁部ハケ,体部へう ろミガキ 内面口縁部ハケ,体部ニボ オサエ,ナデ 内面口縁部平直
440	84	41-5	上脚部	直口 壺	3区	9H-2c	第3b面	2400径	頸部 6.2	15.6	-	-	(12.3)	外:HV8R/3黄青 内:7.5VR7/4にぶい青 断:HV8R/3黄青	きわめて 精良	良	外面頸部一体系上平へう ろミガキ,下平へうろミガ キ,赤肌 内面頸部ニボオサエ後へう ろミガキ
441	84	41-6	上脚部	直口 壺	3区	9H-2b	第3b面	2400径	頸部 11.4	(28.0)	-	-	(31.0)	外:7.5VR6/2灰黒 HV8R7/2にぶい青 内:HV8R7/2にぶい青 断:2.5VR8/1黒	中心部 (7mm以下 砂,赤色粒 部母多く含 む)	良	外面頸部タテナ後ナデナ, 体部ハケ 内面頸部コナ後ナデナ, 体部ニボオサエ後へうろ ミガキ 内外面下半平直
442	84	41-8	上脚部	壺	3区	9H-1b	第3b面	2400径	(13.4)	(28.2)	-	-	28.9	外:5VR7/6粉 内:5VR7/6粉 断:HV8R7/1灰白	密(4mm以下 長石,石英, チャート含 む)	良	外面体部ハケ,底部へう ろミガキ 内面体部へうろミガキ,体部 ニボオサエ後ナデ 体部平直
443	85	44-1	上脚部	小形 鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	9.4	10.6	-	-	5.3	外:HV8R5/2灰黄 内:HV8R5/2灰黄 断:HV8R5/2灰黄	中心部 (9mm以下 長石,石英, 肉石含む)	良	外面1縁部一体系上平ナデ, 下平へうろミガキ 口縁部内面緑豆肌厚 生駒山産黄
444	85	42-1	上脚部	小形 鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	8.2	10.0	6.8	-	13.0	外:7.5VR7/6粉 内:2.5VR8/8粉 断:2.5VR8/8粉	中心部 (5mm以下 長石,石英含 む)	良	外面体部タタキ,黒肌 内面体部ハケ 口縁部円形透孔4 東海系に似た在産
445	85	44-2	上脚部	小形 高鉢	3区	9H-2c	第3b面	2400径	9.4	9.4	-	-	9.1	外:7.5VR8/4黄青 内:2.5VR8/8赤黒 断:7.5VR2/1黒	中心部 (2mm以下 長石,石英含 む)	良	口縁部コナ後ナデ,体部へう ろミガキ 外面黒肌
446	85	-	上脚部	小形 高鉢	3区	9H- 1c-2c	第3b面	2400径	(10.2)	-	-	-	6.6	外:7.5VR6/4にぶい青 内:7.5VR6/4にぶい青 断:5VR6/6粉	密	良	内外面調整不明
447	85	-	上脚部	壺	3区	9H-2c	第3b面	2400径	-	-	3.4	-	(5.4)	外:7.5VR5/2灰黒 内:HV8R4/2灰黄 断:2.5V2/1黒	中心部 (5mm以下 長石,石英, 肉石,チャ ート含む)	良	内外面調整不明
448	85	42-2	上脚部	鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	(15.6)	-	4.1	-	8.8	外:HV8R6/3にぶい黄青 内:HV8R6/3にぶい黄青 断:HV8R6/3にぶい黄青	密(1mm以下 長石,石英, チャート含 む)	良	外面体部平直タタキ,黒肌 ナデ 内面へうろミガキ 赤黒肌
449	85	42-1	上脚部	小形 鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	9.5	-	10.8	-	9.1	外:2.5VR7/2灰白 内:2.5VR7/2灰白 断:7.5VR7/4にぶい青	密	良	内外面調整不明 円形透孔4
450	85	42-1	上脚部	椀形 高鉢	3区	9H-1c	第3b面	2400径	10.7	-	17.6	-	8.9	外:2.5V6/2灰青 内:2.5V6/2灰青 断:7.5VR6/6にぶい青	密	良	外面ハケ後へうろミガキ 内面口縁部ハケ後へうろミ ガキ,頸部ハケ後ナデナ,見込 円形透孔4
451	85	42-5	上脚部	壺	3区	9H-1c	第3b面	2400径	12.8	15.0	-	-	13.9	外:N1.5/黒 内:7.5VR5/4にぶい青 内:7.5VR5/4にぶい青 断:7.5VR5/4にぶい青	密(2mm以下 長石,石英, 赤色粒多く 含む)	中心部	外面体部上平タタキ後 コナ,下平タタキ後ナ デナ,内面へうろミガキ 内面体部平直
452	85	-	上脚部	壺	3区	9H-1c	第3b面	2400径	(12.9)	16.0	-	-	(12.9)	外:N2/赤 内:5V4/1灰 断:5V4/1灰	中心部 (2mm以下 砂,赤色粒 多く含む)	良	外面体部上平タタキ後 コナ,下平タタキ後ナ デナ,内面へうろミガキ 内面へうろミガキ
453	85	-	上脚部	高鉢	3区	9H-1d	第3b面	2400径	(24.4)	-	-	-	(6.5)	外:HV8R6/3にぶい青 内:HV8R6/3にぶい青 断:7.5VR7/4にぶい青	密	良	外面へうろミガキ 口縁部コナ後へうろミ ガキ
454	85	-	上脚部	壺	3区	9H-2c	第3b面	2400径	(12.1)	-	4.5	-	11.7	外:HV8R3/1黒肌 内:HV8R6/3にぶい黄青 断:HV8R6/3にぶい黄青	密(2mm以下 長石,石英含 む)	良	外面口縁部タタキ後コナ ナ,体部タタキ後ニボ オサエ後ナデ 内面口縁部ハケ,体部ハケ 後ナデナ,内面ニボオサエ, ハケ後ナデ V様式
455	85	-	上脚部	壺	3区	9H-2c	第3b面	2400径	(18.2)	-	-	-	(9.1)	外:HV8R3/3黒肌 内:HV8R3/3黒肌 断:HV8R3/3黒肌	密(石,金,赤 青含む)	良	外面口縁部コナナ,体部 タタキ,内面口 縁部コナ後コナ ナ,体部へうろミガ キ
456	85	-	上脚部	壺	3区	9H-2c	第3b面	2400径	(17.8)	(25.6)	-	-	(11.6)	外:HV8R6/2灰黄 内:2.5V5/2灰黄 断:HV8R6/2灰黄	密(1mm以下 長石,黄色粒, 雲母,肉石 含む)	良	外面口縁部コナナ,体部 タタキ後ハケ 内面口縁部ハケ,体部へう ろミガキ
457	85	42-4	上脚部	壺	3区	9H-1c	第3b面	2400径	12.4	-	-	-	(10.3)	外:HV8R5/2灰黄 内:HV8R3/2黒肌 断:7.5VR5/3にぶい青	密(2mm以下 長石,石英, 雲母含む)	良	外面体部タタキ 内面体部へうろミ ガキ

建物の 番号	用途 区分	写真 の 番号	種別	形状	調査 区	地区別	階位名	造替名	法量 (cm)				色調	船上	構成	備考	
									口径	最大径	底径	器厚					器高
458	85	43-1	土師器	甕	3区	9H-2d	第3b面	240焼跡	6.0	-	-	-	(2.5)	密 底(0.5-1mm の長石、黄良 含む)	良	外面口縁部コナナデ、体部 タナハ、復付着 内面口縁部コナナデ、体部 タナハ、復付着	
459	85	-	土師器	甕	3区	9H-2c	第3b面	240焼跡	14.9	-	-	-	(3.2)	外: 2.5YR6/4に、白い 内: 2.5YR6/4に、白い 断: 7.5YR6/4に、白い	密	良	外面口縁部脚凹部、器部コ ナナデ、復付着 内面口縁部コナナデ 内面コナナ 内面器
460	85	43-1	土師器	有段 口縁 甕	3区	9H-1c	第3b面	240焼跡	15.4	-	-	-	(4.9)	外: N2.0黒 内: 2.5YR7/3に、白い 断: N4.0灰	中心部 (1mm以下 砂質、赤土 多く含む)	良	外面口縁部退化した凹部 内面口縁部コナナデ、体部 タナハ
461	85	43-1	土師器	甕	3区	9H-2c	第3b面	240焼跡 頸部 (11.4)	19.2	-	-	(10.9)	外: 10YR6/2黄良 内: 2.5Y7/3黄良 断: 7.5YR6/4に、白い	中心部 (2mm以下 砂質、赤土 多く含む)	良	外面口縁部脚凹部、器部 タナハ後ヘラミガキ後コ ナナデ、復付着 内面口縁部コナナデ、体部 タナハ後ヘラミガキ	
462	85	42-3	土師器	二重 口縁 甕	3区	9H-2c	第3b面	240焼跡	11.8	13.4	-	-	13.8	外: 10YR8/2灰白 内: 10YR8/2灰白 断: 10YR6/3に、白い黄良	中心部 (2mm以下 砂質、赤土 多量含む)	中心部	外面調整不明 内面口縁部一節部ナデ、体 部エビオサエ 内部片立ち欠き
463	85	42-6	土師器	甕	3区	9H-1c	第3b面	240焼跡	-	25.3	4.6	-	(21.3)	外: 2.5Y7/2黄良 内: 2.5Y7/2黄良 断: 2.5Y7/2黄良	中心部 (3mm以下 砂質少量含む)	良	外面体部上平タナエ、下平 部タナエ後ナデ、体部エビ オサエ、復付着 内面口縁部エビオサエ、体部 ナデ
464	85	42-7	土師器	甕	3区	9H-2d	第3b面	240焼跡	14.2	20.8	-	-	19.8	外: N2.0黒 内: 2.5YR6/4に、白い 断: 7.5YR6/4に、白い	中心部 (7mm以下 量含む)	中心部	外面口縁部ナデ、体部ヘラ ミガキ 内面口縁部ナデ、体部エビ オサエ 千葉型五面式脚凹部
465	86	43-4	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-2c	第3b面	240焼跡	-	瓶 (5.9)	-	2.6	(4.2)	外: 10YR6/3に、白い黄良 内: 10YR6/3に、白い黄良 断: 10YR6/3に、白い黄良	精良	良	面取り、朝アズ、上面V字 溝式
466	86	-	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-2b	第3b面	240焼跡	-	瓶 (7.1)	-	2.7	(7.6)	外: 10YR7/2に、白い黄良 内: 10YR7/2に、白い黄良 断: 7.5YR6/4に、白い	中心部(2- 3mm)長石、 土質	ナデ	内面貼り付け
467	86	-	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-2b	第3b面	240焼跡	-	瓶 (5.5)	-	2.5	(5.2)	外: 2.5YR4/3黒 内: 2.5YR4/3黒 断: 7.5YR4/2黒	密(1-3 mm)長石、 石含む)	ナデ	内面貼り付け
468	86	-	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-1b	第3b面	240焼跡	-	瓶 (5.5)	-	1.5	(4.7)	外: 2.5YR6/4に、白い 内: 2.5YR6/4に、白い 断: 7.5YR5/4に、白い	中心部	良	ナデ
469	86	43-6	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-1c	第3b面	240焼跡	-	-	4.6	-	(2.0)	外: 2.5YR6/9 内: 2.5YR6/9 断: N4.0灰	中心部(3 mm)以下 砂質、赤土 多量含む)	中心部	内外面調整不明
470	86	43-6	土師器	瓶 or 甕	3区	9H-1c	第3b面	240焼跡	瓶 径 4.3	頸部 (5.6)	-	-	(2.7)	外: 10YR7/2に、白い黄良 内: 10YR7/2に、白い黄良 断: N3.0灰	中心部 (1mm以下 砂質、赤土 少量含む)	中心部	外面エビオサエ
471	87	44-4	土師器	小形 灰皿	3区	9H-1c	第3b面	242焼	頸部 4.5	11.2	-	-	(8.3)	外: 2.5YR6/9 内: 2.5YR6/9 断: 7.5YR6/9	密	良	外面体部上平ヘラ後ヘラ ミガキ、下平ヘラタナエ後 ヘラミガキ 内面内面ヘラタナエ、ヘラ ミガキ、体部ナデ
472	87	-	土師器	鉢	3区	9H-2c	第3b面	242焼	12.0	-	-	-	4.4	外: 2.5Y5/2黄良 内: 10YR6/3に、白い黄良 断: 7.5YR5/4に、白い	密 (4mm以下 長石、石、黄 良含む)	良	外面体部未調整、底部転字 アケ、エビオサエ 内面ハナ
473	87	44-3	土師器	小形 灰皿	3区	9H-1d	第3b面	242焼	頸部 7.2	9.5	-	-	(6.5)	外: 2.5YR6/4に、白い 内: 2.5YR6/4に、白い 断: 7.5YR7/4に、白い	密	良	外面口縁部ハナ後コナナデ、 体部ヘラタナエ後ヘラミ ガキ
474	87	44-5	土師器	小形 灰皿	3区	9H-2c	第3b面	242焼	11.2	-	-	-	6.4	外: 10YR6/2黄良 内: 10YR6/2黄良 断: 7.5YR5/9明赤	密	良	外面口縁部コナナデ後ヘラ ミガキ、体部ヘラタナエミ ガキ 内面口縁部コナナデ、体部 転字
475	87	45-4	土師器	小形 鉢	3区	9H-2c	西側調	242焼	14.6	-	-	-	(4.2)	外: 2.5YR5/9明赤 内: 2.5YR5/9明赤 断: 7.5YR6/6	密(1mm以下 長石、石、黄 良含む)	良	内面口縁部後ナデ 粗土、赤土、黄土混入
476	87	44-8	土師器	小形 高杯	3区	9H-2c	第3b面	242焼	11.8	-	-	-	(7.3)	外: 10YR6/2黄良 内: 10YR6/2黄良 断: 5YR7/8	中心部(2 mm以下長 石、石含む)	良	外面口縁部コナナデ後コ ナナデ 内面ヘラミガキ
477	87	45-7	土師器	鉢	3区	9H-1c	第3b面	242焼	(27.0)	-	4.5	-	20.6	外: N2.0黒 内: 10YR5/2灰黄良 断: 10YR6/2灰黄良	中心部 (5mm以下 砂質多く含む)	良	外面ヘラミガキ、下平タナ エ後ヘラミガキ 内面ヘラミガキ 生土山崎式
478	87	-	土師器	小形 高杯	3区	9H-1c	第3b面	242焼	10.2	-	-	-	(2.7)	外: 2.5YR6/6 内: 2.5YR6/6 断: 7.5YR6/6	密	良	内外面ヘラミガキ、コナナ デ 内面見込み放射状ヘラミ ガキ
479	87	-	土師器	有段 高杯	3区	9H-2c	第3b面	242焼	22.6	-	-	-	(6.6)	外: 2.5YR7/2に、白い 内: 2.5YR7/2に、白い 断: 7.5YR7/3に、白い	密	良	外面口縁部コナナデ、体部 タナエ後コナナ 内面コナナ
480	87	45-6	土師器	瓶	3区	9H-1c	第3b面	242焼	(28.8)	-	-	-	(12.6)	外: 2.5Y6/2黄良 内: 2.5Y6/2黄良 断: 2.5Y6/2黄良	密 (1mm以下 長石、石含む)	良	外面口縁部コナナデ、体部 タナエ後コナナ 内面コナナ
481	87	-	土師器	瓶 or 高杯	3区	9H-2c	第3b面	242焼	10.8	-	-	-	(4.4)	外: 2.5YR2灰白 内: 2.5YR2灰白 断: 2.5YR2灰白	密	良	外面体部エビオサエ後ヘ ラミガキ 内面コナナ後ヘラミガキ 見込み放射状ヘラミガキ
482	87	44-6	赤土 土師器	瓶 or 鉢	3区	9H-2c	西側調	242焼	-	-	11.2	-	(5.8)	外: 10YR6/3に、白い黄良 内: 10YR6/3に、白い黄良 断: 10YR6/3に、白い	密 (2mm以下 長石、石含む)	良	外面口縁部ヘラミガキ、 体部ヘラミガキ、脚部 ハナ

建号	棟号	写真(階番号)	種別	形状	地区区分	階位名	階名	法線(cm)				色調	施工	構成	備考	
								口径	最大径	直径	器厚					
483	87	44-10	上脚部	有機高杆	3区 9H-2c	第3b面	242調	22.6	-	(15.8)	-	17.2	外:2.5V6/2床裏内:2.5V6/2床裏断:7.5VR6/4c	密 (3mm以下砂粒、赤土を含む)	良	外面杯部コニギギ、脚部ヘラズリ後ヘラミギギ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ、脚部ヘラミギギ、脚部ヘラミギギ 内面コニギギ
484	87	44-9	上脚部	有機高杆	3区 9H-2c	第3b面	242調	(23.0)	-	(14.2)	-	15.7	外:7.5VR6/4cにぶい層内:7.5VR6/4cにぶい層断:7.5VR6/4cにぶい層	密	良	外面杯部コニギギ、脚部ヘラズリ後ヘラミギギ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ、脚部ヘラミギギ 内面コニギギ
485	87	-	上脚部	板形高杆	3区 9H-1c	第3b面	242調	-	-	14.8	-	(5.5)	外:7.5VR6/4cにぶい層内:7.5VR5/3cにぶい層断:10VR2/1層	密 (2mm以下灰、右、石、赤土を含む)	良	杯部内外面ヘラミギギ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ 内面コニギギ
486	87	44-7	上脚部	有機高杆	3区 9H-1c	第3b面	242調	23.2	-	-	-	(8.0)	外:2.5V6/2床裏内:2.5V6/2床裏断:2.5V6/2床裏	密(5.0mm以下、赤土を含む)	中・良	外面杯部コニギギ、内面コニギギ後放射状ヘラミギギ
487	87	-	上脚部	高杆	3区 9H-2c	第3b面	242調	24.0	-	-	-	(6.4)	外:10VR7/2にぶい黄褐色内:10VR6/2床裏断:10VR6/2床裏	密(1mm以下、赤土を含む)	良	外面ヘラミギギ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ
488	87	-	上脚部	小形高杆	3区 9H-1d	第3b面	242調	-	-	(10.8)	-	(5.9)	外:5VR5/4cにぶい赤褐色内:5VR4/2cにぶい赤褐色断:5VR6/2床裏	きわめて閉 詰り	良	杯部内外面ヘラミギギ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ 内面コニギギ
489	87	-	上脚部	直口部	3区 9H-2c	第3b面	242調	(19.2)	-	-	-	(8.0)	外:7.5VR6/4cにぶい層内:10VR6/4cにぶい層断:2.5V6/1黄灰	密(赤土、右、石、赤土を含む)	良	外面タタミギギ 内面コニギギ 外面鏡面行着
490	87	43-1	上脚部	直口部	3区 9H-1c	第3b面	242調	(11.2)	-	-	-	(4.8)	外:2.5V7/2床裏内:7.5VR6/3cにぶい層断:7.5V4/1灰	密(1mm以下砂粒を含む)	中・良	内面鏡面タタミ 内外面タタミギギ 内面コニギギ 内面コニギギ
491	87	-	上脚部	直口部	3区 9H-2c	第3b面	242調	第部(11)	(17.3)	3.6	-	(5.4)	外:10VR7/2にぶい黄褐色内:2.5V6/2床裏断:2.5V6/1黄灰	中・密 (5mm以下長尺、赤土を含む)	良	外面鏡面コナデ、体部ヘラミギギ、杯部一部閉詰り 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ 内面コニギギ
492	87	-	上脚部	直口部	3区 9H-2c	第3b面	242調	-	(5.6)	-	-	(10.8)	外:10VR7/2にぶい黄褐色内:10VR6/2床裏断:10VR7/2にぶい黄褐色	密(赤土、右、石、赤土を含む)	良	外面体部上平口ミギギ、杯部コニギギ 内面コニギギ、キナ 内面に赤土貫通の網入り、所、穿孔あり
493	88	-	上脚部	垂	3区 9H-2c	西壁	242調	第部(9)	(21.0)	5.0	-	(24.7)	外:10VR6/3にぶい黄褐色内:2.5V7/2床裏断:7.5VR7/4cにぶい層	密 (4mm以下砂粒、赤土、赤土、赤土、赤土)	良	外面杯部ヘラミギギ、杯部ヘラミギギ 内面体部上平口ミギギ、キナ 内面コニギギ後放射状ヘラミギギ
494	88	-	上脚部	垂	3区 9H-2c	第3b面	242調	-	20.6	-	-	(19.2)	外:7.5VR7/4cにぶい層内:10VR7/3にぶい黄褐色断:2.5V6/1黄灰	密(4mm以下長尺、右、赤土を含む)	良	外面ハケ、ヘラ工具部 内面にヘラミギギ、下半ヘラミギギ
495	88	45-5	上脚部	費	3区 9H-2c	第3b面	242調	(13.6)	(8.2)	-	-	17.8	外:N2.0断 10VR7/2にぶい黄褐色内:10VR7/2にぶい黄褐色断:10VR7/2にぶい黄褐色	中・密 (1mm以下砂粒を含む)	良	外面内面鏡面コナデ、前面タタミ後ナデ、体部ハケ 内面内面鏡面コナデ、脚部ヘラミギギ、杯部ヘラミギギ、杯部ヘラミギギ、杯部ヘラミギギ 内外面鏡面行着
496	88	45-3	上脚部	費	3区 9H-1c	第3b面	242調	13.3	-	-	-	(5.9)	外:10VR7/2にぶい黄褐色内:N2.0断 10VR7/3にぶい黄褐色断:10VR7/2にぶい黄褐色	密 (2mm以下砂粒を含む)	良	外面タタミハケ後ナデ、内面内面鏡面コナデ、体部コナデおよびシオキエ
497	88	-	外土工部	垂	3区 9H-1d	第3b面	242調	-	組(12.4)	-	1.3	(8.2)	外:10VR5/2床裏内:10VR5/2床裏断:10VR5/3にぶい黄褐色	中・密 (8mm以下右、赤土、赤土を含む)	良	外面鏡面コナデ、列点エ、ハケ 内面ハケ後ナデ 直口ハケ
498	88	43-2	外土工部	複合脚部	3区 9H-1d	第3b面	242調	-	組(9.3)	-	1.7	(5.9)	外:10VR6/3にぶい黄褐色内:N2.0断 10VR6/3にぶい黄褐色断:10VR6/3にぶい黄褐色	中・密 (3mm以下内面コニギギを含む)	良	外面タタミギギ後ナデ、脚部コナデ 内面コニギギ、内面鏡面コナデ、内面鏡面コナデ、内面鏡面コナデ
499	88	45-1	上脚部	費	3区 9H-2c	第3b面	242調	(15.6)	(8.9)	-	-	20.4	外:7.5VR5/3cにぶい層内:7.5VR5/3cにぶい層断:7.5VR5/3cにぶい層	密 (3mm以下砂粒を含む)	良	外面鏡面コナデ、体部上平口ミギギ、杯部ヘラミギギ 内面内面鏡面ハケ、体部ヘラミギギ、杯部ヘラミギギ 外面全周、内面1層部以外鏡面行着
500	88	45-2	上脚部	費	3区 9H-2c	第3b面	242調	(6.4)	-	-	-	(7.9)	外:N2.0断 10VR4/1断内:2.5V8/2断内断:2.5V8/2断内	密 (2mm以下砂粒を含む)	良	外面内面鏡面ハケ後ナデ、体部タタミ、鏡面コナデ 内面内面鏡面ヘラミギギ後ナデ 内面内面鏡面コナデ
501	88	-	上脚部	費	3区 9H-2c	第3b面	242調	17.8	-	-	-	(4.5)	外:10VR4/1断内:10VR4/1断内断:10VR4/1断内	密 (1mm以下長尺、右、赤土、赤土を含む)	良	外面内面鏡面コナデ、体部ハケ、鏡面コナデ 内面内面鏡面コナデ、体部ヘラミギギ
502	88	43-1	上脚部	費	3区 9H-1c	第3b面	242調	(13.6)	-	-	-	(5.6)	外:7.5VR5/3cにぶい層内:10VR4/1断内断:10VR4/1断内	密	良	外面内面鏡面コナデ、体部ヘラミギギ 内面内面鏡面コナデ、体部ヘラミギギ 山鏡面anti錆色の機板
503	88	43-1	上脚部	費	3区 9H-1d	第3b面	242調	(12.8)	-	-	-	(2.8)	外:10VR7/3にぶい黄褐色内:10VR7/3にぶい黄褐色断:N4.0断	中・密(1mm以下砂粒、赤土、赤土、赤土を含む)	中・良	内外面鏡面不明 内面内面鏡面不明 内面内面鏡面不明
504	88	43-1	上脚部	費	3区 9H-1d	第3b面	242調	(13.4)	-	-	-	(4.6)	外:N2.0断 7.5VR5/3cにぶい層断:7.5VR6/4cにぶい層	密	良	外面鏡面ヘラミギギ後ナデ、体部ハケ、鏡面コナデ 内面内面鏡面コナデ、内面内面鏡面コナデ、内面内面鏡面コナデ
506	88	43-6	上脚部	製型土部	3区 9H-1c	第3b面	242調	-	-	3.3	-	(3.9)	外:10VR5/2床裏内:10VR7/3にぶい層断:5V6/1灰	中・密 (3mm以下赤土を含む)	良	外面体部タタミ後ナデ、脚部コナデ 内面体部ヘラミギギ、脚部コナデ

建号	棟号	写真 (階層 番号)	種別	部材	調査 区分	地区別	階位名	調査名	寸法 (cm)				色調	施工	検成	備考	
									口径	最大径	径差	部厚					部高
507	88	43-6	土脚壁	壁面 上部	3区	9H-3c	第3b 面	242調	-	-	4.9	-	(4.4)	外:10YR6/3に多い黄褐色 内:7.5YR6/4に多い黄褐色 断:7.5YR8/3或黄褐色	中心部 (3mm以下 砂粒,赤色粒 多く含む)	員	外面体部タタキ, 扉部エビ オキテ, 裏込め材付物付 内面体部ヘラクリ子, 扉部 エビオキエ, ナデ
508	88	43-5	土脚壁	壁面 上部	3区	9H-2c	第3b 面	242調	-	(12.0)	-	-	(9.7)	外:2.5Y6/2灰黄 内:2.5YR1/1灰白 断:N4.0暗灰	密	員	外面タタキ後部分のタナデ 内面タナデ
511	90	46-1	須臾器	杯蓋	3区	9H-1b	3b層	-	(12.6)	-	-	-	4.1	外:N8.0灰白 内:N7.0灰白 断:N7.0灰白	密(1mm以下 砂粒少量 含む)	員	外面天井面同様ヘラクリ子 内面回転ナデ
512	90	-	須臾器	杯身 (首 高部付)	3区	9H-1a	3b層	-	(11.0)	-	-	-	(4.7)	外:N8.0灰白 内:N6.0灰 断:N5.0灰	密(1mm以下 砂粒少量 含む)	中心 員	外面杯部下平回転ヘラクリ 子, 内面回転ナデ
513	90	-	須臾器	杯身	3区	9H-2b	3b層	-	(12.8)	-	-	-	(4.4)	外:N6.0灰 内:N5.0灰 断:N5.0灰	密(1mm以下 砂粒少量 含む)	員	外面底部同様ヘラクリ子 内面回転ナデ
514	90	-	須臾器	有蓋 杯身	3区	9H-2b	3b層 (99層)	-	(10.6)	-	(9.8)	-	9.0	外:SPB5/1青灰 内:SPB5/1青灰 断:SP4/1暗赤灰	密(3mm以下 長石, 石英 含む)	員	外面杯部下平回転ヘラクリ 子, 扉部体部タタキ 内面回転ナデ
515	90	-	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-2a	3b層	-	(10.2)	(10.4)	-	-	9.0	外:10YR7/4に多い黄褐色 内:10YR7/3に多い黄褐色 断:10YR7/3に多い黄褐色	中心部(1~ 2mm以下 長石, 石英, 赤 色粒含む)	員	外面口縁部コナデ, 体部 ヘラクリ子, 扉部体部タタキ 内面回転ナデ, 体部 エビオキエ, ナデ
516	90	-	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-1b	3b層	-	9.0	9.5	-	-	(6.0)	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR6/2灰黄褐色 断:10YR6/2灰黄褐色	密(8mm以下 長石, 石英, チャート 含む)	員	外面調整不明 内面ナデ
517	90	46-1	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-2b	3b層 (99層)	-	9.6	-	-	-	7.7	外:5YR6/6暗 内:5YR6/6暗 断:5YR6/6暗	密(1mm以下 長石, 石英, 赤色粒 含む)	員	外面口縁部コナデ後, タナデ付キ, 扉部ヘラクリ子 内面口縁部ヘラミガキ, 体 部ナデ
518	90	46-1	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-2b	3b層 (99層)	-	(9.2)	-	-	-	4.9	外:10YR4/2灰黄褐色 内:10YR4/2灰黄褐色 断:10YR6/2灰黄褐色	密(1mm以下 長石, 石英, 赤色粒 含む)	員	外面口縁部コナデ, 体部 ヘラクリ子 内面口縁部コナデ, 体部 内外面調整
519	90	46-1	土脚壁	小形 鉢	3区	9H-2a	3b層	-	8.8	-	-	-	2.9	外:2.5YR6/4黄 内:2.5YR6/4黄 断:一	密(3mm以下 長石, 石英, 赤色粒, 茶色粒 含む)	員	外面ココハケ, 扉部 内面ココハケ
520	90	-	土脚壁	高鉢	3区	9H- 1c-1d	3b層	-	14.2	-	-	-	(4.9)	外:2.5Y7/3黄褐色 内:2.5Y7/3黄褐色 断:7.5YR5/6明灰	密	員	内外面調整不明
521	90	-	土脚壁	高鉢	3区	9H-1d	3b層 (99層)	-	-	杯部 (13.8)	(10.6)	-	(11.9)	外:7.5YR6/4に多い黄褐色 内:7.5YR6/4に多い黄褐色 断:10YR6/1暗灰	密	員	内外面調整不明
522	90	46-1	土脚壁	高鉢	3区	9H-1b	3b層	-	-	-	10.2	-	(7.5)	外:10YR7/3に多い黄褐色 内:10YR7/3に多い黄褐色 断:10YR7/3に多い黄褐色	密	員	外面ヘラミガキ付 内面エビオキエ
523	90	-	土脚壁	鉢	3区	9H-2b	3b層 (99層)	-	(13.2)	-	-	-	(6.4)	外:7.5YR7/4に多い黄褐色 内:10YR7/4に多い黄褐色 断:10YR8/4或黄褐色	中心部 (3mm以下 砂粒, 赤色粒 非常に多く 含む)	員	外面体部タタキ後部分の タナデ付キ, 扉部ヘラクリ子 内面回転ナデ
524	90	-	土脚壁	鉢	3区	9H-2b	3b層 (99層)	-	(15.8)	-	-	-	7.2	外:10YR5/2灰黄褐色 内:5Y2/1黄 内:10YR4/2灰黄褐色 断:10YR6/2灰黄褐色 2.5Y4/1黄灰	密	員	外面口縁部コナデ, 体部 エビオキエ, 扉部ヘラクリ子 内面ヘラ ミガキ
525	90	-	土脚壁	鉢	3区	9G-1	3b層 (99層)	-	(12.5)	-	(12.7)	-	5.9	外:10YR6/2灰黄褐色 内:10YR7/2に多い黄褐色 断:10YR4/1灰白	密(1mm以下 長石, 石英, チャート 含む)	員	内面ヘラミガキ
526	90	-	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-1b	3b層	-	(11.2)	-	(6.0)	-	5.7	外:2.5Y3/1黄褐色 内:10YR8/1灰白 断:10YR8/1灰白	密(1~2mm 長石, 石英, 赤色粒 含む)	員	外面口縁部コナデ, 体部 ヘラクリ子, 扉部コナデ 内面ヘラクリ子
527	90	-	土脚壁	有孔 鉢	3区	9G-2	3b層 (1P 0.5~)	-	-	-	3.0	-	(6.2)	外:2.5Y5/2暗黄褐色 内:2.5Y5/2暗黄褐色 断:2.5Y4/1黄灰	密(5mm以下 長石, 石英, 赤色粒 含む)	員	外面体部タナデ, 扉部エビ オキテ 内面ナデ 内面穿孔
528	90	-	土脚壁	鉢 (裏 面)	3区	9H-2a	3b層 (99層)	-	-	-	4.5	-	(5.7)	外:10YR5/2に多い黄褐色 内:10YR6/3に多い黄褐色 断:10YR6/3に多い黄褐色	密(5mm以下 砂粒 多く含む)	員	外面タタキ後部分の タナデ付キ 内面タナデ
529	90	-	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-2a	3b層 (99層)	-	12.1	-	-	-	6.3	外:7.5YR7/4に多い黄褐色 内:10YR7/3に多い黄褐色 断:7.5YR7/2に多い黄褐色	中心部 (右, 裏面, チャート 含む)	員	外面口縁部エビオキエ, 体部 タナデ 内面ナデ
530	90	46-3	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-2a	3b層	-	(11.5)	-	-	-	5.9	外:7.5YR8/4或黄褐色 内:2.5YR7/8暗 断:5YR7/6暗	密	中心 員	外面調整不明, 扉部 内面ナデ
531	90	-	土脚壁	小形 丸底 鉢	3区	9H-3c	3b層	-	11.6	-	-	-	7.4	外:10YR7/3に多い黄褐色 内:10YR7/3に多い黄褐色 断:5YR4/4に多い赤褐色	密(4mm以下 長石, 石英, チャート 含む)	員	外面口縁部コナデ, 体部ヘラ クリ子 内面ナデ
532	90	-	土脚壁	鉢	3区	9G-1a	3b層	-	10.7	-	4.7	-	4.5	外:10YR6/3に多い黄褐色 内:N2.0暗 断:N6.0灰	密(2mm以下 長石, 石英, 赤色粒 含む)	員	外面体部ヘラミガキ, 扉部 ナデ 内面口縁部コナデ, 体部 タナデ
533	90	-	土脚壁	ミニ チュア 鉢	3区	9G-2	3b層	-	6.4	-	2.8	-	3.1	外:5YR6/6暗 内:5YR6/6暗 断:N4.0暗	中心部 (1mm以下 砂粒, 赤色粒 多く含む)	中心 員	外面タタキ後コナデ付 内面タナデ
534	90	-	養生 土脚	ミニ チュア 鉢	3区	9G-1	3b層 (99層)	-	(7.4)	-	3.6	-	4.5	外:N3.0暗灰 内:10YR7/2に多い黄褐色 断:5Y4/1黄灰	密(2mm以下 砂粒少量 含む)	員	外面口縁部(体部ナデ付キ, 扉部)エビオキエ 内面ヘラクリ子付 外面内面調整

建群番号	棟群番号	写真図番	種別	器形	調査区	地区別	階位名	遺構名	法量(cm)				色調	船上	焼成	備考		
									口径	最大径	底径	器厚					器高	
535	90	46-5	土師器	小形鉢	3区	9G-1a	3b層	-	9.6	-	3.3	-	4.7	外:7.5YR6/6黄褐色・赤褐色 内:7.5YR6/6黄褐色	新(7mm以下)粘土、黒色粒、赤褐色(含有)	良	外面タタキ後ナデ、底部・内面ハケ、底部エドオエ生駒山内製産	
536	90	-	土師器	小形器台	3区	9H-2e	3b層	-	9.6	-	-	-	(5.0)	外:10YR7/3にぶい黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄褐色 断:10YR8/2灰白	密	良	外面ヘタミガキ、底部エドオエ、器部へうらミガキ、内面ナデ、肌製	
537	90	-	土師器	小形器台	3区	9H-2f	3b層	-	10.4	-	(10.8)	-	7.7	外:10YR7/2にぶい黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄褐色 断:7.5YR4/2黄緑	密	良	内外面調整不明 体内面・内部に粘土 内面黒色	
538	90	-	土師器	小形器台	3区	9H-1c	3b層	-	-	-	10.8	-	(7.2)	外:5YR5/4にぶい非層内 内:7.5YR6/4にぶい黄褐色 断:7.5YR6/4にぶい黄	密	良	外面タタミガキ後ヨコミガキ、内面ハケ後ヨコナデ 内面透孔4	
539	90	46-7	土師器	小形器台	3区	9H-1c	3b層	-	10.0	-	11.6	-	9.2	外:10YR7/3にぶい黄褐色 内:5YR6/6明赤褐 断:5YR5/6明赤褐	(6mm以下)粘土、石(含有)	良	外面ヘタミガキ 内面赤褐色後枚状 へうらミガキ、器部ナデ 内面透孔3	
540	90	-	土師器	小形高杯	3区	9H-1e	3b層	-	(6.0)	-	-	-	(4.9)	外:7.5YR8/3黄褐色 内:7.5YR8/3黄褐色 断:5YR6/6	(1mm以下)赤色粒、黒多(含有)	良	外面ヘタミガキ 内面ヘタミガキ後枚状 へうらミガキ	
541	90	49-1	土師器	小形器台	3区	9H-1b	3b層(砂層)	-	-	(6.6)	-	-	(5.1)	外:10YR6/3にぶい黄褐色 内:10YR6/3にぶい黄褐色 断:5YR5/6黄	(5mm以下)砂多(含有)	中	良	外面黒い張り取りハケ 内面ヘタミガキ 内面透孔3
542	90	49-4	土師器	高脚器台	3区	9G-2a	3b層(砂層)	-	-	12.4	-	-	(4.0)	外:7.5YR7/6黄褐色 内:7.5YR7/6黄褐色 断:7.5Y6/1灰	密	中	良	外面受取部目、6条のへうら織文(1本ずつ織文) 内面ヘタミガキ 赤褐色(含有) 北岸系(北岸内面黒縁、枚状)
543	90	49-3	土師器	低脚付杯	3区	9H-1d	3b層(砂層)	-	-	(6.4)	-	(4.3)	外:10YR8/2灰白 内:10YR8/2灰白 断:10YR8/2灰白	密 (4mm以下)粘土、石(含有)	良	良	外面部ヘタミガキ、器部ヨコナデ 内面部ヘタミガキ へうらミガキ	
544	90	49-2	土師器	小形器台	3区	9H-2a	3b層	-	(8.6)	-	-	-	(4.9)	外:2.5Y7/2黄褐色 内:2.5Y7/2黄褐色 断:N4.0灰	密 (3mm以下)砂多(含有)	中	良	外面口縁ナデ、底部ヘタミガキ、器部ナデハケ、器部エドオエ、器部へうらミガキ、内面ナデ、肌製
545	90	-	土師器	低脚付杯	3区	9G-2a	3b層	-	-	-	5.8	-	(2.0)	外:5YR5/6明赤褐 内:5YR5/6明赤褐 断:5YR5/3にぶい赤褐	密 (1～2mm)赤褐色粒(含有)	良	良	外面エドオエエハケ 内面エドオエエハケ 赤褐色(含有) 加飾の可能性もあり
546	90	49-5	土師器	手組土器	3区	9H-2c	3b層(砂層)	-	-	(4.5)	-	0.8	(4.9)	外:10YR8/2灰白 内:10YR8/2灰白 断:10YR6/2黄褐	中々硬 (3mm以下)砂多(含有)	中	良	外面口縁細粒文 内面口縁細粒文 石(1個)
547	91	46-8	土師器	有様高杯	3区	9H-2c	3b層	-	12.9	-	-	-	(9.6)	外:2.5Y7/2黄褐色 内:10YR4/2黄褐色 断:2.5Y7/3黄	中々硬 (3mm以下)砂多(含有)	中	良	内外面タタキ後タタミガキ エドオエエハケ、5～6条の粘土紐接合痕(加飾)
548	91	-	土師器	有様高杯	3区	9H-1d	3b層	-	22.3	-	-	-	(9.5)	外:10YR8/3黄褐色 内:10YR7/2にぶい黄褐色 断:7.5YR7/6黄	中々硬 (5mm以下)砂多(含有)	中	良	外面口ヨコナデ後ヘタミガキ 内面ヘタミガキ
549	91	-	土師器	高杯	3区	9H-2a	3b層	-	-	-	14.6	-	(9.7)	外:7.5YR7/6黄褐色 5YR6/6 内:7.5YR7/6黄褐色 断:7.5YR7/6黄	中々硬 (1～3mm)粘土(含有)	中	良	外面部面取り、器部ヘタミガキ、肌製 内面部ナデ、エドオエ 内面透孔4
550	91	-	土師器	高杯	3区	9H-2b	3b層(砂層)	-	-	(15.6)	-	(9.9)	外:7.5YR6/4にぶい黄褐色 内:2.5YR6/6明赤褐 断:7.5YR6/6黄	密	良	外面部ヘタミガキ、器部面取りハケ後ヘタミガキ、器部ナデ、ナデ 内面透孔4		
551	91	-	土師器	高杯	3区	9H-2e	3b層	-	-	-	(15.8)	-	(9.2)	外:5YR5/6明赤褐 内:5YR5/6明赤褐 断:5YR6/1灰	密	良	外面部面取り、器部ヘタミガキ、肌製 内面調整不明	
552	91	46-4	土師器	広口壺	3区	9H-2b	3b層(砂層)	(砂層)	(11.4)	15.2	(4.0)	-	18.8	外:7.5YR5/4にぶい黄褐色 内:7.5YR5/4にぶい黄褐色 断:7.5YR5/4にぶい黄	中々硬 (3mm以下)砂多、赤褐色多(含有)	中	良	外面部面一筋部タテハケ 体内中程ヨコナデ、下平エドオエ、器部ハケ後肌製 赤褐色(含有) 内面部ヨコナデ、エドオエエハケ後ナデ、下平ナデ
553	91	-	土師器	広口壺	3区	9G-2a	3b層(砂層)	-	14.3	-	-	-	(5.5)	外:5YR6/4にぶい黄褐色 内:2.5Y7/2黄褐色 断:5Y7/4にぶい黄	中々硬 (5mm以下)粘土、内閉石(含有)	良	良	外面口縁部ヨコナデ、器部エドオエエハケ、器部ナデ 内面口縁部ヨコナデ、器部ヨコミガキ、肌製
554	91	-	赤土器	壺	3区	9H-1a+2a	3b層(砂層)	-	13.0	-	-	-	(4.9)	外:10YR5/2黄褐色 内:10YR5/2黄褐色 断:10YR6/3にぶい黄褐色	中々硬 (5mm以下)粘土、黒色粒(含有)	中	良	外面部タテハケ後ヘタミガキ 内面口縁部ヨコナデ、器部エドオエエハケ後ナデ 生駒山内製産
555	91	-	土師器	壺	3区	9H-1a	3b層(砂層)	-	(12.0)	-	-	-	(1.5)	外:7.5YR6/4にぶい黄褐色 内:7.5YR6/4にぶい黄褐色 断:7.5YR6/4にぶい黄	密 (2mm以下)粘土、黒色粒(含有)	良	良	内外面調整不明 内面黒色
556	91	-	土師器	器台	3区	9G-2a	3b層	-	(13.8)	-	-	-	(4.7)	外:10YR6/3にぶい黄褐色 内:7.5YR5/4にぶい黄褐色 断:N4.0灰	中々硬 (6mm以下)粘土、赤褐色多(含有)	中	良	内面ヘタミガキ 北岸系(赤褐色)の 加飾の可能性もあり
557	91	-	土師器	壺	3区	9G-2a	3b層(砂層)	-	-	12.5	1.8	-	(12.7)	外:10YR5/3にぶい黄褐色 内:10YR5/3にぶい黄褐色 断:N3.0灰	中々硬 (5mm以下)砂多(含有)	中	良	外面部タタミガキ、器部面取り、肌製 内面調整不明
558	91	-	赤土器	壺	3区	9H-2a	3b層(砂層)	-	(14.6)	-	-	-	(7.5)	外:10YR5/3にぶい黄褐色 内:10YR5/3にぶい黄褐色 断:10YR6/3にぶい黄褐色	密 (5mm以下)粘土、赤褐色多(含有)	中	良	外面部タタミガキ、器部面取り、肌製 内面調整不明 内面部ヘタミガキ、ヨコナデ、器部エドオエエハケ、ナデ 生駒山内製産

建設番号	積算区分	写真(図説番号)	種別	形状	地区別	期位名	建群名	法量(cm)				色調	肌土	構成	備考		
								口径	最大径	径差	器厚						
581	93	-	上脚部	費	3区	9H-2b	3b層(砂層)	-	10.0	17.0	-	(16.7)	外:HV3R/31層間内:HV3R/31層間新:HV4R/2区黄褐色	密	良	外面部タタキ後コナダ、体部上半タタキ後ハ、下平ハケズリ 内外面部付着 生動山西麓産	
582	93	48-1	上脚部	費	3区	9H-1d	3b層	-	(15.0)	18.0	2.6	-	19.1	外:N2-0層内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/1区白	中～密(5mm以下砂層、虫母、赤色砂を含む)	良	外面部タタキ後ハケ、口縁部～体部、体部中程ハ、底面付着 内面:コナダ、内面も一部砂状、付着付着
583	93	-	上脚部	費	3区	9H-1a-2a	3b層(砂層)	-	16.6	-	-	-	(9.1)	外:HV3R/2区黄褐色内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/2区黄褐色	密(1mm以下砂層少量含む)	良	外面部ハケ後ナダ、体部コナダ付着 内面:緑コナダ、体部ヘラケズリ 生動山西麓産
584	93	-	上脚部	費	3区	9H-1a-2a	3b層(赤色砂層)	-	(15.3)	-	-	-	(7.2)	外:HV3R/2区白内:HV3R/2区白新:HV3R/2区白	密(1mm以下赤、黄褐色を含む)	良	外面部ハケ 内面:体部ヘラケズリ
585	93	48-4	上脚部	費	3区	9H-1d	3b層	-	15.3	20.8	-	-	25.3	外:N2-0層内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/2区黄褐色	密(0.5～2mm長石、砂母を含む)	良	外面部緑部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面:口縁部～胴部コナダ、体部上半ヘラケズリ、下半エボシ全体付着 内外面全体付着 内面付着
586	93	47-7	上脚部	費	3区	9H-2c	3b層(砂層)	-	14.8	18.6	-	-	19.4	外:7.5YR5/4に、近い層内:7.5YR5/4に、近い層新:7.5YR5/4に、近い層	密(3mm以下長石、石英、虫母、角閃石を含む)	良	外面部タタキ後ハケ、体部ヘケ、付着付着 内面:口縁部ハケ、胴部～底面コナダ付着、付着付着 生動山西麓産
587	93	47-4	赤土層	費	3区	9H-2b	3b層(砂層)	-	15.0	17.8	-	-	(13.2)	外:HV3R/2に、近い黄褐色内:HV3R/2に、近い黄褐色新:HV3R/2に、近い黄褐色	密(2mm以下長石、石英、角閃石を含む)	良	外面部ハケ、口縁部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面:口縁部ハケ、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面は胴部まで付着 内面上部(胴部間隙)
588	93	48-2	上脚部	費	3区	9H-1f	3b層	-	(17.0)	(22.4)	(13.8)	-	25.5	外:N2-0層内:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/3に、近い黄褐色新:HV3R/3に、近い黄褐色	中～密(3mm以下砂層、赤色砂母多く含む)	良	外面部緑部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着 体部エボシ付着 ヘラケズリ、底面エボシエボシ後ナダ付着 内面付着
589	93	47-6	上脚部	費	3区	9H-1a	3b層(砂層)	-	13.3	14.7	4.9	-	17.6	外:N2-0層内:2.5Y7/2区黄褐色内:N3-0層内:2.5Y7/2区黄褐色新:7.5YR1/6白	密(2mm以下砂層少量含む)	良	外面部タタキ後ハケ、口縁部～体部、付着付着 内面:体部ハケ、下平化付着 付着付着
590	93	-	上脚部	費	3区	9H-2c	3b層	-	15.2	19.6	-	-	(22.2)	外:N2-0層内:HV3R/2区黄褐色内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/2区黄褐色	密(4mm以下砂層少量含む)	良	外面部緑部ハケ後ナダ、体部ヘケ、付着付着 内面:体部ヘラケズリ、体部下半エボシ、体部エボシ、下平化ナダ
591	93	-	上脚部	計付録	3区	9H-1d-2d	3b層	-	(13.2)	-	-	-	(8.9)	外:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/1区白新:HV3R/1区白	密	中～良	内外面部コナダ付着、体部間隙不明
592	93	48-6	上脚部	鉢	3区	9H-1d	3b層	-	(26.2)	30.8	-	-	(24.5)	外:N3-0層内:HV3R/2区黄褐色内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/2区黄褐色	中～密(3mm以下砂層少量含む)	中～良	外面部タタキ後前部ナダ、体部付着付着 内面:体部ヘラケズリ、生動山西麓産 生動山西麓産 生動山西麓産
593	94	-	上脚部	費	3区	9H-2a	3b層	-	(17.2)	-	-	-	(5.7)	外:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/3に、近い黄褐色新:HV3R/3に、近い黄褐色	密(1mm以下長石、石英、虫母を含む)	良	外面部ハケ 内面:体部ヘラケズリ
594	94	-	上脚部	費	3区	9H-1a-2a	3b層(砂層)	-	(16.4)	-	-	-	(6.4)	外:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/3に、近い黄褐色新:HV3R/3に、近い黄褐色	密(1mm以下長石、石英を含む)	良	外面部タタキ、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面:体部ヘラケズリ
595	94	49-6	上脚部	費	3区	9H-2c	3b層	-	(18.6)	-	-	-	(7.5)	外:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/2区黄褐色新:HV3R/2区黄褐色	密	良	外面部緑部タタキ、口縁部コナダ、体部コナダ付着 内面:体部ナダ 胴部の上層を構成
596	94	49-6	上脚部	費	3区	9G-2j	3b層	-	(14.4)	-	-	-	(2.9)	外:HV3R/3に、近い黄褐色内:HV3R/2区黄褐色新:2.5Y7/2区黄褐色	中～密(1mm以下砂層少量含む)	良	外面部緑部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面:体部ナダ 胴部の上層を構成
597	94	49-6	上脚部	費	3区	9G-1j	3b層	-	(14.8)	-	-	-	(3.3)	外:7.5YR5/3に、近い層内:7.5YR5/3に、近い層新:7.5YR5/3に、近い層	密	良	外面部緑部間隙6条、胴部コナダ、コナダ付着 内面:体部コナダ、体部ヘラケズリ 内面付着
598	94	-	上脚部	費	3区	9G-2j	3b層	-	(13.2)	-	-	-	(2.8)	外:7.5YR6/6層内:7.5YR6/6層新:7.5YR6/6層	密	良	外面部緑部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着 内面:体部コナダ、体部ヘラケズリ 内面付着
599	94	49-6	上脚部	費	3区	9G-1j	3b層	-	(11.8)	-	-	-	(4.2)	外:7.5YR6/4に、近い層内:7.5YR6/4に、近い層新:7.5YR6/4に、近い層	密	良	外面部緑部間隙7条、胴部ヘケ後コナダ、体部コナダ付着 内面:体部コナダ、体部ヘラケズリ 内面付着
600	94	-	上脚部	費	3区	9H-2c	3b層	-	(13.9)	-	-	-	(2.5)	外:7.5YR6/3に、近い層内:7.5YR8/3区黄褐色新:7.5YR8/3区黄褐色	密	良	外面部緑部間隙8条、胴部コナダ、体部コナダ付着
601	94	49-6	上脚部	費	3区	9H-1b	3b層(砂層)	-	(13.5)	-	-	-	(5.1)	外:7.5YR6/4に、近い層内:HV3R/3区黄褐色新:HV3R/1区白	密(1mm以下長石、石英、虫母を含む)	良	外面部ハケ 内面:体部エボシエボシ、体部エボシ、下平化

建設番号	建設種別	写真の図番	種別	形状	調査区	地区別	期位名	遺構名	法量 (cm)				色調	船上	構成	備考	
									口径	最大径	径深	器形					器高
602	94	-	土師器	甕	3区	9G-2	3b層	-	(15.4)	-	-	-	(3.9)	外:10YR7/3にぶい黄褐色内:10YR7/3にぶい黄褐色断:7.5YR7/4にぶい黄	密	貝	外周コナダ 内周縁部コナダ、体部 山崎系
603	94	49-6	土師器	甕	3区	9H-1f	3b層	-	(15.6)	-	-	-	(6.2)	外:10YR7/2にぶい黄褐色内:10YR7/2にぶい黄褐色断:10YR7/2にぶい黄褐色	密	貝	外周縁部コナダ、体部 ハナ、黒 内周縁部コナダ、体部 ヘラケツリ 山崎系
604	94	49-6	土師器	甕	3区	9H-2a	3b層	-	(15.2)	-	-	-	(4.8)	外:7.5YR7/4にぶい黄褐色内:5YR6/6褐色内:7.5YR7/4にぶい黄褐色断:7.5YR7/4にぶい黄褐色	密 (2mm以下 長石、石英 含む)	貝	外周縁部コナダ 内周縁部コナダ、体部 ヘラケツリ 山崎系
605	94	-	土師器	甕	3区	9H-2c	3b層	-	(16.6)	-	-	-	(4.7)	外:7.5YR7/3にぶい黄褐色内:7.5YR7/2にぶい黄褐色断:10YR3/1黒灰	密 (2mm以下 長石、石英 含む)	貝	内外面調整不明 古瀬
606	94	-	土師器	甕	3区	9H-2a	3b層 (器形)	-	(16.6)	-	-	-	(5.1)	外:10YR4/1黒灰内:10YR7/2にぶい黄褐色断:2.5Y6/1黄灰	密	貝	外面部～体部タナナ 後立コナダ、白より下ナナ メハク(黄銅1条) 内周縁部コナダ、体部 ナダ 内外面埋付 器形は古瀬 船上は山崎(乙類)
607	94	49-6	土師器	甕	3区	9H-1c	3b層 (器形)	-	(12.2)	-	-	-	(4.6)	外:2.5Y6/2黄褐色内:10YR4/1黒灰断:10YR4/1黒灰	密 (1mm以下 長石、石英 含む)	貝	外面部タナナ後、縁部 コナダ 内周縁部コナダ、体部ナダ 内外面埋付 器形は古瀬
608	94	-	土師器	甕	3区	9H-2a	3b層 (器形)	-	(14.4)	-	-	-	(3.2)	外:2.5Y2/1黒内:7.5YR5/3にぶい黄褐色断:7.5YR5/3にぶい黄褐色	きこめて 粗目 (1mm以下 長石、石英 含む)	貝	外周縁部コナダ、体部 ヘラケツリによる光沢(漆 塗か) 内周縁部コナダ、体部 ヘラケツリ
609	94	49-6	土師器	甕	3区	9H-2d	3b層	-	(12.8)	-	-	-	(2.1)	外:5YR6/6褐色内:5YR6/6褐色断:5YR6/6褐色	密 (3mm以下 長石、石英 含む)	中心 貝	内外面調整不明 同灰
610	95	-	弥生土器	加脂器	3区	9H-2a	3b層 (器形)	-	(14.8)	-	-	-	(1.6)	外:10YR6/3にぶい黄褐色内:2.5Y5/2黒灰内:2.5Y5/1黒灰	中心部 (5mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	外周縁部2本の沈積 の上に厚浮文 土師山崎系
611	95	-	土師器	加脂器	3区	9G-1a	3b層	-	(16.2)	-	-	-	(2.2)	外:5YR5/6明赤褐色内:5YR5/6明赤褐色断:5YR5/6明赤褐色	密	貝	内外面調整不明 古瀬
612	95	-	弥生土器	甕	3区	9H-2a	3b層	-	(18.4)	-	-	-	(3.2)	外:5YR5/6明赤褐色内:5YR5/6明赤褐色断:10YR6/2灰黄褐色	中心部 (5mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	外周縁部粗目の粗砂
613	95	-	弥生土器	加脂器	3区	9G-1j	3b層	-	(14.8)	-	-	-	(4.0)	外:7.5YR6/4褐色内:10YR4/1黒灰断:7.5YR7/4にぶい黄褐色	密 (石、長石、 石英含む)	中心 貝	内周縁部厚浮文+葉 土師山崎系
614	95	-	弥生土器	二重口縁器	3区	9H-2b	3b層 (器形) (内径)	-	器部 (8.2)	-	-	-	(7.5)	外:10YR6/2灰黄褐色内:10YR7/2にぶい黄褐色断:10YR7/2にぶい黄褐色	中心部 (4mm以下 の石、長石、 石英含む)	中心 貝	外面部ナダ後刺突文2段、 粗砂ナダ 内周縁部ユビオオエ、ナダ 調整不明 土師山崎系
615	95	-	弥生土器	甕	3区	9H-2b	3b層	-	器部 (12.3)	-	-	-	(5.4)	外:2.5Y5/2黒灰内:2.5Y5/1黄灰断:2.5Y5/1黄灰	中心部 (石、長石、 金銅含む)	中心 貝	外面部ナダかハナ、器部尖 部+粗目 内周縁部ナダかハナ 土師山崎系
616	95	-	弥生土器	高杯	3区	9G-1j-2	3b層 (器形)	-	(19.4)	-	-	-	(2.8)	外:10YR7/2にぶい黄褐色内:10YR7/2にぶい黄褐色断:10YR7/2にぶい黄褐色	密 (1mm以下 長石、石英 含む)	中心 貝	内外面調整不明(ヘラミガ キ)
617	95	-	弥生土器	大形甕	3区	9G-2j	3b層	-	(10.0)	-	-	-	(4.0)	外:7.5YR5/3にぶい黄褐色内:7.5YR5/3にぶい黄褐色断:10YR7/2にぶい黄褐色	密 (石、長石、 金銅含む)	中心 貝	内外面調整不明 古瀬
618	95	-	弥生土器	收塵	3区	9H-2a	3b層	-	(11.2)	-	-	-	(0.9)	外:7.5YR8/4黄褐色内:5YR7/6褐色断:5YR7/6褐色	中心部 (1mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	外周ヘラミガキ部、 内外面調整不明 粗砂土
619	95	-	弥生土器	広口甕	3区	9H-2a	3b層	-	(16.2)	-	-	-	(3.6)	外:10YR4/2灰黄褐色内:10YR5/3にぶい黄褐色断:10YR5/2灰黄褐色	密 (石、長石、 金銅含む)	中心 貝	外周縁部器形目、器部ヘ ラミガキ 内周縁部コナダ、器部 調整し、且2個 土師山崎系
620	95	-	弥生土器	甕	3区	9G-2j	3b層 (器形) (内径)	-	器 (8.0)	-	0.5	(5.0)	外:N3.0暗灰内:10YR4/2灰黄褐色断:10YR5/2灰黄褐色	中心部 (7mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	外面沈積4条 内周ユビオオエナダ 土師山崎系	
621	95	-	弥生土器	甕	3区	9H-2a	3b層	-	器 (7.6)	-	0.4	(2.9)	外:5YR6/6褐色内:5YR6/6褐色断:5YR5/6明赤褐色	中心部 (1mm以下 砂粒、赤色粒 多く含む)	中心 貝	調整不明 内周縁部に円筒文1周	
622	95	-	弥生土器	無蓋甕	3区	9H-2a	3b層	-	器 (5.1)	-	0.6	(3.9)	外:10YR7/2にぶい黄褐色内:10YR7/2にぶい黄褐色断:10YR5/1黒灰	中心部 (3mm以下 砂粒、赤色粒 多く含む)	中心 貝	口縁部ナダ、外面部状況 のより古瀬 器に結合させるための縫 造し、且2個	
623	95	-	弥生土器	鉢小	3区	9G-1j-2	3b層 (器形)	-	器 (5.2)	-	0.5	(1.9)	外:2.5YR5/6明赤褐色内:7.5YR8/4黄褐色内:2.5YR5/6明赤褐色断:7.5YR8/3黄褐色	中心部 (1mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	両面に朱塗(漆か)	
624	95	50-1	縄文土器	深鉢	3区	9G-2j	3b層	-	器 (7.5)	-	0.6	(6.1)	外:7.5YR5/4にぶい黄褐色内:2.5YR5/4にぶい黄褐色断:7.5YR5/4にぶい黄褐色	中心部 (4mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	深鉢口縁部の文様帯の一部 土師山崎系	
625	95	50-1	縄文土器	深鉢	3区	9G-1j 9H-2a	3b層 (器形) (器形)	-	器 (4.5)	-	0.9	(4.7)	外:10YR6/4にぶい黄褐色内:10YR6/4にぶい黄褐色断:N6.0灰	中心部 (5mm以下 砂粒 多く含む)	中心 貝	二重交帯	
626	95	50-7	土師器	製造土器	3区	9H-2b	3b層	-	(4.6)	-	-	-	(5.1)	外:10YR7/2にぶい黄褐色内:7.5YR7/4にぶい黄褐色断:7.5YR7/1黒石	中心部 (3mm以下 砂粒、赤色粒 多く含む)	中心 貝	外面部ユビオオエ、ナダ 内周ユビオオエ、軟ナダ 多く含む)

建番	棟号	写真 (写真 番号)	種別	部材	調査 区	地区別	階位名	建番名	寸法(cm)			色調	施工	構成	備考	
									口径	最大径	径差					部厚
627	95	-	上脚部	製地上部	3区	9H-2a	3b層	-	-	10.3	-	(5.9)	外:HV8/72にぶい黄粉 内:2.5V5/2戻灰 断:N3.0戻灰	中や厚(5mm以下) 初物に多く含む	中や員	外面タタキ 内面板ナデ
628	95	50-5	上脚部	製地上部	3区	9G-1	3b層	-	-	(4.6)	-	(6.6)	外:2.5VR6/6 内:2.5VR6/6 断:N3.0戻灰	中や厚 (5mm以下) 初物に多く含む	員	外面部タタキ、脚部 ヒオオエ、部内取扱い ナデナデ
629	95	50-5	上脚部	製地上部	3区	9H-2b	3b層	-	-	4.3	-	(2.8)	外:2.5VR6/11にぶい黄粉 内:HV8/72にぶい黄粉 断:HV8/1戻灰	中や厚 (6mm以下) 初物に多く含む	員	外面部タタキヒオオエ、脚 部ナデ 内面脚部ヒオオエ、換熱 ナデ
630	95	-	上脚部	製地上部	3区	9H-2b	3b層	-	-	(5.2)	-	(1.8)	外:30E6/6 内:N3.0戻灰 断:2.5VR5/1戻灰	中や厚 (5mm以下) 初物に多く含む	員	内外面ヒオオエ、脚部ナ デ
631	95	50-6	上脚部	製地上部	3区	9H-1b	3b層	-	-	(3.4)	-	(5.4)	外:2.5V6/2戻灰 内:5Y7/2戻灰 断:5V6/1戻	中や厚 (3mm以下) 初物に多く含む	中や員	外面部タタキカ
632	95	-	上脚部	製地上部	3区	9H-2a	3b層	-	接合部 3.4	脚部 4.8	-	(3.1)	外:2.5VR7/4にぶい黄粉 内:2.5VR7/4にぶい黄粉 断:2.5V7/1戻	中や厚(5mm以下) 初物、赤土、赤 母土を含む	員	外面部タタキ、接合部 ヒオオエ、脚部ナデ 内面ナデ
633	95	50-5	上脚部	製地上部	3区	9G-2	3b層	-	-	4.2	-	(4.0)	外:HV8/2戻灰 内:2.5VR16白 断:2.5VR16白	(1mm以下) 初物、赤土、赤 母土を含む	中や員	内外面ヒオオエ、 部内取扱いで白っぽい
634	95	-	上脚部	製地上部	3区	9H-2b	3b層	-	接合部 3.2	-	-	(2.3)	外:2.5VR6/11にぶい黄粉 内:HV8/72にぶい黄粉 断:5VR3/1戻灰	中や厚 (4mm以下) 初物に多く含む	員	外面部タタキ、接合部 ヒオオエ 内面脚部ナデ、脚部ヒオ オエナデ
635	95	50-5	上脚部	製地上部	3区	9H-2b	3b層	-	-	(4.4)	-	(3.0)	外:5VR6/6 内:2.5V4/1戻 断:2.5V4/1戻	中や厚 (3mm以下) 初物に多く含む	員	外面部タタキ、脚部ヒオ オエナデ 内面脚部ナデ、脚部ヒオ オエ 内外面換熱
649	105	-	脚部	換	4-1区	9I-1b	2a層	-	-	4.4	-	(3.3)	脚:2.5V6/1戻灰 内脚:HV8/72にぶい黄粉 断:HV8/72にぶい黄粉	密	員	ロウ引後全面塗敷 刷出し高台、巻引敷
650	105	25-2	換 上 部 A類	換	4-1区	9I-1c	2a層	-	-	(7.2)	-	(1.4)	外:2.5VR3/3 内:2.5VR2/1 断:2.5VR3/1戻灰	密	員	内外面調整不明
651	105	-	瓦	平瓦	4-1区	9I-1c	2a層	-	長 (7.6)	幅 (6.2)	-	21	外:N3.0戻灰 内:2.5VR3/3 断:N4.0戻	中や厚(2mm以下) 長石、石を含む	員	内面布目積、縦引線の張 白面ヘラナデ
652	105	25-2	頭部	杆部	4-1区	9I-1b*1c	2a層 (内脚)	-	(12.2)	-	-	(3.7)	外:5Y7/1戻灰 内:N5.0戻 断:N5.0戻	密	員	外面天井部縦引ヘラナズリ 内面回転ナデ
653	105	-	頭部	有蓋 換	4-1区	9I-1d	2a層	-	-	(8.4)	-	(4.4)	外:2.5V6/1戻 内:2.5V6/1戻 断:N5.0戻	密	不良	外面部ヒオオエ 内面脚部ヒオオエ
654	105	25-2	頭部	有蓋 換	4-1区	9I-1d	3a層	-	-	(8.0)	-	(5.6)	外:N5.0戻 内:N5.0戻 断:2.5H4/1脚赤灰	密	員	外面部ヒオオエ 内面脚部ナデ
655	105	25-2	上脚部	面	4-1区	9I-1b	3b層	-	(15.6)	-	-	(4.8)	外:HV8/5にぶい黄粉 内:HV8/4にぶい黄粉 断:2.5VR3/1戻灰	密	員	内外面コナデ
656	105	-	養生 上脚部	二重 口縁部	4-1区	9I-1b*1c	3b層	-	(19.0)	-	-	(3.4)	外:5VR7/6 内:2.5VR6/11にぶい黄粉 断:2.5VR7/4にぶい黄粉	密	員	内外面ヘラミガキ
657	105	25-6	養生 上脚部	費	4-1区	9H-1b	4a層 北壁 (V.P. 1.9~ 2.0m)	-	-	8.6	-	(9.2)	外:2.5VR4/2戻灰 内:2.5VR4/2戻灰 断:5VR6/2戻灰	密 (5mm以下) 長石、石、 チャート、金 部を含む	員	外面部ヘラミガキ、底部 ヘラナズリ後ヘラミガキ 内面ヘラミガキ 5割山積
658	105	25-2	瓦部	換	4-3区	9I-1e	2a層	-	-	(5.8)	-	(1.1)	外:2.5Y2/1 内:2.5Y2/1 断:2.5VR6/6	密	不良	外面コナデ 内面調整不明
659	109	25-5	頭部	杆部	5区	9I-1b 西平	2a層	-	(13.8)	-	-	(1.4)	外:N7.0戻白 内:N7.0戻白 断:N7.0戻白	密	員	外面天井部縦引ヘラナズリ 内面回転ナデ
660	109	-	上脚部	換 部	5区	9I-1b	2a層	-	長 5.2	-	14	4.4	外:HV8/6にぶい黄粉 内:HV8/6にぶい黄粉 断:HV8/6戻灰	密	員	内外面調整不明
661	109	25-5	脚部	内面 換	5区	9I-1	2a層	-	幅 (7.5)	-	-	(5.9)	外:HV8/73にぶい黄粉 内:HV8/73にぶい黄粉 断:N7.0戻白	中や厚(2mm以下) 長石、石を含む	員	内外面調整不明
662	109	25-3	上脚部	費	5区	9I-1h	4a層 上面	-	(14.6)	(6.6)	-	(10.6)	外:HV8/6戻灰 内:HV8/6戻灰 断:HV8/6戻灰	密	員	外面口縁部コナデ、体部 タタキ、保行着 内面口縁部コナデ、体部 ナデ
663	109	25-4	上脚部	費	5区	9I-1a	4a層 上面	-	-	(17.1)	-	(12.5)	外:2.5VR3/3 内:HV8/4にぶい黄粉 断:HV8/4にぶい黄粉	密	員	外面部コナデ、体部 ナデ 内外面全面に保行着
664	109	25-5	上脚部	面	5区	9I-1	4a層 上面	-	部厚 (9.2)	-	-	(5.2)	外:2.5V6/2戻灰 内:2.5V6/2戻灰 断:N5.0戻	密 (2mm以下) 長石、石を含む	員	外面部コナデ、体部 タタキ 内面脚部コナデ、体部 ナデ

表 18 土製品観察表

※法量の()は残存を示す。

遺物番号	検出番号	写真図記番号	種類	器種	調査区	地区別	層位名	遺構名	法量(cm)			重量(g)	色調	胎土	備考	
									最大長	最大幅	厚					
280	57	—	土製品	土罐	3区	9G-2j	1 a層 (高取溝)	—	(4.0)	0.7	0.3	0.25	1.7	外:SYR7/3(にぶい)内:SYR6/4(にぶい)胎:SYR2/2(白)	密	四端細形
281	57	—	土製品	土人形	3区	9H-2b-2c	2 a層	—	8.2	3.1	2.4	—	27.4	外:10YR7/3(にぶい)青粉内:10YR7/3(にぶい)青粉胎:10YR7/3(にぶい)青粉	密	素焼きで中空、2枚の骨盤まじり土粒と糸取り合わせて成形すか
301	71	—	土製品	土罐	3区	9H-2d-2e	第3面	155土器群	(4.0)	1.0	0.4	0.3	2.8	外:10YR7/3(にぶい)青粉内:2.5YR6/4(明赤黄)胎:N4.0灰	密	紐状のものによる櫛目四端細形
309	72	—	土製品	土罐	3区	9G-1j	第3面	160溝	(2.2)	(1.3)	0.5	—	2.8	外:SYR4/4(にぶい)赤粉内:SYR7/6粉胎:SYR7/6粉	密	四端細形か
310	72	—	土製品	土罐	3区	9G-1j	第3面	160溝	(3.9)	2.65	1.45	1.1	21.6	外:10YR5/4(黄)内:10YR5/1(黄)胎:10YR5/1(黄)	中々密 (2mm以下の砂粒多く含む)	管状土罐
311	72	—	土製品	土人形	3区	9H-1a	第3面	160溝	(4.95)	(2.9)	1.1	—	13.7	外:2.5Y6/4(にぶい)赤粉内:2.5Y6/4(にぶい)赤粉胎:—	密	素焼きで中空型成形
314	72	39-7	土製品	土玉	3区	9H-1a	第3面	160溝	0.55	0.55	0.1	—	0.2	外:N3.0(黒)内:—胎:10YR7/3(にぶい)青粉	密	—
315	72	39-7	土製品	土玉	3区	9H-2a	第3面	160溝	0.65	0.6	0.2	—	0.2	外:SYR6/3(にぶい)青粉内:SYR7/3(にぶい)青粉胎:—	密	—
418	74	—	土製品	土罐	3区	9H-1a	3 a層	—	7.3	3.1	1.3	1.0	60.3	外:10YR7/3(にぶい)青粉内:SYR7/6粉胎:—	中々密 (2mm以下の砂粒少量含む)	管状土罐
505	88	43-3	土製品	土罐	3区	9H-1c	第3 b層	242溝	7.4	3.8	2.0	1.4	115.0	外:2.5Y6/1(黄)内:2.5Y6/1(黄)胎:2.5Y6/1(黄)	中々密 (2mm以下の砂粒多く含む)	管状土罐
636	95	90-4	土製品	土罐	3区	9G-2j	3 b層	—	9.5	3.1	1.2	1.0	94.9	外:2.5Y7/2(灰黄)内:N3.0(黒)灰胎:N4.0(灰)	中々密 (5mm以下の砂粒多く含む)	管状土罐
637	95	90-4	土製品	土罐	3区	—	3 b層 (土上)	—	9.8	4.0	2.5	1.8	131.8	外:SYR6/6粉内:SYR6/8粉胎:—	中々密 (2mm以下の砂粒少量含む)	管状土罐
638	95	90-4	土製品	土罐	3区	9H-1a	3 b層 (砂層)	—	7.0	3.2	1.5	0.8	74.6	外:2.5Y6/1R内:2.5Y6/1R胎:2.5Y6/1R	中々密 (2mmの砂粒多く含む)	管状土罐
639	95	90-4	土製品	土罐	3区	9H-1c	3 b層 (砂層)	—	7.4	2.8	0.8	0.5	57.3	外:2.5Y6/1(黄)内:2.5Y6/1(黄)胎:2.5Y6/1(黄)	密 (1mm以下の白色砂粒含む)	両端有孔棒状

表 19 石製品観察表

※法量の()は残存を示す。

遺物番号	検出番号	写真図記番号	種類	器種	調査区	地区別	層位名	遺構名	法量(cm)			重量(g)	備考
									最大長	最大幅	厚		
42	17	—	石製品	砥石	2区	9G-2d	2-4 a層	—	(8.9)	(6.3)	1.1	93.1	—
231	44	—	石製品	滑石製模造品	2区	9G-1d	3 b層 (高取溝)	—	(2.95)	(1.4)	0.45	3.5	—
278	56	—	石製品	砥石	3区	9G-1j	櫛目取削り面 磨乱面北溝	—	(8.8)	(8.3)	2.8	245.1	—
312	72	39-2	石製品	滑石製模造品	3区	9H-1a	第3面	160溝	(1.35)	(0.75)	0.35	1.1	—
313	72	39-2	石製品	石鏝	3区	9H-1a	第3面	160溝	(1.3)	(1.05)	0.2	0.3	—
419	74	40-6	石製品	砥石	3区	9H-2c	2-3 a層か (高取溝)	—	(7.4)	4.7	2.1	116	—
420	74	40-7	石製品	砥石か	3区	9H-2b	2-3 a層	—	2.7	1.1	1.0	4.2	—
421	74	40-7	石製品	滑石製模造品	3区	9H-1e	3 a層	—	(2.2)	(1.6)	0.4	2.4	—
640	95	—	石製品	スケレーパー	3区	9H-1a	3 b層	—	5.05	3.2	4.45	9.5	—
668	109	—	石製品	硯	5区	9H-1j	表層	—	(9.7)	9.4	6.2	325.4	表面(障面)と裏面と1側面に櫛目 粘粉石

表 20 金属製品観察表

※法量の()は残存を示す。

遺物番号	検出番号	写真図記番号	種類	器種	調査区	地区別	層位名	遺構名	法量(cm)			重量(g)	備考
									最大長	最大幅	厚		
43	17	—	金属製品	銅銭 (皇末通宝)	2区	9G-2e	2-1 a層	—	2.4	—	0.1	—	皇末通宝(北宋銭) 1038-1040铸造/他1枚(2枚が落着いているためもう一枚は不明)
44	17	—	金属製品	銅銭 (紹聖元宝)	2区	9G-2b	2-1 a層	—	2.2	—	0.1	—	北宋銭 1094-1098铸造
282	57	—	金属製品	飾り金具	3区	9H-2f	2-2 a層	—	6.6	4.2	0.1	—	—
283	57	—	金属製品	キセル吸口	3区	9H-1c	1 a層 (櫛目取削り)	—	5.7	1.0	0.05	—	銅製か 銀字燻管
284	57	—	金属製品	キセル吸口	3区	9H-2d	2 a層	(3.4)	0.8	孔口0.3	—	—	銅製か、磨耗して赤く変色 銀字燻管
285	57	—	金属製品	簪	3区	9H-1d	2 a層	—	1.5	1.2	0.05-0.1	—	銅もしくは真鍮か 銀字と鎌首や吸口をつなぐための金具か
665	109	—	金属製品	銅銭 (永樂通宝)	5区	9H-1j	2 a層	—	2.4	—	0.1	—	—
666	109	—	金属製品	キセル燻首	5区	9H-1a	1 a-2 a層	—	6.3	1.0	0.5/穴径0.4	—	銅製もしくは真鍮か 銀字燻管
667	109	—	金属製品	キセル燻首	5区	9H-1j	掘土層-1 a層	—	4.25	1.2	0.1/穴径0.8	—	銅製もしくは真鍮か 銀字燻管

表 21 木製品観察表

※法量の()は残存[]は推定を示す。

標本番号	種別番号	写真の撮影番号	種類	器種	調査区	地区別	層位名	遺構名	法量(cm)		器種	備考
									最大長	最大幅		
9	11	—	木製品	板	1区	9F-3g	3 b層	—	9.1	3.5	(0.4)	—
10	11	S2-4	木製品	椀	1区	9F-2g	3 b層	—	(68.4)	φ9.9 φ3.3	φ10 φ1.9	スタジイ
11	11	—	木製品	扱りのある板	1区	9F-2g	3 b層	—	(62.5)	4.5	2.6	—
332	45	37-1	木製品	楕圓	2区	9C-1f	3 b層	—	(42.0)	8.0	2.5	コナラ属 アカガシ産
233	45	38-3	木製品	楕圓	2区	9F-2h	3 b層	—	(35.0)	6.7	3.5	スギ
234	45	37-4	木製品	楕圓	2区	9F-2i	3 b層	—	(30.0)	楕圓8.8 楕圓3.4	楕圓6.8 楕圓3.4	アツツノ属
235	45	37-3	木製品	板	2区	9C-1c	3 b層	—	(35.9)	16.5	0.8	ヒノキ
236	45	37-2	木製品	楕圓	2区	9F-2i	3 b層	—	(43.3)	楕圓8.6 楕圓3.1	楕圓10 楕圓2.0	スタジイ
237	45	37-5	木製品	楕圓	2区	9C-1e	3 b層	—	(35.8)	楕圓8.7 楕圓5.4	楕圓7.6 楕圓5.0	ヤブツバキ
238	46	36-2	木製品	文様のある板(大)	2区	9F-2i	3 b層	—	81.0	3.6	1.5	ヒノキ
239	46	38-4	木製品	文様のある板(小)	2区	9F-2i	3 b層	—	(28.2)	5.2	1.5	ヒノキ
240	46	—	木製品	有面楕	2区	9C-2b	3 b層	—	(14.5)	楕圓4.4 楕圓2.9	楕圓3.2 楕圓2.7	—
241	46	37-6	木製品	有面楕	2区	9F-2h	3 b層	—	(43.5)	楕圓7.2 楕圓6.0	楕圓5.2 楕圓4.3	モミ属
242	47	38-5	木製品	御行器	2区	9C-1d	3 b層	—	(62.1)	(17.0)	6.9	クロマツ
243	47	37-7	木製品	有面楕	2区	9F-2h	3 b層	—	(34.6)	楕圓4.8 楕圓4.9	楕圓4.8 楕圓2.2	モミ属
244	47	38-2	木製品	楕圓	2区	9F-1j	3 b層	—	(41.0)	19.1	10	コナラ属 アカガシ産
245	48	38-1	木製品	柄穴のある板	2区	9C-1d	3 b層	—	31.8	11.9	2.0	スギ
246	48	37-8	木製品	紡織具	2区	9F-2b	3 b層	—	(31.2)	4.6	グリフ E5.7 4.5	スギ
247	48	—	木製品	柄穴のある板	2区	9C-1e	3 b層	—	(86.5)	9.7	1.3	ヒノキ科
248	48	—	木製品	柄穴のある板	2区	9F-2i	3 b層	—	(92.0)	(9.5)	2.0	—
249	49	36-1	木製品	板 (木船用板か)	2区	9F-2j	3 b層	—	(184.5)	28.5	9.1	ヒノキ
250	49	—	木製品	板	2区	9C-1e	3 b層	—	69.0	6.0	5.2	—
509	89	53-4	木製品	蓋	3区	9H-1b	第3 b層	240瓦路	37.5	23.0	3.5	ヒノキ
510	89	—	木製品	板	3区	9H-1c	第3 b層	242溝	(44.3)	楕圓6.5 楕圓4.6	楕圓6.0 楕圓3.7	アサダ
641	96	51-3	木製品	鎌身	3区	9G-1j	3 b層	—	(23.9)	最大幅 [15.6]	11.9	コナラ属 アカガシ産
642	96	51-2	木製品	鎌身	3区	9H-1c	3 b層	—	(11.1)	10.7	1.0	コナラ属 アカガシ産
643	96	51-1	木製品	鎌欠	3区	9H-2e	3 b層	—	53.0	身16.6 側部4.4	身9.9 側部4.3	コナラ属 アカガシ産
644	97	30-3	木製品	板	3区	9H-2d	3 b層	—	34.4	15.5	3.0	サワラ
645	97	—	木製品	有面楕	3区	9H-1d	3 b層	240瓦路か	(19.0)	楕圓7.9 楕圓5.4	楕圓7.4 楕圓2.3	—
646	97	—	木製品	平円状木製品	3区	9H-2d	3 b層	—	(16.0)	(5.0)	2.3	—
647	97	30-2	木製品	有面楕	3区	9H-2d	3 b層	—	(36.9)	右側部1.7 楕圓3.0 左側部3.5	右側部2.6 楕圓3.6 左側部3.4	モミ属
648	97	30-8	木製品	柄穴のある板	3区	9H-2f	3 b層	—	(48.0)	17.3	23.0	サワラ
669	109	—	木製品	板	5区	9F-1a	第3 b層 (落ち込 み)	—	(28.3)	楕圓3.4 楕圓3.8	楕圓5.0 楕圓2.7	—
670	109	—	木製品	柄穴のある板	5区	9F-1a	3 b層	—	(31.2)	4.5	2.8	オニグルミ
671	110	—	木製品	柄穴のある板	5区	9F-1a	3 b層	—	(60.5)	10.5	2.5	ヤマグワ
672	110	S2-3	木製品	紡織具	5区	9F-1i	3 b層	—	(48.3)	3.0	出羽1.1 楕圓2.4	ヒノキ
673	110	S2-1	木製品	有面楕	5区	9F-1i	3 b層	—	60.6	楕圓2.6 楕圓3.1 尖部1.6	楕圓1.1 楕圓2.3 尖部2.4	スギ
674	110	—	木製品	素材	5区	9F-1a-1b	3 b層	—	(18.7)	楕圓6.9 楕圓3.8	楕圓5.3 楕圓3.1	ヒノキ
675	110	S2-5	木製品	紡織具	5区	9F-1a	3 b層	—	24.4	楕圓3.8 楕圓3.3	楕圓3.9 楕圓3.4	サワラ
676	110	S2-6	木製品	楕圓	5区	9F-1a-1b	3 b層	—	(105.7)	φ6.4 φ3.1	φ1.7 φ2.1	モミ属
677	111	—	木製品	孔のある板	5区	9F-1a-1b	3 b層	—	(30.4)	(33.2)	1.7	—
678	111	S2-2	木製品	素材 (有面楕)	5区	9F-1a	3 b層	—	(46.0)	(46.0)	3.0	スギ
679	111	25-7	木製品	盤	5区	9F-1a	3 b層	—	(32.5)	26.8	3.2	クスノキ